

東京大学戸田寮八十年史

## 戸田寮史発刊によせて

東京大学総長  
東京大学運動会長  
林 健太郎

本学は開学以来百周年を迎えようとしているが、それに先立って戸田寮史を発刊することになったと聞き、大変喜ばしいことと思う。

砂浜に立ち、巴の海を眺めるとき、明治以来、この海辺に躍動する若人達の裸身を想いかべることが出来る。今でこそ交通機関が発達し、戸田は近くなったが、昔は海を渡ってはるばるこの別天地に青春の憩いの場を求めて先輩達が集まったものである。そこに集う若者達は、いわゆる「バカ」になり、都会の騒音と勉強をしばし忘れ、健全な身体と精神を培ってきた。この伝統は運動部の諸君によって受け継がれ、今も生きている。



昨年、戸田を訪れたとき、村長さんはじめ村の有力者達と話す機会を持つことができた。漁師育ちだから声は大きい、人の良い、親切そうな人達である。善意に満ちた村との友好関係を永く保ち、良い環境と良い伝統を後輩達に伝えることは我々の務めであらう。



## 戸田寮寮歌

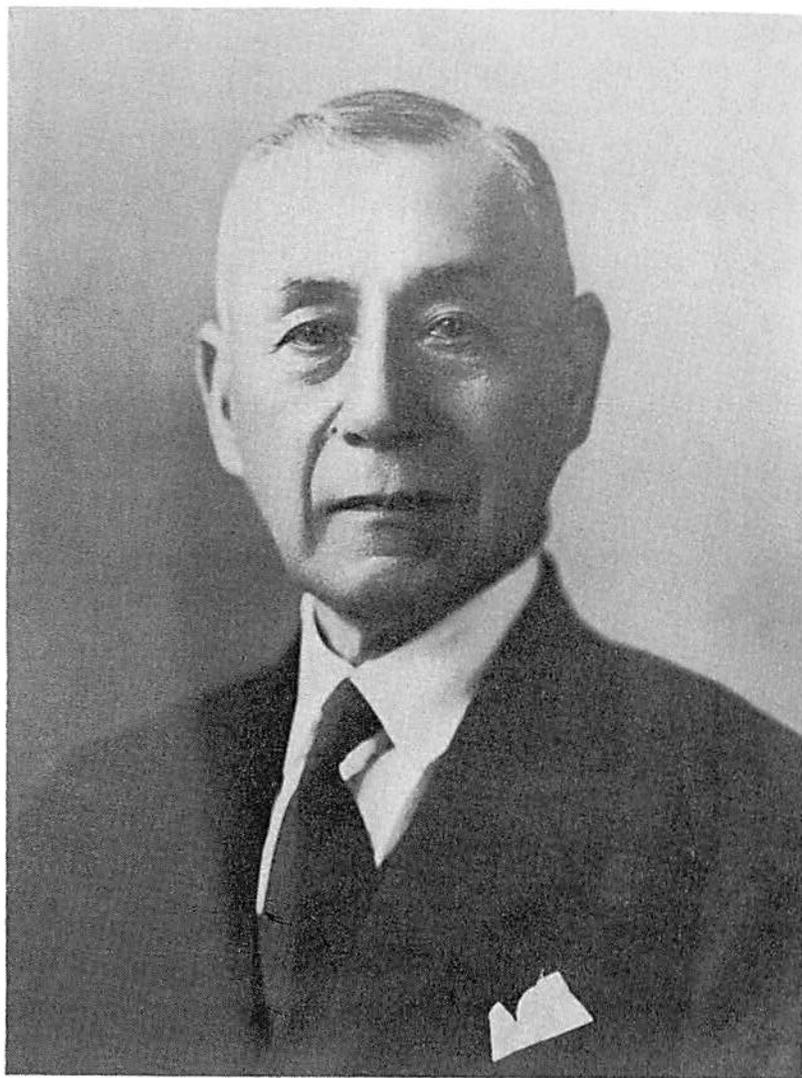
(作詞作曲 未詳)

一、戸田の港に 朝風涼し  
目ざめよ 男の子ら

我が夏は来ぬ 我が夏は来ぬ  
※ (ト拉拉ララ ト拉拉ララ  
(ト拉拉ラララ(くり返し))

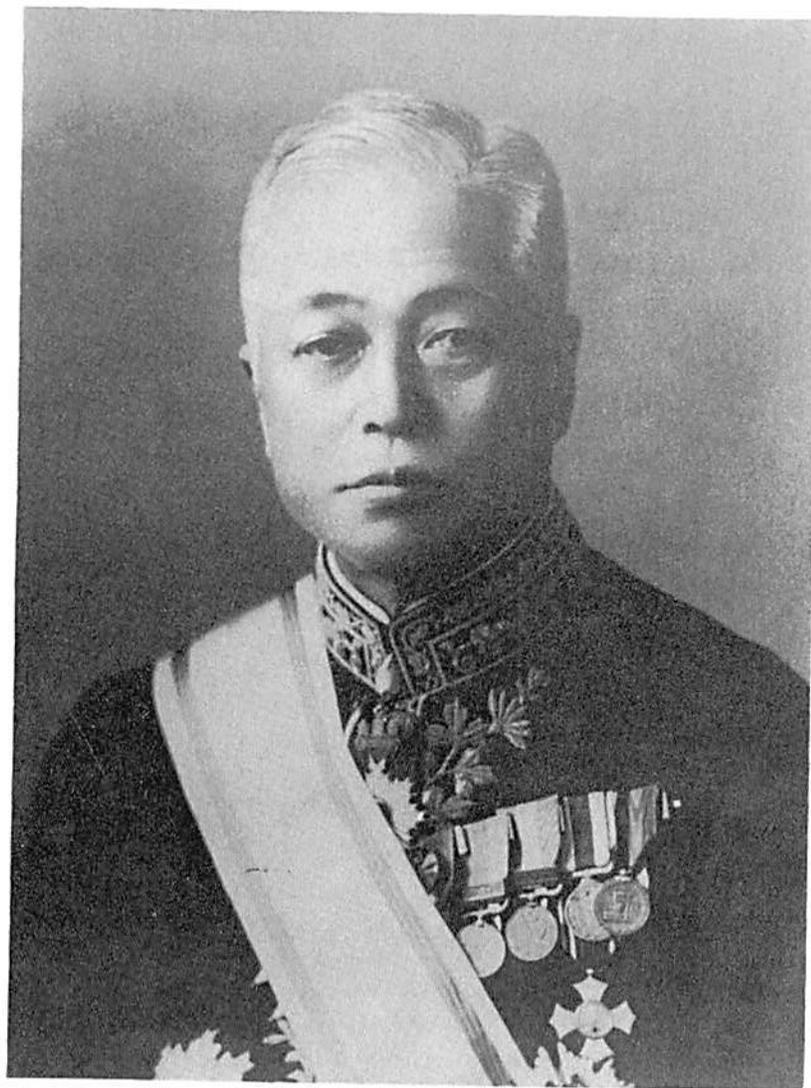
二、巴の海に 遊ぶ男の子ら  
か黒き腕に  
潮は躍る 潮は躍る  
※以下くり返し

三、夕べ静けき 御浜の岬に  
どよもせ 男の子ら  
わだつみの歌 わだつみの歌  
※以下くり返し



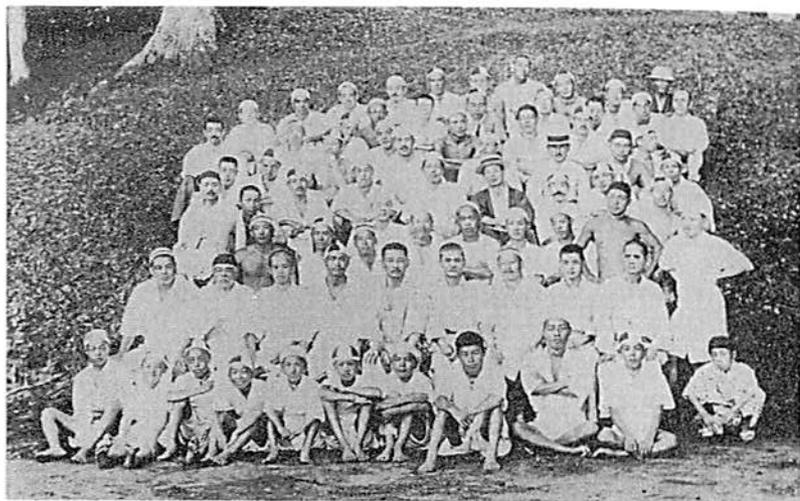
太田資時氏

戸田水泳部創設に尽力され、以来毎夏欠かさず来寮される。太田老人と呼ばれ学生に親しまれた。昭和二十四年夏来寮され、静かに水泳を楽しまれたのが来寮の最後となった。



篠田治策氏

戸田水泳部創設者の一人で当時水泳部員



大正四年、テニスコート横にて写す。二列目左端辰野保取締役、  
三列目左端原鴻太郎取締役、その隣り緒方規雄取締役。

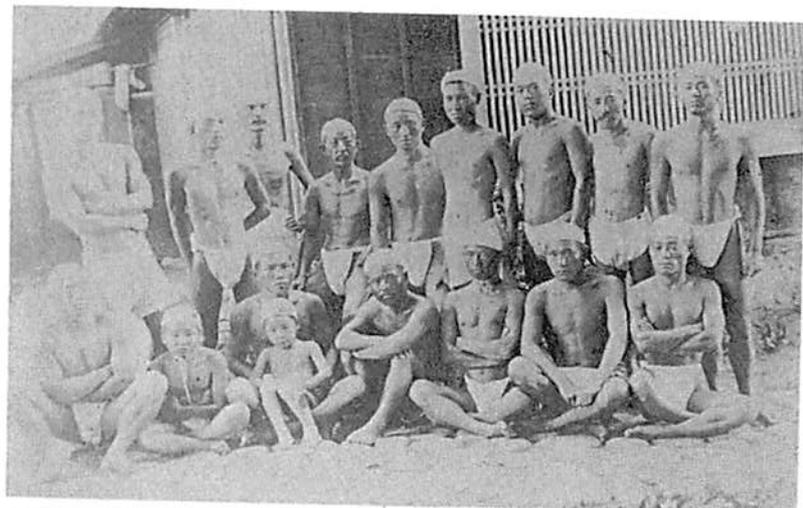


### 松沢一鶴氏

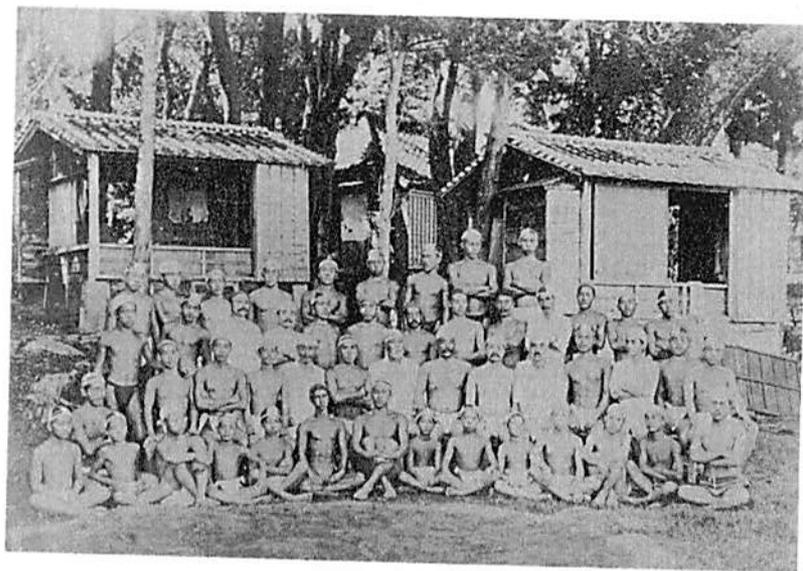
大正六年、神田のYMCAに日本ではじめての温水プールが出来た。その頃、一高水泳部が中心になってダニエルの著書により、クロール泳法の研究がはじまった。

松沢一鶴氏は大正十年五月生麦三笠園で開催された第五回極東水泳大会予選に出場し、四百四十ヤードの種目で優勝した。また同十一年、全国水泳連盟が結成され、会長には末広巖太郎が選ばれ、松沢氏は実行委員のメンバーとなり、日本の水泳界に大きく貢献した。

また松沢一鶴氏は、大正十三年より十五年まで三年間、取締り



明治三十二年頃の戸田水泳部。子供を抱いているのは小栗復吉氏(後日本郵船)



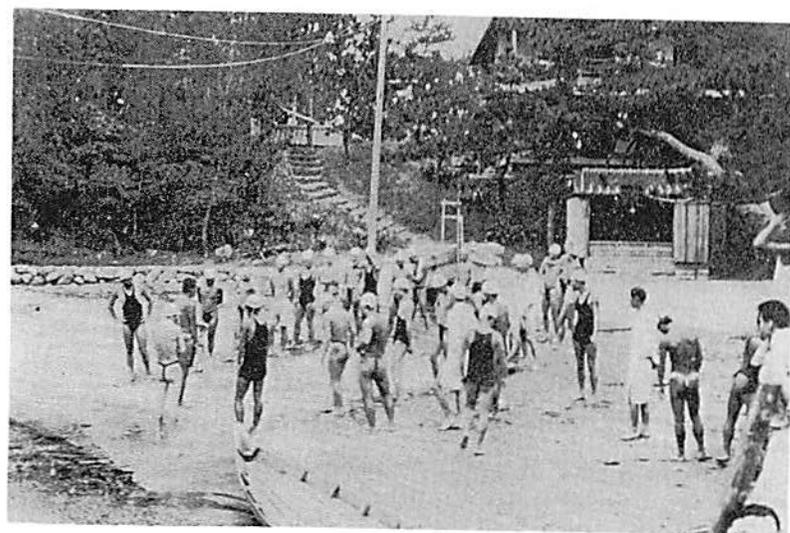
明治四十一年八月、故霜山精一最高裁長官の顔が見える。



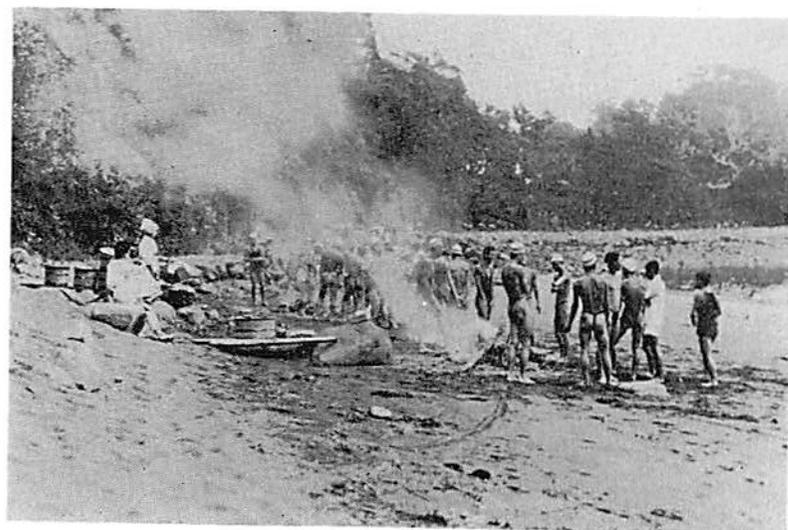
昭和七年頃の離れと新二階



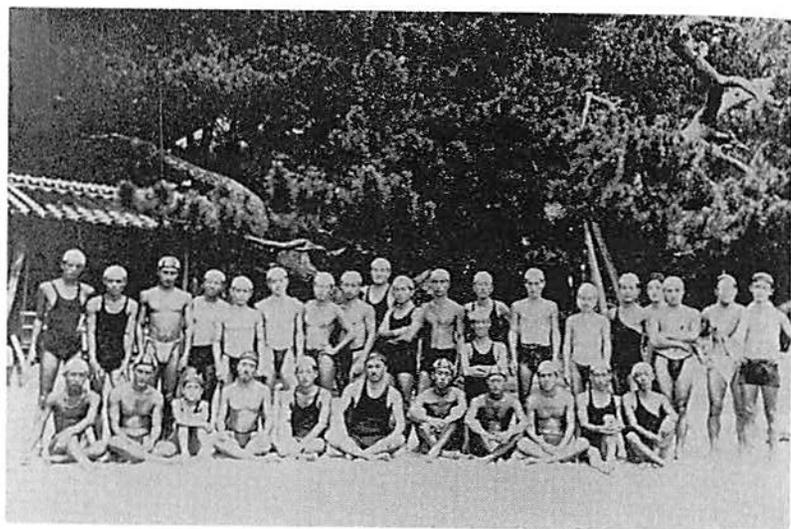
昭和七年滄海楼の横にて。女中さん達の前にしゃがんでいるのは稲木管理人。



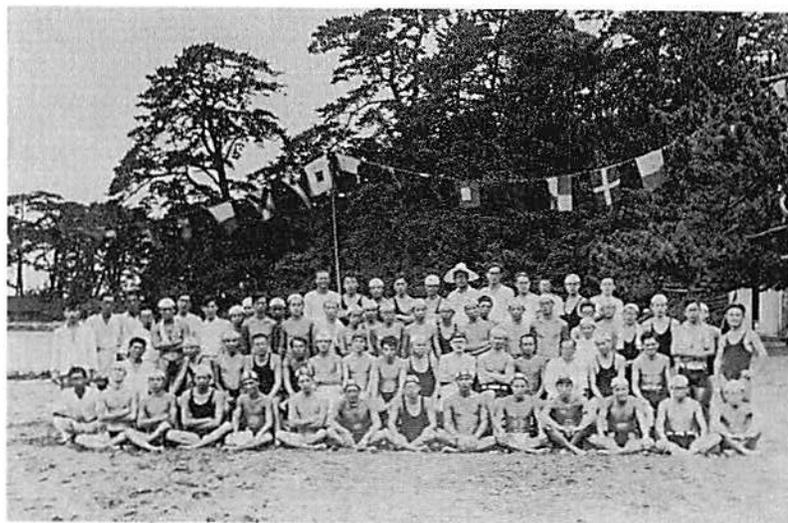
大正十五年七月二十五日大遠泳出発前の集合



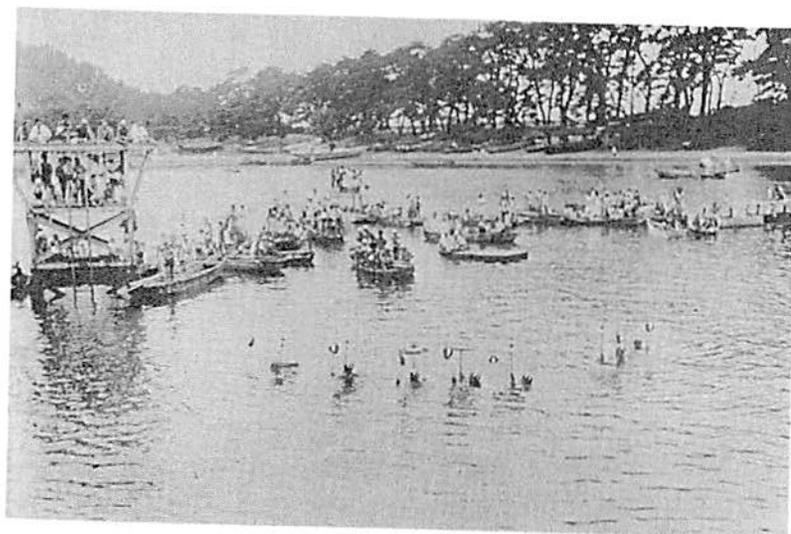
大瀬崎にて昼食



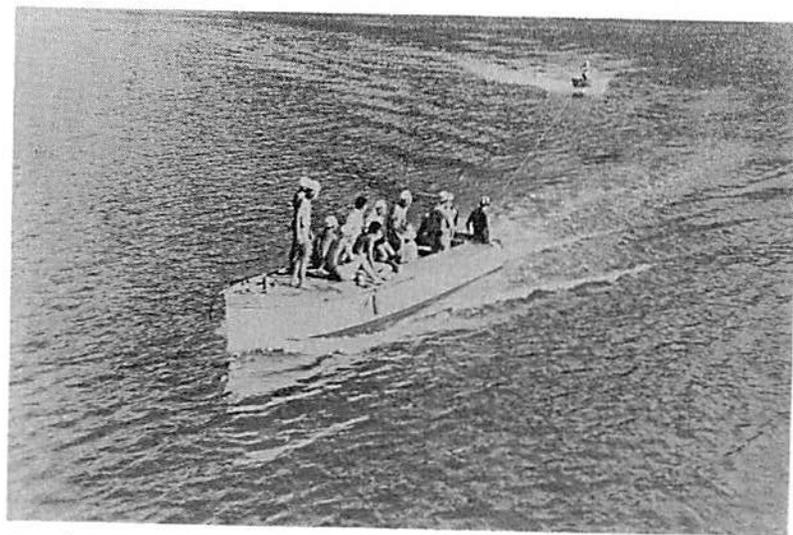
昭和七年夏



昭和十年夏



昭和八年の水泳大会。右手に日傘、左手に提灯を持って立泳ぎ。



モーターボートでアカプレーンを楽しむ。戸田はウォータースキー発祥の地。



昭和二十五年七月。村の依頼により土木工学科で戸田湾の周辺の測量を行なった。右から島田、北村、花村、最上教授、西脇助手、教授令息、杉村委員。



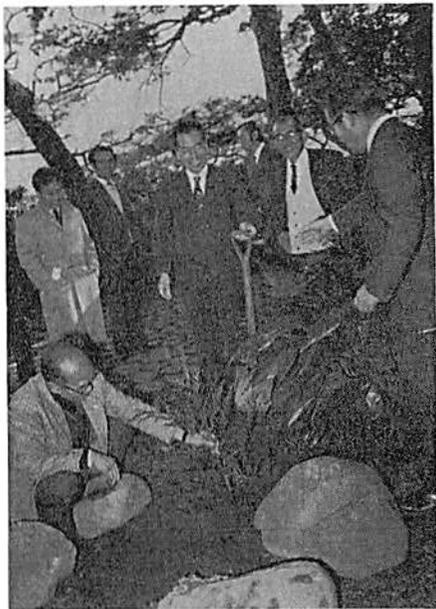
湾口突破でシーツ洗濯の罰



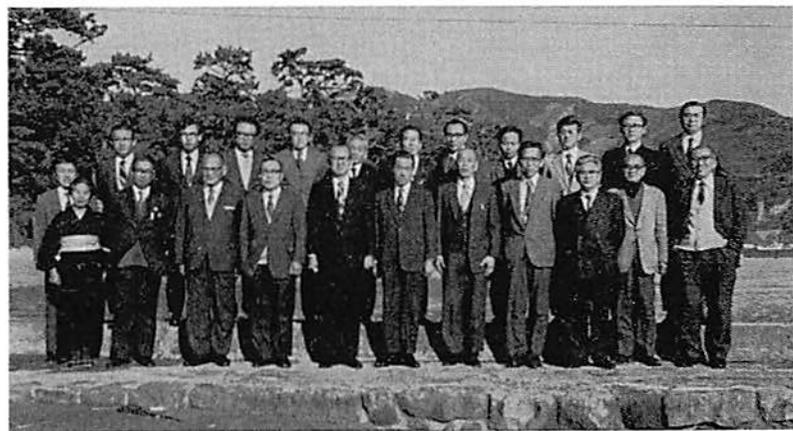
昭和二十一年夏、荒れはてた寮の前の砂浜。



昭和二十一年、寮の裏の堤防にて。左側、松橋直氏(現戸田寮委員長)。



昭和五十年一月二十六日、  
林総長による記念植樹



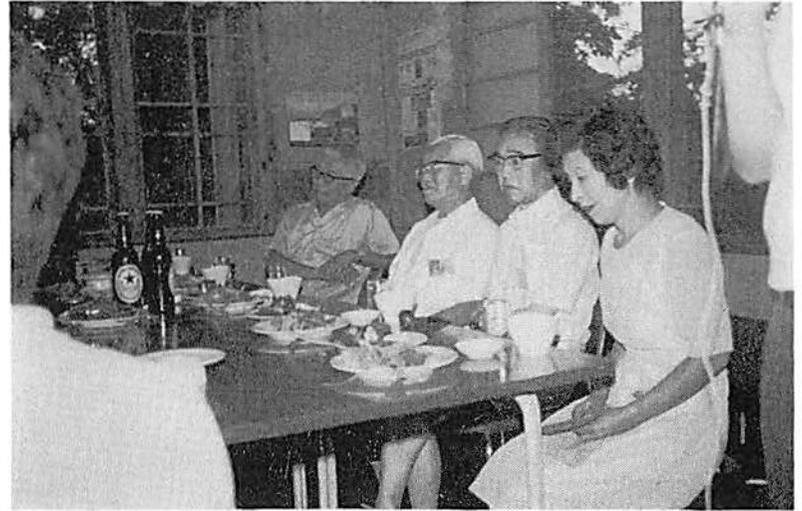
林総長戸田寮訪問  
前列左から四人目久保特別補佐、稲木村長、総長、伊藤特別補佐



昭和三十一年一月、キャプテン合宿、先生のあいさつ。



まず体をほぐして、「シゴキ」はそれから。



昭和四十九年八月二十四日 「戸田の夕べ」  
左から前寮委員長日野先生、元運動会理事長佐々木先生、現寮委員長松橋先生



先輩の自己紹介

## 目次

戸田寮史発刊によせて

東京大学総長  
東京大学運動会長

林健太郎

序にかえて

堤よしえさん(八十四才)の対談

取材 鈴木一郎 21

思い出すままに

赤門運動会会長 東龍太郎 7

見たり聞いたり

太田資時 25

寮史発刊を祝う

戸田村長 山田三郎 9

松本東作氏の話

取材 岸尾光二・八木沢正博 29

寮史発刊に想う

寮委員長 松橋直 12

『水泳雑記』

大10医卒 青木三弦 31

『海の館』

前学生部長 大嶋藤三 13

稲木さんの話

取材 鈴木一郎・高橋常雄 33

明治大正時代

春木屋さんの話

取材 古田直樹・岸尾光二 39

明治・大正の戸田について

戸田の憶い出

昭12経卒・水泳 加藤英夫 41

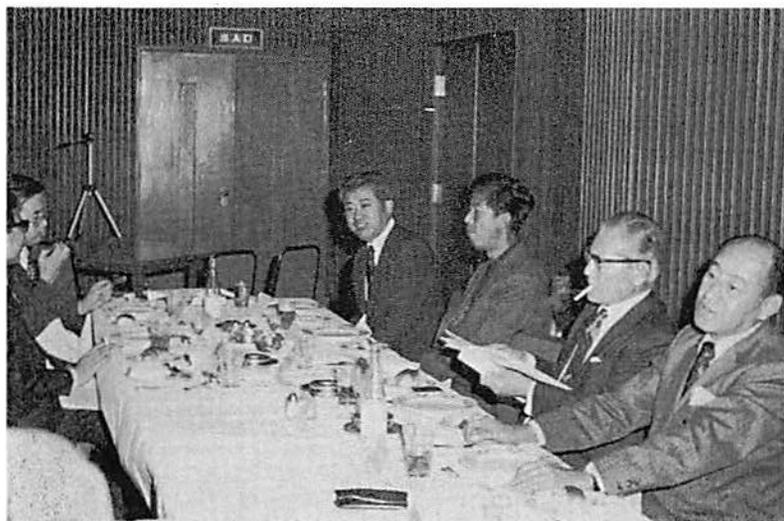
前戸田寮委員長 日野和徳 19

山本伊能助氏の話

44



昭和五十年五月 学生会館分館において戸田寮史の取材。



取材風景

大正年代の新聞記事より

45

〈戸田の話〉

昭16 理卒 秋 邦雄

2

大正十五年、寮日記帳より抜粋

49

〈戦前の戸田寮の思い出〉

昭和時代（終戦まで）

昭16 医卒・水泳 林 周一 82

昭和初期から終戦までの時代背景―個人的

「思い出の戸田寮」 昭17 医卒 河合 博正 48

経験を中心にして― 昭17 法卒・水泳 大場 和夫 69

昭和十七、十八年の戸田寮

御浜雑記 昭4 法卒 岡本 勁一 70

昭18 文卒・陸上 林 実 85

「トリミダシ」の思い出

昭8 医卒・水泳 中野 勇 74

太平洋戦争突入前後の戸田寮 大場 和夫 87

『昭和五―十一年の戸田』

昭8 文卒 望月 衛 75

福永武彦著「草の花」より 89

「バカヤロー」と送られて

昭12 医卒・ボート 太中 弘 77

創始から隆盛へ（抜粋）

嗚呼、我が青春の思い出―御浜寮

昭12 医卒 牧野 進 78

茨木中のデビューと戸田開場の日―帝大新聞昭7・3・7 松沢 一鶴 90

昭和五―十一年の戸田

昭24 卒・水泳 牧野 亥之助 101

夏の聖地 93

昭21 医卒・寮委員長 松橋 直 103

昭23 医卒・水泳 衣笠 恵士 104

戸田寮の園遊会―帝大新聞昭8・7・23― 95

昭7 文卒・陸上 加藤 橘夫 107

昭26 経卒・陸上 杉村 弘二郎 109

大坪事件 95

昭16 工卒・運動会理事長 八十島 義之助 111

昭28 農卒・水泳 丹羽 孝忠 114

昭33 育卒・ボート 遠藤 郁夫 119

昭27 農卒・排球 須藤 彰司 116

昭16 工卒・運動会理事長 八十島 義之助 111

昭42 文卒・水泳 渡辺 敏彦 140

昭28 農卒・水泳 丹羽 孝忠 114

昭28 農卒・水泳 丹羽 孝忠 114

昭40 農卒・合気 山成 喬彦 139

昭和時代（戦後から現在）

戸田寮（運動会報）

終戦時の戸田

101

昭33 育卒・ボート 遠藤 郁夫 119

戸田寮再開

昭24 卒・水泳 牧野 亥之助 101

昭38 農卒・応援 永木 宏 124

昭21 医卒・寮委員長 松橋 直 103

昭23 医卒・水泳 衣笠 恵士 104

昭33 法卒 前田 知克 126

昭7 文卒・陸上 加藤 橘夫 107

昭26 経卒・陸上 杉村 弘二郎 109

昭35 法卒・応援 河原 昭文 138

昭23 医卒・水泳 衣笠 恵士 104

昭28 農卒・水泳 丹羽 孝忠 114

昭40 農卒・合気 山成 喬彦 139

昭7 文卒・陸上 加藤 橘夫 107

昭28 農卒・水泳 丹羽 孝忠 114

昭42 文卒・水泳 渡辺 敏彦 140

昭26 経卒・陸上 杉村 弘二郎 109

昭28 農卒・水泳 丹羽 孝忠 114

昭44 文卒・水泳 渡辺 敏彦 140

昭23 医卒・水泳 衣笠 恵士 104

昭28 農卒・水泳 丹羽 孝忠 114

昭46 文卒・水泳 渡辺 敏彦 140

昭7 文卒・陸上 加藤 橘夫 107

昭28 農卒・水泳 丹羽 孝忠 114

昭48 文卒・水泳 渡辺 敏彦 140

昭26 経卒・陸上 杉村 弘二郎 109

昭28 農卒・水泳 丹羽 孝忠 114

昭50 文卒・水泳 渡辺 敏彦 140

昭28 農卒・水泳 丹羽 孝忠 114

昭28 農卒・水泳 丹羽 孝忠 114

昭52 文卒・水泳 渡辺 敏彦 140

昭27 農卒・排球 須藤 彰司 116

昭28 農卒・水泳 丹羽 孝忠 114

昭54 文卒・水泳 渡辺 敏彦 140

昭16 工卒・運動会理事長 八十島 義之助 111

昭28 農卒・水泳 丹羽 孝忠 114

昭56 文卒・水泳 渡辺 敏彦 140

古田先生の話	対談	142	資料編
青木さんを偲んで			戸田寮の土地関係の変遷
戸田寮史編集懇談会	昭45医卒・ボート	149	浜木綿について
戸田の思い出―過去と現在、そして将来―			露艦遭難戸田村にての造船について
	昭44医卒・ボート	157	戸田村のむかしばなし
昭和二十三年寮日誌より抜粋	古田直樹		戸田村沿革
落書帳より			年表
昭和三十四年～五十年寮日誌より抜粋		161	歴代寮委員名
戸田慕情	元戸田寮管理人	163	将来の戸田寮―戸田寮の改築計画について―
「バカヤロー会通信」より抜粋	青木信博	178	
近代年刊歌集より			あとがき
	長田貞雄	186	編集後記
貝殻がちがいの記	昭40医卒	187	
	日野昌徳	192	
		193	
			学生部長 大場 和夫
			杉村弘二郎
			鈴木一郎
			226
			220
			216
			212
			210
			208
			208
			195

# 序にかえて

## 思い出すままに

東龍太郎

私をはじめて戸田村の御浜を訪れたのは一高三年生の学生の学年末、すなわち大正二年初夏のこと、今から六十五年の昔である。まだ水泳部の開寮前であつたらしく、松林の中に隠見する寮を横目でにらんで人影もない砂浜を散歩しながら、来年の夏には東大生としてこの寮の生活が楽しめるだろうと考えた。ちなみに当時の大学や高等学校の学年暦は九月一日に始まるから、東大に進学するのは水泳部が店仕舞いした後になるので、寮生活は翌年の夏まで待たねばならない訳である。ところがどうしたことか、それから十数年の間に一度も戸田御浜寮に顔を出さず全くの無縁に過ぎ、昭和の初年に東大運動会のお世話をするようになって初めて戸田とのかかわり合いができるようになった。

そもそも明治四十一年（一九〇八）に東京帝国大学が戸田村御浜の村有地四ヘクタールを水泳部のために借り受けたのは、いわゆる紳士協定によるものであつて、岬の弁天祠の鎮座する小区画を除く半島全域を九十九年間無償提供ということであつたと聞く。ただし毎年金一封（百二十円？）を大学から村の小学校の教育費に寄附し、謝意を表する慣習になつていた。

明治中期の戸田村にとっては御浜の半島はなんの経済的価値もなく、東大がこれを利用してくれるというだけで恩の字だったに相違ない。しかし年移つて昭和初期ともなると、村の有力者も親から子へと代がわりして若返つたこともあつて、あの風光明媚な白砂青松の半島全部を

序にかえて



東大に独占させておくのは勿体ないし、村でもこれを活用する途を開くべきであると考えようになつたと見え、これが借地の一部返還の要求となつて現われた。そこでいろいろと紆余曲折の末に、水泳部には利用価値のすくない半島つけ根の土地を返すことに同意し、同時に村との間に正式の貸借契約を結ぶことになった。これにはもっぱら穂積重遠先生をわずらわしたと記憶する。その後もだんだんと蚕食がはげしくなり、ついには寮に肉薄するに至つたのは、まことに隔世の感がある。

さて昭和三、四年頃からだつたらうか、私も運動会総務部長として毎夏に山中・戸田の両寮を訪ねることが数年つづいた。この間にスカルを導入して取締り諸君にコーチをし、また漕ぎ損じて海に落ちても、艇を毀損することなく安全に艇上に跳ね上がる術などを指導した。その代わりに諸君からは寮の外海で潜ってサザエをとることを教わつたが、その頃は初心者でも面白いほど沢山の獲物があつたのを覚えている。そして一日の日課を終えてから、食堂のテーブルの上に車座をつくつての満を引いたビールや、春木屋に遠征してたらふく平げたカモ鍋は忘れがたい醍醐味である。

戦後になつて女人禁制が解かれて家族にも寮が解放されてからは、私の娘や孫がこの恩恵に浴し、年中行事のようにご厄介になる定連として、東一家はバカヤロー会のメンバーに加えてもらつている。私も何年か前に一家眷族の仲間入りをして二十何年ぶりに寮の生活を楽しませてもらった。しかし一歩足を寮外に踏み出すと、あまりにも見苦しい環境の俗化に胸がいたみ、玲瓏玉の如き佳人の老いさらばえた老醜の姿を見るにしのびない思いであつた。悪貨は良貨を駆逐するという論理は、遺憾ながらここにも当てはまるようである。 (大6 医卒・ポート 赤門運動会会長)

## 寮史発刊を祝う

山田三郎

今回、当村にとつてもゆかり深く、また歴史に富んだ東京大学戸田寮の寮史が編纂されることに心からなる協賛の意を表するとともに、村長としてその所感の一端を披歴できることを光榮至極に存じます。

東大戸田寮は明治四十二年に発足し雨来幾星霜、多くの学生諸君に親しまれ愛されてきました。麗峰富士を朝夕仰ぎ見る閑静平穏なうちにも、四季折々のたたずまいはそれなりにいみじく、学問に志す者の心の浄化にはこの上もない環境であつたことが偲ばれます。

私は明治四十三年十一月戸田村に生まれ、皮膚に海の香を染みこませながら育つてきました。現在三期の村長として村政を預っていますが、東大とは何かと折衝をもち、種々お世話にもなっています。当年六十五才、そして東大戸田寮はそれより一年余り早い誕生となるわけです。



陵の孤島と呼ばれた戸田村では、交通機関として当時より終戦後まで沼津からの船便以外にたよるものはなかつたのです。そのうえ入港しても巡航船は沖合に止まり、「ハシケ」と呼ぶ小舟で乗り降りをするのでした。たまたま海が荒れ欠航ともなれば、西浦經由真城山越えか修善寺經由達磨山を半日がかりで越えるという状態が長くつづきました。そんな悪条件にもめげず、戸田村を訪れる学生諸君は跡を絶ちませんでした。私達在住者でさえその不便さを呪っ

たほどなのに、一体このような魅力はどこにあったのでしょうか。

戦後、自動車道が開通したがいまだに砂礫の悪路が残り、陸の孤島のイメージを返上しきれずにいます。しかるに  
いまだかつて学生諸君から不便をかこつけた苦言を聞いたことがありません。今は立派な地位にある東大卒業生の中  
から、「やはり戸田村は昔ながらの姿でいてほしい」との声をよく聞きます。戸田寮を一度でも訪れた人は学生時代  
のなつかしさが胸の中で昇華し、それが心の壁を伝わってこの言葉となって表現されるのでしょうか。白砂青松はその  
条件を満たす恰好な心の糧であったに違いありません。

私達は私達なりに、また異なった角度から戸田寮への思い出があります。

大正時代の寮の管理人であり、「ハシケ」の船頭をもつとめた「三喜爺さん」という元氣のよい老人がおりました。  
彼は寮を去る学生に、こんな戸田から帰るなんて「バカヤローだ」との意味で船が見えなくなるまで「バカヤロー」  
を叫びつづけた。いつしかそれが別れの挨拶として習慣化され、去る人も残る人も手に手にハンカチを、喉をつんざ  
く大声でバカヤローを……。初めての人には異様な、しかし知る人にはユーモアとペーソスのこもこも籠った人情劇  
が巡航船の通うことに展開されたのです。棧橋で見送る人、船上で見送られる人、その声と声とがぶつかり合って波  
のように山に反響する……。そのこだまが今も余韻を残しているのを感じるものは私だけではないでしょう。

次は学生諸君の遠泳時における太鼓の音です。諸口神社の大太鼓を船にのせ、大太鼓を打ち鳴らして志気を鼓舞し  
た、まさに鼓舞である……。あの大きな音、また夜の納涼船からのコーラスの声、若人の意気なかけたその声は夜の  
静寂をやぶる勇壮なものでした。夜といえば村中は街路を逍遙する学生で賑わった時代もあったことを忘れることは  
できません。

時は流れ世は変わり、これらはさびれた漁村時代の夢となり思い出の片隅に潜んでしまったが、はしなくも臉に歴

然と映ずることがあるのは、その印象の深さを物語る証拠となるであろう。

この寮は当時としては建築の粋を集めたように立派な造りでした。しかし昭和の初期から軍国調きびしく、やが  
て長い戦争へと突入しました。青春の愉楽はどこへやら、学徒動員、応召と国内には若人の姿がまばらとなり、戸田  
寮もあるいは水路部の宿舍となり、あるいは特攻隊の本部となって、時代の波にゆさぶられながら細々と命脈を保っ  
てきたわけです。

戦後、寮の再建が計られふたび多くの学生諸君の来遊を見、あるいは家族の皆さんの利用ができるようになり、  
一挙に以前にもまして脚光を浴びる日を迎えるようになりました。

東大寮の歴史の上になんて思えば、このかん政界を動かす人、学界、財界をリードする方々が数多く学生の中から  
巣立ったのであります。その権威ある東京大学の一部門である戸田寮の存在を本村の人々は大きな誇りとし、これを  
守りつづげようとする愛着心が今なお脈打っていることを確信しております。

行政の重要事項については大学側の強力な御支援をいただき、医療行政においては格別の配慮をして下さり、附属  
病院の診療等のお世話や全国にも無類の専門医の老人検診等も万難を排して御協力をたまわり、各般にわたる御厚志  
に全村民は惜しみなく感謝の意を表しております。

ここに八十年にもなんなんとする寮の歴史を顧みて、老松に相寄る緑葉の如く相互の深い理解と協力によって友愛  
の精神をますます発揮し、将来の繁栄に向かって着実に歩を進めることを今こそ願って止まないものであります。

(戸田村長)

## 寮史発刊に想う

松橋 直

「スイス以东に戸田より美しき所なし」と先輩から語りつがれた戸田の御浜岬に、事もなげにひそむ戸田寮。ここにはまた、多くの歴史がひそめられているであろう。日本の水泳はこの地に発祥したと聞く。クロールが紹介されたのもこの海辺。日本の最初の水泳大会も、飛び込み台をはさんで行われたという。村の古老の中には、某大臣の学生時代の顔を覚えている者もいる。落書帳には、「このおれがノーベル賞を貰ったら、その1%を寮に寄附する。それでも大変な金額なんだぞ」とあるように、燃えるような熱さの中で、また燃えるような若き日をここで過ごしたその道の大家も多いことであろう。

この戸田寮の歩んできた道をいざまとめるとなると、意外に資料は少ない。寮の取締役の記録が残っている年代も少ない。運動会の記録も学生紛争で散逸。戸田村の資料も、昭和三十六年の集中豪雨で流失。先輩の方々のお話も面白くうかがえるが、正確な年月日となるとむずかしくなる。たとえば、わずか十四、五年前の戸田村役場の資料が流失するなど大水害をうけた年にしても、その記録は十人十色、戸田村のほうの記録も同じく十人十色。したがって、資料を集めるための運動会の職員諸氏、学生諸君の努力は大変なものであった。何回も現地を訪れ、また先輩をお尋ねした。それにもなう先輩諸兄からの御懇切な助力も大きく、感謝にたえない。

編集関係者は杉村副委員長を中心に委員会を開くと十数回、戸田寮にも合宿して現場を味



つつ能率をあげることもあった。また運動会の鈴木、高橋両氏の真摯な牽引力も大きく作用して資料もしだいに集まり、とにかく一応寮史らしきものをまとめられる段取りとなった。意をつくせない点もあり、また重要な点で落ちている面もありうる。戸田寮入寮経験者のご批判、ご追加をお待ちしている。次の機会により完全なものにしたいと考えている。ご理解とご協力を願う次第である。

戸田寮の発展を祈りつつ。

(昭21医卒・寮委員長)

## 『海の館』

大嶋藤三

冬の荒れた日には日本海の遠い海鳴りを聞いて育った私は、成人して以来、海のそばに住みつきたいものと思ひ、黒砂海岸（千葉市）まで歩いて五分ぐらいの台地に居を構えたのは昭和二十三年でした。今ではこの海岸も埋立てられてしまい、惜しくも海はわが家からはるかに遠のいてしまいました。住みはじめ頃にはあまりに海が近いので、津波などがあつたら大丈夫かなあと内心は心配したものでしたが、海辺の家の古老たちの安心しきっている生活ぶりを見ているうちに、不安はいつの間にか消えたようです。潮干狩や泳ぎに恵まれた海の自然環境でしたが、それでも夏には富浦（内房州）に民家を借りて二人の子供を連れて泳ぎに行くことにしておりました。

こんな事情のため夏季開寮にともなう海・山寮の視察の場合には、山中、谷川等の山の多い方面に出かけるのが常でした。しかしながら四十四年に次長に就任してからは、管理責任の上



から実際に現場を知っておく必要が生じました。

静岡大学在職時代の二年間、土曜、日曜の上り下りには必ず列車の中から眺めた駿河湾を、船で渡るとは感ひとしおのものがありません。また、往き帰りの私の心を楽しませてくれた富士の山嶺が湾上からの雲間にうかぶ雄姿は実にすばらしい展望でした。

私が沼津港から戸田行きの特急電車に乗船したのは昭和四十七年の八月十五日(火)でした。この日は快晴で風もなく、船は戸田の港に向かって出航いたしました。一時間たらずで御浜棧橋から下船し、道を尋ねながら歩いて行くとその途中には民宿施設が建てこんでおり、御浜地区だけでも二十数軒もあるとのことでした。高台には鉄筋四階の国民宿舎が聳え立ち、以前に書物で知った「ひなびた素朴な漁村」とはおよそ縁遠いものでした。やがて道標「東京大 学戸田寮」にぶつかり、ここからが東大戸田寮の屋敷内なんだなあという実感が湧き起こってきました。寮では青木 管理人、学生委員、藤沢調理人等に会い、寮内も案内してもらい、管理人からは建物・設備・備品等の説明のほか、寮の現実問題について詳細な報告を受けました。大学側の学生レクリエーション施設に対する方策の立ち遅れと、その発想の貧困さを私はつくづくと感じざるを得ませんでした。これは戸田寮だけでなく、谷川や山中寮の場合でも同じ感じを受けました。学生部の先輩たちは二十三年以来学生運動の応待に身も心もすり減らされてしまい、おのれの心身のレクリエーションの場としての寮ではあっても、これらの早急な建設や整備にはとても手がとどかなかつたのでありましょう。そして、根源的に発想の転換をはかるべきものと心の中でひそかに決意させるものがありました。

寮の前の海は昔から「巴の海」と呼ばれて人々に親しまれてきたことでしたが、海水浴場は房州の砂浜の荒っぽさはなく、実に静かな、またいかにも入江という感じのものでした。学生委員は、「ここは昔磯辺であったところを砂で埋め立てて砂浜に造りかえたんだそうです」と語ってくれましたが、この話は私にとって非常に興味深いもので

した。砂浜から堤防ぞいに砂嘴の尖端に出ると、外海の波のうねりは豪壮たる感じそのもので、戸田港がマリアナ沖などへの遠洋漁業の基地であることの意味も読みとれるように思われました。

翌日の朝、松林の中を散歩しながら辿っていると、村立の造船郷土資料博物館の庭に出ました。ここで一人の小背のがつしりした年輩の人と挨拶をかわし、東大の者であることを告げましたところ、天野寅雄さんでした。天野さんは館内を時間外にかかわらず特別に見せてくれて、最後に「東大の寮も昔は若い学生さんだけだったが、この頃は子連れや女連れの客が多くなったよう……」と不満げにもらされ、親しくなった学生達の名前とその後の動静については誇らかに語り、昔の寮生と村人たちとの間柄をのぞかせてくれました。村立博物館の資料で戸田村とロシアの軍艦ディアナ号の物語をはじめ知り、戸田村への関心を新たにいたしました。それ以上に天野さんの心の中に宿りつづける学生たちの面影を追い求めてみたい心情にかられてなりません。こうした村人たちのあたたかい人情に支えられ、静かな巴の海、老松の御浜岬、駿河湾上の富士、そして外海に臨む戸田寮こそ、ここを愛する学生たちの青春にとってはまさに「海の館」とも称すべきものかも知れません。

聞くところによれば明治四十一年に大学は戸田村との間に地上権を設定し、運動会は毎年若干の教育費を戸田村に寄附していたようです。この費用が村では何に当てられていたかを知りたいところですが、いかにも大学らしい寄附の仕方のように思われます。昨年の夏以来、古田主事等によって村の老人診療が行なわれることになりましたが、非常に適切な奉仕と存じます。大学の本部では年二回いわゆる公開講座が実施されていますが、実際には都民相手のものとなってしまいます。体育保健寮所在の地域社会向上のためには、大学は決して労を惜しむべきではないと考えます。

(前学生部長)

明治・大正時代

## 明治・大正の戸田寮について

日野和徳

私が見聞している戸田寮の歴史は戦後昭和二十二年に再開されてからのもので、学生であった頃の昭和十年前後の戸田もほとんど知らない。いわんや明治・大正の寮の歴史については、仄聞していたこと以外は今回諸先輩の原稿や資料に目を通してはじめて知ったことばかりである。まず、それらの資料によって明治以来の変遷にざっとふれてみたい。

戸田はその昔、部田とも書かれ、江戸幕府の直轄地であったという。幕末の頃、ロシアのプーチャチンが、難破した船の代船を戸田で造船したという遺跡があることは、戸田を訪れる者が接しうる歴史の一コマである。いくたの変遷をへて現在のように静岡県田方郡戸田村とな



ったのは明治二十九年（一八九六年）三月というから、東大の水泳場ができたのはそれから間もなくのことである。のちに東京帝大の寮となった旅館保養館が、御浜に

建てられたのは明治二十三、四年のことであるらしい（その旅館の娘であった堤よしえさんの話）。この景勝の地の旅館には有名人も訪れたようで、当時の宿帳には陸軍大将の野津さんや黒木さん（いずれも日露戦争の勇将）の名もあつたという。この旅館は明治四十一年まで経営されていたが、このとき東大に十万円ぐらいで譲渡されたそうである。この譲渡は東大側がやや強引に押しきつたらしいことがうかがわれる。東大の水泳場がここにできたのは明治三十一年で、そのいきさつは太田先輩の回顧談に詳しい。その夏には沼津御用邸に来ておられた皇太子（後の大正天皇）がわざわざこの水泳場においてになったことが、当時の静岡の新聞に記事としてのついでる。

明治三十一年から四十一年までは、夏季のみこの保養館に宿泊して水泳場が開設されていたが、四十一年に篠田治策、白根竹介、広瀬渉、太田資時氏等の先輩と丹波水泳部長、それに土地の有力者松城氏の尽力が実って、

結局御浜半島のうち弁天祠のある区画を除き、山麓までの全部について九十九年の地上権が東京帝大に対して設定されたのであった。戸田村の記録では、明治四十一年三月一日付で東京帝国大学運動会理事中村恭平氏と戸田村長水口悦郎氏との間に契約書が交されている。この時保養館も前記のごとく東大に譲渡され、ここにはじめて現在の戸田寮の原型ができたことになる。この戸田寮創設に当って尽力された太田資時氏は寮の生き字引ともいえる存在で、昭和十四年の運動会報に回顧談を述べておられるが、戦後も夏の戸田寮でしばしばお元氣な姿をお見うけしたものである。

寮の建物のうち滄海楼とか学士部屋などは明治以来のものようであり、堤さんの追憶談の中にも滄海楼がその昔からあったことが述べられているが、太田さんの談の中では大正の末に保養館は取払われたという記事もあるので、そのへんの関係が明らかでない。貴賓館は元渋谷にあった徳川家の能見物に用いた建物を移築したものとのことである。

大正の末頃からは戸田でインターハイの水泳競技なども行われたようであるが、当時はまだ水泳プールがなかったことを思えば当然であったであろう。

大正十四年頃の水泳部日誌が残っている。これは本誌の中にも抄録されているが、当時の戸田の有様がまざまざと描かれて興味深いとともに、その頃の学生がみな字と文章の上手なことにも驚かされ感慨深いものがある。

さて資料を閲覧してみようことは、戸田村の風景・人情・寮の気風等は、明治・大正のそれに比して、昭和三十三年頃までは大きな変化はなかったといってもよいようである。明治三十一年から大正・昭和へと日本の歩みの変遷にもかかわらず、そして戦争・敗戦・戦後という大変動にもかかわらず、昭和二十年代の戸田にはまだ明治・大正が生きていたという感じが深い。それは戸田村にとつては、あるいは時代に残り残された姿であったかも知れない。

東京帝大の権威がどこにでも通用した時代、それでもなおこれに対する反感と反抗の姿があったことは、すでに大正九年八月二十一日の大阪毎日新聞の記事「戸田村民と大学生との確執……契約を破棄せよ」にもうかがえる。

戦後日本の変革が浸透するにつれ、東大と戸田村の関係も次第に変化していったことは戦後の歴史に詳しいところであるからここには述べない。(前戸田寮委員長)

## 堤よしえさん(八十四才)の話——昭和四十九年秋

取材 鈴木一郎

鈴木 現在の戸田寮の前身、つまり旅館時代から東大の寮になるまでのいきさつを伺いたいと思います。その旅館はあなたのお母さんが経営していたそうなのですが……

堤 そうです、保養館という旅館を母がやっています。

鈴木 それは明治のいつ頃ですか。

堤 母は松城家の長女で、別家して戸主となりました。私は明治二十五年生れです。旅館が出来たのは私が生れる一、二年前だと思います。その頃は御浜には漁師の網小屋があっただけで何もありませんでした。父親は造船技師をしており、その父があそこを村から借り(五十年間の借地契約)、整備して旅館を建てました。古い宿帳

には野津大将や黒木大将の名前もありません。

鈴木 今でもその宿帳はあるのですか。

堤 事情があつて家財道具を親類

の大作寺という寺の倉庫に預けましたが、倉庫を改築するときに写真とか宿帳とか古い道具類を全部処分されてしまい、現在は二代目で何も判りません。私は堤家の養女となったんです。御浜には、子供の頃弟や妹が居たのでときどき行きましたが、その頃は御浜に行くのには道路がないので金比羅さんから登り、千代丸さんの家のあたりに畑があつてそこへ降りて、さらにそこから登ると魚見の松があつて、そこを通過して公園のあたりに出ました。七、八才の頃、この道を通ってたまに行く事がありました。ほとんど船で行きました。水泳部の始め頃に、秋父宮妃殿下の父親の松平さんなども来られました。この頃の常連は十名位でした。当時父は旅館の前の浜に生簀を作り、沖のほうを石で囲んでその中に土地の漁師が鯛網で捕った鯛とかシイラ、イサキなどを買い取つては生簀に囲いました。浜にはあずまやなどがあつて非常に風流でしたが、それがあつた時大きな台風があり、全部流れてしまいました。松平さんの時代から少したつ



鈴木 今でもその宿帳はあるのですか。

堤 事情があつて家財道具を親類

て水泳部員も増え、「東京帝国大学水泳本部」という看板を掛けました。この頃は一日二十人位来ていました。偉い先生方や有名人が多く、本部には山川総長はじめ水泳部員の名札がずらりと並んでいました。学生監の名札もありましたし、水泳の指導には、心伝(?) 流の師範で上原さんという老人が来ていました。当時の水泳部の階級は一級から五級までで、白帽に黒線二本が師範、白帽に黒線一本が取締り、白帽だけが一級、黒帽が二級、黒白帽が三級、赤白帽が四級、赤帽(?) が五級、というようになっていました。

鈴木 保養館時代の収容力はどの位だったのですか。

堤 一〇〇名位でした。海中には筏や飛込台などが設けられており、水泳部員は皆六尺禪をしめていました。浜に風呂場があり、海から上ると風呂に飛込み、物干し場で禪をかけて干すのですが、赤や白の禪が風にひらひらはためいて万国旗みたいで見事なものでした。当時の学生は水着が夏の間の制服だったようです。

鈴木 旅館の経営は明治四十一年までだったのですか。

堤 そうです。その時分は外科医の塩田先生、駿河台病院を経営していた近藤先生、法医学の緒方先生などが毎夏来られました。

鈴木 緒方規雄さんですか。

堤 父親のほうです。規雄さんは松平さんあたりとよく来られました。それから辰野先生の息子の隆さん、保さんなど中学生の頃から来ていました。隆さんは私の孫が嫁をもらう時神田の学士会館で式を挙げたのですが、その時来てくれました。この頃の人達はほとんど亡くなっています。石坂泰三さん、俳句で有名な荻原先生など、母が亡くなったあとよく墓参りをしてくれました。

鈴木 この当時の学生の遊びはどのようなことをしていたのですか。

堤 寮の前に相撲場、裏には弓場、テニスコートなどがありました。テニスコートは今の資料館あたりです。相撲は辰野保さんが断然強く、大関でした。三喜はよく弓の的の紙張りをやっていました。学生が退寮して東京に帰る時の別れの言葉は、「バカヤロー」と大声で叫ぶんです。それが別れの挨拶でした。こんな良い所から東京のゴタゴタした所に帰るなんて本当に馬鹿野郎だという意味なんです。御浜の先から船が見えなくなるまで見送るんです。水泳部の開場式はまるでお祭りのように賑やかでした。村の人たちは皆船で見物に来ました。水泳部

員は日傘をさして行列して泳いだり、水書(水の中で扇子に字を書く)をやったり水泳競技をやったりで、それは大変なものでした。そしてその日は園遊会があり、いろいろな店を出して村の人達を招待しました。学生は舞台を造り、剣舞をやったり詩吟をやったり、また福引きなどもありました。相撲なども飛び入りで村の人たちや子どもなどと一緒に県知事の息子さんなんかも相撲を取っていました。このような大学の行事を通じて、村当局や村の人たちとの交友関係は非常にうまくいってました。毎年、夏になると寮の前の松の木陰で徳一というおじいさんが床屋をやっていたり、また大浦のほうから毎日おばあさんがあんころ餅を売りに来たりしました。遠泳大会の時は、泳いだあと葛湯を大釜で煮て食べさせたり、秀月から赤、青の団子を取り寄せて食べさせたり大変でした。当時の学生は立派な髭を生やした人が多く、夜になると先生たちはよく学生を連れて秀月や春木屋に行きました。春木屋では鳥と家鴨を飼っていて、家鴨をすき焼きのように鍋にして食べさせていました。秀月の二階はしゃれた喫茶店になっていて、シュークリームなど評判が良かったのです。

鈴木 秀月というのはどのへんにあったのですか。

堤 今はタバコ屋になっていて、高田肉屋の筋向かいになります。菓子屋は当時戸田に一軒しかありませんでした。毎晩学生は秋月に行こうか春木屋にしようかなんて、結局酒を飲む者は春木屋へ、甘党は秋月へいそいそと出掛けて行きました。村には当時医者がいなかったのので、医学部の先生が寮に来ると村の人たちに知らせ、病人は寮で診療をしてもらっていました。寮では教授が泊まる棟と学生が泊まる棟が別になっていて、教授連中は学生に夜中に空き缶を叩かれたり弁天様の太鼓を叩かれたり、ストームをかけられたりして、一晩中寝られなくて困っていました。

鈴木 教授の部屋というのはどの棟ですか。

堤 教授の部屋は本館の二階で、学生は離れか奥の二階家でした。

鈴木 本館の滄海楼という名称は保養館時代も使っていたのですか。

堤 そうです。滄海楼という額がその後もありました。あの頃はストームをかけられた教授たちは前の松の木の下の縁台で寝ていました。夏の期間が終ると、勉強をしに来る学生もいたり、また神経衰弱みたいな学生が一年中いるようなこともありましたが、堅田病院の息子は三

年間も寮にいました。

鈴木 堤さんは現在の寮になってから最近あのへんに行かれたことがありますか。

堤 いつか妹と一緒にあのあたりに行ったんですが、昔とは大分変わってしまいました。寮の前の浜では昔はボラ貝、帆立貝、赤貝などが沢山とれて、ヒチビ、キシヤゴなんていう貝は砂浜一面に生棲していました。そして寮の横に花壇が作ってあって、草花が植えられており、なかなか風情がありました。今はその頃の面影が全くないのが淋しいですね。

鈴木 その頃の村の食糧事情はどうでしたか。

堤 米、果実などは沼津から船で運んで来て、水は井戸水を使っていたんですが、すこし塩気があり、飲料水には向きませんでした。当時は沼津に行くにはポンポン船か和船が主でした。

鈴木 寮を東大に譲った時の金額は大体どのくらいだったんですか。

堤 あれは明治の四十年頃だと思います。松城の家に県知事と丹波敬三さんが来られて、どうしても東大に譲れという話があり、何回かの交渉の結果、とうとう丹波先生に強引に押し切られてしまったようです。そして、寮

が東大のものになってからも私の母が賄いをやっていて、実質的な運営は母でした。しばらくして、東京から

専門の調理師が来るようになりました。その当時は、野菜などは興津にある園芸実験所から運んでいました。そのうち母が病気になる、東京の病院に入院して近藤先生はじめ医学部の助手の人たちに大変親切にしていたいただきました。旅館を手離した時の金額は十万円ぐらいだったと思います。昔は東大の学生と村民との交流が深く、村の人たちと学生はすぐ懇意な間柄になったんですが、戦後はだんだんと人情がうすれて淋しいかぎりです。

鈴木 それではこのへんで、どうもありがとうございました。また何かわからないことがありましたら伺いにまいます。

## 見たり聞いたり

太田資時

最近、御浜寮の常務委員齋藤健太郎、林周一君等が私の事務所に見え、「帝大水泳部を如何にして御浜に定めたのか、何か古い由来でもあるなら話してもらいたい」とのことであった。

御浜の古い話といっても、私は戸田に水泳部を設置したのは全く昨日今日のように思っているが、なるほど顧みればすでに四十二年前の昔のことで、多くの部員の中には当時まだこの世に生まれ出ていなかった人もあるかも知れないが、そうすれば両君の尋ねらるる所ももっともなことである。とにかく、昔話として知っていることを話してみよう。しかしそれは見たことばかりではないから、見たり聞いたりといふ訳である。

明治・大正時代  
初めて御浜に水泳場を設けたのは明治三十一年であるが、私が最初に御浜に行ったのはそれより四年の後で、同三十五年の七月、部員の一人であった島田剛太郎君の勧誘を受け、ポンポン蒸気で御浜に上陸したものである。元帝大水泳場は神奈川県の大津海岸にあったと聞く

が、たまたま明治三十年の暑中休暇に、当時学生であった篠田治策、栗林己巳蔵君等が伊豆沿岸を旅行し、戸田を通過した時この海は水泳場として好適であると考え、大津の水泳場を戸田に移すべく河童仲間の議をまとめたのが、戸田の御浜が帝大水泳場となった発端であった。

戸田の史蹟を詮索すればいろいろ面白いこともあるが、それは私の引き受けたことではないからここには先づこの戸田の海に因んだことを挙げてみよう。古いことの一つをいへば、この戸田で露国の軍艦を造ったことである。時は安政二年の出来事で、露国の軍艦がどういう風の吹き回しか駿河湾で遭難して沈没したことがあった。赤髯の露助も乗ってきた船に沈没されては手も足も出しようがない。そこで徳川幕府に哀訴嘆願して造船場の許可を得たのがこの戸田であった。露助は戸田に約一ケ年ばかり踏み止まって、小なれども代艦を建造してこれに乗って帰国したということである。聞くところによれば、帰国用の代艦はその後露国から徳川幕府に記念と

して寄贈したといふことであるが、その造船の場所は今なお艦長の名に因んでプーチヤンと呼んでゐる。

話がすこし横へそれたようであるが、篠田、栗林君等が水泳場を戸田に移さんことを発起したのは、露助の後塵を仰がんとしたためではない。というのは後年のことではあるが、篠田君は日露戦後の最中に戸田の海で磨き上げた水泳術を利用し魚形水雷を抱えて旅順港に泳込み、露艦を撃沈せんと発議したくらいであるからである。しかしこの議は乃木將軍に容れられず、ために篠田君が戸田仕込みの技倆を発揮することが出来なかつたのは残念であつた。

帝大水泳場を御浜に移転した明治三十一年の頃には、弁天祠のほかは保養館という旅館があつたのみである。その保養館というのは三棟ばかりの一構であつたが、これ以外には泊るような家とてなく、他はみな苦しいの船小屋ばかりであつた。ここに一つ水泳部員にとつて仕合せであつたのは、保養館の女将が学生を愛する一種の女丈夫で、学生のためにはあらゆる親切を惜まない人であつたことである。ある年のことであるが、保養館の下座敷に泊り込んでいた夫婦連れの者が何か学生の機嫌を損じたものか知らないが、学生仲間ではこれを追い払う議

が起つて、二階ではいつしか柔道の乱取りが始まつて、足払い、背負投げ、腰投げ、捨身等それからそれへと技の限りをつくしいつ終わるとも見えなかつた。そこで女将は苦情どころか、かえつて息つきにビールや肴等を持ち出す等の騒ぎに、さすがの夫婦客も翌朝はこそこそ立ち去つた。

これは明治三十一年の夏のことであつたが、御用邸に御避暑中の皇太子殿下が駆逐艦に召されて戸田湾を御遊覧遊ばされた。時あたかも水泳競技最中であつたため暫時御停泊あらせられ、水泳部員に御召艦まで来艦せよとの御沙汰を拝したが、だれ一人礼服等持ち合わせる者がなく、その旨をお附きの御方に申し上げたところ、水着のまま差し支へないとの御許しがあり、篠田君等一、二の者は水着着用の羅漢姿で拜閲の光栄を得た。

御浜は水泳のほかにもまた面白いこともある。ある夏には戸田湾内へ偶然はいり込んだ小鯨十数匹を学生等が打ち寄つて生捕つた。また、ある年は土地の漁船が鮪の大群を遠く包圍して、これを御浜の湾口近く追い詰め、周圍に漁網を下して全部を捕虜にした。その数じつに無慮一万五千もあつたらう。そこで、御浜に待機していた部員の中には漁夫とともに網圍いの中に飛込み暴れ狂う

鮪の群を追廻したのもあつたが、学生の捕へたものは僅かに一、二匹に過ぎなかつた。

さらに一つ御浜について忘れる事の出来ない重大問題がある。それは明治四十一年の夏季であつたと思う。時の水泳部長であつた丹波敬三君がやつて来ていうには、当水泳場は東京から遠くて、不便でもあるからもう少し近い、相州三崎の臨海実験所の地内に移したいと思ふ、かの地は海水も清く景色も良く何かと便利であるからとの話であつた。この話を聞いた部員の驚きはひとかたではなかつた。そこで篠田治策、白根竹介、広瀬涉君等と私と都合四人がその時の参謀格を引受けて協議を凝らし、とにかく丹波部長と共に実地の見聞をするにしかずと決めて、丹波部長を同道してさっそく、相州三崎に出掛けたのである。三崎に着いて見ればなるほど土地は相当広く水泳部員を收容するだけの場所はあるが、しかし、三崎の海は油壺といわれているくらいで、岸深くして水面暗く、剩へ糸水母やその他名も知れぬ海虫類の巢窟で一度この海に入れば此等害虫魚の総攻撃を受け、到底水泳の出来る処でないから是非とも丹波部長の考えを變更させる必要があつた。そこで一計を案じ櫓の操縦について自信を有する篠田君はどこからか一隻の伝馬を捜

して来て丹波部長に乗船を促し、自ら櫓を押し沖合さして漕ぎ出した。介添人という意味でもあるまいが、広瀬君も乗船して行つた。すると、天魔の戯れか海神の怒りか、にわか突風吹き起ると思ふや三崎の海は丈余の大波が打ち寄せ、今しも丹波部長の伝馬船は転覆せんばかりの危険を感じた。ここにおいて、さすがの丹波君も意外の大波に驚き、ついに移転説を断念したもの見えて上陸を求めた。しばらくして水泳場移転の問題も立ち消えとなつたのである。

御浜はどういう訳で大学のものとなつたかといふことは、よく質問を受ける問題であるが、それには深い魂胆があるわけではない。この御浜の海が水泳に最も適当であるところから、御浜を永く帝大水泳部において使用したいと考へたのは篠田治策、白根竹介、広瀬涉君等と不肖私であつた。幸にも当時土地の有力者で松城兵作君が我々の希望に賛成され、諸君の御希望は戸田村のためにも望ましい事であるから微力なれども御希望の成る様尽力しようといふことであつた。そこで御浜の問題は引続き我々四人の間において研究を重ね、また、戸田より帰京してからもしばしば寄り合い相談し、水泳部長丹波君をもつて大学の方へも交渉したのであつた。その

会合の場所として私の今なお記憶しているのは青山四丁目にあった蒲焼屋である。結局、御浜半島の中弁天祠のある湾口近くの一小区画の土地を除き、それより山麓に至るまで約四町歩にわたる土地に百年の地上権を帝大のために設定し、大学としては地代を払わない代りに戸田小学校に年々若干の学業奨励金を寄贈するという事にして、御浜は全く帝大水泳部の専用することとなったのである。ところで、御浜にあった保養館は館主佐山氏から大学の方へ相当の価格で譲り受けたものである。

御浜に地上権を設定したのは明治四十年前後と想うが、今日までに三十余年を経過したからなお七十年近くは帝大水泳部が使用出来る訳である。聞くところによるとこの地上権は今では国有財産の台帳にのっているとの事である。水泳部には古くから部長というのがあるが丹波敬三君はその一人である。同君は多年の間、御浜に来て何かと部の面倒を見てくれた。丹波君が部長をやめた後の事と思うが、武田千代三郎君や山田三良君が一時、部長となった事がある。

御浜にある建物の中で、貴賓館というのがあるが、これは元、渋谷にあった徳川家の能見物に用いた家を、山田君が部長の時同家よりもらい受けて御浜に移したものである。

である。その位置は前方に、遠く海の上に富士を望み、御浜における最も良い眺望の場所である。

この貴賓館の座敷の前にある松の木は三笠宮殿下が幼年の折この水泳場にお成りになった時御手植えになったものである。

現水泳部長増田胤次君は明治四十二、三年の頃は学生として戸田に来て、他の河童連と共に大いに騒いだものである。同君が部長となったのは確か震災前後と思うがあるいはもっと古いかもしれない。同君が部長となって以来、御浜の面目は全く一新し、前にいった保養館のごときはさっそく取払われ宿舎、食堂を初め、モーターボート、伝馬船等あらゆる現在の水泳設備は皆、増田君の努力のたまものである。同君は水泳にも熱心で毎年の水泳期には必ず来場し真似の出来ない抜手の妙技を見せている。

以上述べた話の中でも、殿下の御来場とか、地上権の設定、あるいは移転の問題等は私の明治三十五年以来、今日までの御浜生活の中における主な思い出の二、三である。なお、その他にも考えればまだ面白い話も沢山あると思うが、それは他日に譲る事にしよう。

——昭和十四年運動会報より転載——

## 松本東作氏の話——昭和五十年六月二十五日

取材 岸尾光二  
八木沢正博

松本 何でも質問してほしい。  
岸尾 豊住さん、緒方さんと一緒に取締りをやりましたね。

松本 そうだ。戸田は駿河湾から向かって左側に湾の入口があり、根元に造船所があった。岬の松林の中にバラックがある。二年取締りをやったが余り記憶はない。

岸尾 造船所は外海にありましたか。  
松本 いや、中のほうだ。

岸尾 現在、漁船などが置いてあります。

松本 昔は一つ脚立が置いてあった（上に一米平方の板）。ここから飛びこんで遊んだ。木の梯子がくっついていて、高さは二間くらいあった。ショウビンという飛び込みをやった。神伝流の技で、

末広巖太郎さんはうまかった。

八木沢 学生の数は何人くらいでしたか？

岸尾 四、五十人はいましたか？

松本 そのぐらいかも知れないが忘れた。野球の先輩の老鉄山（？）といわれた人（実業家のオースリーティ）や、辰野隆氏（東大仏文教授）や息子の豊氏、藤井啓之助氏（外交官、外地で総領事任中に死亡）なんかが来ていた。

岸尾 夏中、水泳以外には何をやっていましたか？

松本 自分は酒を飲まなかった。飲む連中は村まで行ったらしいが、我々の友人にはいない。寮では遠慮していたのではないか。村へ行く連中は相手にしなかった。

房州館山八幡に一高の水泳部の寮があった（三十人泊っていた）。松林の中にバラックがあつて、朝飯前に泳ぎ、十時から十二時、午後二時間、晩飯後と泳いだ。一夏で水府流は覚えた。

そのあと、先輩に誘われて戸田へ行った。取締りは先輩にさせられたわけだ。

八木沢 取締りの役は何でしたか。

松本 委員というか、世話役というか。別にこまかい仕



事の記憶はない。子供の世話をしたりした。

岸尾 どのくらい滞在しましたか？

松本 二ヶ月ぐらいはいた。六、七、八月といったような気がする。開場式については記憶がない。一高は明治四十三年に出た。大正二年に東大を卒業した。

岸尾 そのころは水泳のコースは作っていなかったのですか？

松本 これと違って、そういうものは作ってなかった。

一高では一夏泳ぐと助手(?)といわれた。八幡でもバカヤローはやった。

駿河湾へカツオの群れが来ると、山の上で見張っていて合図をされる。船(ギコギコ)と一緒に乗っていて手伝い、おみやげをもらってきた。群れがきた時は、よく食った。

岸尾 船は沼津からポンポンでしたか。

松本 そうだ。

岸尾 棧橋はどこにありましたか。

松本 向こう側の村へ着いたように思う。

岸尾 寮にテニスコースがあった記憶はないですか。

松本 ない。

故人(大2工卒)

## 『水泳雑記』

青木三弦

東大の水泳部は伊豆の戸田にある。ちょうど巾着の口をしめたような形で、駿河湾に向かって口をあけている。だから海面が静かでほとんど波がたたない。それに湾に流れ込む川も二つほどごく小さなものなので、水が実にきれいだ。手拭いや帽子はいうにおよばず、誤って眼鏡を水底に落とした人があったが、これも拾い上げる事ができた。私は数えてみると三十数ヶ所の海や川で泳いだ。こんなきれいな水はほかに知らない。ほかから来た水泳選手があまり静かなのでかえって泳ぎにくいといったことがあるが、あながち嘘ではないかも知れない。戸田では砂が浮く。それは風のないかんかん照りの日に上げ潮の時、水際でかさかさ乾いていた砂が



小さく膜のようになって下からはがれて浮き、しばらくの間は海の上に浮いてた。こんな静かな海である。私は大正八、九の兩年水泳部の委員をした。初めの年

### 東宮殿下又々水泳御遊覧

沼津に御滞在いたします皇太子殿下には又々十五日、御付の文武官並に御学友方を随えさせられ、静岡より水雷艇第二十号に乘御、豆州戸田湾内なる帝國大学水泳場に御臨場相成りたり。因て各部員西瓜取り、競泳、水泳教師槍杖、筏角力等種々水泳の妙技を御覧に供し奉りしかば、御機嫌麗わしく始終御遊覧相成り、夕頃御用邸に還啓あらせられしやに承る。

### 水泳場閉場

去る六月中より豆州戸田湾内に閉場中なる東京帝國大学水泳場にては愈々去る十八日を以て閉場式を挙げたり。同場は別項にも記せしが如く三回迄も東宮殿下御臨場の榮を辱うしたることとて閉場式は極て盛んなりしが、先づ練習員一同戸田湾の廻泳を初め時しも天候佳良なりしかば、意外の好結果にて午前八時三十分より同十時五十分迄二時間十七分に一里半余の距離を全く泳ぎ得たるもの十七人に達し、中には今夏に至りて漸く泳ぐことを知りし者にて此の遠泳を任遂げしものありたりと云う。畢竟戸田湾の水泳場として尤も妥当なると東宮殿下再三の御臨場に感奮したる等にて此好結果を得しならんと或大学生は云えり。  
(明治31年8月23日 静岡民友新聞)

は宮下静一郎(法)、近藤経一(文)の両君と一緒にやり、次の年には宮下君の代わりに浜口雄彦君が来た。その頃は水泳の師範もなく、この美しい天地でただ面白おかしく暮らしていた。べつに学士部屋と称する一棟があって、いつも多数の先輩が来ていて、我々は色々な面白い話、よい話、悪い話を聞かされたものであった。

この水清く波静かな戸田の海で泳ぐのは実に楽しい。一重伸や二重伸という横体の泳法をやり、ゆっくり伸びをとって二間も三間も水中に身体を横にして進む。そして進みながら今の泳ぎはどうであったか、先き手、受け手はあれでよかったか、真足はどうか、受け足はどうであったかと反省する。そしてまた次の泳法に入る。さらに足の使い方を工夫してスクリュー・モーションを行うと伸びは一段と強くなり、また泳いだ後には水の渦ができる。後年これを詠じて一絶を得た。

一 屈一伸衝浪前（ススム） 徐看足下水紋鮮  
悠悠浮海省游法 湾上漪漪湧靜漣

豆州仙境隔人寰 曲浦長汀指願間  
不懼波濤時湧洶 懷君再訪御浜灣

水泳部の部歌は、「戸田の港に朝風涼し。めざめよ男の兒ら我が夏は来ぬ。我が夏は来ぬ。」というもので、この後に賑かなりフレーションがつくのだが、これはあまり歌われないで、辰野隆氏（仏文学者、名前はユタカと読み、我々はユタチャン、ユタチャンと呼んでいた）作の左の物がサノサ調で歌われて居た。

御浜ちよいと出りやね、御浜ちよいと出りや沼津の浦よ。眉毛に涼しき富士の峰、三保の松原ねさしまねや、いつか心も清見潟。これに対して、文科の鈴木氏が返し歌を作った。

沼津ちよいと出りやね、沼津ちよいと出りや大瀬の崎よ。君の姿ミ御浜まで、苦勞駿河のね海越えて、波に揺られて行くわいな。次に下手な漢詩を御紹介する。

一 船発ニ御浜ニ望ミ沼津一 芙蓉皓皓万峰神  
青松白砂宛如レ画 心気揚々進破淪

二

昭和五、六年頃我が師増田先生が水泳部長をしておられたので、お伴して久しぶりで戸田に行った。ちょうど、先生と同期の白根氏が静岡県知事をしてもらったので遊びに来られ、その帰りに増田先生に従って私もすすめられて静岡に行き、知事官舎に一夜「厄介になつた。知事ともあれば大したもの、県の船が迎えにきて我我四、五人だけが乗り、波静かな駿河湾を横ぎつた。そのつぎには昭和三十七年頃、これは家内同伴だったので村の旅舎に泊つたが、昔のままの汚い家なので驚いていた。さらに今年、詩友二名と共にバスで修善寺から達磨山を越えて行ったが道路は大半舗装されており、戸田峠を越えると富士はその全容を現わし脚下には戸田湾が、遠くには静浦湾や三保松原が手に取るように見え、すこぶる美しい景色であった。この時は一月であったから無論泳げなかったが、その前の時には翌日本泳部に行き、委員の人と色々話をしてちよつと泳いでみたが、漁船から出る油が一面に浮いていて、昔日のおもかげはなかった。いや、変わったのは自然ばかりではない。往年ここ

で寝食をともにし、ともに泳いだ人達も多く幽明境を異にしてはいる。

一 峻峭蒼巒欲レ到天 絶涯足下遠何千  
迢々屈曲道南北 忽愕碧空白扇懸  
二 達磨山上望無窮 富岳全容霄碧中

曲浦長汀尽指示 煙波茫昧俯凝レ瞳  
三 豆州西岸達人寰 懷久情深海与山  
往昔知音離隔香 水清波静戸田灣  
この水清波静というのは、私にとって戸田の印象である。また詠嘆でもある。（昭和四十八年 学士会報より転載）

## 稲木さんの話

鈴木 稲木さんが東大の寮に居られたのは昭和何年頃からですか。

稲木 さあ何年頃かよく覚えていません。

鈴木 その当時の取締役は宮下さんあたりだと思いますがどうですか。戸田の夕べの時来て居りましたが……。



稲木 宮下さんが来ていたので、当日、私達は村側の方に呼ばれていたの逢えなくて残念でした。

高橋 牧野さん、大場さんなんか

もご存じですか。

稲木 よく知っております。

鈴木 そうしますと大体、昭和六年頃から二十年頃まで寮に関係しておられたんですね。稲木さんの前任者はどなたですか。

稲木 塩崎さんです。

鈴木 塩崎さんという方はまだ居られるんですか。

青木 戸田の夕べのとき招待したのですが、本人が病気で入院していたので奥さんが来られました。

鈴木 塩崎さんは何年ぐらい居られたんですか。

稲木 さあどのくらい居られたのですかね。その当時、寮は夏以外は閉鎖していました。

鈴木 そうですか、夏だけ閉鎖していたのですか。

青木 私が来る前まではそうでした。

鈴木 寮の敷地返還問題が起きたのはいつ頃ですか。

稲木 私のいた時でした。

鈴木 昭和六、七年頃だと思いますが。

稲木 そう、その頃です。

鈴木 その時の村長さんは田丸虎吉さんですね。この人はまだ健在ですか。

稲木 田丸さんは亡くなりました。

鈴木 その頃の村会議員で藤尾、佐々木、監物、佐山、山田さんという人達はまだおられるのですか。

稲木 全部亡くなりました。

鈴木 寮を建設した当時のことをご存じですか。

稲木 大体知っています。寮のある所に佐山さんという方が旅館を建てました。旅館の名前は保養館といっています、佐山さんの奥さん（松城兵作さんの姉）が経営していました。その方のご主人は、佐山芳太郎といって、県議員員などもした戸田の財閥でした。当時は東大の学生など沢山その旅館を利用していました。

鈴木 その当時という明治四十年代ですか。

稲木 いやもっと前からでしょう。

鈴木 その頃、東京帝国大学とっていったんですが、帝大の学生が盛んに戸田に来ていたんですね。

稲木 太田資時さんあたりが大学で買収してもらおうよう一生懸命奔走したようです。

鈴木 太田さんはその当時はOBだったんですか。

稲木 学生でした。その当時は村としても大学に来てもらうのは大変名譽なことだからということ、うまく運んだらしいです。

青木 先日、堤さんに会いました。

稲木 あの方が松城やえさん（保養館をやっていた人の娘で、よし江さんという人です）

鈴木 その頃の村長さんは水口悦郎さんですね。この方が寮の敷地の賃借契約をしたらいいんですが、そのへんのいきさつは判りませんか。

稲木 さあ良く判らないが、まあ百年というのは永久にというような意味ではないかと思えます。

鈴木 明治四十一年三月一日に百年間の契約書を交しますが、このときの佐山さんとの関係はどうなっているんですか。

稲木 太田さんがなかに入って運動していたんで、私は佐山さんとの関係はよく判りません。

鈴木 佐山さんの娘さんはまだ健在なんですね。

青木 このあいだ戸田の夕べに来てもらうよう案内したが、足が悪いので長く座っているのが大変だからというので来られなかった。堤さんの家へ行けばいろいろ話が聞けると思います。

鈴木 では、その当時は建物などはどうなっていたんですか。

稲木 学士の建物はありました。滄海は建て替えたものです。

鈴木 それでは旅館をやっていた当時の建物は全然ないのですか。

稲木 いや貴賓館のうしろにある二階家がその当時のものですね。あの貴賓館は徳川さんからいただいたものですね。

鈴木 そうです。解体して復元したものです。

稲木 あれは徳川さんの別荘で、それをそのままもって来て建てたらしい。

青木 材料も古いし建物の中では一番いたんでいる。

稲木 井戸の前にある離れは割合新しいものです。旅館

時代は滄海が本館になっていた。

鈴木 滄海を建てたのは昭和の初めではないですか。

稲木 いや今の滄海は建て替えたものです。

鈴木 そうすると旅館時代も滄海はあったんですね。

高橋 造り方などは全然変わっているのですか。

稲木 元の滄海はなかなかシャレた建物でした。

高橋 今の造った前の建物の面影を残すということはしなかったのですか。

稲木 そのへんのところは判りません。

鈴木 前の建物は無償で大学が譲り受けたのですか。

稲木 判りません。

青木 そのことは佐山さんに聞けば判ります。

鈴木 佐山さんとの契約はどうなっていたのですか。

稲木 よく判りません。

高橋 滄海が出来たとき学士も一緒に出来たのですか。

稲木 滄海のほうがあとです。私が大学に行ったとき学士はありました。学士は昭和の初めだと思えます。

鈴木 あなたがいた頃、賄いのほうはどうなっていたんですか。

稲木 東京から本職の方が来て全部やっていました。

鈴木 その頃、大学の食堂は須田町食堂とか富士アイス

とかが請負ってやっていたので、そういう業者がやっていたのではないですか。

稲木 そうです。私がいた時は須田町食堂が賄いのほろをやっていました。関口さんという主任が毎年来ていました。

鈴木 その時分は、今の学生部は厚生部という名称でしたが、職員ではどんな人が来ていましたか。

稲木 その頃は大学の職員は来ていませんでした。利用者も医学部の学生や医者が多く、学士部屋にいて村の人の診療もよくやっていました。

鈴木 稲木さんが寮に関係をもつてから、寮あるいは村にとつて一番大きな事件とはどんなことでしたか。

稲木 村当局としては東大の使っている敷地を返還せよということ再三いっていましたが、たいした問題にはならず済みしました。

鈴木 全村こぞって署名のうえ土地返還の要求をした時代がありましたか、その時はどうでしたか。

稲木 そんな時もありましたね。

鈴木 その時の署名した名簿がありますが、これを見ると村当局がまとめあげたもので、全村民の意志で書いたものと思われません。

高橋 この書体をみると、役場の人が何人か廻って作りあげたものと思われます。

鈴木 その時分、女中さんは何人ぐらい居ましたか。

稲木 毎年四人ぐらいで、一番古いのは稲木せい子さんでした。

鈴木 終戦後は学生課から責任者が来るようになりまして。吉川学文さんが一番古く、神田順治さんなんかも見えられました。

稲木 そうでしたね。

鈴木 私は加藤橋夫さんにたのまれて職員になりました。小学校の職員になるつもりだったのですが、そんなわけで寮の管理人になりました。

鈴木 加藤さんが学生課長の時代です。その話はどこから出たのですか。

鈴木 私は戦後、稲木さんの代わりに寮に入っていて、加藤さんが寮に来られた時直接たのまれたのです。

鈴木 松浦さんはその頃来なかったのですか。

鈴木 ずっとあとになって来ました。

稲木 いや吉川さんが来ていた時も、松浦さんは来たことがありません。

鈴木 勝呂金太郎さんはまだご健在ですか。

稲木 いいえ。あの人が村長だった。昔は村長が管理人だった。

鈴木 そうすると小川さんからずっと続いているんですね。

鈴木 寮に関係のあった人の名前を全部寮史にのせたいので名前と期間を調べてください。(青木さんに依頼)

高橋 あの滄海楼というのは旅館時代から変らないのですか。

稲木 そうです。

鈴木 今の食堂はいつ頃出来たのですか。

鈴木 私が居た時はありましたし、だから大正時代かも知れません。

鈴木 その頃の調理場は、確かいま物置きになっている釜屋だったと思います。

鈴木 そうです。今の調理場はあとから作ったものです。

鈴木 軍隊が入っていたのはいつ頃ですか。

稲木 十九年頃です。海軍の水路部の兵隊です。予科練の兵隊でした。

鈴木 そうすると、学生はその期間は寮を全然利用していなかったんですね。

稲木 そうです。軍隊が入っていた時分、寮の荒れ方はひどかった。

鈴木 兵隊は何か特殊な作業をやっていたのです。

稲木 防空壕を掘っていました。道路ぞいの山すそに横穴を掘っていました。

鈴木 ああ、今でもあるあの穴ですか。

鈴木 そうです。あの頃は風呂に入るのが大変な事でした。ポンプで水を汲み込むのが一日仕事でした。

高橋 だから風呂番なんているのがあったんですね。

鈴木 それで、その頃の皆さんの賃金はいくらでしたか。

稲木 私達は日給六十銭ぐらいでした。

鈴木 その頃の六十銭の価値をどう感じましたか。

稲木 安かったと思います。

高橋 いまも昔も変わらないですね。

鈴木 その時分の物価はどうでしたか。

稲木 たばこが四銭からでした。バットが七銭でほまれが五銭、米が一俵六円でした。だから米一升十五銭ぐらいということですよ。

鈴木 私が来た時は今の駐車場になっているあたりに掘立小屋があり、その中で炊事をやっていました。食事も

その小屋の中でしていましたが、それは終戦後すぐ取り  
 払われました。

鈴木 青木さんが寮に入ったのはいつ頃ですか。

青木 二十一年で、職員になったのは二十二年です。

鈴木 そうすると終戦と同時に学生は寮に来ていたの  
 ですか。

青木 そうです。利用者は全部自炊をしていました。

鈴木 利用者の事前連絡は全然なかったのですか。

青木 連絡もないし許可証なんかも持って来ませんでした。  
 た。

鈴木 そうすると運動会は稲木さんたちの時代も利用者  
 の事前連絡をしなかったのですか。

稲木 そうです。だが三月は弓術部の人が毎年合宿をや  
 っていました。三十人から四十人、だから学生が来てか  
 ら炊事をしてくれる人を探したりするのが大変でした。

鈴木 戦後あの寮に人が入れるように整備したのはどの  
 時ですか。

青木 それは稲木さんです。その当時は窓硝子の硝子、  
 部屋の電球なんか全然なく全くひどい状態でした。布団  
 は稲木さんが一時どこかに運んで保管していてくれまし  
 た。

稲木 私の親類に大きな家があったのでそこへ預けまし  
 た。

鈴木 その時分の女中さんはどこに寝ていたのですか。

稲木 今の食堂のとなりの女中部屋です。その時分の学  
 生は毎晩酒を飲んで、さわいで女中さんを寝かせなくて  
 困ったものでした。それを年をとった太田資時さんあた  
 りがやるんですからね。

高橋 その当時、夏の利用者は多い時何人ぐらいでした  
 か。一日百人以上ありましたか。

稲木 いやそんなに沢山は来ませんでした。

鈴木 今と違い学部も学生数も少なかったから、現在ほ  
 ど利用者は多くなかったかも知れませんが。それから、  
 伊豆半島の中学生を集めて水泳大会をやったような事が  
 新聞に出ていますか……。

稲木 それは無いと思います。ただ村の連中を集めて毎  
 年水泳大会を盛大にやっていました。

青木 その時は皆にサンドイッチなどを配り、ほんとに  
 大変なものでした。

鈴木 いま村で一番年長者はどなたですか。

稲木 毎年八十八才になると村で祝ってくれます。今年  
 は二人でした。今九十才以上の人は何人もいませんね。

鈴木 そういう人達から、外から見た戸田寮について話  
 を聞いてみたいのです。村側からみた大学の寮というこ  
 とで寮史にのせたいと思っています。

稲木 堤さんは八十才以上だから、あの方に聞けば大体  
 そのような事も判ると思います。

高橋 稲木さんは何才におなりですか。

稲木 数えて八十才になります。

鈴木 それでは保養館時代から御浜のことを良く知って  
 おられたんですね。

## 春木屋さんの話——五十年五月

(春木さんは明治四十一年生れ。小学校の校長先生を  
 されておられた)

春木屋 帝大時代、学生達がここ(春木屋)で家鴨、鴨  
 料理を食べに来ました。

古田 モーターボートを使い始めたのはいつ頃からで  
 したか。

春木屋 大正の末頃からありました。法科の学生達が使  
 っていました。陸奥というモーターボートを始め使っ

稲木 さあ、あそこには行ったことはありませんが、中  
 の様子はまだ良く判りません。

高橋 その旅館の敷地の範囲はどの程度でしたか。

稲木 それは旅館の建っている所だけだと思います。

高橋 東大が借地契約をしたのは御浜全部ですか。

鈴木 今プールになっている所に海に面して船小屋があ  
 り、そこから貴賓館の脇までだったと思います。

まあ今晩は時間も遅くなりましたのでこれで失礼し  
 て、また判らないことがあったらお伺いします。

取材 古田直樹  
 岸尾光二

いたが船が小さいので村に遊びに来るのに学生が沢山乗  
 れないので、その後大きなモーターボートを作った。モ  
 ーターの主任運転手は監物東作という人です。よく学生  
 を乗せてうちに来ました。夕方、家鴨料理を食べに来  
 て、九時頃寮に帰りました。毎日何人の学生が必ず来  
 ました。私の父の兄弟が秀月堂という菓子屋をやってい  
 て、そのミルクセーキが評判でした。呑み党は春木  
 屋、甘党は秀月という具合にきまっていました。当時春

み党の代表は辰野隆さんでした。弟の保さんは相撲が強くて、素人大関が戸田に来て相撲を見せていた時、飛入りで出て保さんが大関を負かしてしまい、反物を懸賞にもらったことがあります。辰野兄弟は戸田が好きで、学生の時毎夏来て家に寄ってくれました。太田資時さんも戸田が好きで、よく家鴨料理を食べに来ました。太田さんは若い人と呑んだり食べたりするのが大変好きでした。

水泳部の合宿で、寮に収容しきれない時はうちにも学生が泊ったりしました。私が子供の頃、増田先生が水泳部長をしておられた。神保さんと云うOBは豪傑肌で裸踊りが得意で、酔払ってよくこの二階から小便はジャンジャンするし、真昼間から家鴨料理を食べ酒を呑んでいました。斎藤茂吉さんも一夏うちにおられたこともあり。そのことについて、辰野さんがいろいろ書いています。太田資時さんの息子さんも来ていました。浜口雄彦、末広巖太郎博士なども戸田が好きで来ていました。古田 東大にある記録にもそういうことが書いてあります。

春木屋 昭和になってからモーターボートが入ってきました。和船の尻に付けてシキウスというのがありました。

近藤さんがいつも最初にそれに乗りました。このほか取締りで宮崎さんという人がいました。大正の終り頃の話です。家の前に池があつて家鴨を飼っていました。その家鴨を東大の学生が全部食いつぶすとまたほかから仕入れていました。

## 戸田の思い出

戸田水泳部の寮生活といえは自分にとっては一生涯忘れることの出来ない貴重な人生体験でした。自分が戸田を最初に訪れたのは大正九年で、第一高等学校の時でした。以来、大学に入学して大正十、十一、十二年と毎夏七、八月の二ヶ月は完全に戸田の海のとりこになってしまいました。

当時は東京駅を朝早く出発すると昼頃には沼津に到着

し、現在あるかどうか知りませんが御成橋のそばの鰻やで昼食をして狩野川の河口から出発するボンボン発動機船（船名は日進丸、順幸丸の二隻であつたように記憶し



明治・大正時代

が、それでは貧弱だということで陸奥というモーターボートを使いました。その後大型のモーターボートにしました。三、四十人くらい乗れました。戸田の娘でハーチャンという美人がいて、寮の学生が大変もてました。秋月堂で村の青年と喧嘩したこともありました。学生が多分東大風を吹かせたので村の青年が癪にさわたのでしょう。昭和十四年頃の取締の宮下さん達とよく酒を呑みました。そしてモーターボートに乗せられて寮まで連れていかれ、酒を飲まされてつぶれて寝てしまい、目を覚ましてみると全く見知らぬ所で、蚊帳まで吊ってあり、その横では四、五人の学生が厚い本を開いて勉強していました。そして、学生のいうにはここは東大の貴賓館で、先生以外で外部の者がここに寝たのはあんただけだ、などといわれました。私が子供の頃は、東大というと他の大学と比べて数段と格が高く、まして大正時代の学生は威厳があり、偉そうに見えたものです。

古田 当時いくらくらいで呑めましたか。

春木屋 大正末から昭和始め頃は二、三円で呑みました。近藤経一という人でいま神田駿河台で近藤外科を開いているそうですが、大正時代学生の時、寮に来て水上スキーをやっていました。当時アカプレーンといって、

岸尾 鍋にして食べたものですか。

春木屋 そうです、すき焼きのようなものです。青ねぎがない時分なので、よく王ねぎを入れていました。家鴨は油が多く、臭いが強くて近所の家ではずいぶん迷惑したろうと思います。

## 加藤英夫

ます）に乗船して大瀬の岬を左に見て駿河湾を走ること約二時間で戸田の港に到着しました。駿河湾の荒海を乗り切って戸田の港に入ると、船は鏡のように静かな海を進んで行き、やがて御浜の水泳部専用の棧橋に横づけになり、恒例のバカヤロウの歓迎の挨拶を受けながら下船したものでした。もう一つのルートは、修善寺に出て達磨山を越える徒歩の道順でした。

当時の寮の建物は数棟に別れていて、学士部屋、滄海楼、子供部屋、取締り部屋等がありました。

そして寮務委員を取締りと称し、水上はもちろん陸上に於ても絶対の権力を振るっていました。

自分の記憶によれば、当時の取締りは左記のようでした。

た。

大正八年 宮下静一郎  
 九年 浜口雄彦／青木三弦／近藤経一  
 十年 太田資孝／近藤繪二／吉岡範武  
 十一年 太田資孝／宮崎公平／加藤英夫／西村謙三  
 (師範) × 山岡慎一  
 十二年 加藤美夫／西村謙三／吉田篤二／中野正  
 清(師範) × 山岡慎一  
 以上の諸氏でした。(×印は故人)

戸田水泳部創立二十周年を記念して、大正六年戸田で全国水泳競技大会が開催され、全国の有力選手が集って来ました。以来、この大会は大正十年頃までつづいたと思いますが、この競泳大会こそ日本が水泳王国の名を世界にとどろかせる発端となったのです。  
 そして第四回の大正九年には、茨木中学の教諭杉本伝氏が外国の書物によりクロール泳法を研究し、これを公開して日本在来の泳法片手抜き、小抜き手、チンバ抜き手等を打ち破り、茨木中学を優勝に導きました。その時の選手には石田恒信、入谷唯一郎、高石勝男の諸選手が加っていました。

この競泳大会もやがて日本水泳連盟が確立され競泳大会もその意で開催されるようになったので、自然消滅することになりました。いわば戸田は日本水泳競技会の発祥の地ということでしょう。

当時学士部屋にたむろしておられた先輩をあげれば、  
 ×太田資時(弁護士)、×神保孝太郎(医博)、×郷隆(医博)、×辰野保(弁護士)、×辰野隆(仏文学博士)、×清水(検事)、×原鴻太郎(柔道マン)、×阿部彦郎(弁護士)、×山岡慎一(陸上の名選手)、等々であります(×印は故人)。いずれも一騎当千の方々でした。

戸田の憶い出といえは数知れぬほどあります。戸田の水泳部というものは必ずしも水泳の術を修得するころではありませんでした。水上に出ても泳いでいる者は極めて少なく、大部分は筏船の上で甲羅ぼしをしているか寝ているかでした。楽しく夏の生活を送るところでした。いわゆるバカンスでした。  
 戸田で唯一の御馳走といえは村の春木屋という旅館でアヒルのすき焼を食べることでした。  
 また朝の三時頃から鯉漁船に便乗して一日中駿河湾から遠くは遠州灘方面まで獲物を追い廻わした事、など

その他憶い出は数知れません。

このごろ流行している水上スキーを戸田ではすでにやっています。それは、モーターボートで戸板を引っ張り回す方式でした。

また時には遠泳も行われましたが、まず御浜を出発して稲木別荘(湾口の入口)に向い、それからプーチャチン(昔露艦が難破して新造した場所)を経てまた御浜へ帰って来るすこぶる呑気な遠泳。

後年は外海に出て大瀬の岬まで行った由。  
 また深夜のストームも名物の一つでした。  
 最後に忘れられないのは寮の留守番であったサンキコと三喜爺さんの顔が今でも浮んできます。

なお取締り部屋の隣りに助手部屋というのがあって、毎晩のように先輩連によって花札遊びが徹夜で行われていたのも忘れることが出来ません。

参考(於戸田帝大水泳部)

- 大正六年 第一回全国競泳大会  
 五十、百、二百 齊藤兼吉(高師) 優勝  
 四百、八百 内田正練(浜名湾協会)
- 大正七年 第二回全国競泳大会  
 一高優勝
- 大正八年 第三回全国競泳大会  
 平野豊(日本遊泳専門) 則末芳三、  
 小野田一雄(浜名湾) 優勝
- 大正九年 第四回全国競泳大会  
 茨木中学優勝  
 石田恒信、入谷唯一郎(出場)
- 大正十年 第五回全国競泳大会  
 茨木中学優勝  
 高石勝男(出場)

(昭12経卒)

## 山本伊能助氏の話——昭和五十年五月

戸田寮は佐山芳太郎氏の保養館を大学が買い取ったものです。私は明治二十五年に生まれ、四十二年に小学校を出ましたが、当時はまだ保養館でした。貴賓館と学生部屋は大学所有になってから建てた物です。現在のプールのところに船小屋があり、船を置いていました。当時は水泳がなかなか盛んで、先生も来たりして一夏に二回くらい湾一周遠泳をやったものです。水泳の帽子は泳げない者は赤、あとは赤白、黒白、黒、白の順で、上手な人には金筋が入っていました。年寄りになると三本も入っていて、泳ぎもなかなか速者でした。瓦を十枚背負って泳いだり、手は使わない立ち泳ぎの競技をしたりしました。大きな伝馬船へやぐらを組み、それを飛び込み台にしたものでした。三間ほどの高さで九尺くらいの所に中段があり、いかだといって中空の箱を四つくらい入れて二十五米ほどのプールと同じようにしていました。船を上げる所（現在のプールの付近と思われる）から岬のほうを大学に貸していました。現在資料館と神社の

あるところがテニスコート、鳥居の向うの現在熱帯植物が生えている所が弓道場、鳥居の手前が相撲場でした。寮の前の階段に「いけす」があつて、そこへ取った魚を入れておき、学生の食用に供したものです。学生は五人ほどだったと思います。当日の鯛などの魚（禁漁になっている湾の中で、年寄り衆が鯛網を引いて取った）を献上し、大学を神様のようにしていました。

二十四年の第一期公選で勝呂計三氏が村長になりました。それまで東大の御浜は遼東半島も同じでした。当時は女人禁制で、夜になると女中も三喜小屋（十畳ほど）で泊り、三喜さんが張り番をしていました。足が少しびっこ、がんこなおやじでしたが、保養館の時代からいて帝大になってからもずっといました。戦後になるまでは女人禁制でしたが（女や村の衆は棧橋から降り降りできなかつた）それでも間違いは多少あり、戸田で女関係を作ったものは、それ以後一切寮に立入りを禁止するという厳しいものでした。

八月一日ぐらいの開場式の時でも、女は女中以外入れず、村の衆は「いさば」という沼津通いの渡船に乗って見物していました。浜には宴会の時に呼ばれないかぎり降りられず、大学の土地は船上げ場から中ときっちり決まっていました。

大正天皇は皇太子の時に来られました。また昭和になつてからは三笠宮殿下も来られました。

この時にはシカとイノシシを捕っておいで撃たせたものです。シカは二頭ほどいて、今の五郎竹さんの所に飼っておきました。戸田城のあたりで離し、囲いながら浜に出て来るところを鉄砲で撃たせました。シカが海へ逃げた時には大下さんの親父さんが撃ってしまいました。相撲でも強い人がいました。力士になった東大生もいて、アサヒ（カサギ）山にしこまれて十両ぐらいまでとつたはずで。最初は土地の人のほうが強かったのですが、辰野さんという学生さん、あの人は強かったですね、通称でか新こと筒井新之助という人は彼に投げられて体をおかしくしました。もう一人阿部さんという人も強く、またあれは大正五、六年の事でしょうか、四国出身の秋山さん、彼も強かった。

当時はよく八トンぐらいの船（きのえ丸？）で学生の

お伴をして、カツオやカジキを釣りに行きました。夜、一色の家へ遊びに来たので、泊めてやったが、蚊帳がなかったら泊らないと言っていました。

大正二年、小川村長の時に医者を呼びました。夏に大学が来た時、年寄り、病人を伝馬船で連れていったものです。私の長男も世話になりました。

## 帝大水泳部開場式

田方郡戸田村なる帝大水泳部開場式は四日午後二時より挙行。参列者は奥田文相、山田帝大教授、丹羽・土方文学博士、笠井本県知事、松城・岩崎・田中三代議士、芹沢・城所・鈴木三県会議員、渡辺田方郡長、中村郡視学、笹間三島警察署長、其他百余名にて委員長丹波博士の式辞の後、一番より四十七番迄の式泳を行い、余興として弓術相撲等を行ない、一同記念撮影をなし午後四時閉会。午後七時より水泳部食堂内に宴会を開催したが、戸田村にては開場式を機とし三日午後六時より松城兵作氏、別に笠井知事、及び水泳部員歓迎会を催したり。尚奥田文相は五日午前七時同所出発、石油発動機船にて駿東郡江の浦に上陸し、田方郡葦山村江川氏邸に立寄り同夜修善寺菊屋旅館に投宿せり、帰京は今六日の筈なりと。

（静岡新報 大正二年八月六日）

## 文相と戸田村

奥田文相大臣が、去る四日田方郡戸田村なる帝大水泳部開場

式に臨席せし由は既報の通りなるが、当日戸田村民は盛なる歓迎会を催し大臣一行は松城兵作氏方に休憩。夫より水泳部に臨まれたるが、翌五日には民村一同大臣を請し鯛の網引をなし海上料理を饗応したるが一行の満足一方ならず、文相は金子若千を同村小学校に寄付され学童の前途につき奨励する所ありし由。  
(静岡新報 大正二年八月七日)

大学生の慈母

帝大が戸田村に設立されると同時に、同大学生の寄宿一切の世話をなし大学生より慈母の如く景仰されたる松代八重女史(松代代議士の実姉)は本年一月病を以て逝去されたるより、多年薫陶をうけたる同大学生並に卒業の名士諸士は深く是を哀悼し去る六日同村蓮華寺に追悼法要を執行し、中村書記官、太田法学博士、津久井書記官、田口葉学士、緒方、大村、豊住三取締を始め多数の出席あり、松城代議士以下親戚の人々も列席して壮厳なる弔祭を営みたり。  
(静岡新報 大正二年八月八日)

帝大水泳部主催

戸田湾の競泳  
九日全国大会を挙げる

伊豆戸田に於ける帝大水泳部主催全国競泳大会第一日は九日午前十一時より開会。折柄の驟雨を冒して鉄腕鉄脚を鳴らし戸田湾頭竜騰虎搏の壮観を極めたるが、同日午後三時迄の結果左の如し。  
五十米突一回予選 イ組一着佐野、安房中学(三十一秒)

ロ組一着入谷、安房中学(三十秒二) ハ組一着平野、浜名協会(三十三秒五分の二) ニ組一着小野田、浜名協会(三十秒) 八百米突一回予選 イ組一着瀬川、岩手中学(十四分七秒五分の二) 二着佐野、安房中学(十四分十八秒五分の二) ロ組一着今村、慶応(十四分十八秒五分の二) 二着松上、茨木中学(十四分十八秒) (静岡民友 大正九年八月十一日)

戸田湾競泳大接戦 全国競泳大会

伊豆戸田湾に於ける帝大水泳部主催の全国競泳大会第二日は十日午前十時三十分より開始。当日、屋本県知事、林博士、戸山学校見学隊等観覧者夥しく盛観を極めたるが参加者は一高、浜名湖水泳協会、大阪、茨木、安房各中学、岩手水泳会、神戸高等商業、慶応等にて大接戦演じたり。午前中の競泳成績左の如し。  
五十米突決勝 一等野田(神高商、三一秒五分の二) 二等小野田(浜名、三二秒) 八百米突決勝 一等今村(慶応、十四分五秒) 二等平野(浜名、十四分五秒) 三等瀬川(岩手、十四分十三秒) (静岡民友 大正九年八月十二日)

競泳チーム水泳部に生る

水泳部では予てから懸案になっていた競泳チームが過日の委員会上其の組織その他につき種々協議の結果、愈々生れる事になった。従来水競部には此の競泳チームがなかったため、所謂「走る水泳」がなかったが、今年の夏からは戸田の海に此の技を見る事になったのである。之からの水泳界には帝大チー

ムが愈々その姿を見せるであろう。然し何と云つても初めての事なので何れ丈の活動をするかは未知数であるが、這般の極東オリムピック大会に日本水泳チームの主将として活躍した松沢一鶴君が首脳となり、その下に各高校時代の猛者多数あるとて、相当の活躍は予期されている。水泳部は此の新事実と共に益々戸田の設備を整えて、今年の夏は学生諸君の多数の来る事を希望する由である。  
(帝大新聞 大正十一年)

波静かな戸田の水泳部開場式

全村あげてお祭騒ぎ

昨年の地震にたいして損害をもうけず、相変らず青い海水と砂地とに恵まれた戸田には、愉快な夏が訪れると海を慕う河童連が統々押しかけて来てはしやぎまわって居たが、八月三日水泳部の開場式を挙げる事になった。平常なら朝昼二回しか往復しない発動機船がトットトットと呑気な音を立てながら、沼津から来賓を幾度も送って来る。浜には万国旗が飾りたてられ、水泳部後庭に設けられた園遊会場には、てつだいに来た村の女達の賑やかな笑い声が響いて来て、静かな漁村の戸田も今日はまるでお祭の様かさである。海には大きな鯉釣船二艘を浮べて観覧席が作られ、それをかこんで大小十数艘の船が始まると。午後三時渡辺諒君が飛台から式飛を演じよいよ式が始まった。水府流太田派游法、神仏流游法水中業、外国游法とどこおりなく進み、端書で太田氏が竜戯美人と墨痕淋漓と達筆をふるって水書の妙技を演じ、民野も亦、水中教練諸手傘扇子返しを行って観衆の喝采を博した。競泳では赤白二組のリレー

を行い、最初から赤が組優勢であったが、最後に白組の玉木君、大いに力戦して同着となった。最後の四方拜で式を終ったのが五時過ぎ、それより直に園遊会を開き、県庁のお役人や村の長老達や、河童連が入乱れて大いに歓を尽した。散会したのは六時半。さきょう色の空には夕月が静かにかかっていた。  
(帝大新聞 大正十一年八月八日)

海の子の喜び——戸田の設備整う

本年から競泳に力をそそぐ水泳部

水泳部では日進月歩の我国水泳界の大勢に慮するため、従来閉却された競泳に重きをおくこととし、その打合会が六月十六日午後三時から第二学生控所で開かれ、水泳部常務委員及有志三十余人会合して談合の結果、その具体的方法として先ず松沢、堀田、滝沢、国沢、日下部等を中心とし、新入学生を糾合して競泳部をつくり全国学生の水泳連盟に加入し、九月中旬行はれるインター・カレッジの競泳に出場することとし、彼等は最近設けられた京大、東大水泳部と競泳する予定で、差当り工学部機械科のプールを借りて早速練習を開始し、八月はじめからは戸田の水泳場に合宿して猛練習を行う筈であるが、これには素人の参加を歓迎する由。尚競泳部の人々はダニエルの「スビードスイミング」によって研究中であつたが、これを翻訳して「競泳」と題して本月末神田の改文社より出版する手筈である。風光明媚を以てきこえたる戸田の水泳場は、本年も七月一日から八月廿五日迄開場するとの事で、昨年の震災で多大の損害を受けたが、既に復旧して例年の通り、モーターボート、ガ

ソリン和船、筏、ウオーターシエート付槽船、アカブレーン、競漕ボート、ウオーターポーロ等を設け設備万端整い、一般学生の来場を待つ。今年は陸上、ア式蹴球、ラ式蹴球等も暑中合宿練習するとの事であるから例年より活気を呈するであらう。

(帝大新聞 大正十三年六月二十日)

名も涼しげな「しぶき」の進水

——水泳部用として今夏戸田に浮ぶ

去る廿六日午後隅田川野口造船所で水泳部用モーターボート「しぶき」が進水した。夕陽が川面に映わる頃吃水を群青に塗り、白い船体には淡青色の筋を入れた美しい船が漕艇部の「むつ」と相並んで波を蹴ったのである。長さ二十五フット、幅六フット、深さ三フット半、塔載人員三十人、速力十哩、機関カーマス甘馬力、価格三千七百五十円、作りは「むつ」に比し遙に大きい。陸の交通は殆ど望みなく、たださへままならぬ海路の往来に船の通う度数も僅五指の半ばを屈するに足りぬ所にある水泳部が、一方に年々増加する来場学生を抱えて、学生健康衛生と火急の要事に対する保証とを得たるためである。かくて決然一隻のモーターボートをつくることになり専らこの衝に当たられる渡辺囑託は艇首に葡萄酒をついで「学生の健康と要事の保証に備へて」と使命を宣した。これで戸田における水泳部の設備はほとんど完成したといつてよい。委員達はこの上は唯よく多くの学生諸君を吸収することに頻に勘考を廻らして居る。因に該ボートは七月初戸田に回航する由。

(帝大新聞 大正一四年六月十五日)

## 大正十五年、寮日記帳より抜粹

取締役 磯部茂樹 白杵仁 岡本勤一 松沢一鶴

【現在、夏期特別開寮の時期は乗鞍寮を除いては、七月十日前後に各寮とも一斉に開寮しており、今も昔もあまり変わっていない。

この頃の記録によると寮の食事は東京から専門の賄いを連れて来ていたようであるが、今は夏期開寮中は大学の教官食堂が給食を請負っている。寮は年中開寮となっており、夏以外は大学の職員が管理人として日常事務、給食等を行なっている。では当時の一夏の寮の運営の実態を記してみよう。】

七月五日 松沢、磯部、西本、近藤、西尾。以上五人が開寮準備のため先発隊となる。賄い女中達は先着。海は大荒れ。

七月七日 寮生続々とやって来る。食堂ではピンポン盛ん。ラジオ雑音甚だし。

七月八日 松沢、モーターボートの件にて帰京。寮生二十五名になる。磯部、近藤、海にサザエをとりに行く。今年はサザエ少なし。午後イカダ三個を出す。海静かなり。

七月十一日 磯部、西本、朝の汽船にて下田に向う。村から図書を受け取る。書棚も大整理をやって午後から開く。午後脚立を組立て海に立てる。西尾、近藤初飛込み(下手なくせに)南風稍波あり。

モーターボート廻航記

七月十三日 松沢より磯辺宛電報あり。十二日正午までに下田に來いと連絡。磯辺は夏目甚太郎を連れ、朝六時の汽船で甚公、磯部、西本の三人で下田に向かう。快晴なので気分まことよろし。沼津より松崎に帰る女学生多数、可愛し。三時下田着モーターボート來たらず。

平野家に泊る。神光丸、夜になって下田に着し、夜下田情緒を楽しむ。

十二日 モーターボート引き取る。エンジン動かず。松沢、午後三時下田に来たる。松沢技師エンジン調整、エンジン始動、波高く、戸田への廻航不能、今夜また下田泊り。

十三日 朝またまたエンジン不調。降雨しきり惨々たり。苦勞の末、エンジンやと始動し、出発と相成る。

○八三〇 下田港発

○九四五 スクリューに藻がからみ、取るのに苦勞。

○九五五 出発

一〇〇五 石廊崎沖、エンジン快調

一〇一五 カツオ島沖

一〇五五 入間沖

一一一〇 松崎着、昼食、休憩

一三五五 松崎発

一五一五 土肥沖

一五五〇 戸田港御浜着

七月十三日 曇、少し雨あり、午後晴となる。松沢、磯辺、日暮れになっても飛び込み止めず、空には三日月美

しく、浜辺には寮生歌い舞い賑かなり。

七月十四日 晴、風あり。朝ポンポンにて西尾去る。午後、中央部の伊藤ホトケさん山中より来たる。サザエをとり、ビールを飲む。

伊藤氏の用件は対京大泳競技なり。山中から来れば御浜はすく文化的だとき。六十銭の差かな(宿泊費のことを指す)。ボートの名称は「巴」となりそうだ。巴という名を考えたのは俺(磯部茂樹)なることをここに記録しておく。

七月十五日 長倉鬼夫来たる。弓、ラケット持参。西本正午帰京。ホトケさん京都に向かう。バカヤロー盛ん。午後、ターニング台二台を入れる。石を置いたり距離を計ったり。気温低く寒し。夜、コンパ行なう。明日から水泳のコーチ週間なので松沢氏多弁なり。最後は歌となる。

七月十六日 コーチ週間第一日目

A級 全然泳げない者 四人

B級 四級の人 十五人

C級 それ以上の人 十八人  
A級は浮くようになれば、バタ足、または蛙足をやる。

B級は松沢コーチがクロールの手と足の手ほどきをやり、一人一人をコーチする。

C級は東がコーチをし、ターニング台でターンの練習をつける。

午後は風波のため練習中止となる。

七月十七日 晴。朝ポンポンにて白杵来たる。午後、太田老人また来たる。昨日は風のため午後は自由練習にしたが、今日は朝から相当熱心に指導を行なった。成果大なり。

現在の水泳級別者

一級	一人	白帽	(当時は級別を帽子の色
二級	六人	黒帽	で区分けしていた。)
三級	二十一人	黒白帽	
四級	二十九人	赤白帽	
五級	四人	赤帽	

七月十八日 曇。多少風波あり。

コーチ週間。午前は煽り足、蛙足等遠泳用の泳ぎ方を教える。松沢遠泳の組分け行なう。午後、自由練習。夜、太田さんの奢りで酒を飲む。

七月二十日 晴、微風。

朝の船では来賓者なし。久しぶりで朝寝が出来た。朝食終わるとすぐ水泳練習の集合の鐘。取縮り、助手各自分担でコーチ開始。昼のポンポンにて電略「八幡知らず」こと白杵は東京へ。清水元は静岡商業(江尻)コーチのため出発する。東一人が残され、もの淋しそうなり。午後、西本来たる。栄太楼のヨーカンのお土産に飽食す。

七月二十一日 晴。午後、例によって松沢、西本、コーチ週間の五級養成に力を注ぎたれば、段々と水になれて四十米位泳げる者も出て来た。東、昨日より一人寝の淋しさに堪えかねてか悪友のもとに去る。残れるもの委員松沢、西本、西尾、黒崎の四人、目下滞在者総計七十七名なり。午後、練習後アプレンをなす。湾外にモーターを快走せしめ、波濤の間をアプレンにて走るが快味けだし無上。夜、明日の湾内一周小遠泳の順列を作成す。(遠泳写真参照)

七月二十二日 曇、風なし時々晴

昨夜深更、小雨あり。今日の遠泳に気がかりなのは天気だが、曇りで風もないので敢行する。今朝、遠泳に恐れをなして去る者七名。不参加者これまた十余名を算す。農学部兵藤、帰京時間を延ばして遠泳をなし午後汽船にて去る。その意気壯とすべし。

参加者四十七人。落伍者四名。

出発 〇九三〇 湾口 一〇〇〇 ポンポン発着所

一〇三〇

脚立 一一〇〇 棧橋 一一〇三

所要時間一時間三十三分 予定より三分オーバー。

七月二十三日 曇、後晴。

午前中ターニング台の補修なす。水温低くして風あり。遊泳者の影希なり。ターニング台の置き換えに苦勞一方ならず。鶴さんの寒さに震えるのを初めて見て大いに同情す。午後テニスコートの測量にコーナーの直角を作るのに苦心す。やっと完成し、すぐ一般人達の利用するのを見るといささか嬉しい。夜、戸田の祭りあり。モーターしきりに活躍す。午後のポンポンにて長倉鬼夫来たる。沼津農林学校の水泳講師をなせりとか、珍談多

敷たずさえ来たれり。風止まず明日の大遠泳を二十五日に延期のむね発表す。この遠泳隊の完泳者は三級以下は全部二級にする筈なり。遠泳の舟六艘および船頭八名、ポンポン一艘の交渉を小川氏に依頼し、松沢、西本、漁業組合長の所へ行き交渉す。協力者に酒を飲ませるということで話しまとまる。

朝、大遠泳決行についての掲示をす。

注意事項

一、今日中に練習、ウォーミングアップ肝要なり。

二、胃腸を害せざるよう慎生すべし。身体のコンドイションは大なる影響なり。

三、二十四日午前七時半、棧橋集合のこと。整列点検後

八時出発

四、目的地は今のところ大瀬崎の予定、約五漕四時半位

の見込也(昨年の記録三時五十五分)。

五、当日、昼食の賄いが遠泳地に出張するため、寮に残られても弁当のほか出しません。大瀬に遊ぶ機会も少い

ことですから、病氣以外の方は全部員の参加を希望す。

六、夜は遠泳祝いのため夜食に水泳部よりビールの影響。

七、この遠征に成功せし人には東京に帰りて後、メダル

七、この遠征に成功せし人には東京に帰りて後、メダル

猛烈になし、板をこわせり。

七月二十五日 曇天。水温二十五度(午前八時、寮前にて)

八時四十分入水、拍手起これり。船付きをせられる先輩諸兄および学生左の如し。

船付き、太田、西本、酒巻、佐藤の諸先輩。学生、西本(春)、沈光史、宮島、井手。モーター、薬品を積み危

急に備す。常に潮見に従事す。

遠泳隊に先立ち、潮流を見に湾口に出かける。大瀬に行くとの報来たる。波平穏。湾口を出ること五町にて左

に曲がるなり。温度このへん低し二十五度三分、時間正

に九時。

遠泳中、菓子配るには、始めは相当時間をあけ氷砂糖ぐらいをあげてよるこぼす。空腹を覚える頃にはビス

ケット等を三十分おきほどにやるようにするがよし。く

づ湯を随時あたえるのは一番よろしけれど、列乱れるお

それあり。

遠泳に関する注意事項(準備 遠泳 その後)

湾内一週遠泳には、モーター一艘で守られば学校の

伝馬だけで十分なれども、大遠泳には多少の準備を要す

それあり。

遠泳に関する注意事項(準備 遠泳 その後)

湾内一週遠泳には、モーター一艘で守られば学校の

伝馬だけで十分なれども、大遠泳には多少の準備を要す

それあり。

遠泳に関する注意事項(準備 遠泳 その後)

湾内一週遠泳には、モーター一艘で守られば学校の

伝馬だけで十分なれども、大遠泳には多少の準備を要す

それあり。

七月二十四日 曇。朝風風ぎ霧深く、明日の好天気を予想せしも束の間、たちまち風吹き出す。本日の掲示、荒天のため大遠泳は明二十五日に延期。

夕食後、翌日の潮流により土肥または大瀬崎いずれか

なり。大瀬海上約十軒(六漕)なり。五級の者も全部出

動の筈。昼食に弁当を作るため賄いは大瀬に出張する筈

なり。出発は朝七時半、集合八時なり。アカプレーンを



贈呈。三級生以下の人は全部二級に進級す。途中にて乗船せる人も距離により適当に進級させますから最後まで頑張り努力して下さい。

八、荒天順延のこと。

る。数日前に小川氏を通じて漁業組合との交渉を要す。遠泳に参加すべき人員を予想し、それに応じて船を何艘にすべきや。船頭の人員等を決定し、行先を決定して相談すべし。漁業組合の關係上、当日遠泳に来てくれる人は、漁のあいた時の分け前等の關係上、若い人が来られず。多くは組の各頭株の普段遊んでゐる人が来る等、憶すべし。そのため今年には報酬は金でなく御馳走になつてしまつたが、経費はほとんど同じ。

大瀬遠泳の際は、ほとんど沖の潮にのることだけが遠泳を可能ならしめる。その潮をみてもらうこと。岸にはエツチカレントに似た逆流等あり。このましからず。しかし、今年はずこし沖に出すぎて、大瀬の沖に払はれる潮にやられて、大瀬に着くまでにへばつた。

今年の潮は次の如し。難所第一、奈島。これは潮から外れたため遅かつた。第二の難所、大瀬。沖に払われる潮のため沖から岸に近づけなかつた。奈島まで整列したけれど、大瀬近くになると皆ばらばらとなりし(疲労、安心、空腹等が原因)。二年間の経験によれば、湾口に出るや真つすぐ沖に六十米ほど出て七ツ岩を五百米にし、それから岸を二百米位の所を行くがよし。夜、学生慰勞会。昼の弁当と夜のコンパ代を入れても十銭位の外、ピ

ール代だけですんだ。村の人の慰勞会は適當にやる。

七月二十八日

大遠泳全泳者

七月二十五日の大瀬崎大遠泳の全泳者左の如し

四級	池田仁朗
三級	曾木克彦 陶波 正 後藤一民
	小崎正武 岩野三門 平松左右一
	真崎公一 秋沢貞二郎 石井恭仁郎
	荻原昌次 土方辰三 皆川讓治
	三堀参郎 伊藤秀一 柿村敬二
	吉田武雄 佐奈田幸夫
三級	山口由美 川村二郎 武田武二
	林 俊三 杉山四郎

右の内三級以下の諸君は二級に進級す。なお当日の成績並に状況左の如し。

参加者三十三名、全泳者二十八名、比率八十五%  
曇天、水温(平均)二十五度、無風順潮  
出発 午前八時三十分  
井田沖 十時十五分  
奈島七ツ岩 十一時五分

大瀬沖 ○時五分

先発、到着十二時四十五分 所要時間四時間七分

七月二十六日 水泳部

進級揭示

右三級に進級す、小寺五郎

七月二十六日 水泳部

なお高校大会につき黒板に左記揭示をなす。

高校水泳大会

大会が来たる八月一日〜三日に行なわれますについて、二十七日頃から高校の諸君が見えると思ひます。我々大学生が少し苦しい思いをして高校の人の為に室を提供してやるうではありませんか。

また、ウォーターポロのゴール近々完成す。諸君の猛練を望む。

七月二十八日

カッター水洩れ大なり。午後、西尾と小川氏を訪れ話込む。午後三時水戸、一高、共に別仕立の蒸氣にて来寮。いと暑き日なり。水上にコースのロープを引く。水底の白線は明日に延す。夜皆少し酒を飲む。

ウォーターポロのゴールが出来てきた。ターニング台にねじにて取付ける。

今年の部屋割次の如し。

浦和 十二名 九号、十号(滄海)  
水戸 十六名 貴賓館十畳、八畳  
一高 十二名 新座敷十七号、十八号  
静岡 十二名 学士五号、六号  
二高 ? 新二階二十四号、二十五号  
一高より西瓜差入れ、ウー

七月二十九日 晴、風波強し。

午前、一高、水戸、浦和の順に練習せしむ。波相当あり。

午後、モーターにて汽船よりの来寮者を迎えに行くも、無駄となる。西本、松沢コースラインを張る。其の他の者惰眠、起せば働きしものを。午後四時汽船を迎えに行きしも高校生一人も来たらず。午後五時、二高生十五名汽船にて着し、モーター、伝馬船一艘を引きて迎へに行く。

夜、磯部、岡本に返信料付電報を打つ。一高生の望みにて村に臨時モーターを出す。高校大会終了後の饗応に

関し議あり。遂に一葉、一本の予定。明朝沼津に印刷を  
(水上大会)頼みに行く予定。山中より新聞来たる。今  
晩は電報打つ事多し。

名宛 東京市本郷区帝大ガクセイカン トヨダ テイ  
イチロー

本文 コートウガ ツコウタイカイヨウテスグ イハ  
五ホンスグ オクレ スイエイブ

なお同文電報返電料金付 東、磯部、岡本宛に打つ文  
一ヒアサ八ジ マデ ニコラレルカ ミハマ

水泳大会案内文

拜啓

来たる八月一日より三日間静岡県田方郡戸田村御浜東  
京帝国大学水泳場に於て本州東部高等学校水上競技連盟  
第二回競技会を開催仕るべく候間御来臨の榮を賜りたく  
右御案内申上候

七月十三日

敬具

東京帝国大学友会 水泳部

七月三十日 晴。海荒れ模様。

昨夜製作せる電報、西尾、朝戸田村に打ちに行く。黒  
崎と自分(長倉)沼津に行く。八日開場式の招待状を注

文、及び水上連盟競技大会用の活版紙を買いに行ける  
也。午後一時のポンポンにて帰る。静岡来たる。

午後よりの仕事

インスペクター用 用紙の謄写  
タイム用 //

第二回本州東部高等学校水上連盟競技会記録(左に掲  
げたり)三ページまでを作成。

八時よりのコンパ次第

松沢氏のあいさつ

自己紹介

戸田の歌

競技会招待状左記に出す

中央新聞 報知 玉木

中外商業 万朝 渡辺

やまと 都 総長

読売 時事 原久

国民 朝日 その他先輩

東京日日

なお本日よりの高校生練習時間表

午前九時より 一高 浦和 水戸 二高

午後 浦和 水戸 一高 二高 静岡

七月三十一日 晴、波穏。

本日高校生練習時間割

前 ○九〇〇—一〇〇〇 水戸 二高

一〇〇〇—一一〇〇 一高 静岡

一一〇〇—一二〇〇 浦和

後 一四三〇—一五三〇 二高 一高 満〇九四九

一五三〇—一六三〇 静岡 浦和 満 干〇三三三

一六三〇—一七三〇 水戸 満〇九四一

駿河湾荒れている為海の干満の差狂えり、困る事甚だ  
し。各新聞社及び先輩宛の招待状を日進丸に依頼して、  
朝沼津にて出してもらう。

なお、八日開会式用招待状出来上る。

午後、全高校選手及び役員の写真、脚立にて撮影。鶴  
さん、各高校選手を撮影。西本のアカプレーン撮られ  
る。モーター大故障。磯部、岡本及び増田部長来寮。高  
校生であとから来たる者申告を怠る。生意気なり。オレ  
内心怒れり。モーター修繕なる。東、未着。スターター  
定まらず。清水元君に頼む。高校生撮影後スタートの練  
習をなす。ピストルの具合よし。

夜、高校キャップテン会議

◎ 明日午前から始めるか、午後から始めるかの件につ

いて討議。結果、午後からに決定。

部屋割りの方は子供部屋の者を小川さんの所に移すよ  
うお願いし、大体の割振り終り。

日日新聞より電話あり、西尾明日のレースの概要知ら  
せ。明日来られるようたのむ。来られるやも知れず。

八時からキャップテン会議

子供モーターボートにて小川さん宅に送る。子供七人、

監督として、(長倉・東・清水)小川さんに泊る。夜船を

附ける時、手をはさまれて手をつぶした学生あり。

八月十六日 大学新聞より抜粋

水泳 注目すべき力量の平均

松沢一鶴

◇：一番目立つ事は各チームの内容が充実して来て、何  
れも相当のメンバーを擁して来て昨年様な力の不平均  
のない事であった。それだけにレースも力が入った。そ  
の成績も美事である。最高記録も之を京大の高校大会に  
比してプレスト一つ劣れるのみである。世界のレベルに  
到達した日本記録には尚少しの距離はあるが高校チーム  
の成績としては堂々たるものであると信ずる。一高チー  
ムはよくそろったムラのないチームであった。そこが大

きな強味であらねばならぬ、そして更に大木、田村、植田の三人が一高の安定度を大にして居る。チームワークの妙、バックめんの援助もよろしいがあまりそれに墮せぬ事が必要であろう。◇静高チームは若い感のするチームだ。泳ぎは一樣に精練されて居る。然し敵によりあまり態度をかえすぎる。今回のレースでも思わぬ敵から圧迫されている。レースが巧いといつて賞められない事もないが感心出来ない事だ。小川、今橋が特に光っている。殊に今橋のプレストは一流選手の味がある。練習が肝要。此のチームの大弱点はバックに弱い事であった。◇二高チームはこれに反しあまりに荒削りだ。スタート、ターンその他の技術のまずい事から意外の不覚を招いて居る。力はこのチームの唯一の武器ではあるがあまりに今年は練習に濫費しすぎた様に見える。相馬の力と高野、鈴木、フオームと何れも将来を想う。◇水戸チームはあるいは実際において今年一番貧弱なチームであったといえるかも知れない。優れた人は居なかつた。然しよく練習して居た。スタート、ターン等よくやって居た。これ等が浦和一勝を得た所以であろう。坂場は昨年の八木君の様な行方をとらうとしている様だが賛成しない。將來ある泳ぎだ。専門をきめての練習が望ましい。◇浦和

チームは実に今年悲運であった。大きな切札をもつていながら殺して終った様な形である。原因は練習の不足とバックメンの援助の不足。チームワークの不完全との諸点であろう。あるいは種々の事情でどうにもならなくなつたのであろうか。鷺島、新井、村上諸選手の自重を祈ると共に二三等を働かすべき人の養成を望む。◇終りに當つて各校の内容充実を祈ると共に諸君の協力により益々その間がうまく行く様になる事をお願いする。妄言多謝。  
八月十六日大学新聞より

午後二時三十分開始する

a、二高 b、一高 c、静高 d、浦和 e、水戸  
第一日午後、静岡対浦和 — 二高対一高  
第二日午前、一高 静岡 — 二高対水戸  
午後、一高対水戸 — 二高対浦和  
第三日午前、水戸対静岡 — 二高対浦和  
午後、一高対静岡 — 浦和对水戸

東より一日朝着くとの電報あり

一時頃静岡に合宿せる中央大学学士約三十名ボンボン一艘を仕立て土肥に遊びしとか。その帰途に我が寮を訪る。ターニング台を開放して泳がせる。湯を沸かし一同

入浴す。彼等厚く礼を述べ三時退去する。

開場式の印刷出来上る(百枚)、明朝発送する予定。本日天気晴朗にて微風なり、水温二十八度余。昨日一昨日の波により潮の干満時間遅れ。明日は中潮なれど干満の差大潮の如くして明日のレースも午後より始めるもまた止むを得ず。

八月一日 晴、午前中無風。午後少し風あれども競泳には差支えなし。

早朝、東来たる。腐ったバナナお土産に持ち来る。西本見物席と選手控所になる日進丸の位置を定める。昼の船にて浅倉、浜口帰京。昼食後打合せをする。午後二時それぞれ部処に着く、馬術の者来たる。今までほとんど満員の盛況なので部屋の割当てが面倒である。競技の開始時刻も切迫せるをもって、その儘にして競技を直ちに開始す。天気殊によく風も動かず。役員一同暑さに悩まされる。然れども高校選手の一年間の努力が引続き新記録を作る事によつて表われたり。

四百米 五分五十秒二 田村(二高)  
バック 一分二十一秒六 大木(二高)  
百米 一分十秒八 小川(静岡)

プレスト 三分二十秒六 今橋(静岡)

リレー 二分一秒四 静高チーム(横山、塚本、柿沼、小川)

以上が本日の新記録なり。

部屋割りの方は子供部屋の者を小川さんの家に泊まらせてもらう事にし部屋割り一応終る。日日新聞より電話あり。西尾今日のレースの概況を知らせ、併せて来られし事を伝えり。明日より来るやも知れず。夜八時よりキヤップテン会議を開き明日の組合せを決定せり。子供モーターボートにて小川さんに送る。子供七人の監督として(長倉、東、清水)小川さんに泊る。夜、船を附ける時、棧橋に手をはさまれつづした学生もあり。

八月二日 晴、午前微風、午後無風、暑さきびしい。朝の船にて一人も来ず。

八時モーターにて小川さんに泊つた者達を迎えに行き。役員が部処に着くのが十分位遅れたので競技開始時間ものばす。百米で静高の小川再びレコードを作る。一分十秒〇。接戦の末二高は静岡に敗れたり。午前の競技が終つてから馬術の学生に飛込みの写真を撮ってもらう学生多し。

目下の在寮生百四十五名、一般学生六十九名。その他子供六名なり。午後の船で人來たりなば小川さんに泊るよりに交渉すること。

午後の船で白杵來たる。午後の競技で又新記録出る。四百米 五分四十八秒八 田村(一高) プレスト 三分四十八秒 村井(静岡) 黒崎と白杵、戸田村へ行き日日新聞に今日の競技概要を連絡する。七時半よりキャップテン会議。

八月四日 日日新聞より

静岡の復讐ならず

一高再び勝つ

戸田の東部高校競技大会

昨年年東大水泳部の肝いりで成立した本州東部高等学校水上連盟の競技会は八月一日から三日間戸田御浜の東大水泳場で挙行された。参加チームは一高、二高、水戸、浦和、静岡の五校で新潟高校は予算の都合で不参加は残念であったが何しろ元気の好い連中のこととて浦和チームは七月二十六日に戸田に赴き猛練習を開始したのをさきがけに各校チーム相前後して至り、いずれも火の出る様に練習を続けてた。レース前の予想は従っていずれが

勝れりとも云い難い有様だった。伊豆宇佐美のプールにて再度の優勝を期して、密に刃を磨いた一高チーム。昨年の惜敗に一層の鍛練を積み雪辱の意気物すこき静高チーム。頑張りをもち鳴る二高は実力未知数なれど、また殺気帯び、水戸、浦和また侮り難き勢いを示し、勝負の程はまことに予測を許さなかった。果して競技当日の三日間は左の記録が物語る如き接戦を演じ幾多の新記録を残して一高と静岡が同率であったが、一等の数により遂に再び一高チームの優勝を見た。

◇各校特点

八月一日 一高 三十一 一十七 二高

同 静岡 二十七 二十 浦和

八月二日 一高 三十二 一十五 水戸

同 静岡 二十六 一二十一 二高

八月二日 二高 二十七 二十 水戸

同 一高 二十八 一十九 浦和

八月三日 静岡 二十九 一十八 水戸

同 二高 二十六 一二十一 浦和

同 一高 二十三 一二十三 静岡

同 水戸 二十七 一二十 浦和

◇十五年度最高記録

百米自由型 一分九秒四 大木直正(一高)

四百米自由型 五分四十八秒八 田村善之助(二高)

百米背泳 一分二十四秒六 大木直正(一高)

二百競泳 二分十八秒 村井潔(浦和)

二百米リレー 二分一秒四 静岡チーム

優勝校一高四勝零敗、静岡三勝一敗、二高二勝一敗、水戸一勝三敗、浦和四敗。

八月三日 午前無風、午後少し風あり。

早朝徳江他一人來たる。黒崎、小川さんにて開場式その他を聞き來たる。

増田先生との打合せ左の如し

一、水上連盟 大学総長、増田部長、伊藤書記官宛に招待状を出すこと。

一、来年より宣伝写真を教官食堂に掲げる。

一、プールの新設計画書提出。

一、高校生帰寮の時、人数を調べ、船を仕立てること。午前中の競技は午後に順位を競う試合があるので目ざましい記録出す。

午後潮が可成り満ちて來たのでターニングボードを直す。静高対一高、水戸対浦和、夫々一位、第四位の争奪

なるをもつて興味深きなり。接戦の末一高と静岡とは同点となり一高一等多きにより優勝となる。

水戸も各人の奮闘効を奏し遂に浦和をして全敗たらしめたり。今日の午後出た新記録次の如し。

百米一分九秒四 大木(一高)

午後六時、増田部長より一高の田村君に優勝旗を授与す。百本のビールを乾盃して氣勢を挙ぐ。部長はじめ委員、先輩と共に戸田村春木屋に開宴す。十時春木屋引き上げる。

白杵、西尾、岡本の三人特別仕立の船にて部長を沼津に送る。他は御浜にて痛飲す。

高校生のストームあり。

八月四日 晴、風強し。午前十時特別仕立の日進丸にて高校生引揚ぐ。湾外浪高くモーターにて見送りしに転覆せんばかりなり。高校生のうち居残る者数名あり。午後三時小川氏來たり、開場式の招待状を出す可き人を知らせてくれる。

小川氏から寮の増築の話が出る。空地として風呂の南側しかスペースがない。また、小川氏より田方部の青年団の訓練生を二十日〜二十四日まで六十人位寮に泊めて

ほしいとの話あり。検討すると云う事で返事あとにする。開場式の園遊会食券印刷を小川氏に頼む。菓子、ビール、おでん、だんご、氷の五種類にする。二百五十枚たのむ。

一同昨夜の酒のため疲労し泳ぐ者なし。高校生殆んど退去せるをもって室の大掃除を行なう。

八月五日 晴 東南微風

午前、泳ぐ前に十人位集りスクラップブックの整理をする。村から十七人の病人来たり。取締役の上の部屋を置いて神保、長沢両博士の診察あり。ウォーターポロのゴールを付けて練習をする。現在の在寮者八十一名なれど嵐のあとの静けさの如し、全く静かなり。午後の船にて豊田氏来たる。「カトンボ」から同勢五人連れて八日の朝来るとの手紙あり。

豊田氏より取締りへビール一打もらう。

八月六日 晴、相変らず暑い。

帰る者も居るが、大会も近いせいか在寮者九十名。先輩の一人眼鏡をして飛込み海中に落す。我等一同海中に潜りて探す。ようやく見つけ出す。お札にビール一打を

得。

午後浪おだやかになる。ウォーターポロなす者多し。アカプレーンに乗る者もあり。

八月七日 曇、午前東風強く海浪高し、午後風もおさまり海面油を流す如しなり。

東風強く湾内浪高く泳ぐ者少し。明日の大会プログラムを作る。大体一人一技で不得意のものをさけるような組合せである。

午後風治り湾内静かになる。

鯉の大漁で小川氏に招かれ、ビールをご馳走になる。一時間程で引上げ酔をさまし泳ぐ。夜またまた小川氏に招かれ日本酒とビール馳走になり、酔増々なり。

八月八日 晴

水上大園遊会挙行す。

開場式次第

- 一、記念撮影 午前十時
- 一、水上行事 午後一時
- 一、園遊会 午後三時半

水上行事順序

一、式

- 式跳 斉木
- 式泳 清水元

二、游法

- 神伝流游法
- 游方<sup>オノキガタ</sup> 真、行、草 松沢、太田
- 拷<sup>クガリ</sup>伸 清水蕃、雀部
- 諸手伸 上野、岡本
- 二段伸 東、松沢
- 三段伸 小山、清水元
- 嬰<sup>ハツイ</sup>伸 雀部
- 片手抜 西尾、太田
- 諸手抜 松沢、太田
- 水府流太田派游法
- 一重伸<sup>ヒトヘ</sup> 磯部、渡辺
- 二重伸 桐島、加藤英
- 二重伸略体 式守、松沢
- 継手伸<sup>ツギテ</sup> 徳江、岡本
- 諸手伸 小寺三、砂原
- 平伸 徳江、大谷

三、水中業

- 嬰伸 砂原
- 三段伸 磯部
- 諸手伸 岡本
- 平伸 清水元
- 水底蹴伸<sup>ウミソク</sup> 松沢
- 章魚潜<sup>タコカブリ</sup> 徳江
- 四、櫓業
- 岩跳<sup>イワタビ</sup>(直下) 金沢
- 翡翠<sup>ホトトギス</sup> 雀部
- 逆跳 松沢 其他
- 順下 平松
- 檣逆 岡本

枯木倒シ 山本欽  
倒立跳 西尾、雀部

五、端業  
水書 近藤昇  
硯持 西尾  
鳴 加藤英

手足搦 岡本  
諸手日傘 加藤英  
浮身 神、松沢 其他

六、競泳(級別)  
二十五米、五十米、自由型  
二十五米、背泳(バックストローク)  
五十米、胸泳(プレストストローク)  
混合リレー

七、西瓜取(一般部員)  
八、水球(ウォーターポロ)  
九、拔手雁行  
十、四方拝(松沢、磯部、清水元、西尾) 以上

右のプログラムにより無事終了。特に目立った事も無い。ただウォーターポロが去年より面白かった。園遊会

では皆盛んにビールを飲む。酔ったまぎれに県知事と県庁士会から各一打ずつの進物を盗んで飲んだグループもある。園遊会が早く始まったため明るいうちにストームをする。奇景なり。

八月九日 曇  
水上大会もすんで帰る人多し。松沢、西尾、徳江帰京する。取締り少なくなり寂しくなる。水泳部の年中行事殆んど終りほっとする。夜、学士部屋対取締り卓球試合(をやり、取締りの勝。

八月十日 晴 海静かなり。  
午後、数名でサザエ採りに行く。二五〇個余り採る。太田先輩来たる。山中仙人真黒になって来る。土産はカルピス。

夕方学士対取締りの庭球試合。今日は学士の勝。

八月十三日 晴微風  
久し振りでタイムを取る。

二十五メートル 西本 十四秒フラット  
磯部 十三秒五分の二

東 十二秒五分の四  
西本 一分十五秒  
東 一分二十秒

帰る人段々多し。現在七十名余。昨日のプーチヤチン往復にて臼杵老人、大吉親方元氣なし。西本ビール過多のため下痢。明日、戸田村迄クローリングで行くと皆頭張る。

八月十五日 晴  
松沢親方早朝来たる。鶴さん山中と揃って皆つられて猛烈に泳ぐ。例年今頃ある大きいうねりが御浜を襲う。山中仙人疲労甚だし。  
平松、金沢両君より取締部屋一同に菓子送って来る。学士連中が殆ど帰京したので在寮者僅かに四十名程となる。がらんとして寂しい。  
全日本選手権大会予選

八月十六日 晴  
先日来の頑張りで磯部、岡本肩を痛めて練習を休む。屋の船で十名程来たる。

明日から始まる第二回コーチ週間の打合せ、ならびに在寮生懇親を兼ねて八時から食堂でコンパを開催。全員

で五十数名。黒崎の開催の辞について自己紹介。次いで松沢、今年初めて設けた二〜四週間の目的、実施方法、その他について詳しい説明があった。尚図書館の整理について若干。今晚は例のかくし芸は時間の関係上コーチ週間の最後の晩にゆずる。

最後に部歌合唱数回に及んで閉会とす。  
申込者 二十二名

堀内 鄺 由比 北浦 李 田代 窪川 武田 原  
高橋 沈 熊 山口 平出 山本 橋原 高橋(章)  
兵藤 秋沢 吉田 岡野 木山  
審査の結果

北浦藤郎 高橋章一郎 山口登 五級に編入。

八月十八日 晴  
九時 委員、助手総出でコーチに当る。  
先ず波止場で松沢皆を集めて、水泳を習う時の心得、日本遊泳法、クローリングの概念をたたき込む。皆熱心なので気持ち良し。そして一通り泳ぎ方を見て三つのクラスに分ける。

Aクラス クローリングを学ばんとするもの  
Bクラス クローリングの心得のあるもの

Cクラス 平泳を泳がんと欲する者  
Aクラスには松沢、B、磯部、C、白杵、黒崎とが  
あ

たる。

Aクラス

李、田代、窪川、山口、平出、木山、熊

Bクラス

武田、原、楢原、兵藤、秋沢、岡野

Cクラス

高橋、沈、吉田

審査の結果

岡野治三、木山英一 三級

吉田正 四級

午後のコーチが終って競泳の練習。大ちゃんのクロール滑りものすごし。仙ちゃんのバックもとても良い、恐るべし。

東京からビール五十本戸田に着いたので取りに行き艇庫に蔵った。また雨が降り出した。

八月十九日 雨、風強し。

朝から達磨風が吹き波高し。水案外暖かい。コーチ中止。

## 昭和時代（終戦まで）

## 昭和初期から終戦までの時代背景

大場 和夫

### —個人的経験を中心にして—

昭和の初期といえは、ちょうど私が小学校に入学した頃に当たるが、当時は軍縮時代で、そのため国内は不景気風が吹き荒れており、昭和四年にはニューヨーク株式市場の大暴落から世界的大恐慌が始まり、このため一方では無産運動が勃発し、他方では一部の軍人を中心とするクーデター計画が統発する世相であったようだ。

進学率も小学校から中学に進む者が今の大学進学率よりも低い二十五%前後、大学に進む者は三%前後にしかなかった筈である。

私の育った地方の小都市では、百名の同年生のうち、中学に進んだ者が四名、女子で高等女学校（中学を女子の場合は高等女学校と呼んでいた）に進んだ者はゼロ、普通多くても一、二名程度に過ぎなかった。

中学時代（昭和七、十二年）には、「大学は出たけれど……」という言葉が流行し、中学の先生か

らは、「大学へ行ってもロクな就職はないから、就職のない高等師範へ行け」と盛んにすすめられたものだ。

このような時代背景のもとに、一方では無産思想運動は弾圧され、軍の指導のもとに、昭和七年には上海事変同十一年には蘆溝橋事件を契機に日華事変が勃発し、学校では軍事教練の強化、一般には国民精神総動員運動が起され、やがて太平洋戦争へと傾斜して行くのである。

そのような国内の一般的な風潮にもかかわらず、旧制高校、大学に学んでいた我々は、「濁世の波を永久に堰き」とめながら、スポーツに、恋愛に、議論に、読書に、己が自身好む処に従って、古き良き時代の青春を謳歌していたのであった。

戸田寮の生活でも、半島のつけ根から先は今のようない国民宿舎も民宿も売店も、もちろん一軒もなく、文字通り白砂青松の浜辺を東大の関係者だけがおおらかに濶歩し、村の人達は時折、岬の先の弁天様参りにチラホラと

昭和時代（終戦まで）



姿を見るくらいのものであった。

昔ながらの子供部屋にも先輩達の子供達がたむろしていたし、学士部屋には、今は亡き太田老人、坂田老人や、若手では時永の文ちゃん達が定連で、必ず夏の一時を過ぎて行かれたものであった。

昭和七年頃、最初の東大排斥運動が起ったが、これも東大生が村の娘達にもてすぎるといことが、青年団のやつかみで新聞種になった割には根も浅く、したがって和解も簡単に成立したもので、その点では、戦後の達磨山観光地百選入選にからむ観光開発のための排斥運動や、東大紛争の際の排斥運動のように、村当局自体が主

## 御浜雑記

岡本 勤一



もう五十年以上も前の古い話で記憶もうすれてきているが、戸田での生活は今なお懐しい思い出ばかりである。私は房州の館山で生まれ、小さい時から水泳が好きで房中時代すでに戸田に帝大水泳部のあったことを知って

体となったものとは質的に違った、むしろ牧歌的な匂いさえするものであった。

ただ、昭和十六年、太平洋戦争突入前の閉寮直後の文部省による閉寮命令、十八年の学従動員後の終戦に至るまでの閉寮は、永い戸田寮の歴史の中で最も暗い、陰うつな時期であった。

共に戸田を愛し、青春のひと時を戸田で過ごした仲間達の幾人かは永久に還らざる人となってしまった。生き残った我々は、深い悲しみをもって、哀悼の意を捧げた。安らかにあれよ、友どち。

（昭17法卒・水泳）

いた。

私が初めて戸田に行ったのは関東大震災の翌年大正十三年の夏で、松沢一鶴氏と一緒に来た。その時私は外来者で、どの位滞在したかよくは覚えていないが、御浜での生活にすっかり魅せられてしまった。鶴さんとはその前年大正十二年の夏、房州八幡の詠帰寮で寮を閉鎖後十

人足らずの部員だけが居残り、秋のインターカレッジ前の合宿に入っていた。その最終日の九月一日の昼、運よく近くの港川の河口で練習中あの震災に会い、命拾いをした仲間だった。詠帰寮はその時に全壊し、八幡の海もひどい遠浅になり、海水浴には全く適さなくなってしまう、翌年伊豆の宇佐美に移してしまった、大正十四年私は医学部に入學したが、在学中の四年間毎夏全期間中を御浜で暮す破目になった。東大に競泳部の出来たのもこの頃で、工学部内丸先生の寛大な御理解を得て工学部構内にあった実験用のタンクを改装し二十米のプールも出来上り、増田先生が水泳部長になられたのもこの年だったと思う。鶴さんと二人で、部長をおねがい増田先生を耳鼻科教室の教授室にお尋ねしたことを記憶している。取締委員四人の中、御浜の水泳部から二人、競泳部から二人にする申し合せのできたのもこの頃である。

当時御浜へは沼津から船でゆくより方法がなく、駿河湾上に浮ぶ孤島みたいなものだった。東京から沼津まで汽車で四時間ほどかかったと思う。沼津駅前通りには乗合馬車の走っていた頃で、昼頃までに沼津に着くようにして、市内を流れる狩野川にかかる御成橋の袂にあった寿々喜家の二階で美味しいなぎを食べ、午後一時出帆

の船を待つのが習しであった。この橋の直下が船着場で、日進丸、順幸丸という焼玉エンジンのボンボンが交互に戸田との間を往復していた。この日進丸は昭和二十一年の冬シケに会い、沼津沖で遭難したということである。船は川を下って河口を出ると大瀬崎に向って進み、この岬を過ぎると切立った断崖のせままっている伊豆西岸に沿って南へ、途中井田部落に寄港する。ここを出ると間もなく御浜の岬、松林の森と白く輝く砂礫の岸を見ると、これからの楽しい生活を憶い胸を躍らせたものである。狭い湾口を入れて右に大きく回ると御浜の棧橋である。到着合図の法螺貝の音が印象深かった。沼津から二時間の船旅である。

当時、棧橋を下ると太い松の木のそばに番小屋、左手に艇庫、石段を登るとやや黒ずんで見える滄海樓、これを中心にして左手に学士部屋、右手に取締部屋、貴賓室、取締部屋の西側に新座敷、食堂、賄部屋と続いていた。学士部屋の裏手に風呂場があって、これらの建物は起伏のある渡り廊下で連っていた。貴賓室には原則として宿泊はさせないことになっていた。ここでは女人禁制というきびしい掟があり、またこの地域へは村人でも出入りを許されてなかった。ここは全くの別天地で、御浜

での生活を一層快適なものにしてくれたと思う。女気は女中さん四人だけで、当時御浜の管理をしてくれた元村長の小川武氏が毎年村の娘さんのなかから選んで送ってくれた。皆奉仕的に働いてくれて、室の掃除、寝具・蚊帳の世話、来場者の送り迎え、賄いの手伝いなどが主な仕事だった。

海には、脚立、筏、ターニングボード、和船、カヌー、スカール、アカブレインなど揃っていて、遊ぶにはこと欠かなかった。また新造のモーターボートも活躍し、毎日午前、午後の游泳時間中、見張りに出るのが日課で、私たちのいた四年間には、病人がでたり游泳中の事故などで苦労した覚えはない。夜は村での遊びが楽しみで、モーターボートの定期便をだして送り迎えしていた。村には菓子屋の秋月、アヒル料理の青木屋くらいしかなかったが、みな結構楽しんでたように思う。

年中行事は八月上旬の水泳大会とその前後に行行った遠泳。遠泳は湾一周の他、大瀬崎遠泳を始めたのもこの頃だったと思う。漁船数隻を借り受け、鱧よけの太太鼓を鳴らし、赤禰を流して八軒余を泳いで大瀬の岬を回り、湾内奥の砂浜に上陸した。泳ぎ終ってすするゆであづきと葛湯の味は今だに忘れられない。

を過ぎた覚えがある。また御浜では湾口沖のイカ釣船の漁火が印象的だったし、岬を回って外海でのサザエとり、浜辺でたく壺焼きの味、夕風でのスカール漕ぎ、夜光虫の光る暗夜での水泳ぎ、また村の鯉船に便乗して遙か駿河湾沖での勇壮きわまる竿釣り、カジキマグロの銚突きなど楽しかった思い出は限らない。その起源など詮索したこともないが、ここでは「バカ野郎」で迎え「バカ野郎」で送るのが礼儀になっていた。御浜は初めての学生が、下船した途端「バカ野郎」の連呼に相当に癪にさわったらしく、大した剣幕で取締部屋に怒鳴りこんで来てあれを取締れという。結局腹の虫がおさまらず明日の船で引揚げるといい張って、翌日帰った彼を「バカ野郎」と一段高声で見送ってやったことがあった。御浜を知らずに終った気の毒な奴だったといまだに忘れぬことの一つである。

御浜が縁で終戦後もお付き合っていた先輩に青木三弦氏(大八、九年取締)と太田資孝氏(資時氏の御子息、大十、十一年取締)がいる。青木氏は鎌山と号し、漢詩を学生会報に毎回投稿され、私と同じ病院で働いたこともあり、本年一月のお便りでは昨年未鎌倉山から熱海に転居され、至極御元気で週三回病院へ通っていられ

賄いには木下君という元上野精養軒にいたコックさんが頭でいて、食費は一日八十銭位だったと思うが、仲々うまいものを食べさせてくれた。目玉、ポークソテーなどの一品料理もあり、氷あづきが人気だった。和船は足のわるい三喜爺さん、モーターボートは夏目甚ちゃん管理していて、番小屋で寝泊りしていた。

滄海樓の一階に子供部屋があって、先輩の子供たちが来ていた。当時、阿部実、牧野進、小寺三、四、五郎三兄弟の常連が活躍していた。阿部、牧野両君は後に取締委員になっていく。学士部屋の二階には常に五、六人の先輩が来ておられたと記憶している。私はずっと取締部屋にいたのでお付き合の機会が多く、よきにあれ悪しきにあれ色々知恵つけられたのもこの頃である。私には学士部屋での生活はついになかったが、当時の御常連は太田資時氏、阿部氏(実君の父上)、清水氏(元君の父上)を初めとして、田口文太氏、酒巻衛氏、神保光太郎氏、大河原半蔵氏、近藤経一氏、辰野保氏、森田澄一氏、吉田篤二氏、加藤英夫氏、雀部峻三氏、田口勇三郎氏等が主だったと記憶している。これ等取締部屋の連中には御浜会という集りがあって毎年秋には神田学生会館で御浜会が催されていた。私も二回出席して楽しい一時

る由である。太田資孝氏はもう十五年程前になるかと思うが、鶴見にお住いの頃自宅より失火、令夫人は焼死、資孝氏は大火焼をして近くの同期生の橋爪病院に入院、出来るだけの手当をしてもらったが三日目ついに亡くなられ、まことに残念でならない。御浜当時の先輩同僚の中にも多くの方々がすでに亡くなられており、昨秋何十年振りかで尋ねてくれた当時子供部屋にいた小寺三、四郎両君ももう還歴を過ぎていと聞いて感慨無量の昨今である。

御浜でサノサ調で愛唱した仏文学者辰野隆氏作といわれる詩を付記しておく。

御浜ちよいと出りやね

御浜ちよいと出りや 沼津の浦よ

眉毛に涼しき 富士の峰

三保の松原ね さしまねきや

いつか心も 清見瀉。

昭五十一年二月記

(昭4法卒・水泳)

## 「トリミダシ」の思い出

中野 勇

沼津チヨイト出りやネ

沼津チヨイト出りや大瀬の岬よ

君が姿をみはままで 苦勞するがのネ

海こえてあいに 来たではないかいな サノサ

「みはま」にある戸田寮、誰かが待っていてくれるような粋な唄だが、当時の戸田寮は女人禁制、男ばかりの世界だった。しかし、その海はあくまで青く澄み、そして波静かで、空も澄んで、太陽はキラキラと真夏の光をかがやかせ、そこには南洋の土人と見間違えう若い男どもがたむろしていた。



沼津からボンボン蒸気にゆられて戸田湾に入ると、ホントに波の静けさを感じたものだ。駿河湾につき出した松林の半島にいだかれた己の海。そして、その半島の松林の中に点在する各寮の建物とその向うに仰ぐ富士の

高嶺はいまだ心に浮ぶ。文字通り油を流したような波静かな湾内には、スカール、和船、二十五米に仕切ったプールがあり、五、十米の飛び込み台、モーターボート、アカプレンと今思い出してもなつかしく、青春の真夏の一時期を過したことを幸せに思うと同時に、古きよき時代だったとしみじみ思う。

水泳部にいた関係上、三年間の夏休みの半分程をここで過したが、言葉にタブーのない、女気のない（わずかに数人の女性が食事や掃除をしてくれておった）いわば今でいう女性への欲求不満のためか、沼津からのボンボンがチャチな岸壁に町の香と共に運んでくれたのがひどくなつかしく思われる。

水泳部の委員は水泳のコーチをするとかで取締りという名でよばれるわけだが、誰も取締りなどというものはおらず、トリミダシと呼んでおった。不思議と風規上のとりみだしは唯一人もなかった。私もそのトリミダシを二年ほどやって寮費をフリーにしてもらったことを覚え

ており、いまだに感謝している。

夜になると時には和船で村へ渡る。唯一の喫茶店（名は忘れたが）で七チヨウセイキというピンクの色の牛乳と砂糖とかき氷のミックスしたものの（一杯五錢だったと記憶している）を愛飲したものだ。かえりは、櫓の音を聞きながら達磨山連峰のシルエットの中の真つ暗な海から眼を空に転ずれば、満天の星空は今の東京ではとても望むべくもない、それはそれはきれいだっただ。

沼津通いの定期船の送り迎えというより、迎え方はかた通りだが、送り方はいやはや大変なものだった。何しろ水着（白木綿製で今のジンベエのようなもの）を着た（中に赤禪のはだかもある）連中が大勢手を振りながら岸壁にならば、一斉に「バカヤロー」つぶつぶいて「オ×××」そしてつぶつぶいて「その男は女たらしだから気をつ

けなさい」「そいつは手くせが悪いから皆さん気をつけなさい」と叫ぶ。送るほうは大勢、送られる方はキチンとした姿でとりすまして手を振っているが、赤面して穴があったら入りたいたいと思ったものだ。しかし、これもなつかしい思い出の一つだ。

寮での先輩後輩の交流もなつかしいもので、今でも耳に残っている言葉に、近藤（経一）先輩の「中野君、僕のオヤジがいつにいたがネ」「世の中はだますものと、だまされるものと、それを見て憤慨するものと三種類に分けられる」と。今思うと全くその通りだ。

戸田での交流、合宿での交友、運動部の各部の先輩、部員間の交流、六十才を超える今なお、当時の友情をあたためている事は数々ある。

（昭8医（憲卒・水泳）

## 昭和五年——十一年の戸田

望月 衛

昭和五年頃から、卒業後も一、二回、私は戸田へ行き、長い時はひと月以上も遊んでいた。スエズ以東の最良の海水浴場」とは、いつも聞かされたほめ言葉であっ

た。取締りと称する寮委員がときどき荒れて取り乱すといわれていたが、当時の帝大生はほとんどすべて高等学校の寮生活をしていたので、ある種の自治が自然に出来

ていた。

朝早くから日暮れまで、和船を漕ぎ、スカールの練習をし、雑談をし、時に土肥に出かけ、またほとんど毎夕「モーター出るよ」という声になんとなく誘われて、村の春木屋で「唐人お吉」の歌と金語楼の兵隊落語のレコードを聞きながら「七調サーキ」というミルクサーキを二十銭ぐらい払って飲んだ。和船で村に行き、アヒル料理を食べて帰るのはオツなものだが、村の岸壁にもやっておくと村への足がなくなるので、あの頃から禁じられてしまった。結構、片道を歩くことになるので、アヒル料理も一回ぐらいにした。それに次ぐおごりは一個一円五十銭の大スイカを四、五人で食べて、帰りのモーターに間に合わせることであった。



大恐慌後のどん底景気であったが、寮に夏を過ごすような学生はノンビリしていた。常連の教官としては運動会長の林春雄教授、耳鼻科の増田教授。スカールを教えるて下さった東竜太郎先生はまだ若々しかった。学士部屋には弁護士、作家、理科系の教官がたむろしていた。退寮を命ずるという処分はあったのかも知れないが、先

輩学士はその対象にはならなかったはずである。しかし私はあるとき、プレイボーイと目された先輩が取締りその他の現役学生の手で（酒のいきおいもあって）浜辺に担ぎ出され、毛を剃られて翌朝ボンボンに乗って帰京するのを目撃した。

戸田の行き帰りに山中寮へ泊る者はかなりいた。達磨山はゼロメートルから登るので、荷物を持って越えにくかった。私はむしろ伊豆の踊り子や若山牧水の紀行文学などに憧れて、三島から南下して中伊豆を旅した。湯ヶ島の落合楼で汽車賃がなくなったとき、大きなホクロのあるおかみさんが十円貸してくれた。すぐに返済したが、そんなことが縁で新婚旅行のときに泊った。こういう雰囲気の中に戸田はあったのである。

ひどく聞きとりにくいラジオで「前知勝った」という中継を子供部屋で聞いた憶えがあるから、昭和十一年に私は学士で行ったわけである。それから三十八年たって見た寮は、柱のきずもことによると蚊帳の吊り手をかける釘までそのままみたいで、ただ女子用の施設が若干できたのと、構内が狭くなっただけに変化であった。潮風にあうと朽ちなくなるもののだろうか。学生数はきつと三倍ぐらいになっているのだろうし、職員の利用も考

えたら今のままでは無理だが、私達の時代と今とではこの種の施設のもつ意味がまったく違うから、人数に合っ

## 「バカヤロー」と送られて

太中 弘

た新築を考えるだけに終わってはならないだろう。

（昭8文卒・水泳部）



小生が東大医学部在学中、戸田寮を訪れたのは昭和十一年の学生最後の夏休みで、後にも先にもこれがただの一回であった。これには少々理由がある。当時の戸田寮は、建造物もまだ新しく、周りの部落もまばらで、部落らしい部落といえれば舟で行かねばならない対岸の戸田の村位であったように記憶している。現在と違って女性はいないで、男性だけであるから万事があけっぴろげで、泳ぎはもっぱら細い黒禪一本である。現代女性のビキニスタイルに匹敵するかもしれない。その頃戸田寮にはスカールがあつて、どういふわけか知らないが、その管理が医学部のポート部に委ねられていたので、小生もその一人として大学四年の一夏の或る期間を初めて戸田で過ごすことになったわけである。沼津まで汽車で行って、

沼津の小さい港からボンボン船に揺られながら戸田湾に着くと、大学のモーターボートが迎えに来てくれて、これに乗り移って寮に着くわけである。寮を離れて帰る時はこれと全く逆のコースをとるわけで、帰路はモーターが岸を離れると、総長であろうと、教授であろうと、或いは学生であろうと、岸から「馬鹿野郎」という親しみの声援に送られて別れを惜しむのが慣しであった。今日では想像もつくまい。

次に小生の楽しみは朝早く起きてスカールに乗り、湾の沖合いに漕ぎ出すことであつた。一度は気持よく漕いでいたと思つた所、あつという瞬間に湾の真中で転覆して、漂流中を漁船に助けられて帰ったこともある。とにかく余り上手でなかったスカールの腕前を、上手とはいえないまでも一人前にして貰つたのは戸田のおかげである。その外に想い出といえれば、あの砂浜で野球をした後

で既に故人となられた耳鼻科の増田教授を囲んで酒盛りであった。先生と学生と裸で話し合いがもてたことは、今から考えるとこの上ない幸せであったと同時に、先生の御最後を武蔵野日赤に御見舞申し上げた小生にとってには実に感慨無量である。

もう一つ忘れられないのは、夜寮でメートルを上げてから船を漕ぎ出して対岸の戸田村に出掛け、その飲屋でさらに引っかけ、酩酊した挙句、舟を漕いで寮に帰るわけであるが、櫓を漕いで前に傾く毎に海に落ちる。その都度交替するが漕いでも同じである。皆濡れながら、それでも何とかして寮のある岸に辿り着いた上に、さらに元氣よくターニング台の間を競泳する。随分と当時は元氣だったものだ。と六十才を過ぎた今は羨しく想いやられる。それから西瓜拾いという奴が曲物で、平生あ

いつは生意気だとマークされた人物は、西瓜を持った瞬間に水泳部の連中が頭を押して沈める。浮上ったと思っただらまたやる。いい加減に水を飲まれた拳句に放免と相成る。小生など勝手放題の事を言っていたが、水泳部員に知人が多かったのと、最上級生であること、スカールの管理(実は自分の練習)をやっていたという事でその災難には会わないで済んだ。今から考えると実に楽しい夏で、これを終えてから学生最後の夏休みを父母の下で過ごすべく帰省した。勿論、バカヤローの声に送られてである。

尚、小生等はスクール管理という職責のおかげで潜在中はすべて官費であったことを申し添えておきます。

(昭12 医卒・ボート)

## 嗚呼、我が青春の思い出——御浜寮

牧野 進

私は昭和八年に医学部に入学してから、昭和十二年に卒業するまでの四年間、寮の委員をやったものです。大卒学へ入ってからすぐに委員を命ぜられたのは、中学の三

年の時から、父や兄につれられて毎夏十日か二週間ぐらい行っていましたので、そのような者がいたほうが都合がよかったですからでしょう。

中学時代は、私の他にも常連の少年達がいて、私共は子供部屋と称する、恐らくはもと旅館だった時の母屋であった二階建ての棟の階下に、女中部屋と隣合った十二畳の部屋に入れられていました。女中達は夏の間だけ、部屋の掃除と布団の上げおろしのために、対岸の戸田村の娘たちが雇われていたものでした。

この他には、女気がなくて、寮内は女人禁制になっていました。なにしろ昼間はサルマタ一枚の男子どもがゴロゴロしていたものでしたから、致し方もなかったかも知れません。

高校生になると、こんどは二階の中供部屋と称する部屋に入れられました。ここも常に二、三人はいたようです。もしかしたら、この棟は「滄海楼」という横額のかかっていた棟ではなかったかと思えます。

今は戸田寮というようですが、私の少年の頃はただ単に水泳部と書いていました。その後、競泳をやる方が水泳部と書いていました。その後、競泳をやる方が水泳部と書いていました(これからみれば昔の水泳部は游泳部といったほうがよいかも知れません)。たしか私の入学する前後に御浜寮という名に変わったように記憶してい



いつは生意気だとマークされた人物は、西瓜を持った瞬間に水泳部の連中が頭を押して沈める。浮上ったと思っただらまたやる。いい加減に水を飲まれた拳句に放免と相成る。小生など勝手放題の事を言っていたが、水泳部員に知人が多かったのと、最上級生であること、スカールの管理(実は自分の練習)をやっていたという事でその災難には会わないで済んだ。今から考えると実に楽しい夏で、これを終えてから学生最後の夏休みを父母の下で過ごすべく帰省した。勿論、バカヤローの声に送られてである。

ます(今は戸田寮と書いているようですが)。したがって、常連の先輩の方々は、日本泳法(主として水府流だったと思いますが)の名人、達人の方が多いようでした。毎年七月下旬の日曜日に開場記念祭が開催され、古式泳法の腕を披露されました。私も少年の時、「水書」という立泳ぎしながら扇に筆をふるわれる先輩の硯持ちの役で出場したことがあります。その他にも催し物としては、湾内一周遠泳とか、大瀬崎遠泳とかがあって、完泳者にはメダルやバッヂが貰えましたが、来場者には全員に特製の手拭いが配られました。

活躍された先輩方では、大先輩の太田さん、阿部さん(後に委員となった阿部実さんの親父さん)雀部さんなどの顔が思い出されます。これらの先輩は学士部屋と称する二階建ての一棟に入っておられました。なんといいっても座談の勇は、近藤経一さん、辰野保さんなどで、昔の学生連中の豪傑振りや、有益なワイ談などを伺いましたが、ほとんど忘れてしまいました。

私の入学した頃から日本泳法も廃れてきたので、山中寮のヨットに対抗するような目玉商品が必要だということになって、スクールが導入されました。初めはボートのような幅の広いものですが、その後九インチとやらの

細いのも購入され、湾内をのり廻したのですが、その出入庫やヒックリ返るのを見張るために、游泳時間中は委員がずっと「やぐら」の上で見張っていなければならなかったので大変でしたが、幸いこの頃からボート部の部員が交替で委員として来場されるようになったので、乗り方やこぎ方などもコーチされ、学生の間では大変好評だった事を覚えています。そして、私どもの常任委員も、また競泳の部員も、ボート部の方々と親交を深めあえたのは、非常によい思い出になっています。

その他、少年の時は、嵐が来る予報が出ると、少年たちは戸田村の村長さんの大きな二階に避難させられた

## 〈戸田の話〉

秋 邦雄



「人麻呂は赤人が上に立たむこと難く、赤人また人麻呂が上に立たむこと難し」。人いきてひっくり返りそうに暑い船の上で人麻呂と赤人とを対比しながら今夏久しぶりに戸田を訪れたが、寮の玄関に上る石段の右脇に

立派な筆蹟で、浜木綿の説明と人麻呂の歌が書いてある立札がまだあったかどうか、不覚にも見落してしまった。

み熊野の 浦の浜木綿 百重なす  
心はおもへど ただに会はぬかも

これは紀州での歌、ただ浜木綿を介してここに紹介されただけのものである。だが頼山陽が論破しているように赤人の足跡が伊豆に印されていることを考えれば、

三津のさき 浪をかしこみ 隠り江に  
舟は寄せなす（または、寄らなむ）  
みぬ眼のさきに

という彼の歌は、そのまま素直に戸田の歌と感読できないものであろうか。風吹く海を旅して、忽然として現われた深い入江に飛び込んだ時、彼も矢張りヤレヤレと思つたことであらう。そして海の風いだ後さらに平穏な舟旅をつづけ、田子浦を出入する彼の姿が髣髴と見えるような気がする。

田子の浦ゆ 打出でて見れば 真白にぞ  
不二の高嶺に 雪は降りつつ

富士山に雪が降る頃は、西風が強く、西伊豆の海は荒い。荒天に沼津より舟出するときは、沼津に向って流れる沖の主流をさけて、大瀬岬から戸田にかけて岸辺近く

り、学生時代には、医学部の大先生が来られるとカバン持ちで、やはり村長さんの所で診察されるのにお伴した事、外海の岸で東竜太郎先生とサザエ取りをやった事、運動会の職員の本氏が生意気だというので文字通りの赤チンにさせた事、七調セーキ、「バカヤロー」の送別のあいさつなど思い出はつきませんが、紙数もつきまじったのでこのへんで止めます。  
（昭12卒・水泳）

（なお、氏は、かねてより、病氣療養中のところ、去る昭和五十一年三月五日、尿道ガンのため御逝去されました。ここにっつしんで編集委員一同、心から御冥福を祈りいたします。）

逆の流れに乗って航行するのは恐らく昔も今も変りあるまい。井田を左手間近に見て過ぎると、本当に忽然として、戸田の入江が静かな姿を見せてくる。戸田舟の欠航に業を煮やして、八丁櫓を雇って戸田に来た寮の開祖、太田資時さんも血氣盛んな無茶時代とはいえ、恐らく赤人と同じスリルと景色とを味わったことであらう。

戸田寮はインテリの寛ぐところなので、いろいろ馬鹿話が多い。堅い話はこの位にして、常識外れの朗らか話を少し辿ってみよう。昔は、なんていうと時代がかかるが、寮と村との交流は濃かった。それに村の春木屋！当時の寮生にとっては最高のレストランで、そこに通う舟を漕ぐのは委員の役目。あそこのアヒル鍋は天下一であった。物干しにコンロを据えて一杯やる雰囲気は、今では神代のものになってしまった。オミキが入りすぎて梯子から落ちた奴が居たが、誰だか忘れた。最後に味わったのは食糧不足の始まった頃で、悪弁護士の太田資時さんの悪智恵で、村長さんにはお米を三升都合させ、尋常手段では駄目なので、春木屋さんにはお嫁さんのお目出度にお祝いを贈って、そのお返しにアヒルをキュツ。時の面々は太田さんを筆頭に、時永の文チャン、文学部を出たてで、図書館勤務の佐藤さん、それに末席に小生

と、合計四人、そっくり返るほど食べたものだ。そのほか、ゆでたトウモロコシを一日十三本食べたことや、素裸で夜光虫の海で泳いだ話等、昔話はいくらでもある。

戦後になって村との交流は薄くなったが、寮生の中にトンキョウウなのが目立ちだして、楽しさには事欠かなかつた。

まだ寮に水道がひかれてなかった頃、生水を飲んで下痢をする者が多かった。遠藤郁夫君が静かな口調で「戸田の井戸水は天然の下剤だから、生水は飲んじゃ駄目ですよ」と注意していたのが印象的であった。その頃、朝早く舟を漕いで、大きな薬缶に二杯、飲み水を汲みに行くのが私の日課だった。それでも飲み水は不足して井戸

水を飲む者が居た。「秋さん、お腹を下しチャツタ。急行列車だ」「なに急行列車？」それならお尻に赤い紙を貼つときや止るよ。」しばらくして彼曰く、「秋さん、駄目だよ。全然止らないヨ」「おいいい、ホントに貼ったのか。仕様がネエな。そんなの真面目なわけがないだろ」「だって秋さんが言うのだから、真面目だと思った。赤いのは暖くて、冷えがなおるとか何とかか。」これが医学部で今は偉くなっているから素敵なものである。

楽しい思い出はつきないが、余り囃に乗りすぎると、戸田な話になるので、今回はこのくらいで筆をおかせて貰います。

(昭16理卒・戸田寮ゴロ)

## 〈戦前の戸田寮の思い出〉

林 周一

私は第二次大戦前の昭和十二年〜十五年の四年間、戸田御寮の委員をつとめた。満州事変に続く支那事変の最中で、上海への渡洋爆撃などが行なわれ、軍隊色が次第に濃厚になりつつある時代であったが、それでもなお、古き良き時代の気風が支配的であり、学生々活は自

由で豊かでのんびりしたものであった。とくに戸田は別天地で、夏の生活はまことに楽しいものであった。

当時の寮委員は水泳部とボート部から出ている、寮の管理運営のほかに寮生に対する水泳とボートの指導を受けていた。委員長は両部で毎年交代でやっていた。水

泳部からの委員としては久野健(昭四十一年死亡)、凶師忠、小出義彦(戦死)、滝遠義男(戦死)、富田国男、本多良助、平尾英二、山藤哲三、八木昭一、大場和夫、林周一など、ボート部からは松下、斎藤健太郎(戦死)、長村真、大宮善吉、高橋真(死亡)などの諸君であった。いずれも元氣一杯、極めて愉快な面々であったが、戦死その他ですでに故人となった方々の多いのは誠に残念であり、慎んで御冥福を祈りたい。

当時の寮の運営予算は一夏で僅か千円弱であったのを覚えてい。この予算で寮のすべての行事をやっていた。まことに隔世の感があり、今の若い方々には到底想像がつかないことと思うが、毎年新造する「スカール」一台が百六十円、村の好意で毎日来てくれる女中さん百六十人と「モーターボート」の番人の月給が合せて二ヶ月で百円位であったから、他はおして知るべしである。ともかくこの予算内で伊豆半島全体の小学校水泳大会、



戸田湾一周遠泳などまでを盛大にやって、多少なりとも水泳日本の発展に貢献しているのだと自負していたのだから立派なものであった。それでおお多量の残金が出て

村の小学校へ寄付したのを覚えている。

毎夏、学士部屋へ来られる方々として、東竜太郎先生、坂田さん(通称サンチャン)、太田弁護士、時永文三(文チャン)などの先輩をはじめとして、大塚ガチャ兄弟など多数の方々がおり、大変に賑やかであった。学士部屋の寄贈になるビールは委員室の面々にはこよないご馳走であり、大いに痛飲したものである。ビールの空瓶が食堂の裏の壁にそつと積み上げられていたが、それが屋根に届く高さにいたって毎年の夏が終わるのが常であった。また村の名物として、秋月の「ミルクセーキ」、春木屋のガチョー料理、魚梅の魚料理、望岳亭の「そば」、沼津鈴木の「うなぎ」などがあったが、これら先輩諸君に馳走していただいたのも忘れられない思い出である。

寮への交通はもっぱら沼津からの舟便で、一日二往復、今日のような山越えの自動車便はなかった。不便であったがそれだけに俗世界を離れた別天地の感が深く、白砂青松の半島全部を独占的に使用していたこともあって、全く申し分のない夏の楽園であった。戦時中から戦後二十年にかけて、仕事その他の雑事にまぎれて戸田寮を訪れる機会がなく、昨夏はじめて戸田の海を訪れてみ

た。寮は玄関前の松と共に昔の姿であったが、周囲の事情があまりにも変り果ててしまつて、うたた今昔の感に堪えず長嘆息したような次第であつた。この寮の将来に關して、古くなつた建物の再建はもちろん急がなければ

なるまいが、それにもまして環境の整備が必要なように思われる。あの特色のある夏の憩いの場としての東大戸田寮の再建を希望してやまない。  
（昭16卒・水泳）

## 「思い出の戸田寮」

河合博正

信州松本に住んで十年余り、海を見る機会がないので、夏になると海に出かけたくなります。医科研に勤務している倉田君が数年前戸田を訪れ、私の名札が寮内にあつたと聞かされ、あの建物が戦争にも損われずにある事を知り、なつかしく当時の写真を貼つたアルバムを繰りました。



医学部在学中ボート部マネージャーをしていたので、水泳部より三名、ボート部より一名の寮委員になり、多分昭和十五年と十六年に「取締り」となつたと思います。七、八、九の三ヶ月を寮で過し、たまに用で沼津まで村営の焼玉エンジンの汽船で出かけると、賑やかさや自

動車に戸惑いを感じたことを覚えていています。当時の委員は水泳部からの方が山藤、林（周一）、大場の諸氏であつたようで、私は東京湾汽船で来る学生を迎えるためのモーターボート、和船、スカールなどの管理に当る役をしていました。  
御浜は泳ぎにきた東大生がほとんど独占していて、他の海水浴客はまず見かけない状態でのんびりしたものでした。食堂では夏は暇の学士会館のコックさんが腕をふるってくれたので、一泊一円内外の料金にしては結構すぎる食事を出していたようです。すでに戦争も始まろうとする折でしたので、苦勞してビール等調達し、駿河湾に面する機でアワビ、トコブシをとり、料理を頼んでコンパをやつた覚えもあります。

対岸の村の子供達が一人乗りの小さな和船を先頭に、二十人ぐらいが泳いで御浜によく来ていたようですが、違者なもので溺れる事故などなく楽しげに遊んでいたのは、今日の子供達とかなり違うように感じます。また、日本水泳界発祥の地というので、寮が主催で小学校の水泳大会も催され、なかなかよい記録も出たのを記憶しています。私自身は泳ぎは速くなく、学童も自分より遅いものには敬意を示さないような素振りでしたので、専らスカールで楽しんだものです。偶々ロスアンゼルスオリンピックのゴールドメダリストの北村氏が来られたこ

とがあり、北村、國師氏らが泳ぐのを小学生が目を見張り、美しい泳法に見とれていたのが目に浮ぶようです。  
スカールといえば、風いだ一日、委員三名で隣の井田部落へ遠征しましたが、行きは順風でうねりにのつたわけですが、帰りは逆でひどく難航したのも一つの思い出です。  
観光のパンフレットでみると戸田、土肥は大分ひらけたようでも変わつたと思いますが、三十年あまりでどうなつたか、来夏あたりは出かけて確かめてみたいと思つています。  
（昭17医卒・ボート）

## 戸田のこと

林 実



宮本正尊先生は戸田の寮にこもつて思索され、ある朝ここから富士を眺められたとき、「根本中」を得られた。これは先生のご本に書いてあるところである。

だいぶあとになつてからであるが、このことをわたしに教えてくれたのは法学部の西沢弘順（現高

知大学）であつた。  
この西沢は、わたくしどもの頃の戸田の寮委員であつて、夏は戸田で過ごすというか監督していたし、そのほか二、三ヶ月に一回、ぶつりと本郷から消えることがあつて、それはおおむね戸田に行つていたのであつた。  
ある時、野田茂穂と二人、西沢に連れられて戸田に行つた。たいがいこういふとき鳥居鉄也在るものである

が、あのときは終始雰囲気静かであったから、鳥居は  
いなかっただように思う。そういえばあの頃、鳥居は卒業  
実験に追われていて、夜中も理学部の赤レンガにいた。  
東京から沼津まで電気機関車で、そこから西は蒸気機  
関車であった。その沼津で降りて、ごていねいに駅のベ  
ンチで駅弁を食べ、沼津の町中でまたなにかを食べ、そ  
れからエンジンの付いた和船に乗って大うねりの太平洋  
に出た。ここは太平洋の一部である。船首がはなはだ空  
に突きあがり、船が立って歩いているようであった。エ  
ンジンが重すぎるのか、みんながうしろに乗ったからで  
あったか、まあ船尾から水中にめり込んだら制服のまま  
泳げばよい、と覚悟をきめた。それから土地の娘さん  
が一人乗っておったので、わたくしどもは行儀よくなっ  
ていた。

エンジンの爆音がはなはだ大きい。で、そのエンジン  
が急にとまり静かになった。こんどは故障かなと思つた  
ところ、そこは戸田であった。戸田には音がなかった。  
ないといつてよく、とにかく全くない。

寮に荷物を置くと、湾をまわって村を見に行った。村  
の第一印象は、大きな夏密柑が一つだけ木にぶら下がっ  
ていた。この集落はそれでも十数戸あったであろうか、

すべて半農半漁。型のごとく野道が浜から集落を断ち割  
るように、まっすぐうしろの山裾に一本。

おのずから、わたくしどもはその道に入って行った。  
木も草も音もない中に道は光っている。人影はない。み  
んな昼寝なのか、海に出ているのか。潮風に鍛え込まれ  
た軒下の木肌を見ていると、左手でパイとヒョコらしい  
のが鳴いた。と、そこからおんどりが道に出て来て、わ  
たくしどもの前をゆうゆうと歩いて行く。にわたりの歩  
行をまうしろから見続けていると、なかなかうまい。そ  
う思っているうちにおんどりは右の畑にそれた。わたく  
しどもの通りすぎるのを、おんどりは左の目で監視して  
いる。道はそれでもうおしまい、あとは専門家でない  
と修善寺に抜けられないと、西沢は説明した。

寮に帰るため湾をまわって来た時、西沢はまた口を開  
いた。いわく、一年先輩の大場和夫寮委員は、あれは本  
当の水府流の大家だという。とにかく着物を頭にくくり  
つける。音もなく海に入る。それに、湾を渡るのがとて  
も速い。そして西瓜を二つ三つ分けてもらうや、それを  
どう持って泳ぐのか、もうこちらに上り、着物を着るや  
「たべろっ」と投げ出す。西沢はその後三十年間、戸田  
の話をするとき、いつもこの話をまず持ち出す。

その戸田湾を眺めて、わたくしどもは寮に入った。オ  
フ・シーズンで誰もいない。寮の夕食は煮魚を食べた。  
西沢が一匹やるよといったので、それをもらって食べ  
た。味は覚えていない。甘かったのであろう。やがて夜  
が来た。電気はおそろしく暗かった。先の尖った電球で  
はなかつたが、その暗さに関東震災の前後を思い出し  
た。「お前、こんな暗い電気で本を読んでおったのか」  
と聴くと、西沢が「夜は寝た」と答えた。赤茶色の蒲団  
を引っぱり出して寝てみると、しめっていた。「ヤイ、  
蒲団を干しとけ」というと、西沢は「干しとる。が、海

の湿気のほうが強い。身体のほうを慣らせ」とのたまっ  
た。それから真夜中までしめり蒲団の上で話し込んだ。  
それ以来十年に一度くらいずつ、わたくしは戸田に立ち  
寄ってきた。だんだん戸田寮も湾も小さくなって行くよ  
うな気がするのは、世間の文物が大型化してきたからで  
あろう。戸田集落も開発されてきて貪婪でなくなってい  
くのはよいが、どうも以前のように人間と自然の調和が  
造り出していた品位というか、何にかがガタ落ちになっ  
て行くのはうれしくない。さて、これをやり直すような  
新文明はないものか。  
(昭18文卒・陸上)

## 太平洋戦争突入前後の戸田寮

大場 和夫

昭和十六年、七年頃の戸田寮の歴史を書くに際して  
は、第二次世界大戦はどうしても避けて通るわけにはゆ  
かない。それは、日華事変が泥沼化してゆく中で、やが  
ては世界の大国を相手にして戦争に突入せざるを得ない  
状況に追い込まれた軍部が、非常時態勢の名の下に軍人  
が文部大臣、首相、と政治の実権を握って行った。それ  
までは、大学に対しては比較的ゆるやかだった軍部の圧

力が次第に力を増し、軍事教練の強化、大学修業年限の  
短縮から、やがては学徒出陣に至る悲劇の歴史を大学  
が、従ってそこに学ぶ学生達が、そして学生生活に連な  
る戸田寮の開寮そのものが直接影響を受けざるを得ない  
状況であったからである。

昭和十五年、私が入学した年は、戸田寮は平常通り水  
泳部、ボート部の部員を中心にした運営委員によって夏

期特別開察が行われた。そして戸田の美しさのとりこになった私は、十六年積極的に委員となり、夏前に開察準備を終え、予定通り七月一日の開察につきつけたのであったが、その直後、文部省から物見遊山的な海山寮の開察はまかりならんという、寮閉鎖の通達が出された。(当時、私は学生であったのでどのような形の通達が来たのかは知る由もなかったが、あとで関係者の話をきくと、そのような話であった。) もちろん、その背後には軍部の圧力があつたことは想像に難くない。

やむを得ず、私達委員だけが、食糧、物資等を管理するという名目で一夏を戸田で暮したが、おかげでむしろ非常にのんびりした夏休みが送れたと感謝している。

浦島太郎のような一夏を過して帰京してみると、日本の非常態勢は一段と厳しくなっており、十二月には真珠湾奇襲、米、英に対する宣戦布告、そして、大学に対しては翌年三月卒業予定が三ヶ月繰り上げられ、十二月三十一日卒業という変則事態が始まったのである。

翌十七年一月から運動会総務となった我々は、十六年の閉察の愚を再び繰り返してはならないと策をめぐらし、当時デンマーク式体操をとり入れて海軍体操の指導に当たっていた斎藤氏に師事し、「東大鍛練体操」を全学

生に行わせることにし、東大の配属将校と交渉した結果、教練の実技の時間に全学生を上平身裸にして、鍛練体操を実施することに成功した。

この実績をもとに戸田の夏の開察は、東大生に体操と水泳を通じて体を鍛えるという名分をたてて、開察にこぎつけたわけである。

かくて、厳しい戦時体制下にもかかわらず戸田を訪れた学生達は都会の息苦しい雰囲気から解放され、美しい緑と海に囲まれて、あるいは短くあるかも知れない青春の幾日かを楽しく過し得たのであった。

しかし、緒戦の華々しい戦果にもかかわらず物量に絶対的な差のある日本がこの戦争に勝てる筈もなく、時日の経過とともに戦局は徐々に不利に傾くにつれ、学生達を一日も早く戦場に送るという軍部の圧力が増大し、九月早々帰京した我々を待っていたものは、さらに卒業期を短縮して九月三十日には卒業するという事態となり、東大の卒業式には、時の首相東条英機が祝辞を述べるということになつたのであった。

そして、その夏、我々と一緒に過した中の幾人かは、そのまま遠く南海の海底に、ジャングルの中に永久に還らぬ人となつたのである。

(昭17法卒・水泳)

## 「草の花」より抜粋

福永武彦

H村は伊豆西海岸の小さな漁村だ。細長い岬と荒れ果てた断崖とに入口を扼され、漣波に浮んだ油の汚点がひとりだけで伸び縮みしながらひろがって行くものうい内海。昼は、港の奥の船着場を中心に、火の見櫓、小学校、村役場、二軒の旅人宿、郵便局、それに海岸沿いの背の低い漁師の屋根屋根が左右に開け、赤茶けた断崖の麓には、徳川末期の造船所の名残である頰れかけた建物と、竜骨ばかりの木造船の船体とが、ひっそりと内海に影を落している。夜になれば、船の航跡に、棧橋の脚柱に、渚の打ち上げられた海藻に、夜光虫が銀色にきらめく。

昭和時代 (終戦まで)

僕はもうここ二十年あまりH村を訪れたことはない。が、当時のさびれた漁村は、恐らくは今も、怠惰に、無為に、海岸線のほとりにまどろんでいることだろう。沼津からポンポンと呼ばれる発動機船で通うか、修善寺から五里の山道を遠慮越で来るか、交通も不便なら、格別旅人を誘う名所旧蹟があるわけでもない。ただ夏だけ

は、岬の大学寮が学生達を集めて、男ばかりの賑かな水泳場と化する。内海の漣波に和船の櫓の跡がゆるい波紋をえがき、飛込台から赤い禪が次々とひるがえる。村で唯一軒の菓子屋秋月の店先では、大学生がまずそうに饅頭などを食っている。しかし夏が過ぎてしまえば、蓬髪の子供達が、秋風の冷たい防波堤を我物顔に裸足で歩いているばかり。冬ともなれば、村は一層しんとする……。

昼食のドラが鳴り渡った。

午前の立たてが終つてから、思い思いに碁や、カラムや、読書や、お喋りなどに耽っていた連中が、一斉に思い切りよく立ち上り、食堂に駆けつけた。半日に二十本の弓は程よい運動だったし、空気は塩辛くオゾンに富んでいた。育ち盛りの年頃にとつて、この食慾を妨げるものは何もしなかった。

食堂の中では、先輩も部員も入り乱れて横に細長い食

卓に席を占めた。しかし先を争うほどの御馳走が嘗て一度も出たためしはない。朝はきまつて若布わかふの味噌汁、昼は油揚げとひじきの煮附、晩はたいいて煮肴で、たまにはブリの刺身が出て、ぶった切りの切身の横に食えもし

## 創始から隆盛へ

茨木中のデビューと戸田開場の日

此頃外に調べる事があって明治初年頃の水泳を探している内に、本学水泳部の創始の事に偶然ぶつかった。明治十七年というから随分古い話だ。大川の両国橋と新大橋の間が当時の水泳のセンターであって、いわゆる浜町河岸水泳小屋の賑わいを呈したのであるが、その頃はまだ浜町河岸の対岸の方に中州があってそこに帝大の水泳部が初めて置かれ、同時に学習院と幼年学校の水泳場が出来、水泳するには浜町河岸から船で渡ったものであるという。しかしこの頃は第二回の岸先生のお話にもある通り東京大学の時代で一高の前身である同校の予備門も一緒であった時代であるから、この大学水泳部の誕生は明治二十七年に開設された一高水泳部にとっても強い影響があったと見てよいのかも知れぬ。これ等の事に関

ない海藻が山ほど盛ってあった。僕等ではんでに悪口を言い、持参の缶詰をそこで明けて、喋った分だけ余計にお櫃を空にした。（著者の御好意により転載）

## 松沢一鶴

しては又その頃のお話を伺いたいと思う。

その後大学の水泳部は吾妻橋の上流の中州に移り、再転して逗子に行った。これが明治二十年頃であるらしいが、僕にはまだ年代がはっきり分らない。その後何事かの事情で数年中絶していた所、当時の学生であった栗林己巳蔵、大島次郎、篠田治策の三氏が現在の戸田を発見してここに転転して以来今日に及んでいる訳である。

中古から徳川数代にかけて武術、即我國の水軍の術として発達して来た水泳術は当然軍機の秘密として一子相伝の流派ともなった訳だが、その頃までは武士階級に独占されていた事は論を待たぬ。明治維新と共に水泳もまた大衆に開放されるに至ったが、東京でいえば浜町河岸

に水泳道場が出来たのが、早いので明治四年、漸く二三軒出来てやや盛んになりだしたのが明治十一年以後の事であるから本学が水泳場を作った明治十七年などは実に早いものであったといわねばならぬ。所が学校水泳部設置の濫觴でその後学校設備の基準になつていた本学が、水泳部もまた他のよりも一層後進に対する指導を与えたのであったろう事は想像に難くない所である。しかしその後、戸田に移転してからは本学としては安住の地を得たかも知れぬが、後進開発という方面はその後房州の一高や高師の方がアクティヴであつたようだ。

大正の初年代は競技界全体は元より、ことに水上競技においては組織が出来ておらず、各地の競技会も独立して勝手に行い、まるで戦国時代の様な感があつた。この時、大正六年を期して戸田に水泳部が開設されてより二十週年の記念として、戸田で全国競泳大会の第一回を催した。この大会は戸田がかなり僻遠の地であるにもかかわらず当時の競技界において全日本選手権大会や、関西・浜名の全国大会と共に相当重んぜられた会となり、数年間続いたのである。大正十年に至り全国学生水上競技連盟が組織され、続いて大正十三年に日本水上競技連盟が創立され水上競技界も統一される様になり、本学水泳

部もその分に応じて帝国大学及高校水上競技連盟等の組織をなし、続いて水泳界に貢献している次第である。

こうして大学の水泳部が設置されてから約五十年の歴史があるのであるが、僕が語る資格がある部分は終わりの十五、六年の所である。けれどもこの僅かな間であるが、御話しすべきことはいくつもある。

大正六年に戸田の水泳部で全国競泳大会を開催したことは、静かな刺激のない戸田の海で昔の水泳術をやつたのんびりしていた本学水泳部としては、確かに画期的大事業であつた。この第一回の大会に僕は中学生として参加した。正式の選手としては僕にとつてもデビューであつた。今と同じ様に戸田に行くのには沼津からポンポン汽船に乗る。ところがレースに参加すべき選手を沢山のせた船も、南風が強くなって、とにかく沼津を出わしたものの、ついに大瀬崎あたりへ避難しなくてはならなくなった。明日になつても風が静かになる見込みはないというので、だるま山を越えて歩いて戸田に行こうという事になつて僕等もその一行に加わる事になったが、ここに内田正練君と斎藤兼吉君がいた事を今でもはっきり思い出す事が出来る。当時のナンバーワンで、その年の五日に

芝浦で行なわれた第三回の極東の覇者達。その時の勇姿は僕もあの芝浦の堀割で目の当り見たのだ。

その時初めて造られたターニング台が、戸田村から船に積まれてモーターで引かれてくるのを見て大学はさすがにえらい事をやるなあと感じた印象や、ピストルの弾が何発打っても不発でつひに湯殿の真ちゆうの金だらひをたたいて出発合図にした事等を思いだす事が出来る。景気づけるのに水雷艇を呼んだ事も大学らしいやり方であった。この頃の内田君の百メートルが五十何秒、決勝で一着の斎藤君が五十二秒という発表であった。今なら世界記録で騒ぐ所だが、当時はその様な事には無関心だった。もちろん距離と時計が不正確だったのはいふまでもない事である。

当時、もっとも信頼すべき極東大会における百ヤードが斎藤君の一分五秒〇、メートルに直して十一、二秒であったのだ。又この大会から小野田一雄君が一マイルに出場して四等に入っている。この一マイルのコースはオーブンで戸田湾内を三角形に一周するのであるが、距離の測定には水雷艇から航海中に船足を測る機械をかりて、モーターボートで海を引張り回し、コーナーのブイをいれたり、ゴールは脚立と向こうの石垣との見通しとかが

ふ様であった。

その翌年の大会にも僕はまだ中学生であったが、一高水泳部に行っていたためにその所属であればよいという理由で、大学生と共に一高チームに加わって出場し優勝旗を獲て喜んだ。ところでこの喜びも束の間で、その次の年に(大正八年)戸田に一高チームとして遠征し前年の覇者として大いに得意になっていると茨木中学のチームが来たといふ。小さな中学生の団で多寡をくくっているところの連中に大の高校生のチームがペチャンコにやっつけられ、優勝旗をもって行かれて終わった。

このチームが入谷唯一郎、石田恒春の諸君を含んでいて、当時水泳界の元締を自認していた一高・高師・房中などといふ房州系統のチームが前に述べた煙管泳ぎの研究などをやっている内に四百米位までの自由型全部をクロールで泳いで、小さな身体で堂々と優勝し皆をあ然とさせた。そこで一高の連中が初めて監督の杉本さんから、生徒が自校々庭にプールを掘って数年来泳いでいる事や「芝浦の極東大会以来競泳に志しましたがこんなによい成績を得ようとは」といふ様な話を聞いて感心してしまつたのである。

茨木中の競泳界に対するテレビューとしては大成功であり、後年の輝かしい成績の第一歩であったが、これが水泳界に投じた波乱は、第一にクロール泳法の革命であり、第二にプールの必要・水泳競技場革新の機運を作つ

たことである。これが僅か十二年やそこら前の出来事とは思えぬ位遠い事の様に見える。戸田水泳大会も、近代競泳史に寄与した本源の貢献の一つとして紹介した次第である。(帝大新聞 大正七年三月七日付より)

## 夏の聖地

夏!! 照り輝く夏の陽の下、せめて夏だけは悠久の大自然の懷に飛込んで、身心を洗い清めたいものだ。伊豆半島の西海岸を、千本松原と富嶽を背に、駿河湾の荒浪を乗切つて南に下ること一時間半、船は戸田湾に入る。伊豆特有の断崖が絶壁をなして濃藍の夏の海に影を宿す所、茫として千本松原と富士が波に煙る所、其処に例へば太古以来の静寂をたたへた湖の如くにソト静まり返つた戸田湾がある。そして此処、御浜の松林中に吾々の誇り「大学生の別荘」がある。

大学へ来て戸田を知らない気の毒な人が如何に多い事か。豊かな自然の恩恵と充分な設備とによつて吾等の「聖地」戸田は炎暑と俗塵とを離れて清純な山水を慕う者に大きな満足と喜びとを与えてくれる。本郷通りの喧騒と塵埃を去つて懐しい大自然に心ゆくばかり抱かれて夏と水を楽しむのは戸田に於てこそ可能であらう。

山中は高原の寮、谷川は温泉の寮、そして御浜は伊豆の海の

夏の「聖地」だ。美しい静かな水、老鶯の鳴く松林、夜光虫の浜辺、戸田の風景は理屈抜きだ。

「巴の海」と名付ける湾内の静けさ、小波一つ立たぬ深碧、南から北に伸びた巴の腕の寮の屋根も見えぬ迄に生い立つ老松の森が、吾等を持つ。

此の美しい水に吾等は身を任せる。小波の影が、水底に揺らげば、小魚が光り海草が動く。透明な碧緑の水に吾等はまず驚く。戸田湾の朝は富士から明ける。

泳ぎに飽きたらアカブレインだ。モーターが引く豪快な浪を縫つてスピードとカーブに涼味万斛。或はカヌーを操つて黒鯛釣り、或は夕風の鏡の海にスカールを漕ぐ快味。外洋の波濤寄せる岩間を潜る蝶螺取り、あわび採りにタコ突き等々到底忘れ得ぬ喜びだ。

夜は涼風を受けて老松の蔭に、月明の海浜に、黒鯛のサシミにビールを満をひく。

食堂のビールに飽いたら夕方方村に行く。毎晩定時にモーターが出る。月がいいならギーギー櫓を押ししてもよい。村には名物「春木屋」の家鴨料理がある。下戸ならば「秋月堂」や「朝日堂」がある。迎えのモーターがゆっくり、吾等を待ってくれる。星の降る様な夜、寮に潮風が渡って、波音もなく眠る。「巴の海」を行けば、湾口には漁火点々として芙蓉の峰が、夢の様に浮ぶ。遠く灯台の灯が明滅し、寮の窓もやがて一つ一つ閉じられていく。海の寮、御浜の一日がこれで終わる。

吾々はまた、寮の行事にも御浜生活の懐しさを見出すことが出来る。水泳の出来る人も出来ない人も欺されたと思って戸田へやって来給え。着のみ着のままよい。代は見えてのお帰りで、行く事には遠足会、室内遊戯大会、野球大会等々運動用具なら何でもある。泳ぎの出来る人なら遠泳で紺碧の波間に海上ハイキングするもよし、競泳会のメダル稼ぎも夏の日の思い出の一つ。ダイビング、ウォーターポロ或は古代の神伝流、水府流、の日本泳法に夫々のコーチを受けて「水は悟道の母」とか悟るもよからう。

村の漁師を備って鮔漁に出かけ、波荒い外洋の豪快さに海賊まがいの彼等の心胆に学ぶも一興。八月になれば水上大会と園遊会とがある。当日は近郷近在の年に一度の大祭日にも比すべく、吾等の寮を中心に終日珍客に賑わう。今では静岡県の名物否、誇りともなつて戸田の湾内は観覧船で充される。

今試みに寮の設備を述べるなら敷地二万坪、六棟二十六室の宏壮さ。そこには図書室、食堂、事務室、浴場、医務室、娯楽室があり、而も本学官繕課苦心の設計なる滄海楼の改築によつ

て吾等の御浜寮は面目一新して誇るに足るべき夏の別荘となった。娯楽室の如き、ラジオ、ピンポン、囲碁、将棋、トランプ、麻雀、カルタに至るまで吾々のために備えられている。晴れた日でも雨の日でも、愉快に暮せる不思議な所だ。

サア、行こう戸田の海へ!!

本郷通りの強烈な刺激は剛健な神経をさえ変調にする。暫く都廳を離れて戸田の海に行こう。新しい人等は先ず、来て給え。

戸田を知る人等は今年もまた来給え。そしてアト僅かな学生生活を愛しむ人等は欺されたと思って訪ね給え。

世界中の何処の大学寮にもない巴の海の風光と「吾等の別荘」の完全な設備とが、必ず、吾々をして夏が来れば、戸田をたまらなく懐しくさせるであらう。夏の寮のカレッジライフの思い出は吾々を必ず後悔させないだろう。

夏!! 懐しい自然に心ゆくばかり抱かれて暮す時が来た。

巴の海の静かに澄んだ美しい水が今年も吾々を待っている。

(昭和九年度運動会報(第一号)より)

## 戸田寮の園遊会

今夏移転を了した戸田海岸東京帝大戸田寮は、長汀白浦四万坪を相して同大学官繕課苦心の設計によって建設されたものだけあり設備の完全他に比を見ないものが、八月六日午前十時から朝野の關係諸名士を招待して

## 大坪事件

△夏海変色▽

娘の胸に波たたず学士さまの卵排撃

東大水泳合宿を戸田でお断り

夏海に捲き起された異変——東京帝大水泳部では、毎夏伊豆西海岸にある白砂青松の戸田村御浜に赴き、今年も去る五日から宮下監督以下部員八十余名が合宿して練習を続けているが、最近、突然戸田村から帝大水泳部に来年から本村に来ることをお断りすると強硬に抗議して来た。

理由は、村の静穏をみだし、娘達を仲に青年団の反対がある

園遊会及び水上大会を開催する事となった。現在寮にいるもの八十人。博士も学生も一諸になつての男世帯で赤裸の夏を満喫している。

(帝大新聞 昭和八年七月二十三日付より)

からという。大学の合宿がはじまると、その雑用には村の若い娘さん達を臨時の女中さんに雇ふことになつてあるが、流石に若い娘さん、東京の大学生さん見たさにワンスワンサと女中志願をして、村の青年達を振りむきもしない。それも毎年なことなので怒り心頭に発した青年達、我々の存在が無視される罪は帝大の合宿に根元あり、さてこそ合宿所退去の抗議に及んだわけである。

合宿所は、大正二年から五十カ年間の契約で合宿敷地五町二反歩を無償で村から帝大に貸与する契約があり、帝大でも昨年合宿所を改築しているので寝耳に水のこの抗議に驚き何とかお

手柔らかに調停しようとい河童連中奔走中とある。  
尚、帝大学生部では未だ戸田村から何等の通知がなく、大した問題にならぬでしようと思観している。  
(時事新報 昭和九年八月十八日付より)

## 昭和九年の事件に関する寮日誌の記述

八月十三日

本日夜、本日付静岡日報ニ、静岡新報ニ戸田水泳部ニ関スルケシカラヌ記事アルコトヲ、順チャンヨリ報告ニテ知り、取締一同大イニフンガイス。

ソノ記事ヲ大略シルセバ、

「帝大水泳部の移転を要望。」

純朴な漁村の風紀を紊すと  
地元戸田村当局で」

トイフ標題ノ下ニ、現在県下各地ノ海水浴場ニテ、不良学生ノ風紀紊乱ガ多ク、タメニ警察当局デモ注意スル折柄、戸田村御浜海岸ニ於イテ帝大水泳部ガ合宿中ナルモ、ソレガ宮下学生監督以下八十余名ガ教師ノ監督不十分ナルヲ奇貨トシテ、連日連夜ノ如ク土地ノ料亭、旅館等ニ入りビタリ、飲酒乱行ヲナシ学生ニアルマジキ醜行ヲ演ジ、一例ニテモ数日前、春木屋ニテ一学生ガ醜行ヲ演ジタルヲ青年団ノ一人ガトメタ所、多勢デカカッテナグツタ云々、トカキ、ソノタメ村当局トシテモ、ステテオカレズ、学校当局ニコレデハ質朴ナル漁村ノ風紀上面白カラズシテ抗議ヲ提出シ、村の発展ノタメニ強硬ニ水泳部移転ヲ

掃スル事トナツタ、云々。

トノ大略。以上ノ如キ記事ノノセラレテアルヲ発見シタ。丁度、宮下、原田ハ帰京中ナルタメ、牧野、藤原ニテ早速、村当局ニ対シテカカル事アルカラキキダシ、静岡新報ニ対シ、嚴重ナル抗議取消シヲ要求セシト決ス。又、ソノ記事ノ出所ヲ考ヘテ見ルニ、何レノ点ヨリスルモ前二問題アリシ。村ノ農会技術員大坪某ノ仕業ナラントノ意見有力デアッタ。ソコデ翌日、村長及ビ大坪某ヲ詰問スルニ決ス。

八月十四日

本日昼頃、大坪某ガ話ニ来テクレト取締ニ伝ヘテクレトノコトアリ。ソコデ、藤原、牧野、小出三人ト原トヲ加ヘ四人夕方ヨリ村ニ行ク。村長ヲ訪問シタルニ、宴会トカデ不在ナリ。故ニ大坪某ノ下宿ニ行ク。結局彼ノ云所ハ、ソノ記事ハ自分ノ全然知ラヌ事デアリ、又、ソノタメニ寮生ニ悪感情ヲ持タレルハ、自分トシテ甚ダ困ル様、オ話しテオキタイト思フト云フ。ソレデ、彼自身ガ出シタモノデナイナラバ、ソレ相当ノ反証ヲアゲヨトイフニ、ソレモ出キヌトイヒ、結局何レノコトヤラワカラズニ取締一同引き上グ。

八月十五日

コノ日、小出、藤井帰京セルタメ、牧野、藤原ノ二名デアッタガ、村長宅ヲ訪ネタリ。村長ハ又モヤ宴会ニテ不在ノタメ、常盤屋ニ行キテ呼ビ出シ、村長宅ニテ村長田丸氏ニ会フ。一応コノ記事ニ対シテ村当局ノ意向ヲキキタシテ、牧野、藤原ニテ詰問ス。

村長曰ク、私は「日日新聞」シカトツテイナイノデ知ラナカ

ツタガ、昨日村役場ノ一人ガソノヤウナ話ヲシテイルノデ初メテ知ツタ次第デアルト。ソシテ実際ニ移転ヲ要望シ、学校当局ニ抗議シタル事実アリヤト問ヒシニ、絶対ニカカル事ナシト明言セリ。ヨツテコレハ静岡新報ニ対シ、嚴重ニ取消シヲ要求スベキデアルガ故ニ、村当局ヨリ申シ込マレタシトイフニ、村長ハ早速明日ソノ旨取りハカラフ旨、コレ又約言セリ。

ヨツテ、コレデ満足スベキデアルトシテ、ソレヨリ小川氏ヲ訪問ス。小川氏モコノ記事ニハ全然気付カザリシトイヒ、切抜キヲ見セルニ、大憤慨シテ村長及ビ村当局ヲ大イニノシル。村当局ハ水泳部ヲココニ設置スルニ至ツタ事情ヲ知ラズシテ、今ニナツテカク如キ事ヲ云ヒ出スハ、実ニ恩知ラズナリト極言シ、又、我々水泳部ノモノガ云ツテ話ヲスル迄ソノママニシテ置クハ、全ク村当局モ移転ヲ望ムモノトミナシ得ベシトイフ。

コレハ一応モットモノ事ナレドモ、現在ノ村ノ状勢トシテ、村長一派及ビ小川氏一派トノ対立關係カラ、小川氏一派ガ何レノ事ニモセヨ村長一派ノ事ニ関シ、大学ニ中傷セントシテイル事ハ明ラカデアルガ故ニ、全部ソノマ信マズル事ハ危険ナリ。

八月十六日

晩、村長宅ヲ訪問セルニ不在ナリ。故ニ春木屋ニ行キ、折柄ノ宴会最中ナリシ村長ヲ呼ビ出シ、取り消シヲ新聞社ニ出シタカ否カラ確メ、又春木屋先生ニソノ記事ニ関シテ事実無根ナリトノ言質ヲ得タリ。

本日ハ丁度旧ノボンノ事トテ村ノカツオ船ノ者ガ多勢居リ、トカク大学水泳部ニ対シ、喧嘩ヲ亮ラントスル如キ口吻ヲモラ

シ、大見得ヲ切ツテ居ルモアリ。今年ハ村ノカツヲ船モ景気ヨク、コトニボンノタメニ一杯呑ンデイルモノガ多クタタメモ有ルベシト考ヘラル。ガシカシ昔ト違ヒ、村ノ青年ノ大学ニ対スル空気ノ險悪サハ事実ナリ。警戒ヲ要ス。

八月二十三日

午前中、取締一同ニテ先日來ノ新聞記事ニ関シテノ村及ビ水泳部、共同声明書ヲ起草ス。タニハ村長ヲ始メトシテ村役場吏員九名及ビ巡查、軍人分會長、消防組頭、青年団長ヲ招待シテ、貴賓館ニテ晩サン会ヲ開ク。村ノ主ダチタル人モ大坪輩ニ好感ヲ持タザルコトヲ表明セリ。又、声明書ニ署名シテ貰ヒ、コレヲ明日印刷ニ附シテ先輩ニモ送ル予定デアル。

八月二十四日

朝、戸田村巡查ガ大仁署ニ行クトイフノデ声明書ノウツシヲ一通渡セリ。

昭和時代(戦後から現在)

## 終戦時の戸田

終戦の年は静かな戸田にも戦争の荒波がはげしく押し寄せ、寮は初め海軍水路部の徴用をうけ、のちには少年飛行兵の一団が特殊潜航艇の基地をつくりやっつけて来た。艦載機の空襲は大浦につないであつた漁船まで狙つて、機銃掃射と小型爆弾の投下をうけ、死者一名の被害まで出た。終戦になって老人と女子供ばかりの村にボツボツ男達が戻って来たが、食糧の不足と停電は村をいつ

までも暗い表情にとどめた。村人は山の木を伐つては汐をたき、沼津に運んでは米に換えて飢えをしのいだので、海辺の山々はみな裸になつてしまつた。

寮は少年兵達が引き上げたあとは当時の管理人の稲木さんの姪の青木くにとさんの若夫婦が入つて住みつき、二十二年から青木信博さんが正式に管理人に任命された。

## 戸田寮再開

### 牧野亥之助

昭和時代（戦後から現在）

戦後の戸田寮再開について思い出すままに記してみます。終戦の年の冬頃には各運動部も大体再建されたと思ひます。二十年の十月頃にはすでに運動会の総務部を中心として、検見川の農場（今の運動場）に表まきに行つたことを覚えています。戸田寮が再開されたのは二十一年です。先の戸田寮の集いで衣笠恵士君が言いましたよ

うに二十一年四月下旬に水泳部の連中五名（勝村、衣笠、瀬田靖、須崎、牧野）で下検分かたがた戸田に行きました。村長さんにも漁業組合にもあいさつをして参りましたが、戦時中海軍が使つていたとかで電話などもメチャメチャになっておりました。当時は寮の前の海岸は石垣でなく砂浜でしたが、丁度イルカが二千頭近くと

れ、前の砂浜がイルカでうずまり壮観であったことを覚えていますが。とにかく寮の荒れた状況は運動会に報告しておきました。

その後可能な限りの修理をし、何としても寮の再開だけはしたいということで、七月の休みになるとすぐ、恐らく七月二十日頃であったろうと思いますが、寮を開いたわけです。最初に委員として行ったのはボート部の東洋君、小笠原君(兄の方)、牧野で、それに運動会の桐生さん(現在山梨大学)が一緒でした。まず寮を開く準備をするわけで、掃除をしてそれからふとん運びが大変であったことを覚えていますが。戸田村の稲木さんが村のかなり山よりのほうに全部疎開しているとのこと、艇庫から和船を出して村の棧橋につけ、ふとんを山のように積みこみ、寮を持って帰りました。ただフトンは非常によく干してあってすぐに使えるようになっていました。当時は全て自炊でした。とにかく米もない時で、メ



リケン粉と飯盒ぐらいは持って行きました。ただ魚だけは安く豊富でした。戸田に行って翌日からの開設の準備をし終わった後、とんだハブ

ニングがありました。桐生さんが突然、胃痙攣で転げ廻わって苦しみ出したことです。とにかく二十貫もの巨体をおさえようがありません。また医者を探してつれてこなければなりません。一人が看護していて、二人が和船で医者を迎えに行ったのです。

翌日は寮の再開ですが、寮生は五人くらいであったと記憶しています。本郷に掲示は出しても、寮に来るゆとりなどない時でした。そして当時の学生課長であった加藤さん、松浦さんも見え、形ばかりの再開式をしました。最初の寮委員は一週間くらいおりました。そして次の寮委員である中村賢二君や瀬田靖夫君などに引きついでわけです。

当時は女人禁制でした。このことは戸田の集いの時に衣笠君が話したとおります。私はこの年の春から栄養不良で運動ばかりしていたため病気となり、一年半ほど休み、戸田にも四、五年は行きませんでした。その後行った時は寮の盛況に驚きました。

以上簡単ですが戦後の再開当時のことを述べました。

(昭24法卒・水泳部)

## 戸田寮再開当時の入寮の思い出

松橋 直

終戦の年昭和二十年は飢饉、伝染病、インフレのうちに暮れ、あけた昭和二十一年にはその脅威は増すばかりであった。そして、小生も発疹チフスに罹患、駒込病院で死線をさまよう。高熱が三、四週間もつづいたお蔭で記憶喪失。浮世離れして退院するともう初夏であった。学友の一人が銀座の並木通りで金魚売りをしている。別の学生は大実業家(?)になり、戦前の本郷三町目角の明治製菓ビルを買うとか買わないとか、こういった噂話が外食券食堂の雑炊の順番を待つ学生達の間を流れる。そんなある時、「戸田寮には海軍がいた頃の隠匿米が大分あるらしい。あそこに行く時は米を持ってゆかなくても現地で何とかなるぞ」と誰かがどこからか仕入れたニュースを流す。話はすぐまとまった。といっても、戸田寮の総務の方々の寄稿にもあるようにこれはまったくのデマ。

窓から出入りする東海道線に半日ゆられて沼津港にたどりつき、木造船に乗ったような気がする。まだ機雷が

あるぞとおどす者もいた。しかし青海原は青く広く、沿岸の山々の緑は目にしみるばかりであった。戸田の湾に船が入る。海草が三、四年前とおなじように海底にたなびいている。戸田寮は御浜の松林にひそんでいる。村のたえずまはる戦争中と変わりない。恐らく明治の頃の姿と同じなのであろう。

戸田寮には数人の学生がいた。今から思えば寮委員なのだろう。瀬田修平先生の御息もいた。寮につけばまぐさ飯だ。ところが、食事は持参の食料で自炊しろという。話は大部ちがう。しかし、さもしい素振りにはできない。同行の学友が持参した米を炊くことになったが、ガスはない。松林から雑木を集めて飯盒炊きさん。誰かが釣った魚を焼く。海水で塩味をつける。

こんな状態では一週間滞在の予定も数日で引き上げることに話がまとまる。月の美しい夜であった。和舟の櫓先に夜光虫が光る。泳ぐ学友も海に光り、躍る。海から仰ぐ山々は高く、黒く湾に迫ってくる。友人達との話は

また一転、なんとか食いのばして、できるだけ長くいうという事になった。

夜明けとともに聞こえる浜の人の声。地引網だった。新鮮な魚料理になることはいうまでもない。

富士の眺めは外洋の和舟からは特によい。泳ぎながらの眺めは格別である。黒潮の流れに注意しろという注意さえ守ればよい。

泳ぎ疲れると昼寝、トランプ、清談。医学部の学生の清談になかなか人気があった。時には達磨山ハイキング。日が暮れる頃、電灯から電気をとり、パンを焼く。自製のパン焼器を持ってきた者がいる。電気オーバー。停電。工学部の学生が電柱に登って配線工事。こんな生

活は楽しく、一週間ばかり過ごしたように思う。記憶に残るのは自由な生活ばかりであるが、寮委員の側からはいろいろ入寮規則があったのかも知れない。また、戦後復興以前の話であるから時代の世相を反映して、なんの規則もなかったのかもわからない。しかし、まだ残っていた帝国大学生という誇りが自然に秩序を保っていたのかも知れない。

同行した俳人堀口星眠氏の句が寄せられている筈だ。こうして私は戸田を愛する人間の一人となった。また、妻も子も私にならった。しかし三十年後の今日、戸田寮の委員長になろうとは考えもしないことであった。

（昭21医卒・戸田寮委員長）

## 戦後間もない戸田寮

衣笠恵士

「戦争中接収されていた戸田寮が海軍から返還されたから様子を見てこないか」と学生課からいわれたのは昭和二十一年の五月のことである。

水泳部は終戦一ヶ月後の九月にはやばやと部員の募集

を行ない、当時十五名位にはなっていて、何とか活動を開始したいと思っていた折であった。しかし、ほとんどの部員が栄養失調気味で皮下脂肪など全くないうえに暖房装置がなくなった本郷の地下の室内プールは非常に冷

たく、十分もつかっていると手足の感覚がなくなってしまいう状態であった。

戸田の良さについては先輩からつねづね聞いていたので、「伊豆の海で泳げるぞー」というくらい軽い気持ちで早速行くことにした。

一行は当時部のマネジャーをしていた牧野（現明大教授）、須崎（現焼津病院副院長）、志場（東大第二内科）、松浦（現自治庁事務次官）と小生で、事情のわかっている勝村先輩（勝村建設社長）に同行してもらった。

沼津の駅から焼跡の市街を歩いて波止場にたどりついたあと、東海汽船の甲板にあぐらをかいて、ポンポンとエンジンの振動を気持ちよく体に感じながら富士山の偉容を仰いだり、美しい伊豆の海を眺めていると、平和になつたな〜ということが実感として感じられた。

戸田港に着くと、あらかじめ連絡してあったので、村長はじめ村の人達が大きい出迎えてくれ、そのまま村役場に案内されて盛大な御馳走にありついた。



新鮮な魚貝類を山と出された宴会は当時の我々にとっては夢のような話で、これだけでも戸田の印

象は非常によいものになってしまった。現在の学生の人達には想像できないことと思うが、当時は、五円のサツマ芋の雑炊の盛りつけが神田駅前ではよいという話に付られて、本郷から神田まで歩いて食べに行つた時代であった。戸田でも生質の中を群泳するイワシをみていた牧野君が思わず「うまさうだな〜」とひとりごとをいい、あとあとまで語り草になったくらいであるので、当時のこととなるとどうしても食物の話になってしまうのは仕方がない。

戦争中、戸田に疎開し、そのまま居つてしまった御浜会の大先輩の方にも二、三お会いし、戸田の昔話をお聞きした。この頃、村の人達と御浜寮または東大の学生とのコミュニケーションは今では想像できないくらいよく、私どもの聞いた記憶では戸田村そのものには漁業に必要な砂浜がないため、国から九十九年間の借地となっていた東大の御浜を村が使わせてもらう関係になつたので、相互の関係がうまく行っているとのことであった。

村の人達や東海汽船の人達も、東大の寮があることに好意を示してくれた。例えば東海汽船の舟が戸田湾内に入ると、水泳部員は甲板から海にエスケープしてしま

い、残った者が皆の衣類をまとめ、一人分の船賃をはらうというのをかなりの期間やっていたが、別にとがめられることもなく、見過がれていた。

村の春木屋に泊めてもらい、寮には和船をこいだり湾を半周歩いたりして通った。当時の御浜には東大以外の建物は全くなく、立木も多くこんもりした感じであったし、漁業関係者以外は立入り禁止であったように思う。なにしろ静かな雰囲気であった。戦前からの管理人稲木さんにもお会いしたが、寮は比較的良好状態で保たれており、雨戸がしめられたまま無人であったと記憶している。

滞在中のことで最も強烈に印象に残っているのは、夜光虫がきれいであったこととイルカ漁のすさまじさである。当時の湾内には小さな漁船が岸につながれていただけで、昨今のように大型船舶が多数停泊して海水が油で汚染されるというのではなく、海水そのものがきれいであったが、夜の美しさはまた格別で、月明りの晩など波打ちぎわが夜光虫のために怪しく光っていた情景は戸田を語るとき欠かせないものであろう。

夜光虫で困ることもある。月の明りに誘われて和船をこぎ出し、興にのって生まれた時のままの姿で海に飛び

込んでみたまもの、体を動かすと全身が光って見えてしまい、閉口した人も少なくないと思う。その後、部の合宿では米やメリケン粉を持参して自炊という状況が何年かつづいたが、メリケン粉を海水でこねていると、鍋の中で夜光虫がピカピカと光っていたなど今思えば懐かしい思い出である。

イルカ漁は経済的にあわなくなり、今ではあまり行なわれないが、当時は村の貴重な収入源であり、村をあげての仕事であった。沖でイルカの群を見つけると、二、三日がかりで湾内に誘導し、だんだんと追い手の輪をちぢめ、最後には御浜の砂浜に追い込んでしまうわけである。追いつめられた数百頭のイルカ達が海面上に飛び上がり、互いにぶつかり合ったり、浜を一面に血で染めてあばれたりする状況はまさに壮絶であった。

一昨年、家族と寮を訪れたが、町が発展して大きな建物が多くなり、寮までの道が舗装され、自動車や民宿がやたらに多くなったのには驚かされた。

昔のままの姿で美しくあってほしいと思うのは贅言な話であるが、寮も新たに改築される計画もあることだし、いつまでも美しく楽しい戸田の御浜であってほしいと祈っている。

(昭23 医卒・水泳)

## 戸田の思い出

加藤 橘夫

終戦直後の戸田寮には、数々の思い出がある。その中で現在まで心の中に強く残っているものを述べてみよう。

戸田について最も大きな出来事は、戸田寮を村役場が接収しようとしたことである。元来、戸田寮は御浜の岬の大半を村当局から九十九年間の契約で借りて建てたものである。この契約は明治の終わり頃につくられたもので、終戦当時の計算で、まだ五、六十年ほどの期間が残っていた。それは、村当局にとっては永久借用のように思われていたようである。

戦後の改革の中で大きなものは農地の解放である。地主は国の命令で所有地を手ばなさなければならなくなつた。おそらくこの施策によって、戸田の土地を村に返せという考えがおこったものと思われる。こうした基本的な考え方にくわえて、具体的な狙いもあった。その一つ



は、寮を接収して村直営の観光旅館にしようということと、また戸田寮の食堂を小学校の体育館に移築しようと考えたことなどである。

村役場は静岡県選出の勝間田国会議員の援助を得て、大学に返還方の交渉をはじめた。私は作戦上、まず後方の援護隊長である勝間田代議士の理解を得ることが大切だと思い、国会に行つて勝間田氏に大学の立場と必要性を述べ了解をとりつけた。その後の交渉は楽になつて、借用土地の一部返還、土地の賃借料の値上げ、村との文化交流などについて新しい契約を結んで、この問題は落着

今にして思えば、終戦後の混乱期にこの戸田寮も社会の波に押し流されようとしたが、幸いに地元の理解によって、あれから三十年間、東京大学の教職員・学生の心をなごやかにさせ、身体の養成に大きな役割を演じてきた。あのすぐれた海、富士をとり込んだすばらしい景観は、今でも訪れる人々に深い感銘を与えているであらう。

以上が戸田寮にまつわるむずかしい話だが、もう一つの思い出は、私にとって限りなくつかしいものである。それは、戸田湾の魚釣りの楽しさである。私の釣りは埼玉県庁勤務時代に始まる。最初はヤマベ釣り、つづいてフナ釣りをへて、ウグイ釣り、埼玉時代を終わ、厚生省勤務時代は海に出て夜の黒ダイ釣りを楽しんだ。爆撃の激しかった時は休んだが、終戦後まず眼をつけたのは戸田の釣りである。

キス釣りから始まった。舟をこぎながら海底をみると、大きなキスがすばやく泳いでいる。これに眼をつけ、沼津で若いそめを買って、まずためしてみた。一時間は約十匹ほどの漁果をあげたが、驚いたのはその大きさである。キスの二十五センチから三十センチ物は、今では釣ることのできない大きさであろう。この時代は漁師も少なく、戸田湾の魚影はきわめて濃かった。

つづいて夜のハブ(あなごの大きいもの)釣りである。長さ一メートル、太さ茶飲み茶碗といったあなごの怪物が、いわしの生き餌を囲んでいる大網の下に、日暮れとともに集まってくる。ハブ釣りは返しのない針で釣るので、勢いよく糸をたぐらなければならぬ。真っ暗な夜の釣りなので、かかってくるのはハブばかりではなく、

海へびもいる。ある夜、釣れたハブは一メートル以上におよぶもので、寮生五十人ほどに一切れずつ副食物としてつけることができたのは愉快だった。

このいわし網の下にはヒラメやフカも集まってくる。それをイワシの生き餌をつけて釣る。私には大きいのは釣れなかったが、漁師には貫目以上のものがかる。

釣りも最後の段階にきて、タイ釣りははじめた。御浜におられる歯医者さんがしろうとの名人で、そこで釣りの仕掛けを教えていただき、小舟を借りて一人で舟を漕ぎながら釣りをやる。相手は魚の王様のタイである。どんな喰い方だろうか、引きはどれほど強いのか、タイ釣りは容易ではない。まず餌になるエビを昼間のうちにとり、舟の生簀のなかに生かしておく。出漁時間は朝の四時、午前三時半には起きなければならぬ。さいわいにタイ釣り第一日に一匹かかってくれた。さすがにタイはすこい引きをする。二十ひろの下からたぐり上げるので時間がかかる。やがて姿が見えはじめた。タイが横になりながら舟の前を大きな円をえがく。そのため海が金色に光り輝くように見えた。網ですくいあげたとき、ほっとした気持は今でも忘れられない。

こうして私はタイ釣りに夢中になり、毎夏、一週間ほ

ど遊びに行くことにした。ある年、五日ほどで真っ黒になった私が、二匹釣れたタイを網にいられて舟から寮に帰ろうとしたとき、学生が「オッサン釣れるかね」と話しかけてきた。漁師と間違えたようで、その仲間が「先生だぞ」と小さな声でたしなめている。私もいよいよ本物になったなど、たいへん愉快になったことを記憶している。

## 水泳部の寮から運動会の寮へ

杉村弘二郎

もう戸田には二十年も御無沙汰している。あのときの風景が今も残っているだろうか。七十歳に近づいて、四十歳台の元気な頃をはるかに思い出すのである。

(昭8文卒・陸上)

昭和二十三年末に総務委員になって、早速に戸田寮の担当をおおせつかり、新任の横山主事の指導のもとに寮の仕事をお手伝いすることになりました。寮委員長のご頼み、瀬田修平先生が学生診療所長を兼務しておられたので、挨拶に行つて女子の入寮に関する御注意をうかがつた



り、常任委員会で各寮の予算(戸田寮が一番多かったのですが、それでも二万円ぐらいだったと思います)をきめたりした

あと、大学事務局会計課と営繕課の人たちのお供をして、はじめて戸田の土を踏みました。当時、東

京・沼津間の三等運賃が一七〇円、沼津駅から港湾のバスが一〇円、港湾から戸田への船が二五円だったと覚えていますが、あるいはもう少し安かったかも知れません。寮宿泊費が一泊百円、食費一日百円、そのほかに米を一食一合ずつ持って行くきまりでした。

夏の開寮期間(七月一日〜八月末日)迄に棧橋を作り雨もりを直し、くさった畳を替え、食器類、サンダルなどを補充してもらって準備完了。

委員の方は五月末に寮委員会を開いて、水泳部とボート部に一人二週間、水泳部二人、ボート部一人、またはその逆で、しかもいっぺんに委員が交代しないようにス

ケジニールをうまく調整してお願ひしたわけです。  
食事は、二十四年は生協の第二食堂にお願ひしましたので、板前の藤沢さんほか四、五名が六月末に乗り込んでやってくれました。

開寮準備のため、横山主事やほかの三人の委員と乗り込んだのが、七月一日だったかと思ひます。村役場や駐在さんへ挨拶し、船小屋から和船をおろして高田造船に持って行って修理してもらい、横山主事が違筆をふるって入寮者心得や日課を書いてはり出しましたが、あいにくの梅雨でお客の入りが悪く、十日すぎまで三十人にもならず、委員は暇をもてあます始末でした。しかし、暑くなると急にふえて八十人を越し、寮祭のときなど百三十人にもなつて、寝るふとんもない始末になりました。

当時の日課は簡単なもので、朝食八―九時、昼食十二―一時、夕食五―六時、就寝十一時というだけでした。まだ戸田は陸の孤島で自動車道はないし、歩いて山越えも大変なことでしたので、委員は朝昼夕の沼津からの船を注意していれば入寮者の受付が間違ひなく出来ました。余談ですが、戸田―沼津間を往復していたのは、にしき丸と順幸丸で、時間表は次の通りでした。

沼津発 九時 戸田発 八時

た。たしかこの船は昭和二十四年で廃船にし、翌年は高田造船所で新しい伝馬を作ってもらったように記録しています。

この伝馬の値段が三万五千円で、平底の安定の悪いオワンボートが七千円だったと思ひます。昭和二十五年は横山主事の活躍で、このほかターニング台六基も作ってもらいましたので、浜のほうはけっこう恰好がついたわけです。

戦前にあつたモーターボートは船小屋に入っていました。が、残念ながらエンジンを戦時中に取り外して持ち去られたらしく使えませんでしたし、スカールも食堂の天井に並べてありましたが、腹がさけていたり金具がなかつたりして、どれも使えませんでした。

昭和二十三年の夏には、伝馬を一人で漕ぎ出して井田

## 港の測量

第二次大戦後まもない昭和二十五年頃だった。新学期はじまって間もなくだったとおぼえている。誰からだか忘れたが、戸田寮の関係で電話がかかってきた。あなた

沼津発 十二時半 戸田発 十二時  
十五時 十五時

所要時間は一時間十五分。おまけにお客さんが来るとわかると、たとえ一人でも待つてくれるし、沼津からの荷物もいろいろあつて、それがとどくまでは出港しないので、戸田に着くのはいつも遅れ気味でした。

開寮の頃はお客さんも少なく、村で下船して歩いて来たり、電話がかかつてきて伝馬で村の棧橋まで迎えに行きました。そのうちお客の数が増えるにつれて、寮まで船が来てくれるようになりました。ただし、干潮のときは全然つきませんので、委員が伝馬を出して迎えに行き、五十米ぐらい沖で止まった船からお客さんをつれてきました。昼の船はいつも多くて、三隻ある伝馬を全部出したこともありました。

朝早く食堂で使う水を村まで汲みに行き、昼の船の迎え、夜の村への通船と委員は伝馬を漕げなくてはつとまりませんので、交代の委員が到着するとすぐ櫓の漕ぎ方の特訓をやりました。しろうとが漕ぐものですから、櫓ベソが減りやすく、櫓綱は切れやすく弱りましたし、一隻よく洩る古船があつて、つないでおくと朝まで水船になつて、船板がプカプカ浮いていたりしまし

の方まで流され、ついに諦めて岸に泳ぎついて歩いて帰つて来たサムライがいて、通りかかった船が無人の伝馬を拾つてきたため大騒ぎになった事件があつた由で、伝馬を外海に漕ぎ出すのは厳禁でしたが、風の日にはボートを漕ぎ出す人もあり、浜番の委員は楽ではありませんでした。

当時、村には坂口組のオート三輪が一台あるだけで、あとは馬力とリヤカーが運搬手段でしたから、自転車と伝馬は貴重な交通手段だったものです。舗装道路などは全然ありませんでしたので、雨が降ると御浜は孤島になつてしまします。どろどろの道に下駄やサンダルをとられ、鼻緒が切れてはだしで帰つて来たことも何回かありました。

(昭26年経卒・陸上)

## 八十島義之助

のいる土木工学科では測量がやれる管で、戸田村から頼みに来ているので、一つ実測に行かないか。とのことであつた。

戸田湾をかかえている戸田村は、裏にすぐ山が控えており、森林はひろがっているが宅地や道路に使える土地が非常にせまい。土地を生み出すにはどうしても湾を埋め立ててゆかなくてはならない。勿論、当今話題となっている鹿島とか水島の臨海工業地帯のような大規模なものではなく、道路一つ分の幅だけとか、甚だつましいものではあるが、今までも少しずつは行なっており、今後どうするか計画をたてる必要が生じた。それには、まず測量をして現在の地形をはっきりさせておかななくてはならないというのである。当今は、測量専門の会社がいくらでもあるから、村長さんが電話一本かければたどころに沢山の会社が集まってくる。しかし、終戦後日も浅い当時としては、それもかなわず、われわれの所に相談を持ちこまれることになったのである。



ちょうど夏休み前後の都合のよい時に取りかかればよいということ。仕事をするとはいくもの風光明媚な海水浴場で暑い日を涼しく送れるということ。しかも東大の施設に緑の深い所ということで、われわれはそれを引受けた。

必要な道具類をまとめて、戸田

寮に乗り込んだのであるが、測量の専門の北村さん、花村さん、などのベテランの他に、今は名誉教授の最上先生、それから同じく武蔵工大の西脇教授も参加していた。

寮で朝食をすませて、半ズボン、ぞうりばきのみでちで湾岸ぞいの道路を歩き、村役場にゆく。そこから一日の日課がはじまり、時に海面に、時に陸地ぞいに、あちらこちらでトランシットなどをのぞきまわっていた。目的が目的なので、戸田湾の水深を測ることも大きな課題であり、何日もチャカを湾内へ漕ぎ出した。

何がはじまったかと村の人達もまわりに集まって来る、こちらも細い袋小路の奥にまでもぐりこむ、というような毎日だったが、水泳の達者な西脇さんなどは、帰りは歩かないで、湾をそのままクロールで泳ぎぬいて寮に戻ることもあった。

作業そのものは二週間位で終わり、あとは図面を仕上げるだけである。たしかその年の暮ごろには村長さんに成果を届けたように覚えている。果してその図面にしたがって戸田村がどう変貌したかはくわしく聞いていないが、今日訪れてみると当時とは海岸がいくらか変わっているから、やはりかなり役に立ったのだろう。

この作業は、今になって見るとおぼろげな記憶しか残っていないのだが、戸田の村中を歩きまわり漕ぎまわっていくつかのことに気がついた。一つは、あの表面は静穏で余り波立ったことのない戸田湾の海底も意外に変化にとんだ地形をしており、一癖も二癖もあるということであった。狭いながらも非常に深いというのは昔からいわれたことで、川の出口などの海底は、あたかもそのまま、川が海の中深くまでのびているような地形を示していた。また、村の正面は海岸に大規模小規模とりまぜた石垣が築かれており、その模様が様々であることから、長年かかって一寸刻みの埋立てがあらちちで行なわれることよって今日の海岸線が形成されたことが判る。狭さに困りぬいた戸田村民の血のにじむ記録がその石垣にしみついているようでもあった。

そしてまた、作業中に接した村長さんをはじめ村民の皆さんの関心と、われわれに示した暖い心くばりも感激した一つであった。このような歴史と風格をもった戸田村のいっかくが選ばれて東大の寮がつくられたことも、先輩はじめ関係各位の先見の明に頭の下がる思いがした。

その後、折にふれて戸田をたずねるが、果して戸田は

変わったのだろうか。時代と共に変わったというべきだろうし、あるいは風光明媚な戸田は昔のままというべきかも知れない。

しかし、伊豆半島の農漁業折半の小さく静かな、そしてひかえ目な村というわたしの第一印象を大いにゆさぶったことがある。それは中島藤七さんのお宅をたずねた時だった。寮と役場のちょうど中間に位置する中島さん宅は戸田湾に臨んでいた。戸田村にとって鉄筋コンクリート住宅のはじめの頃だと思うが、例によって狭い道路に面して、この場所えらびに苦労されたのがうかがわれるが、ゆったりとした客間におおされて驚いた。そこには太平洋をこえたフィリッピンはおろか、アフリカ、アラブ辺りの名産さえ飾られているのである。

戸田湾に浮かぶ漁船は、静かな面影をただよわせているが、これは休息している状態にすぎないのであった。一度湾を出ると太平洋、さらにインド洋などまで足を伸ばし荒波をかくくぐって獅子奮迅の活躍をしているらしい。時折手に入れられたみやげ物が客間を飾ってあったのである。

静かで、浮世の雑事からは離れていると思っていた戸田村が、実は日本の国際的活動の最前線とも縁があった

のである。島国から山国日本の標準的な農漁折半の村、そこで国際的な活動をしている。そのような風光明媚な土地に東大は寮を保持しているのである。

測量に携ったお蔭で、静かな戸田村のせまさへの長年の対応を知らされた思いがし、また、中島さんのお宅で、この静かな戸田村が、小さくはあるけれども実は日本の国際的な活動の一つの門戸であることも知った。要するに風光明媚な静かでこじんまりした村も、一方では日本の縮図であることを知ったと共に村民の皆さんの「くらし」の一端をのぞかせてもいただいたのである。こうしてわたしも、戸田寮だけでなくそのおかれている戸田村への深い親しみの気持ちが根づいて来たといつてよ

## 水死事故

中学のころから父親や先輩たちに、良い所だと聞かされていたので、戸田に行くために東大水泳部に入ったような感じがしていた。しかし、運命は残酷(?)なもの、期待に胸をふくらませて出かけた戸田での、寮委員としての始めての仕事は、二日前に水死した学生の葬式

いだろう。

寮は、もちろん東大と共に、そして戸田村と共に今後にも更に内実をととのえてゆくことが、どんなに楽しいことだろうか。わたしが、この寮が永遠に栄えてゆくことを心から望む一人である。

長い風雪の時代を経て、今日その老朽化した建物は別として寮の内実は健在であり、そこに歴史が生まれてくる。しかしそれぞれの時代にこの寮にかかわりあった人は、寮と共に暮して来たのだが、それは単なる歴史ではなくもっと生々しい個人的体験として体内に血肉として蓄積されており、その重みは、はかり知れない筈である。

(昭16工卒・スケート・運動会理事)

## 丹羽孝忠

のあと始末のために、お寺などに挨拶まわりすることであつた。それでも、騒ぎがおさまった後だから「お前なんか楽なものだ」と、前任者の藤村氏たちから、嫌味をいわれたものだった。もっとも、これ以外のことはすべて満足すべき状態にあつて、楽しい思い出だけで一年の

夏は終わった。

その翌年は、終わりに近い戸田の夏を楽しみたいと思つて、特に頼んで八月中旬の委員にして貰つた。ところが、着任後数日して、教養学部の新入生が、体育訓練というこじややって来た。何でも、三、四日合宿して水泳の練習をすれば、体育の点が良くなるのか、旧制のわれわれには理解できなかったが、とに角、訓練に励んで、そこまでは良かったが、最終日の遠泳の時に、またもや、水死事故がおこってしまった。当日の朝、訓練担当教官だった江橋先輩から、手伝って欲しいといわれていたのだが、何かたまたま村の方に仕事で出かけたついで、何も出来ないでいるうちに、大騒ぎになってしまった。翌日、遺体を網で引き揚げ、家族の到着を待って火葬にしたわけだが、大広間を遺体安置場所にして、関係者以外の出入を禁止したり、火葬場のある山の上までお棺をかついだり、目のまわる忙しさであつた。



こんなわけで、二年続いて不幸があつたので、私の最後の夏は、開寮早々に、おはらいをしようというこじやになった。この時も折悪しく私が委員を勤めていて、寮備

えつけの和船に、お坊さんと、横山さん(現学生部次長)と、献花を乗せて、戸田の湾内を一周する役を仰せつかつてしまった。寮から横山さんに乗せて村に行き、お坊さんと花を積みこんで行動を始めた。藤七丸の下のあたりで船を止めて、お経とお花をあげ、続いて御浜岬の付け根のあたりに移動して、そこで再度お経、お花、最後に湾の入口まで行って、また、お経、お花ということになった。前の二ヶ所は静かな湾内だから良いが、湾の口はただでも流れが早いところだし、下手に外にさまよい出れば、強い南下流で押し流されてしまうところである。成可く湾の内部の方ですませてほしいと思ひながら、顔色をうかがうと、横山さんは、「厄を流すのだから、できるだけ遠くへ出る」という。少しムリして出てみたら、もつと出ると恐しい顔をしてどなる。止むを得ずギリギリの線まで漕ぎ出してやつとお経とお花をすませて戻ろうとしたが、丁度千潮にかかつて来て、仲々湾へ戻れない。横山さんとお坊さんは、「亡くなった人たちが呼んでいるんですよ」と、冗談半分に言つてはいたが、実は必死だった。何とかかかんとかがいたあげく、どうにかお坊さんを村に送り届け、花もなくなつて横山さんと二人で寮に帰り着いた時は、クタクタだった。本

当に冗談ではなく、もう少しで、死んだ人に引きずられてこちらで一連托生、御陀仏になるか、良くいっても和船で南海の果てに漂流するところであった。しかし、この時の供養が効いたのか、その後戸田の寮で、水死事故が起こったという話を聞かないのは、ご同慶の至りである。

## 青春のベール

私の戸田とのつき合いは、昭和二十五年六月二十五日からである。何故、記憶のうすれた三十年近くも前のことを、はっきりと覚えているかという点、それは丁度朝鮮戦争が勃発した日であったからである。



薄暗くなりかけた村の中に点々とついていた灯り、漁村特有の香りとひたひたと寄せてくる波の音、さらにこれらの印象とは全く異質な通りすがりの家のラジオから聞こえてきた朝鮮戦争勃発のニュースなど、遠い記憶の中にそこだけ残っている。その時、東京からの旅行は一

東大生の溺死  
〔三島莞〕 廿七日午後六時頃田方郡戸田村戸田東大御浜寮夏期練成中の、東京都北多摩郡摩三鷹町連雀三六八同校教養学部二年鈴木久男（二二）は、高見師母メートル沖合でケイレンを起こして溺死した。  
（昭和二十五年七月二十九日静岡新聞より）

## 須藤彰司

人だったのか、一緒の人がいたのか全く思い出せないでいる。もしかすると、八十島先生と杉村氏も一緒だったのかも知れない。少なくとも八十島先生とは一緒に写真に写っているのだが。

戸田との本格的なつき合いは、次の年、私が委員となつてからである。寮の運営を考えてみた時、前年委員をしていた谷川寮とは比較にならない位、問題が沢山あることに驚いて、一体やれるのだろうかという不安が、一度に襲ってきたのを覚えている。今振り返ってみると、いろいろな出来事が自分の眼の前を走り去っていったが、ひとつひとつをはっきりと区別して思い出すこと



八十島先生と筆者

ているのに驚かされ、わが家のごとく振舞っているのを見て、寮とはこういうものなのかと考えさせられてしまった。前年の谷川寮はまた何とサッパリしていたことか。  
青木さん夫妻は奥さんが一寸肥られたかなと思う位、それ以外全

くお変わりがない。村の往復には自転車か伝馬船だったのに、数年前、青木さんの運転する自動車で村まで送って頂いた時には、あれから確かに四分の一世紀過ぎてしまったことを感じさせられたものである。

東京のデルタからスカールを戸田へ届けることになったが、トラックへ変な積み方をしたために、横浜ヨットへ持込んで修理したことを覚えている。その後の記憶ははっきりしないが、横浜から戸田へ戻る小さい貨物船で運んだのではなかったか。戸田寮の丁度反対側の処に製氷会社があった。最近行った時に確かめなかったが、委員の諸君が何故か製氷会社に氷を取りに行くのを喜んでいたのであった。一寸色は黒いが若い美人が一人働いていたのである。製氷会社といえば、社長さんは加納さんだった。藤七丸の船おろしの日に招待されて行き、少しばかり飲み過ぎ、騒ぎ過ぎ、ダウンしてしまい、家の前の道で寝ていて（当人の私は覚えていないが、しっかりしていた人の証言による）、目を覚まして家の中に戻りかけると、ふとんが敷いてあって誰か寝ており、周囲に心配そうな人がいた。製氷会社の社長さんが倒れられたのだと人から聞いた。暗くなった周囲と家の中の病人、祭のあとのわびしい雰囲気など、事情は正確にわからな

くなったが、それだけが鮮明である。

教養学部の学生が、水泳中死亡したことがあった。夏のことで、家族の方々の来るのを待てなかったのか、あるいは来られたのか、覚えていないが、伝馬船に棺を積んで私も漕いで村まで運んだことがあった。風下になるために棺からかすかに洩れてくる臭気が、今でも妙によりみがえってることがある。村の山寄りの方の山の傾斜を利用した露天の火葬場でお骨にした。あの時の西尾先生の読経の声が、今でも、チヨロチヨロとのぞかれた赤い焰と一緒に記憶の中で揺れている。

あの頃、寮の仕事を手伝って下さった女性の方々はどうされているだろうか。そういえば、宇井さんという調理師もいた筈だった。順幸丸やしき丸も、私たちを戸



瀬田氏

筆者

杉村氏

松浦氏

(26年秋)

大森氏

田と結びつけてくれた大事な幹線だった。一度、戸田からの帰途、大瀬をこえて少し経ってから、順幸丸のエンジンが突然停まり、かなり長い時間波にただよっていたことがあった。両者とも心なしか、最近は往時の威勢がなくなったように見えるのは思っていたらうか。

水月のご夫妻、大松のおばあちゃん、勝呂村長、佐伯先生、等々、何がどうしてとはつきりはないのであるが、私の戸田の記憶の中に出てくるのである。今でも黒鯛やムツは釣れるのだろうか。加藤元学生課長や横山先輩の自慢話の顔が目には浮かんでくる。

(昭27農・排球部)

## 戸田寮

伊豆西岸、またと求められない好地戸田にある我が寮は年と共に愛用者が増えている。家族づれの海水浴にしても、一度来寮した人々は必ず愛好者となっている。それにこたえるべく今年も、風呂の改築、シャワー、井戸ポンプの増設、網戸の完成、機械船の入手その他長年の希望であった施設の改善を一気にやった。

秋のみかん狩、春のハイキングには伊豆の景色をバツ

## 戸田と私

昭和二十三年の暮に竹腰重丸さんの紹介で東大に奉職した私は、翌二十四年に神田順治さんの跡をうけて戸田寮の担当者となった。学生時代はサッカーの合宿で山中寮には度々行った私は、戸田寮には一度も行ったことがなかったで、これが私と戸田との奇縁の出合いとなった。以来二十有余年、私と戸田との関係は切れることな

## 遠藤郁夫

くに特にダルマ山が好適である。冬には避寒がてら勉強に籠る学生も多い。沼津からの一時間の船旅もまたとなきよきコースであり、戸田の港を訪れた印象は何処に遊んでもなおうすれることがあるまい。俗化せぬその環境は利用せずには惜しい寮である。

(昭和三十一年第十一号運動会報より)

## 横山陽三

く益々深いものとなっている。

当時は新制中学の発足の頃で、適当な校舎がすぐには間に合わなかった村は、勝呂計三村長が全村民の署名を集めて大学を訪れ、当時の南原総長に中学校校舎に使用するため東大寮の明け渡しを陳情するなど、東大と戸田村は過熱気味の時であった。私は新任の挨拶に村に参

り、役場に村長を訪れたが、玄関に近い村長室の中から「なに！ 東大の若い衆が来たよ、待たせておけ」と大きな声がひびいて来たのには些かおどろいた。勝呂村長は村では数少ない士族の出で豪直な性格と古武士のような孤高さは、その後の永いお付き合いの中で理解することができた。晩年は村会議長をされて一昨年亡くなられたが懐しい方であった。勝呂村長はじめ、私は戸田の村長さんには今日まで四名七期に亘って公私ともお付き合いをしている。勝呂さんの次は昭和三十年から山田勘次郎さんが村長になった。戸田村では有数の遠洋漁業の船主、千代丸の当主で漁業組合長をやっておられた。頑固だけれど好々爺で私も村の人と同じように千代丸さんと呼んではもらった。暇なときには、ご自分の小船で近場の釣りにさそって下さった。小石の上にこませの餌をのせて木の葉をかぶせ、海底で石を離して釣る戸田独特のいさぎのふかせ釣りを教えていただいたりした。村長を辞められてから高齢で亡くなられたが、一緒に並んで釣りながら「先生は釣りが上手だね」といわれたことをいつまでも忘れず覚えている。

釣りといえば、私には戸田村が、海釣りの強烈な面白さを知ったはじめてのところであり、今日でも昔からの

私の釣りの大先生が二人いる。その一人は山作こと山田

作蔵さんであり、もう一人は、高田啓三郎さんといつてもわかりにくい水月のおやじである。山作さんはいわゆるプロの漁師であり、釣りの名手である。専門家は自分で苦心して探した場所や釣りの仕掛けは他人には教えないと聞いていたが、幸に私が素人であったために手をとって足をとるようによく親切に教えてくれた。鯛やいとよりの釣れる場所に連れて行ってきてその場所を定めるや、まのとり方を教えてくれたり、ひらめ釣りの道具をわざわざ作ってくれたりした。海へ出ると海面は果てしなく広いが、数十メートル下の海底は砂地あり、岩礁ありで魚の常に寄るいわゆる根は極めて限られた場所である。経験によってその根をさぐり当てた漁師は海上のその地点を中心に陸に向かって角度の異なる二本の直線を設定してその交点が根の真上になるようにするがこれを山といっているのである。一つの線が決まるのは陸上の遠近二点の目標であった山作さんに教えたのは海岸の火見やぐらの先と遠景の神社の森の端や、近い平家の屋根の頂と遠景の二階家の軒の端などを結ぶ線であった。私は山作さんのおかげで寮の和船を一人で漕ぎ出しても、いつも魚の集る根の上で釣りをすることができた。私はまた、ひら



で店に寄っていた。

昭和三十四年から稲木一雄村長となった。教員の生活の長い、温厚な教育者の印象の強い方である。就任早々から村の復興に奔走

め釣りの山作さんの手製の錘を今でも大切に使っている。戸田寮にある魚拓のうちで私が昭和四十年頃に釣った四・九kgのひらめは今後とも破れない記録である。自負しているが、これを釣った仕掛けも山作さんからももらったものであり、また、自分のたもに入らない巨魚に対して、遠くから船を漕ぎ寄せて大きなたもを差出してくれたのも山作さんであった。菓子屋の水月のおやじさんは当初から今日まで一貫した親友である。すし屋で使う大きな芭蕉いか釣りの名手で、私は夜釣りのむつや鯨などの釣りを教わった。口八丁、手八丁の人で釣りばかりではなく、もぐりの術も大したもので、今までずい分たこやさざえなどご馳走になっている。今でも戸田の釣情報はおやじさんからもらっている。商売を離れて私ばかりでなく東大寮の学生を終始一貫面倒をみてくれたことを私共は感謝している。そんなことが頭にあって、加藤総長や林総長が戸田を訪れたとき私の思いつきで店に寄っていた。

昭和三十四年から稲木一雄村長となった。教員の生活の長い、温厚な教育者の印象の強い方である。就任早々から村の復興に奔走

されたが、それは昭和三十三年九月に伊豆を強襲した狩野川台風の災害復旧である。狩野川台風は想像を絶した豪雨を降らせ、平素は水量の少ない戸田の河川は様相を一変して、連磨山の麓から濁流が溢れて、人力ではとても動かせない巨岩を含む土砂が田畑を流し、人家に押し寄せ一瞬にして惨憺たる状態となったのである。稲木村長はじめ村をあげての努力により今日の立派な護岸と美しい蜜柑の畑が生まれたのである。昭和三十八年から二期八年間に亘ってそれまで村会議長をやられていた山田三郎さんが村長になった。戸田第一の鯛漁の網元浜平さんの一族で歴代の村長さんの中で最も政治力のある村長さんである。昭和四十六年から一期稲木さんがまた村長になったが昭和五十年から現在に至るまで山田さんが三期目の村長をつとめられている。永いお付き合いであるので色々のことがあったが、その中で二つの大きな出来事は忘れることができない。その一つは昭和四十年十月に起こったマリアナ海域の海難事故である。清水、焼津の漁船も遭難したが戸田村の遠洋漁船の遭難が最もひどく、金比羅丸、永盛丸、弁天丸の三隻が操業中大暴風雨に遭遇して一家の働き手七十五名が一瞬にして亡くなられたのである。東大でも卒業生を含む戸田を愛する広い

範圍の大学人がカンパして多額の救済金が集まった。合同葬儀の日私はその志を靈前に捧げたが、七十五枚の遺影の飾られた大祭壇の前に泣きくずれた遺族の方々の姿は終生忘れられない。山田村長はいち早く精神的に活動をはじめられ、県に予算交渉して、明日の生活にも困る未亡人に職場を与えるため、村営のホテルと学校の給食施設を建設したのである。今日御浜半島の入口の高台に建っている堂々たる国民宿舎は山田村長の努力の結晶である。もう一つの出来事は昭和四十三年から四十四年にかけての東大紛争に関係している。あの紛争は遠く離れた戸田村にも影響があつて、山田村長から、社会秩序を根底から覆すような活動をしている東大生が来寮することは戸田村の子弟の教育上悪い影響があるので東大は速かに建物と土地を返上して立ち去ってほしい、といふかなり荒っぽい要求書が東大総長と文部省に出されたのである。私は日野委員長と二人で戸田に赴いたが、役場の隣の会館の広い会議室には村長はじめ村の執行部と村会の議員さんが多数待ちうけていて、私達のテーブルの上には録音マイクが用意されていた。私達は社会を騒がせていることの陳謝や紛争の状況と見通し、更に永い間の戸田村と東大との友好関係など丁寧に述べて理解を得

られるよう懸命にとめた。安田事件のあと私は紛争事件の分離公判に三十回余り証人として呼ばれたが、その辛さにも劣らぬ針のむしろであった。幸に紛争の沈静化とともに村との友好関係は以前にも増して親睦さを加え現在に至っている。

委員長といえは戸田寮委員長の制度ができてから初代の委員長が瀬田修平先生、二代が日野和徳先生、そして現在が三代松橋直先生である。無医村に近かつた戸田で三先生とも東大医学部の御出身であることは何か必然性を感じることが、それ以上に共通性のあるのは何れも戸田の大愛好者であり、それも家族ぐるみ戸田を愛されていることである。私ごとになるが私の三人の子供達もすべて戸田で水泳を教わり、特に末の陽子は生まれてから成人になるまで一年も戸田に行かなかつた年はなく、戸田を第二の故郷のように思っているようである。初代委員長の瀬田先生は既に故人になられたが私の学生時代に学生保健診療所(今の東大保健センターの前身)の所長をやられており、その頃からお世話になつて来た。戸田では村との交流に特に力を入れられ、ご専門の医療の外に村の青年団との水泳大会、野球の対抗試合などが年中行事であつた。今の役場の助役の野田さんはその頃の水泳で

は短距離クロールのチャンピオンであり、野球ではピッチャー、四番バッターであつた。先生は寮に来られるときには、その頃、我々にはなかなか手の届かなかつたサントリーの角ピンを必ず持つて来られた。その晩、部屋に呼んで下さり、これも必ず「ヨーカン(私のあだ名)栓をあけるよ」といってほんでおられた。私にとつては先生というより親父のような感じであつた。暇さえあれば海に入ってポツカリと浮かんでいた先生に私はマンボウというあだ名を呈した。当時は沼津からの船便しかなく、文字通り陸の孤島といわれた戸田は美しい自然と古い家並の静かな村で、先生はこの自然をこの上なく愛されておられた。

昭和三十五年頃から静かな戸田の村にも文化・開発の波が押し寄せはじめた。村では自衛隊部隊に作業を依頼して戸田と土肥との間に自動車道路を開設する大工事が始まつたのである。緑の山々は無残に削られ、赤土の肌をあらわして開発に関係のない我々を嘆かせた。同じ頃、村と漁業組合から天草干場にするため寮前の浜を埋立てたいと申出があつた。それまで寮の前は大学の棧橋があるだけで、岩と砂地の自然の渚であつた。天草干しは一時期であるのでその他の時は大学の運動場に専用す

れば双方ともよいのではないかといい好意のある話であつたが、自然を破壊したくないということが大学の方針の一貫した根元であつたので、今の浜では天草干しに不十分であるのか一応打診した。しかし天草事業は漁業組合の直営の大切な事業であるので、それを妨害することは本意でないので賛成したのであつた。今日ソフトボールなどのできるグラウンドを寮生は楽しく利用させてもらっているが、反面、埋立地のできた関係で潮流が止まり、村の海水浴場から潮で運ばれてきたゴミ類は寮前の浜の海底に沈澱する状態となり、また、その昔順幸丸が横付けした大学の棧橋は、いくら延しても運ばれてくる砂で海が浅くなり、干潮になると海は陸地になるのである。

村の緑化については協力をした。十年程前に山田村長からヤシの樹を所望されたので、農学部の本間先生にお願いして鹿児島からワシントンヤシの苗木を百本ほど取り寄せていただいたほか、下賀茂の樹芸研究所の郷先生にお願いして巨木な成木をいただいて村に寄付した。現在村の波止場の広場に人目をひくワシントンヤシはその成木であり、苗木は村の丹精によりすっかり大きく育ち、村を流れる川の岸に立派な並木になつている。最近

また山田村長から所望されているので要望にそいたいと思っている。

戸田を知ってから三十年近い歳月が流れて戸田もずい分変わったが、変わらないのは老松の茂る御浜の岬だけである。この戸田の自然の美の象徴ともいえる岬の美し

## はまゆうの花

永木 宏

戸田寮は四季を通じて多くの人に利用されているが、なんとといっても七月、八月の二ヶ月に亘る夏期特別開寮の期間こそ戸田寮生活の中心である。まるで湖のように波のない『巴の海』こと戸田港に海らしい豪快さのないことを不満とする人もあるようだが、夏の遊泳にこれ以上の上のところはないと思う。松の太木がびっしりとはえそるい、スマートな弧を描いて、細長く海上にのび出している御浜崎は、仮に背景の富士山を抜きにしてながめても美にきれいだである。東京大学(学生・運動会の会員)のために用意された別天地といえそうだ。

満潮に はまゆうの花 白く咲く

さは、今後村と大学が協力して守っていかなければならないと思っている。沼津から船に乗り、やがて緑のしたたるような御浜の岬が見えてきたとき、何かほっとするような安らぎを感じるのには私だけではないであろう。

昭16文卒・(学生部次長)

これは、もう長く管理人としてこの寮に生活している青木さんの句である。寮の周囲はもちろんのこと、この浜木綿の花は御浜崎にはたくさん咲いている。常緑の多年草で、多肉で光沢のある葉の方が白い花よりきれいだ。天然記念物となっていることぐらいは心得て眺めてもらいたい。

湾を横切って対岸の戸田村まで遠泳を試みるグループも多い。途中、湾を出入りする漁船や定期船の波をくらったり、クラゲに刺されて泣き声を出すこともあるが、何人か一緒に出かけると仲々ゆかいである。

朝少し早く起きて船を出せば、釣りをたのしむことが出来る。寮の廊下の壁にはあってあるたくさんの魚拓の中

に自分の記念を残しておくのも悪くない。

バカヤローと 送り送られ 戸田の寮

これも同じく青木さんの句であるが、帰寮する人を乗せた沼津行きの船に寮前の砂浜から声を揃えてバカヤローと大声をはり上げると船の上からも同じくバカヤローと返事が来る。

船が御浜崎の先端をまわって見えなくなるまでのこのバカヤロー合戦は面白い。何十年もの昔から続いているという。帰寮する人には船で沼津に出る人が多いが、バスで達磨山を越え、修善寺に出る道もある。

寮を利用する人は二泊か三泊で帰ってしまうことが多いが、泳ぎをたのしむだけで時間を使ってしまうようであり、対岸の村にだけ、戸田村の人達と接する機会を持つことは少ない。二カ月もの夏期休暇を持つ学生なら、じっくりと寮に腰を落着け、存分に戸田寮生活に深入り

してみてもいいだろう。村の人達は皆親切だし、村の女性には美人が多い。

(昭和三十二年運動会報、第十二号より抜粋)



## 戸田寮の青春

前田知克

初めて戸田に行ったのは昭和二十六年の夏。ストライキで退学処分になり協同組合の喫茶のコックにもぐり込んでいた時に協組の仲間達と行った。その時の写真を見ると、紅顔の美青年とはいかないがため息が出る程若い。ふだんは仕事場での仲間である若い女の子達が海水着姿になったのが嬉しかったが、現在の様なビキニ姿は一人もいないで、昔ふうの姿だったことを今更のように想い出す。この時は泊らず帰ったので本当の戸田の良さはわからなかった。この当時からしばらくの間は船が寮の前の棧橋に発着していた。それから毎年寮通いが始まった。二十七年の六月に復学したのでその年の夏は学生として寮にいった。退学処分になって帰って来た男だから、小説「真空地帯」の木谷一等兵みたいなもので委員の三、四年生はたいがい知っている。遠藤氏などもお目にかかり知り合った。秋さんとか、水泳部の先輩坂田老人だとか、毎年レギュラーメンバーで一風変わった連中がやって来て、学士の二階を占領しては我がもの顔に

寮の生活を満喫していた。秋さんなどは毎日朝早く皆が起きる前に伝馬船をこいで村まで行って、一番美味しいという水を汲んできて浜掃除が済んだあと、玉露か煎茶を入れてみんなに出して自慢していたものだったし、このお茶をよばれることは、なんだか戸田の寮の特別資格者になったような気がしたものだった。寮勤を終えた委員も次々にお茶を飲みに来た。委員連中ともすぐ仲良くなるし、村の人達との懇親会もいつのまにか大学の側の一員として、参加させてもらうようになっていたし、戸田の寮は私の青春にとっては忘れられない場所となった。

昭和二十六年から毎年通ったが、特に印象が深いのは三十二年の四月から八月までずっと寮にいて寮滞在最長記録を作ったことだった。この年は学士入学をして、司法試験の勉強のために借金をして、戸田寮にこもることにした。管理人の青木さんに頼んで、毎月いくらかの安い食費代を支払って居候をきめこんだ。四月の桜の咲く



まで水につけて夢中になってとった。夕方これを天ぶらや酢のものにしてもらって一家中のおかずになった。当時は青木さん夫婦と子供さん三人がいて私も家族の一員

頃には誰も寮には来ず松の緑と桜のなたにかすむ雪をいただいた富士の姿、まさに一幅の名画の中にくらしている様な毎日でこんないいものを一人だけ眺めているのは勿体ないと思いつながら、何故こんな時に誰も来ないのだろうと不思議に思った。五月の連休には少しだけ寮生が来たが、それも過ぎると夏まで殆んど誰も来ない。静かな戸田の海辺で勉強に疲れたら子供達や青木さんとシチビ貝をとった。潮が少し引いた時に先のとがった細い竹を持ってきてすねの深さ位のところを静かに歩いていくと、水の底に小さい二つの穴が並んでいて、廻りにかすかに小さい砂が盛り上った様になっているのが見つかる。シチビ貝が管を伸して息をしているのだ。その穴から竹をつつ込むとシチビ貝がおどろいて殻をしめる。竹が貝の殻にはさまれるので抜けなくなる。その竹をたぐりながら掘っていくとひじの深さ位のところに大きな貝があるというまことに面白い取り方だった。深いので顔

で楽しく過ごさせて頂いた。当時寮の裏側で村の漁師がボラ網をはっていた。ボラがくると、寮の電話で村に見はり連絡をする。そのお札にとり立てのボラを二、三匹くれる。これを刺し身にしたり、天ぶらをしたり、煮たりで二、三食はボラばかり続く。そのうちに青木さんの実家である藤七丸の遠洋漁業船の新造丸が帰ってくるのと、俗にトンボと称するピンチョウマガロが一匹どさりと流し場に持って来られる。そうなると毎日来る日も来る日もまぐろの刺し身と煮つけと天ぶらというわけで、体ないがいささかうんざりする。誰かが泊りに来ると、その食事の料理を作るのでこちらもおしよばんにあずかって普段と変わったものを食べる。四月から五月にかけて風が吹くと波が寮の外海で一晩中轟き続ける。松がひょうひょうと鳴る真暗な寮でぼつんと一人だけ夜遅くまで勉強していると何だか心細くなる。こんな夜の明けた時はすぐに裏側の外海の方にある石垣の外に出る。まだ波は大きい、潮が引き始めるとアラメの新しいのが波にうち上げられて、あちこちの石にひっかかっている。これを集めると炭だわらにいっぱい位すぐ出来る。これを酢のものにしたりお汁の実にしたりする。これもまた楽しみの一つだった。或る時はイルカの大群が戸田の海

にやってきたことがあった。はじめ二、三頭毎日のように来ているなど思ってたら或る日百頭余りの大群がやって来た。村中の漁船が総出で追いまくり、湾の内側に追いつ込んで寮から船つき場の方にいった砂浜(現在水月の店があるあたり)に追い込んで潮吹き穴にかぎを引つけて浜に引きずり上げる。青木さんの奥さんがここまで見たら後は見ない方がよいといったが、珍らしいので見ていたら後は文字どおり血の地獄でお蔭で夜中からあくる日にかけて熱を出してねてしまった。

寮には煙草はなく村まで買いに行かねばならない。自転車もなく、歩いては遠いし、ボートをこいで湾を横切つて煙草を買いに行ったり、散髪にいったりした。学校から帰る途中の子供達がわざわざ寮に来て毎日その勉強を見てやるようなことになったが、親達が喜んで時々お菓子などをこずけてくれたりした。ボートをこいでいくのはしんどいので大漁旗の古いのを出してもらって、これで帆をつくり竹竿を立ててボートを帆かけ舟にして少しでも楽をしようとしたが、だんだんこつてきて、とうとうボートをヨットに改造してしまった。ヨットはそれまでに何回か行った山中寮でヨット部にならつて相当の腕前になつていたので、竹竿で帆柱をつくり、大漁旗

をつけているので、そのうちに無理がいつてくさつてとれかけて、ついにだめになつてしまった。考えてみれば無茶な話で、よくあのととき委員会がこれをヨットと認めてくれたものだと思う。

運動会役員も寮委員長も学生課長さん達もこのことは言わなかった。今ではおそろしくこんなことはとても出来ない相談だろうと思う。

司法試験は八月だったので寮から試験を受けに出かけた。東京の下宿は引き払っていたので、アルバイト委員会の宮川さんというお婆さんの家に泊めてもらい、試験を受けてからまた寮に帰つて来た。この時はすでに開寮されているので、以前のように勝手にこの部屋でも気に入つたところにいるわけにはいかないが、寮委員と一緒にどこか空いている部屋に置いてもらつて、食事は相変わらず青木さん一家や食堂の手伝いに来ている村の娘さん達と一緒に寮の台所の休憩室で食べていた。全く特別扱いの寮生であつた。むしろ寮委員達がうらやましがつて誰かかれかその部屋にやつて来た。

いよいよ夏休みも終つて滞寮最長記録を作つて東京に帰る時、たまたま乗つていたヨット部のクルーザー「仰秀」に乗つて帰ることになった。このヨットは当時東大

をミシンで縫つて帆をつくり、センターボードはブリキ板を折りたたんで作りつけ、蝶番で引き上げられるようにした。夏になって開寮してもこのヨットだけは委員会も公認のヨットとしてボートの部類に入らず、貸し出しはせずにヨットとして登録した。センターボードが弱かつたので村の造船所について鉄板を貰つて加工し、これをくつつけたが、この費用は寮委員会の子算から出して貰つた。この変てこなヨットは委員諸公のお気に召して練習申し込みが殺到した。そこで夜、手の空いたときに委員室でヨットの講習会を開いた。ヨット部がない時には私が先生で、皆に走らせ方を御教授する。翌日は当番にあつていない寮委員は次から次へと乗つてみる。ボードだからちよつと油断をするとすぐにひっくり返る。水をかい出すのに洗面器を持って乗る。うっかりしてこれを海に沈めてしまう。寮の洗面器が無くなるのでこれは大変だということひっくり返つた時は何をさておいても洗面器をかかえて飛び込むことがこのヨットを操縦する者の必須の義務として厳しくしつけることになつた。このようにして、ついに一夏のヨットはボートではなくヨットとして活躍した。翌年もこのヨットはあつたし、同じように活躍した。底の中心にセンターボード

が持つていた最大級のヨットで、エンジンはついていなかったが艇長八メートルの堂々たるものだった。これに乗つて清水港まで行ったこともあり、ちよつと東京に回送するというのでヨット部の現役とOBと私と四人で持つていく事にした。一人が六時間寝て三時間かじをとる、三時間見張りをするという当番制で、台風の通過直後の海に一度は夜中に出かけたが、風がひどく転覆しそうになつたので引き返し、翌朝暗いうちに皆が寝ている間に出発した。寮の裏側の海に出て走っている時、寮の人達が気がついて岩壁に走り出て、いつまでもバカヤローと叫んで送ってくれた。台風の後で散々な目にあい、丸丸四十八時間かかつて横浜にたどりついた時は、命拾ひしたような気がした。その後毎年戸田寮に行った。宇佐美で知り合い、その後婚約した彼女と戸田の寮に来たし、その後一緒になつてからも新婚の年にも子供達が出来てからも毎年かさず戸田に来た。ボロ車でダルマ山を修善寺から越えて来て途中でオーバーヒートしたこともあつた。寮祭には必ず出て騒いできた。委員達と夜の食堂で毎晩のように飲んだ。現役の時伝馬競技ではいつも優勝していたし、すもう大会で準優勝したこともあつた。日野一家がいつも水泳で目覚ましい活躍をしたし、今

は大人になってしまった東京のトラ公なども毎年戸田にやってくるレギュラーであった。選挙のために姫路に来てからも自動車では一家中で戸田に行った。しかし現在、選挙が今年あるといつては伸び伸びになり、またロッキード事件でのびているので今年は戸田に行けるかどうかわからない。子供達は生まれたてですぐに戸田に行き、よちよちと砂浜で歩いたり泳いだりしていたのが、今では一番上が中学三年、一番チビも五年生ということ、子供達は選挙でいけないのを不満に思っているようだ。歴代寮委員たちも毎年新しいメンバーが加わり、東京にいる時は秋になると私の家に来てきて、姫路から送ってくる松茸でスキヤキパーティーをしたり、マジヤンをしたりした。寮委員をしたことはないが、バカヤロー会が出来た時その一員に加えてもらい、現在でもときどき青春を謳歌している。

選挙がすんだらまた一家そろって戸田に必らず行く。余程のことがない限りこれからは死ぬまで戸田に通いつづけるつもりだ。そして、寮の暮し方、寮の遊び方はこうするのだということをつつまでも新しい学生達に伝えていきたいと思う。まさに戸田寮こそ、永遠の我が青春である。この想い出を書いていると、懐かしい顔、顔が

つぎつぎと目に浮かんでくる。村の床屋さんから新造丸の親方、先輩の数々、立派になった委員達の昔の顔、今の顔、先生方、幼稚園の可愛い女の子がだんだん大きくなってついにお嫁にいったこと、毎年逢う度に見違えるほど成長していった大勢の子供達（もっとも今はすでにパパやママになっているけど）もう一度機会があれば、その頃の人達の集まりをやってみたいと思う。戸田寮よ、いつまでも健在であれ。

(昭33法卒・戸田寮ゴロ・寮潜在戦後最長記録保持者)

### 常務の誕生

林 裕三

古くは取締役と呼ばれた学生委員は、戦後総務となり寮の運営に当たってきたが、昭和三十九年、新たに常務が設けられた。初の常務は水泳部の林裕三氏。寮委員の統括、寮祭の実行等に大活躍をされた。蛇足だがこの年の寮会計は大赤字であった。



以後の常務は運動会ゴロと称する運動部大幹部五年生クラスから選ばれるのが慣行となり現在に至っている。なお林氏はバカヤロー会初代会長

## 村の近代化 (昭和三十年代)

新制大学といつても今ではピンとこないが、昭和二十年代の終わりは新旧入れ替わりのときであり、深い傷あとを残した第二次大戦の後遺症から日本全体がようやく立ち直ってきたときでもあった。

米穀通帳なるものが有名無実になり、カツギ屋なる商売が成立しなくなって、学生の生活環境はぐっと向上した。むやみに暴飲暴食をする習慣も減り出して、寮の生活にも昔のパンカラ気質というものはうすれて行った。

順幸丸が昭和二十五年に「みはま荘」を建てて以来、村の人が役場と一年契約で御浜に売店を出すのが流行し、沼津から静岡あたりまでの海水浴客が土日にかけて剝剥したの頃である。

昭和三十五年には土肥との海岸道路が開通し、一方、磯崎から南、入浜、小中島、鬼川にかけての埋立も完成して、村の海岸線は完全にその姿を変え、ウツボが無数に棲んでいた古びた石垣はコンクリートの岸壁に変わってしまった。

本格的な自動車道路の完成は、それまでわずか数台のオート三輪しかなかった村の交通手段に革命をもたらした。まず船元や網元が車を買おうと船員達もそれにつづき、人口六千人たらずの村に今は千数百台の車が走り廻る始末になった。おかげで交通事故も激増し、名誉職に近かった村の駐在さんは県警の応援を求めて、やっと交通整理ができるような状態となった。

昭和三十六年の水害は入浜、小中島、大中島など村の中央部に大損害をあたえ、なつかしい古ぼけた村役場も濁流に洗われて貴重な資料が流失してしまったが、これは村の農地区画整理を促進し、新築ブーム、民宿ブームに火をつけたという意味では、古き良き戸田はこの水害とともに過去に押し流されてしまったといえるかも知れない。

(杉村記)

## 戸田寮でのキャプテン合宿の思い出

手塚重郎

あれは確か昭和三十五年一月十日から十四日まで、四泊五日の合宿だったと思う。

小生は三十四年七月、他の掛りから体育掛員として運動会に移ってきた。総務諸兄とともに各種体育行事の企画、実施にたずさわるようになり、三回目か四回目の主将合宿に初めて参加した。この合宿は本郷と駒場の新年度の運動部主将候補が各部から二名ずつ参加し、新年度を迎えるにあたって主将としてのありかた、トレーニング方法等、講師から指導を受けたり、討論をしたりする合宿である。この合宿は非常に規律やトレーニングがきびしく、かなり音を上げた主将達がいたと聞いていたので、お世話をする役の小生も緊張気味での初参加であった。



戸田寮には夏、寮の管理のお手伝い等でよく来ていたが、冬は初めてであった。この時期は駿河湾は西風がよく吹き海が荒れることが多く、沼津よりの船はかなり

の「うねり」に会い、気分を悪くして船べりから海へゲージやる者もかなり出て、さえないスタートであった。午後一時半頃、戸田湾に入ると、今までとは違って変わって、いつもの湖水のごとき海でホツとした。

講師陣は、教養学部体育科助手の渡辺、浅見（この二人とも現在助教）両先生と、横山学生課長補佐（現学生部次長）であった。渡辺、浅見両先生とも、若手のパリパリといった感じであり、横山さんも頭にはフサフサとまではいかないがかなりの黒髪があった。さつそくミーティングが開かれ、日課、班別等の説明が総務委員からあり、合宿の一日目ははじまった。翌日から起床六時、七時半の朝食までトレーニング、九時から十一時半までトレーニング、二時から五時までトレーニング、六時半から八時半までリーダーシップとかトレーニング法等の講義、九時就寝といった日課で、もちろん禁酒禁煙である。小生も学生諸君と同様、トレーニングにも加わり、運動部員の感じを味わっていたが、この合宿の目的は講

師曰く、運動部の主将としてトレーニングをすることにより体力の限界を知らしめるということで、そのしほり方がすごいこと。おまけに当時の戸田はデコボコ道ときて、大小の石がゴロゴロしている。毎日、対岸の村の小学校まで三往復のマラソンで膝がガクガクになり、ももがつっぱり、寮の階段をはいくくばって上り下りするわ、トイレでしゃがむには激痛をとまなう等の始末となる。これは小生ばかりではなく、ほとんど全員であった。初日の夜は歓談する声が聞こえたが、二日目から昼の休憩時間でさえ声を出すよりフトンにもぐり込み「イビキ」をかく次第。戸田の風光明媚な姿を觀賞するものはだれ一人もない。いな一人いた。その一人は駒場寮の三階から寮雨（オシッコ）を降らせていたところ罰が当たって転落し、命をとりとめた悪運強き男で、まだ身体に水泡が出ていたので、トレーニング免除となっていた。彼の冗談は格別で、それにより殺伐な気持がかなり救われていたようだった。

この合宿に参加するにあたり、人並み以上の酒好き、タバコ好きの横山さんが禁酒、禁煙を、はたして学生諸君と同様に守られるだろうかという興味があった。それとなく見ていると、やはり日頃よりなんとなくさびしそ

うな風情であったが、一方、村への毎日のマラソンにも参加したりして元気なご様子であった。夜、部屋に伺うと、あまり間食しない人が塩センペイをポツリポツリ食べながら本を読んでおられた。この情景が今までも強い印象として残っている。

体育科の両先生も遠隔地での合宿のため、トレーニング用具等が不ぞろいで苦労されていたようだった。このときサーキット・トレーニングが先生方から紹介され指導を受けたが、用具不足のため地形をうまく利用されたり、ダンベルのかわりにビールビンに砂を入れて代用したりなど工夫されていた。指導方法も気迫が満ちあふれ、また率先垂範であったので、体育の先生は年をとってからは大変だなあと思った。

早くこの合宿が終わればいいなあと思いつつ、やっと最終日がやってきた。この日は軽いトレーニングだけで、その後一万メートルのマラソンで打ち上げである。

戸田から海沿いの山道を土肥方面に行った「船原」というところを往復するコースで、登ったり下ったりの難コース。前述の寮雨の彼が胴元になり、馬券ならず人券を発行して興味を盛り上げた。一人を除いて参加者全員がスタート。これが終われば合宿も終了とばかりに、石が



キャプテン合宿風景

ゴロゴロする登り道をブツ飛ばす。だが、だんだん苦しくなり、なんでこんな苦勞をしなくてはならないのかとか、いや、共に苦勞してこそ友になれるのだとか、自問自答する。落伍者もなく全員完走。小生は五十数名中九位に入る。昼、打上げ。さっそくピースに火をつけたが味はまずく、クラクラする。帰りの船旅は、やりとげたという充実感とともに駿河湾の海の青さが疲れをいやしてくれた。

この第一回の参加から運動会勤務最後の昭和四十四年まで、正月明けのこの合宿に毎年参加した。検見川総合運動場ができてからは、キャプテン合宿は戸田でやらなくなった。検見川での合宿では全面芝生のためか、同じようなトレーニングをしても膝がガクガクするようなこともなく、夜も学生諸君の歓談の声が遅くまで聞こえた。私はあの戸田の合宿以来マラソンにも自信が付き、年と逆比例して順位が上がっていった。戸田寮でのあの合宿の思い出は、私の脳裡から永遠に消えないであろう。

（東大庶務部人事課）

## 幼き日の戸田

黒岩 玲子（旧姓吉野）

私達が初めて御浜の船着場に降りたのは、たしか昭和三十二年七月末だったと思います。その頃、満潮時には寮の前の棧橋に船が着きました。私達一行は、吉野綾子

（アーチャン、二才）、吉野玲子（ズク、五才）、吉野裕子（タム、六才）、東乙比古（トラ、七才）、木下健（タキ、八才）、東廸子（カリ、八才）、木下洋（ボン、十一才）、木下淑子（ロロ、十四才）、私の両親、木下の伯母、東の伯母の十二人でした。部屋はたしか滄海楼十五号室だったと思います。初めての食事の時、前に坐った学生さん

に、「皆兄弟なの？」とそっと聞かれました。「三組のいとこ同士です」と答えたら、どれとどれが兄弟かと、がやがや話し合っていたことを覚えています。朝の浜掃

除、体操、食事時間の太鼓などの生活は珍らしく、五日間はあっという間に過ぎてしまいました。その時の楽しさが忘れられず、それから十三年間、毎年の夏休みを約

十日、長い時で二週間、戸田寮で過ごさせて頂くことになりました。

あの頃は海もきれいで、底まで澄んでいました。寮の前の棧橋からも小さな魚の群が泳ぐのが見えましたし、民宿などは一軒もなく、ただ一つ富士見館の屋根の文字だけが対岸にめだっていました。浜は埋立て前でした。寮の前は大学の専有地で人氣もなく、朝の浜掃除以後翌朝まできれいでしたので、思いきりころげ廻って遊べました。

私達は夜八時には寝かされたので、朝は五時半位に起き、村まで水を汲みにいらっしやる秋先生の和船に乗せて頂きました。朝早い海はとても清々しく氣持の良いものですから、私達は和船に乗るために色々努力をしました。前夜から衣類と洗面具を枕元に置いて出やすいうようにしたり、お互いに起こしっこする約束をしたりしたものです。寝坊したことに気づいて飛び起き、洗面もせずに浜に出ると和船は沖にいて、がっかりして寝床



に戻る、そんなこともなんどかありました。この水汲みは何年つづいたか覚えていませんが、戸田寮を思い出すたびに、あの和船でむかえた素晴らしい朝が目に浮かんできます。

あの頃は、夕食後にチャカや和船が村まで時々出ました。二艘の和船が舳先を並べ、一艘から流れる寮歌に他の船から声を合わせ夕暮の静かな海を渡りました。村へは、「水月」に氷を食べ、にゆくだけなのです。帰りの夜光虫の美しい海は、私達をもの淋しい気持ちにさせました。

十三年の間、私達は遠泳や寮祭に戸田の生活を満喫しました。寮祭には全員が参加し、水泳、野球、サッカー、ボート、卓球大会など各種目に出ました。ですから、その翌日にはくたびれきって泳ぐ元氣もなく、部屋でゴロゴロしていましたし、喧嘩する回数も増えたように覚えてます。アルバムには、応援のおかげで割れた西瓜を前にして、嬉しそうな様子の妹の写真があります。キャンプファイアの際は水泳部の河童踊りの仲間入りしたり、合唱したりしました。その合唱練習に何日か昼寝の時間をつぶしたりもしました。

その他にも色々なことがあります。プラボートに何人

乗れるかと、沈むまで乗ってバカヤロー会の方達と一緒に表彰を受けたこと、翌日、午前中かかって皆でシート洗いをしたこと、船着場で寮歌やテープで見送りをした後、駆け足で湾口の堤防まで行き、水虫踊りを繰り返したと、船からバカヤローの声が聞こえなくなるとお別れの淋しさを感じて、また来年も必ず来たいと思ったこと……。毎年懲りもせず宿題を持って行き、結局遊ぶのに夢中で何もせず、学校の始まる前に寮委員の方や寮でお友達になった学生さんに家まで来て教えて頂いたことなどもありました。

小学生時代、中学生時代の私達にとって、あの寮での生活は力一杯といえますが、ともかく全身全霊をあげて楽しんだ日々でした。今になって思いますと、各々幼児から青年までの成長期に、この二週間のために一年があるような気持ちで、思い残すことなく遊び、泳ぎ、楽しむ生活ができた私達は、本当に幸せだったということが分かります。アルバムには、日野先生御一家から頂いた戸田の写真が沢山あります。写っている誰れもが、他のどの写真よりも嬉しそうに生き生きと生きているのです。

いとこ達八人は、現在も十三年間の戸田寮生活を共に過ごした仲間として、当時と同様の親しさを持ちつづけ

ています。そしてみな戸田を子供時代が一番なつかしい場所として大事に思っています。こんなに楽しい思い出を

させて頂いたのも、日野先生御一家、横山先生御一家、前田様御一家、秋先生、青木様御夫妻、その他毎年お会いした御家族、寮生の方々、そして特にバカヤロー会の皆様のお陰と心から感謝しております。戸田寮でおめにかかりました皆様、本当にありがとうございます。

終わりに一同の近況をお知らせ致します。

ロロ、平塚淑子 (旧姓 木下)

男の子二人あり、六才、四才

ボン、木下 洋 新日鉄勤務

タキ、木下 健 東大工学部船舶博士課程

五十二年三月卒業予定

カリ、大塚廸子 (旧姓 東)

五十年九月結婚 在シカゴ

Mrs. M. Otsuka

1369 E. Hyde Park Blvd.; Apt. 806

Chicago, Ill, 60615, U.S.A

トラ、東 乙比古

信州大学工学部

タム、吉野裕子

五十二年三月卒業予定  
練馬区立大泉二中、国語科教師

ズク、 玲子 五十一年四月結婚

六月セントルイスへ渡米

アーチャン、綾子 早稲田大学文学部二年在学

追伸

吉野家は父の転勤により九月以降在メキシコシティになります。留守宅御連絡は在留者もおりますので

177練馬区石神井町六―二―十六 03-996-0053

東龍太郎方「吉野」にお願い致します。

セントルイス、シカゴ、メキシコシティ方面御出張

の際は是非お立ちより下さいませ。住所はまた決まり次第、バカヤロー会事務局に御連絡致します。

## チャカのこと

河原昭文

昭和時代（戦後から現在）

私は昭和三十五年入学し、昭和三十七、八年の二年にわたって戸田寮々委員をつとめた。

そのころは、御浜には一般の海水浴客はほとんどなく、寮生の外は臨海学校の生徒が遊んでいるくらいで、ずいぶん静かでひなびた海辺だった。

それから既に十三、四年、記憶も大分うすれたが、いくつかがことは、まだあざやかに記憶に残っている。

当時、寮にチャカとよばれる小さな発動機船があった。寮委員は、これを戸田の町へいく足として使っていた。食料品、日用品を買いにいったり、盆踊りにいったり、あるいはデイトにいったり。さぞかし、今の自動車にあたったことだろう。



ある日のこと、ボート部の金さん（これはあだ名）、合気山の成とチャカにのって、寮のボートの見まわりに出た。湾口の方にいるボートに警告し、さて湾内

に帰ろうとしたところ、チャカは既に外海の流れのつており、チャカの小さなエンジンでは抗しようもない。どんどん西に流される。カジもほとんどきかないが、懸命に努力して、やっと陸に近づいた。けれども岩ばかり、とうとう船体が岩にのりあげ動かなくなった。波はますます高く、チャカは前後左右にゆさぶられ、岩にぶつけられて、ミシミシ音をたてる。なんとか岩から離れさせようとしているうちに、転覆して、腹を見せてしまった。しかし、岩からは離れない。このままでは船体はバラバラになって、発動機もろとも海底に沈むだろう。発動機は船体に比べて何倍も高価だ。発動機だけでも助けようと、相談がまとまり、発動機をはずしかかった。一人が波を頭からかぶりながら船体をおさえ、一人が発動機をかかえて、一人がねじをはずす。三人とも海の中で汗びっしょり。道具もなく、手だけでいくつかのネジをはずしおわったところへ大波一つ。あっという間に発動機は船体からはなれて海中へ。あわててもぐってつか

もうとしたが、われわれの努力をあざ笑うかのように、ユラユラゆれながら海中深く沈んでしまった。あとに残ったのは、ガタガタの船体と疲れきった三人の男だけ。

発動機がはずれて軽くなり岩を離れた船体を岸まで運んで、そこに置き、われわれ三人はとぼとぼ歩いて寮まで帰った。総務の永木さん（応援部）に報告すると、永木さん、まっ青になり、高価な固有財産を失ったことをどう処理すればいいか、思案にくれていた。

結果から見れば、発動機をはずそうとしたのが失敗だったのだが、事態に直面した三人は、とにかく、発動機

だけでも助けようと必死に努力したのであり、やむをえなかったと思う。

ともあれ、それからはチャカがないためずいぶん苦勞し、不便な思いをした。ある晩は、寮生の中に急な腹痛を訴える者が出、盲腸かも知れないというので、彼をボートにねかせ、和船でひっぱって、町の医者まで運んだこともあった。

さて、このチャカの一件、永木さんがどう処理したか、それはすっかり忘れてしまった。

（昭35法卒・応援部）

## 運動会のめぐり「戸田寮」

山成喬彦

昭和時代（戦後から現在）

冬の戸田は陸の孤島であった。現在でも半ば孤島である。海がシケると船は止まる。そうになると、何時間もかけて達磨山を越えて修善寺に出るより他はなかったようだ。今ではバスがあるが、しかしこれも冬は達磨山に雪がつもると止まってしまう。土肥から戸田へ道路が出来、ここにバスが通るようになってから幾分よくなったが、それでも午後四時過ぎるともうない。タクシーで行

くなら何時でもよいが、我々学生には千円以上もする車代は無理だから、結局戸田は陸の孤島ということになる。

戸田に親しむと、たとえバスが動いても乗る気はしない。沼津から船に乗らないと戸田に着いても着いた気がしない。船が港を出たら、船尾に坐ろう。富士がボカッと眼前に広がる。今まで富士めぐり、そのほか富士の回

りをぐるりと回って見たが、こんなすごい富士にはお目にかかったことはない。それでも半時間もながめると驚きはさめる。囲りの海や伊豆半島特有の断崖をながめてみると、海に突き出した砂嘴と山に囲まれた戸田湾内に船が入る。荒れた海から来た時は、とたんに揺れのなくなる湾内に着くとほっとする。湾はちっぽけだが、「御浜」で船を下りないと湾の奥で下ろされる。すると外海につき出た砂嘴の真中にある寮まで四十分も歩かされる。松林の中に建つ寮は新しいのでも三十年近く、見ただけで落ちついた感じがする。冬の戸田はまったく静かだ。都会の雑踏を逃れて休養するにはもってこいだ。何にもすることのない人には釣をすすめる。身分不相応の大物をねらわなければ誰だつてつれる。釣れなかつた

## 旧時代の終焉

敵しかった夏の陽もようやく西に傾き、茜色を背景に御浜の松はくっきりと浮かんでいる。この夕映え美しい黄昏ときにはじまり満天の星が最後の輝きをみせるまで、連夜にわたりミーテングと称し、夜光虫を着に大酒

で、誰もいないところで糸をたれるのは気分のよいものだ。ただし風のない時だけで、遠慮下ろしが吹きまくりだと寮の中にとじこもる以外にはない。風がなければ伊豆は常春である。

夏は孤島が一変して江ノ島になる。浜は人でにぎわい、サーフィンの音が、キャンブからガンガン流れる。寮には活気がみなぎる。日焼けした顔がぶつかりあう。泳ぐには湾内は実によい。波がないからである。連絡船もめつたに止まらないし、便数が冬の倍以上である。夕方遅くまであるからしごく便利である。しかし、戸田は冬に行くのが一番楽しい。

（昭和四十年第十四号運動会報より）

## 渡辺敏彦

をくらつたあの日のことは今もなお脳裡から離れない。かけがえのない青春時代のひとときは、自然のふところにやさしく抱かれた巴の海を舞台にはじまる。真夏の太陽とすばらしき仲間達がつくりあげるシンフォニーの

終楽章には、必ずや明日への活力を生み出す何物かが高らかにうたいあげられたものであった。

数々のエピソードを残し、この地に限りない想いをこめて去っていった男達にあの日は再び戻って来ない。だが、裸同志の友情はその後も絶えることなく続いているのである。

この年の秋十月七日、マリアナ海域アグリガン島沖において、海難史上未曾有の漁船集団遭難が発生、戸田漁港所属の金比羅丸、永盛丸、弁天丸の三隻の大型船が一度に遭難、七十四名の尊い命が失われた。当時人口わずか六千余名、その三分の一が漁業で生計をたっていた戸田村にとっては、余りにも大きな悲惨事であった。

戸田寮関係者は、全学に救援の手をさしのべるべく援護募金の協力を依頼、短期間ではあったが四十六万余円の見舞金を届け、心から哀悼の意を表したのであった。

日本がほこる『栄光の南洋漁業』の一翼をになう戸田



港が、この打撃を乗りこえるにはもはや観光誘致しかなかった。山田村長はじめ役場を中心に再建に奔走、翌年には国民宿舎ができ、数多くの家が民宿をはじめた。

つぎの夏が訪れたときにはもう一般の海水浴場と何等変らず、車の洪水も都会同様の活況を呈することになる。思いもよらぬことではあったが、素朴な自然を破壊せざるを得なかったのは我々にとっても痛恨の一語につき、以後寮前庭を寮生だけで独占するなど全くの夢物語になったことを想うと、この年が旧き時代の最後のよき時代であったと想われる。

艇庫の前から海につき出た松のあたりの浜には大きな石があり、松の木の下には「これより東大寮」の立札もみられた。寮のたたずまいも浜木綿も前年と少しも変わっていなかった。ただ一つ、浜の電柱に今は亡き青木管理人手製の大時計がかけられ寮生に時を知らせていた（これは今でも残っている）。

自然環境の変化はなかったが、この年の寮委員は例年と若干趣きを異にしていた。岩沢、古田、安田、日野の五年組が重鎮として常に活躍し先頭きってバカヤロー振りを披露、加えてこの時すでに社会人ではあったが島崎氏など毎週末来寮する精勤者が相つぎ、バカ振りに拍車をかけた。通常はボート、水泳、応援、柔道、合気道部のものが多かったが、この年硬式野球部の古谷野がのりこんで来た。四年生二十名、三年生十四名、二年生十三

名、一年生十名が運営に参加したのである。

○月○日、宮川管理委員総監督のもと火災訓練が行われた。慎重な打合せにもかかわらず、米田が一糸まとわぬ姿で火元の風呂場を飛び出したのがそもそも誤りであった。全寮にとどろく古田の真にせまった避難命令がまた出来すぎ、ついには荷物すべてをまとめて逃げ出した寮生の怒りをおかい、委員との間にとっくみ合いが演じられた。さらに厳禁であった火災報知器が何者かによって押されたため、村の消防団から文句をくらうはめにあった。

寮祭のメインはキャンプファイアである。司会是我らが名優古田。さすが大役を無難にはたし、打上げコンパとなり、ご存知「水月」になだれ込んだ。今宵の感激に放心の氏は、しこたまくらってもなお辞さず。この時、

## 表彰式創設その他

古田直樹 (談)

三十七年頃のトピックスからお話ししましょう。まず総務は塩沢さん、柔道部の古村さんは、なにしろ豪傑で歌をうたうといつも同じ高さで、声ばかり大きくて旋律

さらにはあやうしとみた親友島崎氏、ドンブリに水をなみなみとつき酒と偽り進呈する。一瞬気がつきかけた古田氏、かまわず約一升。翌日午後四時まで姿見えず。以上「ジョニ白」の一件。

誰もが特色あるバカ振りを発揮し、各々の役目を責任もって果たしていたのである。だが私自身には一つだけ悔いが残った二か月ではあった。寮委員として悔いなく遊んだが、寮生に対し何をなすべきだったか一度も真剣に考えなかったことである。気がついた時は、はや困難近く、ついには水の事故さえなければ……としか考えられないほどボケていた。何となく寮生に強要するような気がして避けていた大太鼓は、閉寮後に一度だけ思い切りたたいた。むなしさと、いくらかの安堵があった。

(昭42文卒・昭和四十年年度総務)



彰は非常にうけてみんな拍手でもって迎えたので怒れなかった。一番問題なのは寮委員が「コラー」といったら「なににおー」となつてはこまるわけだ。だけどみんなの

と、それから表彰式を行った。表彰式は僕らが考えた。バカヤロー会の初代会長の林祐三さんが三十八年、初代常務だったときに、けしからん奴が相当いて、例えば消灯時間を守らないなど、そういう奴をただおこり

ばしてもケンカになるし、そこでなにかうまい手はないか、じゃあ体良くお引きとりねがうのが一番だと考え、そして体良くお引きとりねがうのにはなにかさせなければ出ていかないとどうしようというので、最初は女性同伴のときは女性をぶん取ってしまおうかというような冗談もしたが、結局便所掃除とかシート百枚洗い、一人くらいだったらフトン干しを全部やらすなど、午前中かかっても終りきらないような肉体労働を与えることとした。最初はけしからん奴もショックでみんな一所懸命やった。

便所掃除、そのかわり厚生大臣と称して寮委員の下級生が陣頭指揮をしてやらせた。寮委員の指導のもとに寮規則を破った者に友好的な罰を与えようとしたが、この表

前で「いついっただれだれは、よってこれを表彰します」とくれば、みんなが「ワハハ」というわけで本人だつてカッとこないわけだ。これが効を奏し伝統的になったのだ。日課はほとんど変わらない。

寮委員の勤務は一時間交代だつたと思う。寮委員の数は、最初にやったところは季節にもよるがそう多くなかつた。それで午前午後、番がまわってきたりした。たしか一時間単位だと思ふ。常務は林祐三さんだつた。

遠泳とかそういうことをかなり規則的にやらせた。例えば大きいグループが来たり、出来るようなときはなるだけ鍛えようという精神で、「しるこを用意するから明日朝やるぞ」というわけで、ボートにすぐ引上げてやるような連中から、向うまで行って帰って来る連中までグレードをわけ、ボートで付添い監視をし度々行った。

寮委員の構成は今とだいぶ違った。伝統的にボート、水泳、応援、それから合気道、この四つが一大勢力だつた。空手、柔道、サッカーなどもいたが、現在の主たる部と違うことは事実だ。水泳、ボートが多かつた。

血洗いソングを始めたのも僕らの時からだ。それから残飯捨てが仕事で、仕事の内容にもよるが、青年将校とか下士官とか体良く分類していて、来たばっかりの奴は

たとえ三年四年でも、一年目などはペーペーで、それらが残飯捨てを一日三回やる。僕も何度もやったが、雨の時など捨てた所にすべって落っこってみづからゴミの海で泳いだこともある。

僕の二年目か三年目から栄養大学の女子学生がアルバイトに来た。三十七、八、九年頃がピークだった。よくわからないが藤沢さんが何かの理由で来れなくて、検見川のおばさんが少し手伝ってもらいながらやっていった。栄養大学の学生が手伝いに来たので、寮委員のたのしみの一つは、自分のフリータイムに彼女たちを接待すると称して、ボートに乗せ共に、泳いで、散歩してと、それはやはり面白かった。賄と売店もふくめてだが、売店は青木さん一家がやっていて、プロの卵だから主に料理を手伝った。それで結ばれたのが渡辺敏彦と岩沢諄和で、共に当時の寮委員だった。そのころは秋に戸田同窓会と称してみんなで山中湖に行った。学生部にわざわざ行って団体のハンコをもらって、団体割引で三十人位連れだって行った。山中湖の寮で一泊してね。そんなことをしているうちに親しい仲が生まれたりして、できてつぶれているんなことがあった。直接いえない気の弱いのがいて友達を介して、神宮でデートしたらそこでへマを

やってふられた奴とかいっばいいいた。草原さんの代々木の下宿に神宮球場の帰り途ビール片手にみんなでおしかけて、飲み明かしたりして、戸田寮の夏の思い出を夜遅くまで皆で語りあった。神宮でデートをかさねたり、ハイキングにいたり、あげくの果てには結婚した奴も何組もいた。

ヒエラルヒーが非常にはつきりしていて、五年生はものすごく偉くて、そのころ三年生がいつとう下士官だった。三年なんて小使いもいいとこだった。中尾は一方では六大学連盟の委員長をやっていたのだが、それが三年で来たときはペーペーでなんでもやらされていた。そのころは運動会ゴロが寮委員になりたいというので、あまり末端の奴は行けなかった。俺が行くときも他は上の人たちが行きたがり、別に寮委員として人が行くので足りたわけで、おまえ行ってくれという必要は一切なかった。むしろ俺が行くときは行かせてくれとたのんだのだ。そういうことになる。二年などものすごく若い方で応援の梶浦がめずらしく一年で来たときはもうボーヤボーヤだった。でも梶浦はがんばって四年間ずっと来ていた。不思議と一年目いじめられたのが毎年来たのだ。それでいつの間にか成長して、ポツと来てポツとやめちゃ

うというのは割と少なく、持ちがいいのが多かった。老舗の部が大体寮委員を占めていて、特に寮祭の頃は独占していた。それでしかもその部でもキャプテンとかマネージャーとかいいところの連中がみんな取ってしまった。なかなか行かせてもらえなくて、そのためには一年でも二年でもつらい思いをして、顔でもって三年目はいいところへいくというそんな感じだった。

夜廻りが面白かった。敷地内の変化もあるが、その頃は道路などなくて、あそこらへんが全部雑草地帯だった。そこに凶々しくキャンプなどはる奴がいた。ルールからいうと、東大寮のちよっと手前のところから、土手の内側、グラウンドその全部を東大がにぎっていた。だから土手の内側でキャンプをはっている奴なんかいいエサで「おい、コラーツ」てなもので、たちの悪い奴は一回見過ぎておいて十一時頃わざわざ出かけていって、「オイコラーツ」「あっすいません」てなわけで、僕らが立っている前で、あわててテントをたたんで、たまには男女で出てきたりしてね、そういうのを堤防の外に追いや出して、「岩場ならいいが、そのかわり夜知らんぞ」といったりした。ともかく絶対的な権力もってたからね。

生簀がたくさんあって、今ほど人が多くはなかったから、夜こっそりボートでいって、生簀からイワシをすくった。夜光虫がいるからイワシが逃げると光る。そこを網ですくって一人あたり一時間に四、五十匹くらいとれた。三、四人でいったから次の日一人あたり一匹くらいずつ付けて「提供は寮委員です」なんてやったりした。

マイクは三十八年かそこらにはいった。最初のころはいちいち解説つきで昼間レコードをかけた。「ただ今からXさんの魅力的な歌をお送りします」なんて、黛ジュンの歌や「今日は赤ちゃん」みたいな古いソングだった。

卓球台がはいったのも三十八、九年だと思う。(これは裏話だが) 忍法水鏡、これは風呂場なんだ。女湯と木のしきりの下のほうがちよっとあいていて、床はコンクリートで、すのこがひいてあるが、たまたまあるところちよっとすのこがきれておった。そうするとそこはコンクリートでぬれると光るわけだ。角度によっては非常に劇的なシーンになるわけだ(そういう話は鈴木さんに聞いたほうがいいんだ)。中から鍵をかけて一人で風呂に入ったり、それ専門にしたってる奴もいるし、しきりの横にお湯のせるパイプが通っていたのだが、あんまり顔を近づけていたのでやけどした奴もいるんだ。節穴

のすぐそばにパイプがあつてそれでやけどしたり、それから人工的に節穴をつくった奴とか。そういう話は昭和四十年前の奴だったら大体知つてはいるはずだ。風呂は四十二、三年までには出来たから、僕らの仲間なら忍法水鏡は知つているな。勇談をつくつた人もいるからね。

寮祭をセレモニとしてやりだしたのも僕らからだ。僕がファイヤーストーム委員長となつて水泳部に松明を持たせて、岬の向こうの方から、火をずつとともして沖の方からやつて来る。最後にシーツを体に巻いたボートに乗つた女神が登場して、そいつが、おもむろに火をつける。とにかくアトラクション的に花火をやつたりした。ただ単に火を燃すだけでなくファイヤーストームで学生を二つにわけて東西民謡合戦をやらせたりした。アドリブや名物家族に歌わせたり、賞品を出したりした。女の子(栄大生など)がいたつてこともあるが、いきおひ夜のファイヤーストームがにぎやかになつた。

開寮祭がおつたあとは、一切寮のルールを破ろうというので、プラボートを外海までもつていって、次の日は外海で沈めあつた。栄大生に特別料理をつくらせ、夜はエンドレスで、ほとんど堤防の上で寝た。好き勝手なことをさんさんやつたものだ。そういつたストレス解消

が、次の年またこようというエネルギーにもなつた。一方できびしく、また寮生をいかに楽しくすごさせるかということでは卓球台を入れたりサービスをした。同時に寮委員仲間の統率を徹底させたが、一方ではお役御免になつたときは酒を飲むとか、気のあつた奴でピクニックに行くとか、つきあいは短いけどおたがいの友情は深かつた。

村との関係では、観光開発が進んだこともあつて、そういう過程で土地を返せ返せといつたなかで再契約ができた。その時点で、仮に東大紛争があつたらあぶなかつた。山成さんなんかがかくわしいと思う。マリアナの漕艇も一つのエポックだ。僕ら、秋になつて本郷キャンパスでカンパをやつたら、戸田を利用した連中が多いからすぐに二、三日で五十万円募金できた。教授なんかも千円札出してくれたり、学生でも二、三百円くらいみんな出した。大口の人も二、三いたかもしれない。

水泳教室もやつていた。寮祭と懇親会は一緒だった。看護学校の生徒が一年のオリエンテーションに毎夏来ていた。そういえば戸田寮で俺と林さんで社交ダンスパーティをやつた。女の子も看学が来れば多かつたし、評判も良く二、三年やつた。男はズボン着用だった。ただそ

れだけで、あとはやらなかつたようだ。青木さんの実家でレコードを借りて流した。デコレーションをして寮祭とは別にやつた。ロマンスもだいぶあつたが、応援の佐藤敏之などが、結ばれた例だ。僕らのときあつて、それつきりというのはダンスパーティーぐらいだ。卓球大会はずいぶんやつて来た。シングル、ダブル、混合と俺がトリプルチャンピオンになつたこともある。

娯楽といつても、夜伝馬船で「王将」、「アムール」に飲みに行ったことはあるが、今みたいにスナックはなかつた。仕事にさしつかえないくらい飲んだ程度だ。水月にはずいぶんよく行つたものだ。寮委員がつけをしたのは四十年ぐらいからだ。たんじゃないか。四十年頃からはモンキーダンス、エレキがはやつて、すごいポリュームで夜、御浜でやつていた。寮委員も夜ぬけだして踊りにいったものだ。たまたまはやつていたというだけだ。

交通機関は今と同じ。ただ陸路は雨が降れば土砂崩れでダメで、陸の孤島になることは今よりも多かつた。

堤防は今のままだが、草原で木がいっぱいはえていて道はなかつた。道が舗装されたのは七、八年前で、それまでは神社へ行く、寮に沿つて道が一本だけだつた。向う側は藪で、その中にテントはつていてバカがい

た。道なんかは「熊」に聞いたほうがいい。

バカヤロー会は四十一年に出来たのだから、三十七年入学の連中が中心メンバーだ。渡辺とか清水とか、それと僕と島崎さん、下田さん(応援)、イナミさん(弁護士をやつていて水泳のOB)、林さん。バカヤロー会と名をつけようと発案したのは林さんなんだ、そもそも四一年の夏、例によつて思い出をたくさん残して帰つてきたが、安田以下七人が、その秋にまた会つて、「卒業するんだが、このまま別れるのは面白くない、見ていると何年かたつうちに別の顔をしちゃう」というわけで、「このままでいこうよ」と言いだしたのが七人位いて、それが僕と岩沢と日野と安田とクサハラ、島崎、山成かな。それで下準備をして十一月に集まつて、それで一月にステーションホテルを、ボート部の先輩が社長をしてるんで場所を借りて、それで第一回総会をした。「バカくさいからすぐやめちやえ、やめちやえ」といつてたが何となく続いてしまつたわけだ。今度は逆に十年たつといろいろな流れを調整していかねばならないし、ただただ古いだけでも、また息苦しい会になつてもしょうがないし、そこらへんの調和がむずかしいけど、まあ今度の総会をやつて、世代の親交を暖めるのもいいんじゃない

かと思う。

僕らのときは秋さんがいた。東一家、松橋一家、吉野一家も来ていた。秋さんには昔から寮委員は大変世話になり、僕が寮委員の最後の頃はおられたかどうかははっきり覚えていないが時に面白い話をおききした。「きのう、第五空軍の司令官と司令機で帰ってきた」とか聞いて最初は「へえそうですか」と、おたまたま、どえらい人だと知ったよ。内心は半信半疑であつたけれども「ブラジルで国から招待をうけてね」とか、「僕がドイツで教えてたころはね」などと非常に世界じゅうの話がでてきて、非常なるV・I・P・だと思つた。

印象に残る人物には多々出会つた。一方寮生は（主観的に）「これはいい、気に入つた」というのと、「これくらいなら金出してホテルに行つたほうがいいや」というタイプと二つあつたように思う。運動部員達はざつぱらんで居心地がよかつたと思うが、家族などはガンガンいわれてこれじゃあとと思う人もあつたんじゃないか。また最近是一段と考え方がかわつてきたようだ。学生るときチョコツといつて、卒業したら金があるんだからということ、なにもこんなとこ来ないでもという傾向は当時も若干あつた。

寮生は寮祭前後七月末から八月十日位まではいつとも満員で、ふとんを最後の一枚まで奪ひあつた。百八十から百九十は常識で二百五十ということもあつた。廊下もどこも寝れないので、寮祭の頃は、寮委員が三十人ほどになるので、食堂の台の上でふとんなしに寝たり、堤防で寝たりした。不思議と酒なんか飲んで寝ると風邪ひかないでいたもんだ。貴賓館がなくなつて、新二階がダメになつて、定員が少なくなつた。この二つが使える頃は定員は百五十人だつた。

忍法水鏡はとでも寮史にのせられないね。これは戸田寮裏史だね。風呂場の位置は変らないけど、縦に細長か呂にはいつたものだ。俺はそんなに楽しんではいないゾ。こんなのはちつともネタにならないよ。

古田と森川氏の間を埋めるのは柔道の古村さんと林祐三さんが適當だろう。そう基本的なことには変わりがないだろう。ただ、寮の外的環境がかわつたが、内にいる人間は大なり小なり同じ体験をしているだろう。ただ居心地良さについて多少違いがあるかもしれない。僕はレジャーとか何するとかいうよりも、ポケーとしているのが楽しいという人間が多かつた。あそこで留年をした

という奴も多かつた。あそこで人生意気に感ずというわけでのんびりしようと思つた人間も多いだろう。ただ卒業すると自分でまかつた予想しない変化がくると思う。それに関してはバカヤロー会は人生的な意味はあると思う。卒業するとその夏は来るけど二年目にガタツと減つて三年目には来なくなつちやう、社会人三年目になると、学生時代になにか足がかりがない限り、遠のいてしまふ、非常にそれはドライだ。そこをバカヤロー会みたい、いつも飲んでいて知人ができるから、また行くかということになつて非常に意義がある。バカヤロー

## 青木さんを偲んで

沼津の港を出て三十分あまり、船が大瀬崎を回り、切り立った断崖を左に見ながら進む頃になると、心はいつとも一足先にもうすっかり戸田にいる。懐かしい海、御浜の林、堤防、戸田の寮、友人達！

この近年、海は青さを失ない、空は濁つて富士は見えない。喧嘩は年を追つて増してくる。でもそんなことに一向に邪魔されずに、毎年私は少年の頃と同じように、

会の意義は精神的なきずなにある。別に毎年行くの行かないのという Duty ではないはずだ。

日誌はあるはずだ。戸田寮にあるはずだ。捜せばあるはずだ。らくがき帳は僕は記憶はない。島崎さんは四年の現役おわつてから、一回来て正式にやつたのは一回だけだが、その後好きになつて毎年来てゐる。戸田で好きな女性と知りあつて結婚したようなものだ。その典型といわれた看板娘が戸田小町を嫁にもらつた杉村さんだ。青木さんの奥さんの妹君にあたる人だ。

（昭38医卒・ボート、運動会主事）

## 日野恭徳

少し興奮して心の中でいつも叫ぶ。「また来たぞ！」。だが、今日はいつとも違う。人影の見えぬ浜がこれほど寂しいことがあつたらうか。ガランとした寮が、これほど悲しいことがあつたらうか……。

戸田に慣れ親しんでいふんと久しい。戸田寮は私の人生と深くかわつてゐる。幼ない頃の思い出、寮委員時代、バカヤロー会。とりわけ戸田を愛し、寮委員とい

う共通の体験を通じて集まっているバカヤロー会は、私の青春である。現在、我々ひとりひとりの生活は異なり、ともすれば喧噪の中に埋没しがちである。しかし、浩然の気を養い、自由を愛する心、信じあえる友情、今にみているの感慨を体得させてくれたのは戸田寮であり、我々をいつもこころよく受け入れ、時にハメをはずす我々を寛容の心で見守ってくれた青木さんであった。青木さんは戸田の海をこよなく愛し、浜木綿をいつくしむやさしいロマンチストの文学青年であった。現役を退かれ、これからも良き師であり、友であって

欲しいと願っていたのに、青木さんはもういない。戸田寮関係者にとって、青木さんは即ち、懐かしい戸田の寮そのものであり、思い出はつきず、悲しみは限りない。青木さん、今年の夏も戸田へ行きますよ。これからも出来るだけ自由を愛し、自然を尊び生きたいと思えます。そして、次の時代の子供達にも、かつて我々が学んだことを教えてやりたいと思います。戸田寮の将来を見守っていて下さい。  
あなたの愛した地で、どうぞ安らかにお休み下さい。  
(昭和45 医卒)

## 戸田寮史編集懇談会

於 赤門学生会館 (昭和五十年五月三十日)

出席者  
OB  
東 竜太郎  
佐々木道雄  
宮下静一郎  
近藤 勁一  
加藤 英夫

大学側  
横山 陽三  
松橋 直  
鈴木 一郎  
古田 直樹  
高橋 常雄

黒田 基一  
宮下 衛  
松下 元次  
杉村弘二郎  
岸尾 光二  
辻角 精二  
渡辺 仁

東 私には学生るときには戸田に行ったことはない。昭和の初め総務部長をやっていたころに数年間戸田へ行ったことがある。特に印象に残っているのはスカルを始め

たことだ。運動会が再建した昭和二年以降しばらくしてだから昭和五、六年ごろだ。私は水泳はだめだが、もぐりが好きだった。だからサザエをたくさんとった。

杉村 当時、太田先生はいましたか。

東 昭和十年頃はよく来ていた。一番古いのは経ちやん(近藤経一)だ。

近藤 私より宮下さんの方が古いです。その当時の教授は貧乏だったので子供はどこにも連れていけなかった。それで戸田寮に行かせておけば一番良いという考えだった。だから七つか八つの時から戸田に行っていた。

宮下静 私が取締のころは近藤君は小学生でしたか。

近藤 ちがう。宮下さんが三年の時、私が取締を初めてやって、その後三年つづけた。兵役をのがれるために長く大学にいた。戸田で日本の水泳史に残ることがある。

日本でクローリングが泳がれたのは戸田が初めてだ。また海の中にプールみたいなものを作って泳いだのも戸田が初めてだ。五十メートルのコースに小さなキャタツを六つ置いて飛込台を作った。私は日本のスポーツの黎明というものを書いてみたい。各種のスポーツの黎明を全部見ている。四つか五つのころから御殿下グラウンドに来ていた。このころの帝大の運動会の目標は日本選手権だった

た(私の父はボートの選手だった)。

春は向島の土手には桜がいっぱい咲き、見物人がたくさんいるなかでボートレースを行っていた。また、グランドには医科の若い看護婦がたくさん来ていた。工科は白、法科は青、医科は赤、三色に分かれて戦った。私は水泳が得意だった。生れて初めて金ももらったのは水泳だった。静岡商へ水泳のコーチに行った。初めて二等のキップをもらって得意になっていた。

杉村 最初に行ったのはいつ頃ですか。

近藤 明治三十七、八年だ。

杉村 私の姉が嫁に行った所で、白根竹介というのを知っていますか。

近藤 彼は知事だった。毎年、開場式というのがあって必ず来た。当時は東大のスポーツ部は日本のスポーツだった。まして水泳は日本中から戸田の大会にやって来た。一番強かったのは房州の安房中だった。その次に一高がいた。みんな三、四十人ほどずつ連れて来た。茨木中の三年までしかない五人のチームがあった。高石、入谷、石田、……と五人で来て優勝旗を持っていかれてしまった。杉本という先生が向こうの本を読んで何とかクローリングの形を覚えさせ、二百メートルを二分三十秒で

泳ぐようになった。その当時、日本の最も速い選手がクルールでなくて、二分五十五秒だった。

今、水上スキーが日本でも行われているが、日本の最初は戸田だった。戸板にのってやった。五百五十円で関西のボートを買って、それで引張ってもらった。

杉村 佐々木先生が初めて戸田に行ったのはいつごろですか。

佐々木 大正七年で大学二年だった。取締は辰野さんだった。

近藤 私はその頃子供部屋にいたので、きつといっしょにいたと思う。藤沢威雄、中村省吾、細谷さんの三人が委員であった。

佐々木 先聲で覚えているのは北さんという京都大学の教授の方、それから浜松一中の小池さん、一年先聲で覚えているのは朝倉さん、森田さん。

近藤 森田君は一人に一人のめずらしい人だ。彼はどうしても浮かなかった。戸田では二つの遠泳があった。横断するのと、回るのと。

宮下 文科からは取締が出なかった。本当は私は経ちゃんを推した。土田誠一学生監がいて、彼に文科からも取締を出すようにたのんだ。

佐々木 沼津の橋の下からボンボン蒸気が出たのはいつごろまでだろうか。

松下 昔は大島まで行く東京湾汽船というのがあった。近藤 昨年行ってみて、私は女がいたので驚いた。誰なのかと言くと東大の学生だという。昔とは変わったものだ。

宮下 学士部屋というのがあった。子供部屋もあった。子供部屋にいた人は後に偉くなった。学士部屋にいた人で覚えているのは辰野さんだ。

近藤 戸田で一番古い人は太田さんですよ。今は借地権はどうなっているのか。

杉村 昔よりずっと狭くなり、建物の回りだけになっってしまった。

東 表向きは無償で、契約も何もなかったが、村に教育費として百二十円寄付していた。穂積先生がこれではだめだから正式に契約すべきだと云った。そのためには村に土地を少し返してからでないと話にならないので、少し土地を返して村と大学で契約した。

杉村 その後また更新してさらに狭くなった。

近藤 お官の方のトラックもテニスコートも返したのでか。

杉村 はい、返しました。根上りの松と称する松の先にプールを作った。日曜日になるとあの小さな村に車が六千台入ってくる。

宮下 戸田の漁師たちとは昔は仲が良かった。

近藤 戸田の外海でカツオがとれた。いちばんとれた時は六千尾もとれた。鯨も湾の中に入ってきた。

杉村 大正七年にはマグロも入ってきたと聞いている。近藤 忘れないうちに云っておくが、後に国連大使になった岡崎勝男君という人が歌を作った。「きのう思えば

御浜の石を、教え教えてな お足りぬ」と。それから宮崎ゆうへいという人がいたが彼は加藤君の先聲で俳句を作った。「汽笛じょうと鳴るふんどのしの別れにや」と。夏も終わりにになると百人位いた学生さんたちがみんな帰って行った。そして九月十日になると寮を閉じた。しかし、

四人の人間がまだ残っていた。彼らはどうしてもいられなくなるまで戸田に頑張っていた。一種の戸田病にかかっていた。毎年夏は百日位ずっと戸田にいた。今の学生は一晩とか二晩とかで帰ってしまうが惜しいことだ。沼津に鈴木とかいううなぎ屋があったが今でもあるのか。

杉村 今でもあります。

近藤 加藤君なんかよく抜け出して沼津へ行った。

杉村 加藤さん、沼津の思い出なんかありませんか。

加藤 私は沼津に行かなかったよ。沼津へ行ったのは、東君や菅原君ぐら이었다。

近藤 彼は悪いことをしたものだ。

東 私が初めて総務部長で戸田に行った時には、その菅原君等が委員をやっていた。

近藤 いなぎの別荘というのは今でもありますが。そこに娘がいた。そしてその娘の歌まであった。

加藤 最初に戸田の建物ができたのはいつごろですか。近藤 非常にあいまいだった。最初御浜館というのがあった。そこに立派なおかみさんがいた。東大水泳部がその建物を借りていた。そしてしばらく後にそれを引き取った。その建物で今残っているのは滄海楼だ。

松下 昭和十二年、増田胤次先生が部長で、その時に三十周年記念の行事があった。だから逆算すると明治四十年前後になる。

近藤 それなら私が行った時はまだ御浜館のおかみさんの時代だ。

松下 昭和十二年の夏、三十年記念に長与総長に戸田に何かたためになることを、ということとで絵をかいてもらって小学校に贈った。

近藤 篠田治策さんが第一回の取締役じゃなかったろうか。

東 塩田さんが京都に行って見てきて伊豆のどこかにプールを作ろうかという捜して、土肥とか松崎とかが候補に上った。その時分から稲木さんとの関係が始まった。

近藤 太田という村長がいてよく寮の世話をしてくれた。

松下 私が連れてきたボート部の高田太郎という人が戸田の娘と結婚した。

近藤 昔は東大の運動会の見物人は女が多かった。みんなお母さんといっしょにおむこさん捜しに来たからだ。

戸田にプーチャチンの記念碑がある。いつごろか知らないが作られた。プーチャチンが漂流した時の娯楽館が残っている。年寄りのおばあさんで目が青い人がいる。

松下 ボート部のモーターボート運転をたのんでいた人で監物という人も目が青かった。村にロシア人の血が流れていて、夏に村の女の人を女中さんにたのんだが確かにかわいい子が来ていた。

近藤 村の女の人たちには女中に来たがっている人が多かった。

つけて動かしたら性能が良かったそうだ。ヨットが難破したという話を聞いたし、スカルやカヌー、伝馬船もあった。そしてボート部と水泳部から委員が出た。

近藤 原鴻太郎という人がマレーシアのゴム園へ就職したが、彼が三艘贈ってくれた。弟は原愛次郎で一高の名ピッチャーだった。兄の鴻太郎は六高出身で悪者だった。柔道六段だった。

杉村 黒田先輩、昭和の初めの話を聞かせて下さい。

黒田 小畑君という経済の人に勧められてやった。戸田で初めてトマトを食べたが青くさくてうまくなかった。それから昭和二年に学習院の白い船が戸田に寄った。海の青さとマッチしていたし、当時の学習院の女性の評判も良かったし、そんなわけで印象に残っている。また夜十時頃肝だめしがあった。酒も飲まずに半島の先の方まで行くのは恐ろしかったものです。

宮下衛 一番大きな事件は村と共同声明を出したことだ。昭和九年の八月ごろ春木屋の前で寮生と村の青年とけんかしたからだ。その時寮生は帰ってくれといわれたが村長も郵便局長もこちらの味方をしてくれた。また寮祭に県知事を取締が呼びに行っていたが、私の時代には学生課から竹原さん、高山さんが呼びに行った。帰りに

松下 おせいちゃん、ゆきちゃん、かめちゃんを覚えている。おせいちゃんは結婚しても来ていた。十年間も来たはずだ。戦争中は寮には誰も来なかったのですか。岸尾 はい。だれも学生は来なかった。

近藤 第一次南極探検隊が練習したのは戸田だった。

松下 半島の根元の方が遠浅のいい浜だ。村の小学校に水泳部が水泳を教えた。クロールはなかったが日本泳法だった。私がいたのは昭和十年から十二年だった。

宮下 戸田の水泳の歴史は古いが、技術はだめだった。しかし、しゃべる時はよくしゃべった。

松下 砂浜で泳ぎ方を教えておいて、水に入れて二日で仕上げた。

宮下 先輩がいかなでの上で一日中話をした事などをまとめると大変なものができる。

松下 ベルリンオリンピックの中継は戸田でラジオで聞いた。まだテレビのない時代だった。

小出 私は水泳部について、昭和九年から十一年と戸田にいた。戸田は日本の水泳史上大事な所だから、記録を残しておいてほしい。私がいた時には日本の水泳の先輩である松沢一鶴さんの話を聞いた。それから松沢一鶴さんが墜落した飛行機が何かのエンジンをモーターボートに

は大変ごちそうをいただいて帰ってきた。船いっぱいのスイカをもらった。これは三年上の先輩からの伝統で、寮祭だけは立派なものにしようという考えが強かった。

近藤 私の知っている高橋君というやつは全く浮かなかった。一年中彼は戸田に行った。四畳半でがんばっていた。彼は大学には十五年ぐらい在籍していた。

宮下衛 戸田に来る先生では二つのタイプがあって、学生に好かれるかいいじめられるかのどちらかだった。一番いじめられたのは丹波という薬学科の先生だった。その先生はいい人だったが、戸田に来ると寮生が待っていたかのようにいじめたものだ。特に辰野兄弟はその主役だった。

(中略)

松下 この資料を見ると大分新聞でたたかれていますけど何かあったのですか。

宮下衛 新聞に出てから私達は気づいたのです。いろいろ調べてみると春木屋に寮生が飲みに行き村の青年とけんかした。別にそのことはたいしたことではなかった。ところが県の方から農業指導に来ていた男がいて、その男が村会議員にいつけて、この際風紀を乱す帝大生は村から出ていってもらいたいと話した。そして村会でい

ろいろもめているのをある記者が取材した。近藤 その男の彼女を帝大生が取ったからだ。私はその男を知っている。

宮下衛 私の記憶では昭和九年の八月です。あの頃は何かやかんやいつて東大の寮を村に戻したかったから、そんな下心からも大きな問題になったんだ。

宮下衛 当時私が取締筆頭をやつて、藤原豊君とか牧野君とかがまずいからというので、村長、議長に申し入れた。できればそのようなやつを村として不問に付すようにしてやろうということ、三日三晩村に通つて村長に春木屋へ来てもらった。もう当事者は何とも思っていないというので、新聞の内容とは少し違つて、村長と共同声明を出そうじゃないかということになった。この作成には苦労した。当時学生課から監督に来ていたのはフットボールの竹腰さんで、この人が心配してくれて大学の方は私がうまくやるといつてくれた。寮生の皆さんがこの事件に腹を立てて、あの男をなじつてやろうという意見もあった。新聞が共同声明を出したことでやっとけりがついた。太田資時先生も手助けしてくれて、「私が村長に会つてやる」と云つてくれた。しかし何もなくて済んだ。そして村の人と寮生とで手打式をやつた。

宮下静 僕達の頃は、戸田寮区域に入ってくる人で男はいなかった。

宮下衛 私は昭和七年から九年と行ったが、私達の先輩の決めた取締のルールがあつて、それを守るのが鉄則だった。村の人が入つて来ると、稲木君が見張つていて怒つた。伝馬船とかで入ってくる人もみんな追い出した。

宮下静 私達の方に入ってくるのは村の女の子数人だった。寮生の食事の用意してもらうためであつた。男は一人も来なかつた。それから寮祭の時は県知事呼んだが、一時知事が来なかつたことがあつた。そうすると先輩たちが取締は何をしているんだと恐つたものだった。取締は「知事がどうしても用事で来られない」となだめた。代りに学務課長を呼んだら学務課長が来ました。

宮下静 戸田の土地を買つておけばよかつたが、運動会の水泳部の評議員は弱かつた。山川総長だつてすじを立てて説明すればお金を出してくれたと思う。

近藤 私は戸田の寮史はおもしろいものにして欲しいと思う。いろいろなつかしい思い出、感慨、エピソードなどもたくさん盛つたものにして欲しい。だって、戸田は、われわれの人生の貴重な一時期を形成しているんだから。

## 戸田の思い出

—過去と現在、そして将来—

私と戸田寮との関係は昭和三十六年以來である。ポータ部の夏の合宿も終り、九月の中旬に友人と伊豆旅行の途中、戸田寮を訪れた時のその静かで美しい戸田の海を今も忘れることが出来ない。木材で作られた古びた東大棧橋の囲りにキスが泳いでおり、青く澄んだ海底はかなり遠くまで地上から眺めることが出来た。古ぼけた東大寮の囲りは樹木や草花がいたるところにあり、外海の堤防の上に立つて眺める海と富士山の雄姿は、都会を離れて来た我々をやさしく迎えてくれ、いつしか現世の雑事を忘れ、心なごむ気持ちになつてしまつたのである。以來、毎年夏を中心に戸田を訪れるようになり、学生時代の戸田の寮委員時代をふくめ今や十六年の歳月が過ぎたのである。その間に出会つた友の数は限りなく、またその友情はどうも大学のキャンパスで得られるものではないものであつた。医学部卒業後もOBとして毎年戸田を訪れてきたが、現在は昨年より東京大学運動会の主事として現役学生諸君の戸田寮に関する相談事に若干の知

## 古田直樹

恵を提供し微力をつくしている次第である。

今、それら十余年の戸田の思い出を走馬灯のようにめぐらせる時、戸田寮祭のこと、バカヤロー会の誕生、マリアナ沖の海難事故、東大紛争、夏の救急医療、戸田寮の将来計画のこと等が特に強く思い出される。

寮祭の最後を飾るファイアーストームにおけるアトラクションは、我々の寮委員の時から一段と趣向をこらしはじまり、古代ギリシャの神話によせて、ゼウスの神が遠く沖に浮かぶ和船から泳者に引きつがれ運ばれた聖火をかざし、おごそかに開会を告げ、数十発の祝砲ならぬ花火がとどろいたのである。そして歌い、踊り、その情勢は深夜まで燃えさかり、星空の下、たき木の上をニンフのように飛びまわつたのである。

昭和四十一年暮に出来た、バカヤロー会についても、発会者の一人として、戸田寮の新しい歴史を語る時、一言ふれずにおられないのである。戸田で結ばれ戸田で育つた友情、また若人の情熱を社会に出てもっと強く抱

いで行こうという気持は皆同じであり、戸田寮を愛する一種の戸田音痴仲間集う会を作ろうということになったのは昭和四十一年夏の閉寮の時であった。そこで、三十八年当時の寮常務をしておられた林先輩(水泳部)を会長に、五十余名が集って、東京ステーションホテルで十二月に旗揚げをしたのが始まりであり、以後、毎年寮委員をした者が新たに加わり、いつしか十年の歳月が過ぎ、二百名を超える集まりになってしまったのである。バカヤロー会の仲間の最大の楽しみは、毎年夏に戸田で集いを持つことであることはいまでもない。その間、忘れてならないのは、前戸田寮委員長であった医学部出身の、日野先生の励ましと御助言であり、先生が繰り返し我々に語られたバカヤロー精神というものが、我々の友情にとって、また人生訓において欠くべからざるものとして今も存在しているのである。その注釈をする資格も、能力もない私であるが、もし私自身の一つの解釈を述べる事が許されるとしたならば、「虚色を捨てて常に裸の自分自身で相手に接し、友のうれしいに我は泣き、わが喜びに友は舞い、そして一たび大事あれば、自分の持つ力と勇気の全てを持ってそれに敢然と立ち向かう精神」とでもいうものではないかと思っており、私の一つ

の人生訓と考えている。

さて、そのような我々の回りでも決して天下大平であったわけではない。戦後のいくつかの変遷の中の一つとして、大学の自治のあり方、また医師養成制度についても問題があり、それらが一度に東大紛争として燃え上がり、今考えれば非常識なまでにエスカレートしてしまっただ。それは昭和四十三、四年にかけてであった。当時、結果として戸田村の方々にも若干その余波で御迷惑をかけたことを大変残念に思っている。その間もバカヤロー会は不思議と団結が堅かった。もちろん闘争理論としては全く違う仲間が多かったが、東大紛争はバカヤロー会との後に良い試験にこそなれ、不幸な事態は招かなかった。これは、バカヤロー精神のお陰であろうと思っている。

戸田村が七十四名の働き手を一時にして失ったマリアナ沖の海難事故は我々にとって大変悲しいことであり、我々は直ちに大学のキャンパスを中心に義捐金を集め、わずかに数日で当時としてはかなりの金額が集まり、戸田村へ送ったが、これもバカヤロー会の活躍と、もちろん大学当局の努力によるものであった。

十余年の間に戸田村の景色は少しずつ変化していった

が、このマリアナ沖の事故はその後に大きな変化をもたらした。つまり、これら犠牲者の家族の生活補償として

国民宿舎が建ち、これを契機に村の観光開発、すなわち民宿の増大と海水浴客の増加であった。それまでの内海の静かな海面は海水浴客のつけたサンオイルのために汚れ、海浜は夜も都会から来た若人の行きすぎた騒ぎ等で風紀もみだれ、それまでの静かな戸田に一挙に自然改造の浪が押し寄せて来てしまった。今までの草花はなくなり、かわりにコンクリートの舗道が敷かれ、広大な有料駐車場が寮の囲りに出来上ってしまったのである。これは現代文明と戸田村の当時の利害が一致したことに基づくものであったからに他ならない。もし、このままさらに自然破壊がなされれば、遠くさかのぼると明治三十年代に始まり、戸田村の歴史と共に歩んで来た東大戸田寮も今後は全く存在理由を失ってしまうのである。戸田寮は今も昔も、東大の学生保健体育施設として存在しているのである。静かで美しい自然環境が奪われ、そのかわりに現代文明の醜い姿が戸田村に満ちた時、悲しいが住みなれた戸田寮を訪れる者はないであろう。その時我々は戸田村とは別れを告げるしかないであろう。また戸田寮が消え去ったときの愛すべき戸田村を考える時、醜く

肥り、公害で病んで汚れた戸田を思わずにはおれないであろう。

もし寮が今後も東大の学生のため、村のため、美しい戸田の自然と共に永く存在することが許されるとしたならば、東大当局も長い間お世話になってきた戸田村とともに必死になってその自然保護、また戸田村民の方々の健康管理などにも援助をつづけることが出来ると私は信じている。戸田寮の改築についての試案は古くから検討されてきたが、最近ようやく遅まきながら東大当局も老朽化した戸田寮の修理を昨年以來行い、また近々恒久的な寮の改築を行いたいと考えているようであり、私としてもその問題に関して微力ながら村民の皆さんの協力を得てその実現に向けて一所懸命努力するつもりである。

ここで戸田村診療について一言述べさせていだきたい。人口五千を有する戸田村に、日常村民の健康管理をあずかる医師は二名程在任していたが、各医師の健康上あるいは個人的都合で事実上不在の日が多く、無医村の状態が多々存在していた。そこで戸田村当局は医療協力を東大へ再三要請し、それを受けてまず出来ることとして昭和四十八年以來毎年七、八月の土、日曜の救急医療を私が以前勤めていた三井記念病院の協力のもとに引き

受けることになった。主に海水浴客の怪我、病人が対象であったが、その内容は、人命救助から脳卒中の予防まで多様をきわめた。一例をあげると四十九年には橋本医師(東大第二外科)が地元の中学生を溺れている状態で発見し、救急蘇生を行い、沼津の病院へ連れて行って一命を救助したことがあった。また昨年の秋は村民の老人検診を依頼され、三百余名の老人を東大病院の協力により専門医による検診を施行し、放置されていた病人の発見、当座の治療などを行い大いに喜ばれた。昨秋より村唯一の開業医が他へ引越し、全くの無医村となったため今年始めより前寮委員長の日野先生の御尽力により、蒲原病院より増田先生(本学の先輩)が村医として着任された。村としては今後は増田先生を中心に健康管理を行うことになったが、決して充分な状態ではなく、今後も我々に協力要請があれば出来るかぎり最大限協力をおしまないつもりである。これら今迄の医療協力はわずかなものであるが、我々に都合のつくかぎり専門医師団の検診等を今後もつづけてゆきたいと思っている。なお村民の東大病院への診療依頼については戦前から特に医師の紹介をつづけており、その数はおびただしいものとなっている。

最後に、今後の東大戸田寮と戸田村との友情の一層の発展を望みつつこの拙文を終ることとする。

第一回東大戸田マラソン大会から帰って

昭和五十一年六月七日 記

(運動会主事)

#### ○医師引き無料診断

医療過疎に悩む戸田村

(戸田) 医療過疎に悩む戸田村で二十五、六日の両日と十一月八、九日の四日間、東京大学付属病院の医師を招き六十五歳以上の老人の健康診断を実施する。同診断は無料で一般の住民でも持病に悩む人は受診出来る。

同村は今年九月から小児科医が一人になってしまい、急患の扱いや平常の健康管理に住民の不安は大い。そこで村は一昨年からは夏季だけ救急医療をうけてくれている東大付属病院に住民の健康診断を依頼した。同病院側でもこれを快く引き受け、今回の診断となった。診断の内容は消化器、循環器、リウマチ、心電図など、ほとんどの分野にわたり、カルテは村で保存して住民の健康管理の材料とする。診療場所は同村大中島旧柳原医院、日時と対象部落は次の通り。(以下略)

(静岡新聞 昭和五十年十月二十四日より)

## 昭和二十三年、寮日誌より抜粋

寮委員 山田正仁、紺野邦夫、米倉 亮

七月十七日 滞在者約百十一名。部屋割り、布団の配分に最も苦心する。八畳に七人、十畳に九人等の超満員の部屋も出現。布団は一五、六人分は不足。夜十時頃までかかってやっと整理。女子寮の設置は一応成功。

朝食の際五食分行方不明。監視人を必要とするは悲しむべし。

貴賓室の配線工事完成す。

無許可来寮者、滞在延期者多く、手数増加す。

——戦後の混乱期での寮運営がわかる。部屋割り、布団の配付の苦労は戦前から同じで、布団の数が絶対的に少ないので、寮生が百名を越すといつもこういう苦労をしたのである。

八月十七日 水泳大会 村民集う者約千。船が御浜に集まり愉快である。式次第および競技は案の定準備不足が目につく。来季から改めてしかるべきであろう。

菊井、佐々木両先生来寮。水泳大会の司会は加藤先

生、閉会の辞は瀨田先生、閉会の辞佐々木先生、だいたいの準備不足にしては上出来のほうであろう。

夕方、村の有力者と会食する。酒の勢いに乗じて村、大学双方ともに勝手な熱を上げたが、相互には良かったと思われる。

宿泊許可証なしで泊まる学生が二、三みえる。

寮の諸問題は結局、村の青年との融和により両者共に手を取り合う形から解決もできるのではないかという気がした。これは来年の開寮に関して諸々考えておくべきことであろう。

寮と村との融和には、文化会等ももっと利用しなくてはならないように思われる。運動会、文化会、協組、この三者のスクラムの上に寮が成立し、それが村民と大学とをむすぶ中心とならねばならないであろう。

食堂の件についてはもうすこし協組としても考えるべきであろうし、また運動会としても考えるべきであろう。女子来寮者に問題があるような気がする。

八月十九日 臨時宿泊者がふえてくる。これに問題がある。また、学生の名を借りて他人が来ることが多い。これもまた問題にしないでほならない。

部屋を男と女によって区別する事はもっと徹底的にやるべきである。むしろ女子寮めいたものを一つ別に作るか、三つの建物の中一つをそれに当てるのも一考だろう。

船の整理は相当むずかしい気もする。村と野球試合を行う。圧倒的に征服する。しかし、これは非常に懇親をはかることができた。

八月二十日 閉寮のため整理を行う。自炊にうつる人が相当にいるが、これもまた問題を残すであろう。

夜、解放されるためのコンパを行う。ついで内田氏(村会議員)の宅まで出掛ける。

来寮者が寮規に違反した場合のこと、寮規に関してはもっと考えを廻らす必要があるような気がする。宿泊、男女同権、学職の呼称等々と具体的にはいかに解決するかは困難な問題である。

寝具員数

掛蒲団 一〇四  
敷蒲団 一一三

蚊帳 二四張  
枕 九二  
娯楽品

麻雀台 三  
碁盤 二  
碁石 一組  
将棋盤 二  
将棋駒 一組

八月二十七日 早朝雨風激しく午後一時雨止み、退寮者十余名あり。順幸丸に寮前に船を着けてもらい、和船で乗船させ、船をつないでおく。

二時着の船へ客を迎へに行くも船は波高く危険ゆえに歩いていく。風のため二時着の船が遅れて四時に着く。客来らず、にしき丸の船長より大学の伝馬船が七島方面に漂流して居り、救助せるも波高く船は大破し、櫓だけ船に持って帰る。話を聞きすぐ寮に電話を掛け人員を点呼するも、一人船に乗りたるを他の人が見たが一人どうしても居らず。駐在所へ行き、消防組の援助を得て順幸丸をたのみ、大瀬岬まで探索するも分らず、止むを得ず引き返す。明日の探索準備を話し、十時過ぎ寮に帰る折

り遭難者来り。波のため外海に流され、船より海上に飛び込み岸にたどり着き、山を越えて帰りたる由なり。遭難者は水戸高 飯島侑。

八月二十八日 学生課長殿来り、事情をお話し巡查と

## 落書帳より

松並木の間にちらちら見える青色のバンガロー、東大もさばけたもんだと思っただのはつかの間、その反対側のいとくろはしき Colander、おおこれぞ東大戸田寮。

委員に連れられて玄関に到着、名前を控え、次なる部屋に行けば、おお美わしき乙女がにっこりと微笑んで諸君らの米代を集めたのは御承知の通り。

受付嬢の紅唇にフラリとしながら、二階に案内され、この四号室に辿りつけば、再び脱帽!! 昭和二年製という歴史的フトンとマクラが諸君を柔く(いやしつとりと)待って居るのです。今頃、B・H・Cを忘れて来た事を悔んでも *in spate* になわね。

腹を減らせて帰ると、おお「めし」「めし」が待っています(映画の広告でないことを特にお断り致します)。それも炊事の美わしき乙女等の汗の結晶(本当は汗も少しはいつているので

にしき丸、消防、順幸丸へお礼に廻る。和船は流失、行方不明となる。

寮費は学生二百十円なり。なお、他にピンポン玉三ヶで七十五円。

しょう)。とにかく味も何もわかりはしません。ただ食べるのです。ほら今頃になって受付嬢の思わくを気にして、一合なんて書いた事が後悔されるでしょう。男子たるもの見栄はすてて、三合位に書くべきでしたね。しかしこれも *in spate* 夕暮れともなれば、美しき声がセレナードを唄うのを諸君は聞かもしれません。その時あわてていけません。多分それは食堂のラヂオです。

まあのおんびりと散歩にでも行きます。波打ち際を何処迄も二人は歩いて行った。さっき落とした食券を探して(食券は再発行致しませんと受付嬢が仰せられたことを remember)。まだ元気があって困る方のために、ピンポンの設備(決してピンポン台とは申し上げません)があります。大変親切に縦横の寸法が短く、なかなか球が入らぬ様に出来て居ます。

汗を出して一風呂浴びようと思っても、あわててはいけません

ん。入口の札に御注意！「只今女子入浴中」。千万人といえども我行かん等ファッションがかっていけません。君子危きに近よらず。

やがて日はとっぷりとくれて、あちこちでガチャガチャと虫が鳴いている。ああ戸田はいいなあと思うと、時々ロン・ボン・チー・カンと変な鳴き方をします。麻雀という一種の鳥が戸田には多いと動物学の本に書いてありますよ。

でも皆さん十二時には休みましょう。よりよき明日のために。ああ、今日はこれでおしまい。皆さん静かに今日一日を反省しましょう。先ず第一に二十分間も下の落書きを読んだりも決してしないこと。ではお寝みなさい皆さん。

今迄読んで来た人は BAKKAYARO

(このころの寮生活がよくわかる一般的な寮生の感想落書きである。時代色を感じさせるところがとろとろとろちろちろあらう。)

(学士四号「落書帳」より S二七・七・一三)

石らここに吹く海を固めたり

海に飢ういそぎんちやくに指を吸わせ

屋ながし海の痕ある石のへに 生野ゆき女

浜木綿のかなしきは群れ咲きて

白日光にてらされぬたり

辛吉

戸田の良い所

海岸に近い

ピンポン・野球などがある  
時間が規則正しい  
戸田の悪い所  
食堂がふせいけつ  
フトンが少ない  
水道が出ない

(S二七 子供の感想)

一九五二年八月二十六日

水泳不能なる学生生徒に告ぐ。

一、フトンには昭和二年製が最新なる事を覚悟せよ。

二、溺れる事を必ずしも欲せざる諸君は絶対に英語及独語のことを考へべからず。

三、第三日目に注意せよ。溺死せるものは、総て第三日目なればなり。

四、海水以外の生水は飲むべからず。但し海水は飲めば飲むほど水泳上達し、一升飲めば確実に貴賓館に安置さるべし。

五、この貴賓館は、我々の土左衛門を安置せる所にして、未だ定員に満たざれば、安んじて溺死されたし。溺死後の住居に事欠くことなし。

六、海岸中央より向って左は岩礁にして足の頸動脈を切る恐れあり。向って右は赤線区域にして深みにはまれに必磁マヒの恐れあり、中央より先に進めばイクスあり、近寄るべからず、故に水に入るべからず。

七、幸いなるかな、トランプをさげすむもの。その人は神の

子となる事を得ん。

八、溺れんと欲するものは次の項目を厳守せよ。これ当寮の輝やかしき伝統なり。

(a)人の足をアゴで引張ること。

(b)出発の朝一時間半にわたり英語の帯取りをすること。

(c)食券は判り易い所に安置しておくこと。

九、尚、当地の地引網は一ヶ所の穴もなく優秀なれば、土左衛門となつても遺骸紛失の心配なし。

十、ねむくなつたので以上終。

午後六時半。

生水飲む生水飲むなの御意見なれど、生水飲まずにいられるものですか、だがね、あなたも泳げない身になつてみやしゃんせ、ちよつとやそつとの御指導なんぞ泳げるものですか。ちよつとねえさん板もつてこい。

(「落書帳」より)

夏の戸田釣り入門

伊豆西海岸は一、二、三月頃西風が吹き釣りはむずかしい。四月に入ると生イカを餌とする大鯛、鯛、平目など海外で釣れる。六月に入るといけすができて、それについて(鯛を追つて)入ってきた鯛・平目・黒鯛などの釣りが盛んになる。小物(むつ・きす・かき・しら・こち・あじ等)は場所と仕掛を吟味することによっていくらでも楽しめる。

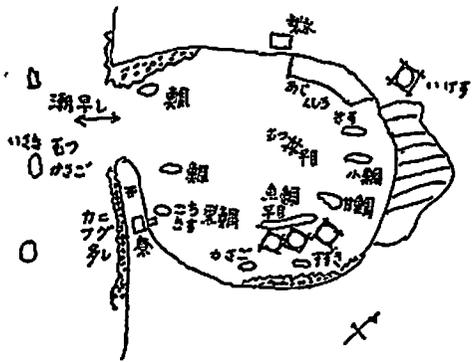
大物は職業釣師が日夜狙っている、なかなかむずかしい。湾内で鯛で釣れば鯛・平目・黒鯛は大きなものばかりで、一尾釣つても千円位で売れるので、寮人はなかなかのことであ

る。海老を餌とする鯛釣りは二〇〇級級から貴族のものまで来るが、釣る技巧がむずかしい、少くとも二〜三夏修業を要する。大物はやはり自分船頭で気長にやらぬと、一回や二回職業漁師と出かけても釣果を期待できない。

職業漁師をたのむなら、湾口内のむつ、いさぎ、あじなどは確実でしかも沢山釣れる。一般向きで面白い白きすも年々少なくなる様で残念である。ばしよりいか(大きな一貫メもある)の餌に生きた白きすを使うため乱獲するためか、黒鯛のにこし釣りなどもいいが、これといって寄る所が少ないので寄せる元気がいる。ほらは、鯛が多いときは漁師に頼んで、腐った鯛を何杯もほうりこんで寄せ

ておいて釣ると何十も釣れる。黒鯛(海津)を釣る研究が夏の釣りを楽しむのに一番である。——といった釣りマニアの解説も散見できる。当時は今とちがって魚も濃かつたろう。

(S二七、八、三)



昭和二十八年七月十六日

# カナヅチ新聞

創刊号

但し以後  
廃刊

責任者

〇〇〇〇

## カナヅチ大挙戸田へ

一昨日十四日午後、倉田外五十名

〔戸田発WC共同〕

一昨日十四日十二時三十分、沼津発の東海汽船に五十一名の東大生が来船した。彼等は全員カナヅチあるいは、カナヅチである。

引卒の教師、(下等教授) 談

東大生たるものは全て泳げなければならぬ。その意味で我々はこの講習会を企画した。

〔戸田発共同WC〕TOILET

記者よりの電報によれば戸田湾内の海水は約二斗五升程度減じたといわれる。これは先日戸田に着いた東大生が一人当

り平均約五合以上海水を吸収したことによるものと思われる。

〔戸田にて子守記者〕

戸田湾内の減水についてカナヅチ代表の倉田東君(十八才)は次のように語っている。「なお子守記者もカナヅチであることを付記する」

倉田東談

平均水深二米の所に無理に沈められたので、一人平均五合は呑んだと思われる。そのために夕食の味噌汁の売れ行きが悪かった。

(以上保羅吹新聞のNORRO氏提供)

〔十七日WC共同(戸田発)〕

カナヅチ組一班の者十三名は一、二号室をブチ抜いて夜八時半より盛大なコンパを行なった。このコンパは寂始まって以来の盛大なるもので、その騒音は湾のはるか彼方の村までとどろき渡り、そのため通常は夜、湾内に入り来たる管の魚が全く入り来たらず、十八日早朝に漁夫代表より正式に抗議を申し込まれた。これに対しコンパ代表の神参君は次のように語っている。

我々はあくまでもコンパを行なう。それによって魚が湾内に来たらずとも、我々の食事の品質はいささかも影響を受けはしないであろう。またコンパをすることによって毒魚などの侵入を防げることが出来るし、今後より以上に断固コンパを行なうであろう。

神参氏の秘書 船主高階氏の談

神参氏の主張は全く正しく、漁師の抗議は全く当を得ていない。神参氏自身も毒魚の被害を受けているし、我々としてはこの点において一歩も退けぬ。

△解説△

右記事中の「毒魚」について頭狂大生水産科の教授は次の如く説明した。

この毒魚はサンカミツクという学名で毒魚の種類ではその容姿醜麗にもかかわらず人間に対する害は最も顕著に現われる。人間界にしても容姿醜麗なるメツチェンという種が大なる害を及ぼすようである。

それに対する予防策は絶対にその魚を近寄らせないこと……その点、人間界と共通している。

人間の体は海水には浮くように出来ている。それを浮かさないようになってしまったのは実に我々人間の祖先が陸上に住むようになつてしまつたからである。

すなわち、地球上の三分の一のみが人間の行動範囲になり、あとの三分の二では著しく行動がしにくくなった。人間の不幸はここから始まつたのである。

(帽子番号十一番)

戸田の良い所

①餌無しで釣ができます。(注、我々は一週間もねばつたけど一匹も釣る事は

できなかつた)。

②きれいなEggがみえます。

③戸田の村人は人情厚く親切です。

④気候 風光については云うのが野暮。同じく良くない所

①雨の降つた時の気持ち。

②もつとお魚を食へさせなさい。

③お風呂のこと

④便所に蛍光灯をつけること。

二合五勺の飯でもまだ足りぬ。どうしてこんなに減るのだら。全身くらげにされた痕だらけ。近頃はもうさされてもかゆくないんだよ。

お客が減つても増えても忙しさは同じくらい。然し減れば減る程度疲れるヨ。これはどうした事だべし。どうして話がかくも落つるのでしょう。上つたためしない。

始めて来た夏にヤヨタ多く、遊んで食えると聞いたげな。夜毎夜のテンマ上げ、毎朝早く船を下げ、ついでに早起きのメチを載せ見え見え富士を見せに行く。だがしかし、かく云う俺が着いたなら

ば、降りたる雨も昇天し、隠れるオヒサマ笑い出す。ツイデにニキビも笑い出す。委員とは、かくもいそがし、手の平は、傷の又傷、雨を望みて、空を眺むる。

### 黒帽大安売り

泳げぬ人も、泳げるように見えます。但し溺れても誰も助けません。

### 求ム水泳に自信のある女性

一日カナヅチの相手を頼む。報酬は物心両面より。委細面談 (帽子番号九番)

### 浮袋貸します

ダンブカーのチェーン。格安絶対沈みません。

### 求ム容姿端麗にして水泳の出来ない女性

一生運、生活保証。

(当方帽子番号八十四番)

戸田の数え歌

一つとせ  
東京はなれて戸田に来て自然を楽しむ東大生、  
こいつは呑気だね 呑気だね  
二つとせ  
二言目には馬鹿野郎挨拶代りの東大生  
こいつは呑気だね 呑気だね  
三つとせ  
三保の松原思わせる巴の海の美しさ  
こいつは素晴らしい こいつは素晴らしい  
四つとせ  
夜の海原眺れば漁火たゆとう波の間に  
こいつはすばらしい すばらしい  
四つとせ  
いつも同じおかずでは缶詰食べたくなる道理  
こいつはもつともだ もつともだ  
六つとせ  
むかしの想いにひたるため戸田に来たるか学士さん  
こいつはもつともだ もつともだ  
七つとせ  
なかなかきれいなお嬢さんつらつら見とれる東大生  
こいつは楽しいね 楽しいね (事実には非ず)  
八つとせ  
闇の夜中に舟を出しスリルを味わう金組隊

こいつは楽しいね 楽しいね  
九つとせ  
故郷はなれて五日間滞在期間も今日限り  
こいつは名残り惜し 名残り惜し  
十とせ  
とうとう船に乗り移り花 (浜木綿) にもバカヤロー叫びつつ  
こいつは名残り惜し 名残り惜し (S二八・七・二四)

戸田の長雨 (戸田情話)

どうしてこんなに降るのだろう  
不思議に思っ  
ばあさまにきいたなら  
きいたなら  
ばあさま曲った腰をなでながら  
わたしや八十になるけれど  
こんな長雨はじめてだ  
はじめてだ  
ばあさまの物語り  
そもそもこの村戸田にや  
プチャーチンの物語り  
語り伝えておられます  
おります  
はてさてばあさまいっわっしやる  
その物語りとは何ぞいな

どうぞ話して下さいな

下さいな

ときは安政のはじまりに  
駿河の国の湾内に大きな津波押寄せて  
ディアナ号は沈没す  
それから話がはじまって  
はじまって  
帰りの船をつくるのは戸田の港とさめました  
それから幾多ロマンの花咲きぬ  
異国の人の深情け  
深情け

ディアナ号の船長のプチャーチンにも

やさしい日本娘の恋人が

ありましたと聞きますする  
聞きますする

月日は流れる矢のように

苦心の作の新造船

帰国をせねばなりません  
なりません

またあうことを誓いあい

別離の涙ながしつ

帰国の途につくプチャーチン

その後娘は毎日をなきなき暮し

みどり児一人を残しこの世をば

心残して去りぬれる

去りぬれる

わかったばあさまこの雨は

あわれな恋の物語り

清き娘の涙ぞな

涙ぞな

ばあさまニッコリ腰のばし

やれやれはようなお天気に

ならぬかの

ならぬかの

(S二八「落書帳」より)

戸田寮入寮者心得

- 一、水泳に来たと思ふな、麻雀に来たと思え。
  - 一、勤酒、勤煙せよ、禁勉せよ。
  - 一、他人の物を間違つて持ち帰る事はあつても自分のものは決して置き忘れるな。
  - 一、委員を見たら「馬鹿野郎」と言え(思ふ)。
  - 一、毎夜戸田村に行き豪遊せよ。
  - 一、落書きは、ただノートにとどまらず壁、襖、廊下、天井など豪勢に行なえ。
  - 一、腹が減つたら大鼓をメチャクチャ叩け。
  - 一、退寮時は必ず土産を持ち帰れ(註参照)。
  - 一、生贖の魚を大量いけどり乾物にして持ち帰り知人に配給せよ。
- (戸田に名物数々あれど、すさまじきは風呂屋の女風呂な

り、ゆめ忘れる勿れ）  
註、戸田の土産は数々あるよ。一、サンダル（二人五足まで）  
二に金だら、三に枕、持てるお方は太鼓を持って行け。  
右の事についてある寮生の批判。  
太え野郎だ、現代青年の鏡とするに足る、と書いてある。  
（学士十四号「落書帳」より S二八・七）

○ 巻頭言

諸君は俗世の塵にまみれてその日その日の糧を追う人々のひしめき合う町東京を離れて今山紫水明の地西伊豆の戸田なる港に、しかも東には伊豆の山脈により逆海月の巻と隔てられ西には太平洋を望む場所に来ているのだ。だが諸君、諸君はこの東京大学御浜寮の一住人である限りここにはこの習慣慣例や規則のあることを忘れてはならない。そしてそれらの事柄が完全に守られる限りに於て諸君は大自然の恩恵を充分に享受すべきである。最後にこの小冊子が諸君の心情の吐露により美けしき珠玉とならんことを希望んで竹ををく。  
戸田を愛する 一人として 学究

○ 「滄海一号の落書帳」 S二八・七

馬鹿野郎

馬鹿野郎の大安売は国会と戸田。  
しかし考えてみると馬鹿野郎を大安売りする者は未来の総理大臣になる素質があるとも言えるのではないだろうか。  
（S二八「落書帳」より）

われは寮の子

しらみの子  
いつもモノモノ動いている

体は白く足おおき

戸田なる寮のシラミ子は

紅き血潮のもゆる夜

はかなき恋に泣くとかや

誰がうまいと言問わば

色黒き男は最下等

ゴツゴツしていて口疲る

最上等は二八の娘

恋しりそめし乙女子は

血潮に甘きにおいあり

ぶどう酒のごとわれもまた

同じ想いにくるうとか

我れはおんみらのヘソの上

うまき盃くみかわし

よごとにつどいまだいする

うたはたのしノミの唄

伊豆のあたりはなみしづか

ホトのあたりもやすらぎの

いこいのやどとなりぬらん

ねむれ乙女子やすらけく

（新二階十号室 S二八・七）

寮のラジオは聖徳太子が発明したものだそうなる程、一度に三つ位の放送が入ってくる。それではダンスを始めましょう。河童ダンスに盆ダンス、次にトンコ節から何でもござれ、ワルツにタンゴ、ルパンにトロッコ、どじょうすくい、エイサッサ。あれれ!! ドン・ドン・ドンと響きわたるは何事ぞ。出陣太鼓の音が、はたまた、オマツリの太鼓なるか、何はともあれパヴロフの条件反射の原理にしたがい、我れ食堂に急ぎぬ。飯を食いながら戸田寮の次なる歌が出来ました。

一、戸田寮のタタミは悪し

目覚める男の子等

みな腹が減る、みな太鼓打つ

ト拉拉ララ

ト拉拉ラ ラララララ

二、波打際に遊ぶ男の子等

あかきからだは

ブクブクもぐる 塩水からし

どよもす村びと

眠られぬ歌 見覚ましの歌

ヘタだヘタだとおっしゃいますな

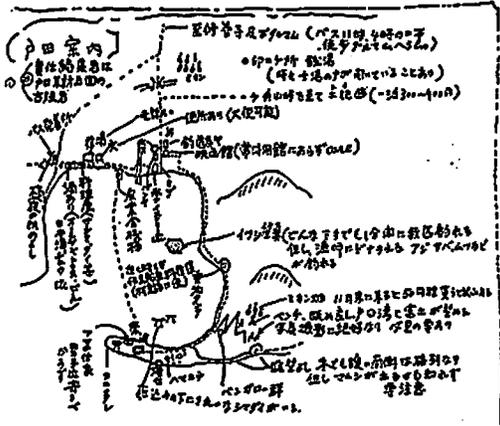
ヘタはヘタなりに泳げます

トマトのヘタまで喰いながら

耐えた男の子の腕見よ

我れ戸田の三日間、平泳百メートル、エベレスト征服以上の大なる業績である!!  
タタエ タタエ タタエン!!  
（学士三号の男）





学生と同じであって、決して低くはないのだ。  
東大女子学生の皆さん、東大の女子学生は皆美しい、と言  
う評判をとるように努力しましょう。  
今後、この部屋にお泊りになる方の中で、私の相談相手にな  
って下さる方がありましたら、下記の所まで連絡して下さい。  
どなたからでも心からお待ちして居ります。  
〔落書帳〕のトビック S二九・七・八

卒業論文題目  
すだれ敷布の特効について  
使用法  
すだれを敷布と掛布団の間に敷く。これは夏期、特にのみ、  
織、しらみ、南京虫の類に悩まされる時用いると極めて快適で  
ある。  
特効  
前述の害虫を生かしながらも被害を受けないという極めて良  
い平衡関係が成立する。  
1 極めて風通しよく健康によい  
2 湿気を防げる  
3 敷布のよこれから自らを守ることが出来る  
4 極めて寝心地よし  
以上の理由でもって全人類は今後すだれ敷布を用いられた  
し。  
なお今後財を貯えんと欲する者は、本寮委員会、または本論  
文提出教授を経て小生に問い合せられたし。  
涼しさや  
すだれを通る磯の風  
すだれ敷布については特許はそのうち申請する予定、大手某  
メーカーより製造一手販売引受けたしとの話あり、  
(S二九理学部学生、二年生)

カウント五十

コレハ何ヲ意味スルカ、一人ニアテガワレタオ湯ハ金ダライ  
一パイ也、コレデマズナガシテ、入ル時間カウント五十ナリ。  
行列シテ、入浴ヲナスマタタノシ。湯ブネニツカルノハタダ一  
人、二人入ルトキハ一人ノツカルノニ反比例シテ一人が出ル  
ワケナリ。コレ「フロシソー」と名付ケルノガ適當ナラス。  
(風呂入浴の様子 S二八)

ある女子大生の落書きより

一九五三年 八月二十四日 昭和大納言  
○一山百円位の東大生がたくさんこの寮に来ております。  
○戸田名物、ゲジゲジ、毛虫、くも、蚊、蠅その他。昆虫探  
集も可。  
○いとおしきものは昭和二年新調のふとんなり、落書きしたる  
人の筆跡、破れ障子など。  
○にくきものあれど、中ではなもちならぬ願したる東大生。  
そのほか言うものうき程なり。



大漁!

二月十九日につかまえたもの。  
ひとで 二つ  
やどかり 十  
なまこ 一  
ふぐ 三尾  
うに 三  
かに 二匹  
いそきんちゃく 二  
貝類 多数  
(S二九・三・一九)

これらのような記事が落書帳にみえる。二十年代の平均魚獲  
高といったところだろう。

求む相談相手

昨夜、宇佐美の寮に一泊したら、ああ、寮の壁にも東大の女  
子はウレシヤンと書いてあった。私は東大の女子学生の一人と  
して、断固このような侮々恥々に反戦しなければいけないと思  
った。世達でも同様な考えを抱いている人々が多くいることを  
思うとき、結果的には頭の良い女子は美しくない。つまり、反  
比例とでも考えているのであって、それは言う人の頭が悪いか  
ら、そのようなひがみを言うのだと思う。  
どうせ私はそんなに綺麗ではない。そして私より以上の人も  
少ないことも事実である。しかしそのレベルは他の大学と女子

○ 戸田寮案内と、泳げぬ人と泳げない日の為に何をしたら良いか

- 一、先ず入寮のとき委員に護衛をすり、なるべく良い部屋に入ってもらおうよう努力すべし。仲間に女性居れば有利なり。
- 二、食事時は太鼓の近くにて待機せよ。飯は早いほど良しとす。
- 三、北方百メートルに神社あり、そのあたり静閑にして散歩によし。特に恋を語るに最適。
- 四、便所に入る場合マスク着用、目薬を用意されし。



- 五、飲料水は理想的生理塩水なれど、飲むと腹痛を起す恐れあり。
- 六、米持参の場合、ピンハネされる恐れあり。計量する時鋭いまなこにて監視せよ。
- 七、副食足らざる数、生簀の魚逮捕し煮焼きして食せ。但し、炊事場の小母さんに依頼する場合相当な政治手腕を必要とす。

○ 泳げない日には

- 一、裏海に出て石と石と間を物色せよ。興味ある生物多し。ナマコ、ウニ、カニ、サザエなど。カニは甲羅の味噌が美味なり。ナマコの酢の物は一杯やるに最高なり。
  - 二、釣道具あらば、アジの切味を餌とし海中に沈めれば、すこぶる大きアナゴ釣れるべし。
  - 三、寮委員をまるめ込み船出せるなら、寮前面に浮べる生簀で釣るのが一番確実なり(釣堀りと同じである)。餌は、タモにていわしを掬い背の肉を釣にさし糸をたれば、鯖、アジ、ムツなど、戦果大なり。
  - 四、好奇心にて戸田村に行く奴が居るが、ムダ、何もなし、ヨシナハレ。(十九号室「落書帳」より S二九)
- 学士八号室滞在者より  
以後当室に入る者に告ぐ。  
一、麻雀台一台を寄附すること。  
二、足は廊下のゴミ箱を使用す。

- 一、上の板は押入れの中に隠してある物を使用すべし。(註・これは小生等が生命の危険を犯して太鼓の下の渡り廊下の板をだまって借りて来たもの。委員に見つかるは大変です。気を付けること。)
- 二、パンツ乾燥装置一式を進呈す。
- 三、最後に重大なるニュースあり。

(註・これは廊下に張ってある麻ひものことであります。前記の者がこの部屋には吸血虫が一匹も居らんと言つとるが、それは真白からであります。南京虫、蚊、のみ、その他新種がたくさん棲息しておりますぞ。

○ 筆者 徳田球二、鼠小僧次郎長 (S二九)

○ 寮の改善要求

- 一、学生証により、ビール、酒、その他一切を無料とする。
- 一、入寮者男子については知能を、女子については容貌を吟味し厳選すること。
- 一、寮の前面の海面に生簀を作り魚を手握み出来るようにせよ。
- 一、午前十時、午後三時には、男性には生ビール(無制限)、女性にはアイスクリーム又は良く冷えた西瓜(一切無料)をサービスすること。
- 一、便所は水洗とし、極上の香を焚き臭気なきようにすること。
- 一、起床時間制限なし。起きたとき起き、随時太鼓を叩く事が

できる。

- 一、雨天の日は大賭博を開帳せよ。寮委員は貸元となり、素寒貧になった者は、丁重に扱い、東京までの旅費、弁当、小使錢を支給し船に乗せバカヤローと呼び最敬礼をすべし。(離れ十七号 S二九)

○ 戸田の生い立ち

神々の語るに基きし歌

- 一 空も水も ひとつに輝いて  
日は玉にうつり 降り散る  
水の珠 日は吹きそよぎ  
波間に ひらめく魚影はかそいけい  
或る時 地はとよみ 水は溢れて  
山となり 谷となり  
泥濘流れ出でて 流れをせばめ  
突き出でて 岬を象る  
余多空より 雪おちて溶け  
のぼりては 又雲よりあられ降る  
いっしか冷えて 土岩と化し石をも砕く  
渡り鳥鳴き過ぎて 木の葉をおとし  
種をまく 芽ふけば年めぐりて木々の生い立つ

松福 岬をおおいて  
いくとせの 実りを続く  
鳥はねぐらを作る  
岸に僅かに白々と  
浜木綿の 淋しき花

## 二

水ある処人ありと、云いし伝えもその儘に  
舟棹立てて 漁人のさすらい寄する  
松はしほぶき 月土塊を弄べど  
人の住居は ただ増ゆるのみ

村の姿の作り出で

水際に幼き児の遊ぶ時

木々の怒も和いで

美しき平和も訪れぬ

〔落書帳〕より 二九、八

## 〇

戸田寮入寮規則（昭和二十九年八月二十日改正）

- 一、運動会費、入寮費、食事代等は一切できるだけ賤賤化する。
- 二、女学生同伴に限ること。但し、同伴せざる者には、委員長任を持って女子を割り当てること。
- 一、寮生活は完全に自由なるものとし、委員を僕俾徒弟として利用酷使すること。
- 一、空腹者は随時太鼓を叩くこと。

## 〇

対岸、戸田村での五十円の豪遊

一人当り五十円で豪華な遊びが出来ます。お茶は只呑み、ウイットレス大変美人です。レコード、マンボ No.5 などあり。  
（四号室落書帳第一頁より）

第八頁Y君の反論

一頁記載の五十円の豪遊は嘘である。美人など居りやせん。レコードもちびつておる。寮の三十円のサイダーの方がましである。ある人の話、戸田村の女は夜一人歩きをする時に、片手に必ず石を持ちおるとのこと、石は拳大にして形状は石核石器に似て非常に鋭いから、くれぐれも手出しなどせぬようご注意ありたし。賢迷なる諸兄はその石の用途がすぐに判るであろう。さよう彼女等は自身の防衛の手段として常に携帯せるものなり。我等はその彼女等に東大生のことをいろいろ聞きしに、曰く、一ツ 東大生はまじめである

一ツ 東大生は女タラシであるという人も居るが私はそうは思わな

一ツ 立教の学生達は東大生は女に弱いと云い軽蔑している。

一ツ 私は御浜の水屋「ミマツ」に居る。

（明日は断固ミマツに行くぞ）  
一九五六年七月二十五日夜記

- 一、委員を見る時には、バカヤローと絶叫すること。
- 一、食後は必ず奇声を発することとし、発せざる寮生は、発するまで食事を摂ること。
- 一、就寝時の唸り声、寝言等は、できる限り雄壮活潑、豪快喧嘩たるべきこと。
- 一、水泳は風呂の中においても自由に行うこと。
- 一、集団的空腹者は、群をなして食堂及び近郊の民家にアタックすべきこと。
- 一、退寮時は、必ず寮備品を持ち帰ること（例えば、金盆、WCの下駄、フトン、蚊屋、太鼓、ボート等）。

〔落書帳〕より

## 〇

一筆書遣し候事

朝には太鼓の音に見覚め

「敢て起床せざるは孝の始め」なる

聖賢の言葉を得し

夕べには六合の飯にあきたらず

麦製品なる液体を求む

嗚呼われ、胸に溢るる悩みをいだし

ここに來たれるに

夜毎の松籟何ぞ亦、吾が心を悲しむるや

都に居ればよきものを

馬鹿野郎と呼ばれにわざわざ戸田まで

やつて來た。俺は本当に馬鹿だった!!

楽しかった。

大人には懇を、子供には胸一杯の夢を与えてくれました。

寮委員の御苦勞を感謝します。IM一家

ぼくは戸田に來てやつと泳げるようになりました。來年もまたきます。KM

当寮の家族的雰囲気がかがわれよう。

（家族部屋の「落書帳」より S三二）

## 昭和三十四年～五十年、寮日誌より抜粋

昭和時代（戦後より現在）

昭和三十四年七月四日 医学部大挙来寮の記

今日は医学部医学科の団体をはじめとして大挙来寮するとの報があったので、午前中は部屋割りの計画をたてたり、まだ建物の未完成な新下には、朝から大工、ガラス屋をせきたてて仕事を急がせたり、準備（心の準備）に大わらわ。

本日の一陣は教養学科の十数名の団体、意外にも女子三人を含む。額面通り来ているとか来ていないかといっているうちに。医学部の連中が竜宮丸に到着。手続きは幹事にまかせて、さっそく遊びに出る始末で、受付はいささか混乱。それでも教養の方で申込んだらしい連中は予定の半数ぐらいいしか来なかったようなので、工事未了の新下を使わずにすむ。この点一安心。ために寝具も余裕十分。

大勢来ていると、いろいろ故障者も出てくる。足を切った者が一番多い。風邪気味の者もある。耳に蛾が入った者もある。医科の先生をわずらわして治療にあたって

もらう。

医科の連中、九時近くにコンパを終わって、浜でフアイアーをたく。円陣を組み、雑唱・混唱。フアイアー・ストームはあまり例のないことだそうだが特別許可。横山先生も承知。割りかし秩序だった光景を呈していた。なかなか印象深し。十二時ごろまでガタガタしていたが、一廻り「オヤスミ」を勧告する頃にはおさまるとにかくこのような所では、他人に迷惑のわからないように各自に心がけてもらうより仕方あるまい。

〔追記〕 横山先生と宮家委員のカロム合戦をみる。久しぶりの対戦とかで、なかなか気合の入った熱戦だった。二人のゼスチャーには笑わされた。横山先生に凱歌上がる。

昭和三十年代にはよく医者が来寮している。この日の日誌には当時の寮委員の生活がよく示されていて、すがすがしかった。追記にでてくるカラム合戦とはいったい

どのようなものであろうか。

昭和三十九年七月二十六日

鳥山工業高校生溺死事件始末記

——戸田～沼津死体随伴記——

事実

九時十分 遠泳開始。

九時三十五分 沈んでいるのを東大ボートの二名が発見。浜ですぐ、人口呼吸——体育大生の応援。

十時三十分 伊東先生を要請によりお呼び立てして現場へ。「脈がないから」と首をかしげられる。ともかく、

カンフル、聴診器等々を村の医者までとりに行かれる。

十一時三十分 特別船順幸丸にて沼津まで直行。人口呼吸の連続。一時唇の色がよくなり、伊東先生、おもわず

「ガンバレ」と呼ぶ。

十二時十五分 沼津着。全員、救急車とオート三輪で当日日曜だったので当番病院の瀬尾外科へ。

十二時三十分 病院に運び込むとすぐ硬直。紫斑があらわれ、すでにいかなる方法をもってしても、不可能な状態となる。

検死の問題おこる。

時・場所・何時死んだかは分からず。

①戸田の浜にて既に死亡せし場合は、死体を許可なく移動せし罪により二万円の罰金。しかも、沼津に着いた死体を再び戸田に運んで、検死しなければならないとのこと。

②沼津の病院で死亡せし場合は、病院での手当の方法、救急車の到着の遅れなど問題になるとのこと。

したがって実際は、何時、どこで死んだか判らないので、手続き上最も簡単なる場所、時間にて死亡せしことに決定する。

さらに、過失がなかったことにするため、すなわち、船の上で生きていたことにするため、さらに、溺れてから（窒息してから）十五分以内に船にのせたことに決定（絞殺でも十五分以内なら生き返るそうである）。

以下、書類上の事実

十時三十分 溺者発見。

十時四十分 順幸丸が戸田を発す（十五分以内）。そして、戸田の警察の権力を離れ、沼津警察のナワバリに入った。十二時過ぎに死亡した。したがって、病院に着いた時は死亡していた。不可抗力である。

伊東先生には大変ご迷惑をおかけしました。

(応援 佐藤記)

太陽の輝く戸田寮。しかし、海にはかならず溺死の危険がともなう。事実、数年おきに寮日記には水難の記事がでてくる。次は四十二年に起こった下賀茂での水死事故に対する当時の戸田寮委員の感想である。

昭和四十二年七月十一日 下賀茂で水死との事。明日からはバッチリと浜勤。

七月八日 下賀茂で水死事故があったことは、我々にとってまったくショックであった。戸田も水死の危険はつねにつきまとう。厳重な監視を徹底させる必要がある。

昭和四十八年七月二十四日 晴。気温低けれど水は澄み、波静か。浜で水死あり。六、十才ほどの男の子。母親、よよとばかり泣きくずれてとりすがれど、甲斐あらん。救急体勢確立の要を痛感す。酸素ボンベも空しかりしか。

昭和四十九年八月四日 夕方、浜で人が騒いでいる。

昭和四十九年八月十七日 「報告」柔道部西浦、つり竿放置により、四才児負傷す。

十五日午後七時頃、学士一階六号前に放置してあったつり竿の針に四才の子の足裏がひっかかり問題となった。原因は、西浦が、子供連れの部屋の前につり竿を置いたことであった。十五日は盆で戸田村の病院は休みであった。それゆえ、四才児の母が土肥に向かつて、タクシーで急行した。しかし、土肥の病院も見当たらず、結局、修善寺まで行き、その日赤病院で治療を受けた。幸いに傷は浅く、すぐ治り、治療代は四一〇円であった。

ところが、タクシー代が七四一〇円もかかり、その代金の精算が問題となった。発覚した時、西浦が子の父親に抗弁したため、父親の態度が硬化し、父親が寮委員会に調停を求めた。

そこで、高木・橋・岸尾・三本松で合議のすえ、次のように決まった。

① 西浦が先方にあやまる。

② 七八二〇円全額支払う。

③ 寮委員が西浦にカンパをし、負担を軽くする。

六日朝、西浦と三本松が先方に向かいあやまり、全額

何かと思えば、帰ってこない人が一人いるそうだ。沈んでいるのではないかと大勢で網を引いた。六時頃までやっても見つからず、結局、打ち切りとなった。その間、吉田さんが呼ばれたり、あわただしい。

昭和四十九年八月五日 昨日のゆくえ不明者を今日探索し、九時前に、浜の遊泳禁止解除。死体が見つかったらしい。

海水浴客が増える事故が増えるのは、当然のことである。寮日誌を見ると、死亡事故には至らないが、迅速な処置を要求される事故は枚挙にとまない。このいつ起こるか知れぬ事故に対して、応急処置とそれに続く一連の手際のリストアップ、医師・警察など必要な所の電話番号を寮委員は熟知している必要がある。とくに、戸田は陸の孤島の性格をもち、迅速な行動は、いざというときにとりにくいものである。

最後に、数多くの負傷事件の中で、昭和四十九年の報告と反省が負傷事実をよく示していると思えるので、これを抜き書きすることで「戸田寮における事故」のまとめに変えさせていただく。

支払った。その後、西浦にカンパした。相手方も西浦も、ある程度しこりが軽減したようであった。

反省

① 緊急時の病院への交通ルート（パトカー、救急車）の確立。

② 私物の管理の不徹底であった。

(文責 三本松)

表彰について

常務制度が昭和三十七年にできて以後、寮日誌に表彰の記事が目立つようになる。

昭和三十九年七月七日 九時、浜掃除前、昨晩のマージャン組ふた組を表彰。ゴミ車引きを任命する。

昭和四十年七月十五日 合気道部の五人が前の浜で大騒ぎをしていたので、明日の表彰を楽しみにしていたら、十一時丁度にピタリ歌い終わったのでちょっと気抜けがした。

昭和四十二年七月十五日 表彰が三組あり、シート洗

い、便所掃除をさせた。女子がいなかったもので、女子便所の掃除はしていない。それで、今日は女子の違反者を探すのに力をつくし、女子ポート部員の違反を見つけ。長年の懸案が解決された感じである。

昭和四十三年七月二十五日 本日、和船がひっくりかえった。そして、おまけに、ポート部員一人がおぼれかけたが、幸いにも助けられた。事故にならなくてよかった(ホント)。ポート部の連中に表彰。

昭和四十四年七月二十七日 寮生の数は、どちらかというともい方がよい。あれやこれやの理由はあるが、ともかく、売店がもうかり、そしてまた、シーツ洗いをやる人間がでる確率の高くなることである。

(大槻記)

昭和四十六年八月十日 四三・四SDを表彰し、シーツ洗い百枚をもって、これに当てる。

昭和四十九年七月十三日 十一時前、大胆不敵な湾口突破だ。こんなチャンスはないとばかりに、橋さんは0、

る。

昭和三十九年八月四日 夜、村長さんはじめ村の方々来寮されて、愉快な一時を過ごす。無形文化財のオドリとウタを目のあたりに見て面白かった。

昭和四十二年七月二十九日 六時半頃、村の有力者を招待しての懇談会。村側の出席者、勝呂村会議長・山田村長をはじめ十名。大学側、日野寮委員長・八十島総務部長・横山課長・宮川・飯塚・OB前田・山成両氏、亀井・一杉・米田。

日野先生のご挨拶の後、村長さんが東大寮を国民宿舎に負けないくらい立派な鉄筋コンクリートで、浜辺に近く建てなおしてはどうかと苦言(?)を呈された。大学側は、目立たないところがいいので、このまま木造のほうがいいと村長さんの名案を敬遠した。

9時近く閉会。その後、欠席者の家八軒にあいさつ廻わりをする。

昭和時代 (戦後より現在)

昭和四十五年七月十九日 村の助役、小学校関係、役場関係の人々と昼食をともにする。土地問題で村との関

07、に勇躍乗り込み、長田は堤防を喜んで走っていた。敵もさるもの寮委員の追跡をふりきり対岸にいたろうとしたが、橋さんがついに追いつき、便所掃除が一つへりました。

昭和五十年八月二十二日 SI・二二の十四名、昨日の門限を破り、表彰。

表彰制度は戸田寮委員だけがユニークなもので、戸田の大きな自然にはぐくまれたユーモア精神に裏打ちされていておもしろい。

寮委員の仕事へらしになるという現実的な効用があるので、寮生の管理に役立つことと合わせて、一石二鳥である。いや、表彰された寮生たちにとっても、きれいな空気の下での労働の喜びを知り、戸田での大きな思い出が一つ増えるであろうことを考えれば、一石三鳥といえる。

村の有力者来寮

村の有力者と戸田寮とのつき合いは明治以来である。寮日誌にも、村の有力者の来寮の記事がのっている。

係がしっくりといていない今日ゆえ、なごやかに昼食をともにするという雰囲気ではなかった。しかし、島田は村関係の人々をインギンにもてなし、話題はつとめて寮以外のことを持ち出して無事に終わらせた。

村関係の人々も戸田の発展を望むとともに、この戸田の自然美を残すことに心をくばっているようであるから、東大も加わって検討すべきではないか。ただ土地を借りているというだけでは、今後の関係はますます疎遠なものになってしまうだろう。

なごやかなムードの三十九年の日誌に比べて、四十二年、四十五年の日誌では村関係との懇談は堅苦しく、憂々としたものにすら感じられる。当時の寮委員の苦悩がしのばれた。

寮祭

戸田といえば寮祭とすぐに答えがでてくるほどの寮祭。この記事を日誌からひろってみよう。

昭和四十二年七月二十七日 青木さんはけ返し板の処理、委員たちは寮祭の掲示を書き始めた。第七十二回寮

昭和時代 (戦後より現在)

祭。回数など数えてみたこともないのに、聞いたら、ゴロがいいから七十二にしたそうである。

昭和四十六年七月三十一日 好天にめぐまれ、寮祭第二日目。大成功。本日開催種目、ソフトボール・卓球・水泳・相撲、きのう以来、継続の基は、宇野先輩の優勝に終わる。

午后よりバカヤロー会の面々、続々と来寮する。現役の我々、久しぶりに小さくなった。寮委員チームとバカヤローチームと、ソフトボールに出場したのであるが、先輩の勇猛なる気概のもとに五対一と大敗を喫した。口の悪い連中、「先輩に花をもたせるのもなかなかむづかしい」しかしながら、だれの目にもこれは実力の相違と見える。夕方、バカヤロー会総会。若々しい先輩諸氏の前に、私は年を感じた。

昭和四十九年七月二十八日 今日には寮祭のクライマックスの日。相撲大会・卓球・すいか割り、遠泳大会。最後に恒例のファイアストーム。

二日間を通して感じたことは、寮生の絶対数が昨年以前にくらべて、減少しているせいかな、寮委員指導の寮生

大会であった感がする。例えば相撲大会にしても、寮委員関係以外の人は一人でもどうも寮委員の大会であったようだ。演芸大会にしてもファイアストームにしても、寮生は参加するのではなく、見物人(傍観人)であったような感がする。もともとこういう一般寮生の立場は今さら始まったわけでもないが、一般寮生の減少という事実

がはつきりすると、今後の寮祭はいかにして寮生を行事に積極的に参加させるかが大きな課題だと思ふ。例えば寮生が参加するとしても、うたをうたうばかりでなく、企画を徹底させ、内容のある劇を作成させるとか……。

今年の寮祭はたしかに楽しかった。反面、大熊氏の寸評のように、内容的に格調高かった企画が少なかったようである。これは寮生の減少による寮委員会指導の寮祭であったことも一因であるが、もし、これまでの寮祭の規模をさらに維持させようとするならば、企画の内容的徹底(寮生あるいは寮委員会に限らず)をさらにはから

ない限り、寮祭は味気ないものになるであろう。

今年、寮祭を担当した一人として、その面での努力が足りなかったことを反省しています。(日誌担当 山内)

昭和五十年の寮祭の計画書の一部が手に入ったので抜

粹することにする。

開会式 水泳部一名を聖火ランナーとして使う。沖のボートで聖火に点火し、泳いで来て浜に上がる。グラウンド一周。ストーム点火。この時、アイヌの格好をした委員がぞろぞろとついで行く。曲は「嘆きのインディアン」

○出し物 (1)プロレスリング

正義の味方 藤谷

悪者レスラー 矢折

やられ役(矢折の反則技にやられる。一、二年から選抜)。

戸田慕情 (元戸田寮管理人 故青木信博作)

むかしのまま  
美しくなった村である  
想い出がひそんでいるような  
浜木綿に想いをよせてみる  
そこまで来た秋の流れを感じ

たったいま別れて来た峠越への  
バスの中の見知らぬ女の体温のぬくもりが  
もしやと思ふかすかな哀愁をただよわせる

ここでそのまま  
時代の錆を重ねたもの  
そんな旅情が残っている  
なつかしい戸田である



想い出の戸田

海の色は濃いみどり  
一年中霜を知らない  
西伊豆の  
はまゆうの咲き競う戸田

巡航船でさえ  
上下に揺れる冬の日もある

こんな僻地だった集落にも  
いくつかの想い出を持った人が  
いる

——私と妻と——。



(青木信博・くに夫妻)

「バカヤロー会通信」より抜粋 (No.4 までから)

「創刊のことば」にかえて

大熊 和彦

想い出

岩沢 諄和

達磨の稜線が西に流れて戸田湾巴の海をみおろす高い  
岬から急に駿河湾に落ち込むその連なりが、白みはじめ  
た藍色の夜明け空に、黒くいよいよ鮮明になってくる。  
満天の星が最後の輝きをみせ、闇に慣れた眼に朝の香りを  
う波面が白く映りはじめ。堤防をわたる風に朝の香りが  
して、やがて陽が昇り戸田に若人の一幾代も続く若人  
の夏の日が始まる……。

この地に限りない青春の想いをこめるバカヤロー会も  
着実な歩みを経て二年後には創設十周年を迎えることに  
なります。既にバカヤロー会通信創刊準備号に「通信」  
のおもわくなどは述べましたので繰り返さなくても、  
「戸田を愛する者が集いお互いの親睦を深める」ことに  
貢献することを祈るばかりです。

(事務局長・ア蹴・四三工卒)

戸田から土肥へのくねった坂道を三まがり程たどる  
と、戸田湾を一望に収められる。湾口にわずかな隙間を  
残して、後は松並木で外海と内海を区切っている。あの  
天然の防波堤はうまくできたものである。西海岸を船で  
めぐると戸田型地形によく出会う。この地方の地形の特  
徴らしい。しかし戸田程ふところの深い港湾はない。

伊豆は台風の通り道で、直撃を受けるとすぐ内海と外  
海が一体化してしまう。それをかろうじて堤防でさええ  
ている感じである。この堤防はいつ着工されたのかは知  
らない。三十六年夏初めて訪れた時湾口が最も狭くなる  
あたりまでできていた。堤防を歩くと昭和〇〇年〇〇月  
竣工とペンキで書かれており年間十数メートルでのびて  
いる。狩野川台風の時には戸田もかなりの被害をうけ  
て、寮にも募金箱が置かれていたが、そのせいかその後

二年ぐらいで現在の形が完成した。

四十年前後には違法(?) テント追い出しの為むくつけきおのこどもが一行となって寮歌などとなりながら毎夜堤防の上を夜まわりした。なぜか素直に火を消してテントは移動してくれた。当時寮は寮祭の頃には定員をオーバーして一六〇名以上つめこんだりした。当然委員のふとんはおろか寝場所がなく寮委員室↓廊下↓食堂↓堤防と移動していった。この収容力は抜群であった。新参委員に課される仕事に残飯棄てがあった。二人掛りを持つてかいプラバケツを持って外海に行く。堤防を越えてからが苦痛で岩から岩へ飛び移りながら波打ち際まで行き、投棄してからバケツをゆすいでくる。その際ごていねいに残飯の海にただよってきた委員もいた。毎夜の如き夜のおつとめでいい気分になるとビンを持って堤防を歩いた。と、急に道がなくなる。一瞬なにが起ったか信じられないがすぐ無事着地する。不思議なもので酔っていると自然体で無理しないせいか変に身体をねじったりはしない。神社の入口には今では電灯がついたようである。しかし昼間なら安全かというところでもない。H・Y・氏はN・F・氏の船を送って足元に気を配りつつ堤防を走ったのはよいが大切な頭部に裂傷をおってしま

った。翌朝早速HY氏、TS氏と三人でノコギリを持って恨みの松の枝退治にいった。そのブザマな切口がいまだに残っている。(水泳・四一工卒)

水月

清水 英夫

卒業して八年もたつと戸田もいろいろと変ってきた。浜にはビキニがあふれ寮を訪れる人も次第に変わり、我々のみが相変わらず、夏に集まってみると八年前に逆もど里したかのようだ。そんな中で、我々同様昔と少しも変わらず、毎年つき合っている? 人がいる。あの「水月」のおやじだ。

「らっしやーい」という独特の声を聞くと「ああ戸田へ来たな」と思う。

夜のミーティングが終ると、「ラーメン食いに行こう」ということになる。しかし「水月」はラーメン屋ではない。御存知のごとくラーメン屋は隣りなのだけれど、なぜか水月へ行く。

今も昔もそれに変りがないようだ。

寮祭のあと、閉寮のあとのバカ騒ぎは、水月へなだれ込む。店貸切りで、夜半高唱しても、昔は、周囲に被害

は与えなかった。

三々五々散会していくが、いつも、誰が勘定を払ったのか判らない。時々、しかるべきスポンサーが清算してくれたり、閉寮のあとつげが回ってきたり。毎度迷惑をかけてきたようだが、おやじは、今もって懐しがり、毎年我々がゆくのを心待ちにしているようだ。たしかバカヤロー会の結成が決まったのも、「水月」での宴の時だったと記憶している。

昨年だったか、会のあり方について議論沸騰し、大いに物議をかもしたのも、この店だった。

バカヤロー会とは切っても切れない縁をもっている。年々華やかになる戸田の浜、べの片隅で、東大寮とともに影が薄くなっていくような気がするが、未長く昔のままのつきあいを続けていきたいものである。(応援)

ソフトボール

内藤 賦一

ぼんやりしている時、寮の前の浜のソフトボールのことを考える。

ホームランを打つのは充分引きつけて、もっていく感じで押し出すべきだ。外野へのゴロでも、ランバ

ウンドで早い球を投げれば一塁でランナーを刺せる。島崎さんのように腕力でむやみやたらと引張る人には外角低目に投げればイチコロだ。清水周さんの格好は見るからに異様であるが、あれでは打てるわけがない。大熊さんは、自らすすんでサードなどを守ったが、これがまたエラーばかりする。エラーをしても、首をちよつとしかしげるだけで他の名手と一向に変わらうとしない、これがまたいい。考える野球。しかし、僕の見限りあまり進歩はなかったようである。

などなど考えていると、ああすればよかった、こうすれば、と楽しいものである。今は、腹も出て戸田にいた時のような肉体的充足感を味わうこともない。ただ、酒を飲んだら、えらく楽しくなるのは以前と変りない。

ソフトボールにかこつけて、偉大な先輩方の名誉を著しくけなす結果になりましたが、またあのバカが勝手なことを言っているということで御宥下さい。昨年五月に結婚したルリとの間に、十一月の予定で子供ができました。今は、無事出産してくれることを祈るのみです。男の子が生まれたら、一平と名付けようかと話しています。女の子の場合は、現在のところ一致しておりません。(応援・四六法卒)

## 雑感

T・T

戸田へ来ると人間が変わる。恥の感覚が鈍くなる。きっとバカな人と一緒に長い間生活するせいに違いない。どんなことでもできるような気がしてくる。しかし、それも夏の間だけ。東京へ帰るとまた元の自分に戻ってしまう。

話しかわるが、ここ数年戸田の海も汚なくなってきた。話によると地元の人には湾内では泳がないそうだ。しかし空気はまだまだきれいだ。自動車で帰ると、東京へ近づくとつれ空気の汚れがひどくなるのが目に見える。東京へ着くとよくこんな所で生きていけるという気がする。今年もあまり泳がないようにして、きれいな空気を胸一杯すい、バカな事をして、閉寮後外海で泳ぐのを楽しみに一夏すごしたい。——戸田にて—— (合気)

## 随想

橋 和夫

今年も夏が来て、戸田に来ている。昨年の今頃は、初めての常務としての生活が始まったばかりで随想どころ

る事の出来ないこの様な感激を、夏の戸田で何度か感じる事が出来る。戸田寮もやがて建て直され、寮委員や寮生の世代もどんどん変わっていくだろうが、こんな戸田の夏の出会いと別れは絶対に変わって欲しくないと思ふ。

(水泳・四三入学)

## 雑感

清田 研

今年が初めての戸田である。梅雨期もあけ、ここ二、三日快晴の日が続いた(尤も、今日は曇天だが)。ようやく「夏は来ぬ」という感になつてきた。夏期開寮してからもう十五日程すぎた。一期が終わり、二期にはいつている。最初、不慣れで難しく感じた仕事にも少しは慣れてきた。コンパももう幾度かあった。「戸田寮エレジー」などは特に印象的だった。歌詞とメロディーを早く覚えたい。

浜には海水浴客が満ちあふれ、活気づいてきた。積極的に女に接触しようと思つても、この顔にこの体格、まして泳げないようではどうしようもなく、せめて泳げるようにと思ひ、先日、大熊さんと皆川さんに特訓を受けた。なかなか筋がいいそうである。この調子では今年は

ではなかったが、今年はお役御免になり戸田の味をあらためて感じている。私が夏の戸田を好きなのは、ここに出会いと別れがあるからだ。梅雨の中、戸田寮に来て開寮の準備が一応整うと、寮生が来る。彼等が帰る時にも、また新しい寮生が来る。一緒に十日間過ごした寮委員をみんな美浜棧橋まで送る途中、水月の前で今着いた船で来た新しい寮委員と出会う。寮委員と仲良くなり一緒にボートに乗った寮生も、騒いで寮委員を手こずらせ、うるさく叱られた寮生も、大人しくて目立たなかった寮生も、帰る時には「どうもお世話になりました」と言つて帰っていく。こちら「気をつけて。又、来て下さいね」といつて笑顔で送る。いろいろうるさい寮委員会に何度も小言を言われた寮生も、「もう二度と来るものか」と思いながら帰るものはいない(と思う)。皆、それぞれ胸に去っていく。こんな事が何回も繰り返されていくうち、いつのまにかかんかん照りの暑い日も少なくなり、涼しげな風が吹き始めて富士山のように見える日も多くなつてくると、やがて閉寮が来る。戸田寮はなくならなくても、夏の戸田とはお別れである。出会いは楽しいものであり、別れは寂しいものであるが、別れの方がより感激的である。一生の間にそれ程多く感じ

泳げるようになりそうだ。

一、二回ほどバカヤロー会の幹部会に顔を出させてもらいましたが、大先輩達ばかりで恐れ多いと思つた。でも戸田に来て、先輩達に直接接触してみると、皆んな、気安くおもしろい人達ばかりだ。しかしながら、締める所はちゃんと締めている点さすがひとかどの人物連。寮祭は今年度の二十七、二十八日の土曜と日曜にあるし、戸田の夏はこれから!

なお、私はまだ現役二年の新顔ですが、よろしく願ひします。(総務・弓術・四八入学)

## 恐怖の戸田 (連作その二)

宮下 晃

夏といえば、おおよそ図書館で勉強する事以外に、身も処すことを知らなかった私が、戸田寮の委員をするとは、思つてもみなかったことです。

あれは確か一年の夏もすぎたころでした。練習を終えて、部屋にいつて行みると、真黒な男が二人いたのでした。アフリカからの留学生かなとも思つたが、日本語を話している。おかしいと思つたところ、これが、なんと日本人、しかもクラブの先輩の山口満男氏と、山内正雄

氏ではありませんか。話を聞くと、戸田寮で寮委員をしてきたという。全くの奉仕で海の監視員をしてきたという。私は、思わず、鏡をのぞきこみました。「確かに、私は、利口そうな、育ちのよさそうな顔をしている。が、何か足りない。」思えば、この夏中私は、学問の迂回生産、*v. s. Save Life*. 結論は、瞬時にして出ました。来年は、戸田に行こう、と。その夜、おもう様、おたあ様、じいやを説得した私は、さっそく来年にそなえて、監視員になる為の準備をはじめました。畳の上、水練、クロール、平泳ぎ、バック攻め、彼女を呼び出しては、人口呼吸の練習、マウスツーマウス、デューブ人口呼吸、およそ考えられる準備は、すべてして、私は、夏に望んだのであります。こうした努力が認められたのか、二年になった私は、晴の一期の寮委員。ボストンバックに、洗面道具、海パン、着がえ、それに大事な、寮委員の認定証を入れると、両親の前に手をつき、「行ってまいります。二十年間の御恩を忘れません。ひよっとする生きて帰れないかもしれません。しかし、任務の為で

す。その時は、悲しまないで、よくやったとほめてやって下さい。」そう言って家を出ました。それは、悲しい出発でした。ところが、戸田についてみると……。

紙数もつきたので、以下次号。

(台気・五一経卒)

## 貝殻きちがいの記

日野昌徳

子供の頃に始まった貝殻のコレクションが種類も千五百に近くなり、今なお続いている。貝殻はそれを拾った時の思い出とともにいつまでも残る。そのもともとも古いもの、いわば私が海の貝を初めて知った時のいくつかには昭和二十二年、戸田と記されてある。

その夏、小学生だった私は父に連れられ再開後まもない戸田寮に行った。海はあくまで澄み、御浜には人影もまばらという時代である。ここに、その後三十年近くたっても忘れ得ない海の貝との出会いがあった。

ある岩陰に——その岩をいまでも、これである、と指摘できるのであるが——一個のタカラガイが落ちていた。それは波に洗われ、色も灰色に変わってしまったものであったが、それまでタカラガイというものは瀬戸物でできた作りものであると思っていた私は、この貝が実在することを知って驚きと感激をもって拾いあげた。からだ中がぞくぞくするような興奮に堪えかねて私はその貝を握りしめ、タカラガイがあったあ——と叫びながら父のほうへとんで行った。この印象の強烈さが貝にやみつきになる大きな原因であったことはまずまちがいが無い。

それからというのも毎年夏休みの理科の自由研究といえは貝の標本作りであった。新しい種類をもとめて磯を歩きまわり、ときには湾口や外海の防波堤のむこうまでも遠征しては何時間

## 近代年刊歌集より

長田 貞雄

達磨山雲にかくらふ入海の

ただなかにしてころさびしそ

終戦の二十周年を迎へたり荒磯に

にほふはまゆうの花

黒潮にうち寄せられてた

たなはる石はみながらまるみをもてり

しらじらと浜木綿咲けり地の上に

原水爆をふらしむべからず

はまゆうにいちもじせせり

飛びかへり遠潮騒の間なくきこゑて

(東大文学部出身、歌人、東大戸田寮にて詠む)

も採集に熱中したものである。いまでは埋め立てられてしまつたが寮前棧橋の左には岩礁があり、危険なので泳いではいけないことになっていたがそこは貝の宝庫で、しばしば立ち入ってはすり傷だらけになって、しかし珍品はしつかり握って帰ったものであった。私は小学校六年生までカナヅチだったのでここで禁を破って泳いだことはない。つまり、せつかく戸田に来ても浜にいる時間のほうが長かったことが貝のコレクションを増やすのに役立ったのだと評する人もあるが、これはある程度真実なので認めざるを得ない。泳げるようになってからは多少深いの貝も手にはいりコレクションも急速に充実していった。

い所の貝も手にはいりコレクションも急速に充実していった。

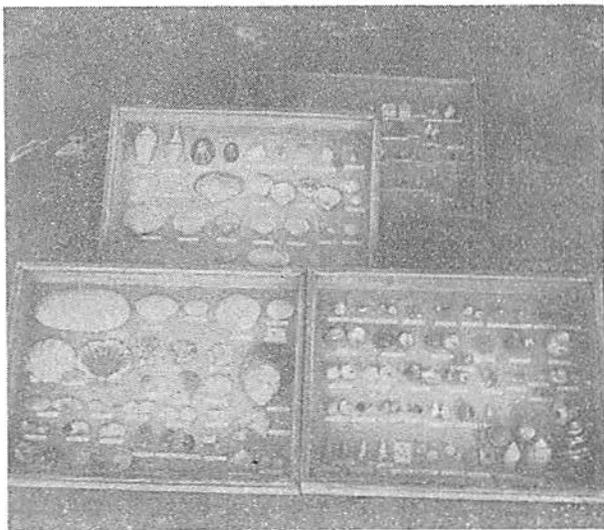
採集方法もいろいろふうして、ボートを出してはタモ網に竹竿を継いで五メートルもの長さにしたもので海底をすくってみたり、その竹竿まで具合のよいものを切り出して二段継ぎにして釣竿よろしく東京からわざわざ持って行ったのであるから、われながら相当な凝り機だったと思う。またテングサ小屋の前には海草について上った小さな貝が無数に落ちており絶好の採集場であった。砂をふるいにかけては目ぼしい貝をビンセットで拾いあげるといふ一見なにをしているのかわからない子供が

——いや大学生になってまでもであったが——毎年夏になるとあらわれるのには小屋のおばさんのみならず来寮者の中にもいぶかしげに見た記憶のある人が少なくはないであろう。

こんなに珍らしい貝がたくさんといふ念願叶って三十三年東大入學、

その年かねて集めた貝の中から普通に見られる約二百種を選んで標本にし、自分と戸田の海との長いつきあいの記念の意味も

含めて寮に寄贈した。この標本はその後寮を訪れる子供達の宿題作りにも役立っているようで嬉しく思っている。私が戸田で集めた貝は約五百種類で、かなりの珍種もある。この数字をきくとほとんどの人が、この戸田のどこにこれだけの貝があるのかと驚くであろう。これは普通には目にとまらない微小貝を含



めた数であるが、いまの戸田の海岸ではどう探してもこれだけの種類は、いやかつては普通だった二百種類も見つけることは困難である。それは私が戸田の貝をとりつくってしまったからではなく、この二十余年の間に戸田が大きく変貌したことと無関係ではない。対岸にはいまや漁村の風景はなく近代的な建物があり、御浜も海水浴場としての施設が多くなった。寮前の浜は埋め立てられ運動場としては便利になったが長年なれ親しんだ戸田が変わって行くことに淋しさを感じない人はなかったであろう。私もむろんその一人であったが、それにもまして貝の宝庫がなくなることが残念でならなかった。埋め立ては一つの貝の宝庫をなくしたのみならず、使われた泥土がこまかい瀾りとなって沈澱したため附近一帯は貝のすむことを許さぬ環境となってしまう、汚染に強い平凡な種類しか見られなくなってしまう。わが国ではこの生物学的な現象に対する無感覚が戸田だけのことにとどまらず全国の海岸の半分以上をいとも無雑作に破壊してしまったのだといつては言葉が過ぎるだろうか。

少年の日から巴の海に遊び、貝を探しまわった私もいまや三児の父となった。子供達は図鑑の貝をながめては「こんど貝とりに行こうね」とはり切っているのであるが、この子供達がかつて私が抱いたような純粹な驚きと喜びをもって貝殻を拾うことができぬ海がはたして日本にまだ残っているだろうか、とくに不安にもなるこのころである。

（昭40 医卒）

## 戸田寮をめぐる土地関係の変遷

戸田寮の土地関係は次の時代区分ができる。

- 第一期 明治四十一年から昭和二十三年まで。
- 第二期 昭和二十三年から昭和三十八年まで。
- 第三期 昭和三十九年から現在まで。

各時代について見てみよう。

### 第一期

現在の戸田寮がある場所に明治二十四年に当時の静岡県会議員である佐山氏が、村から土地を借りて保養館を建てた。この保養館で、明治三十一年から帝大水泳部が水泳場として毎夏合宿をしていたのである。明治四十一年に帝大運動会が佐山氏より保養館を買収し、村とのあいだに五十年間の地上権設定契約を締結した。契約の概要は次の通りである。

### 契約書

静岡県田方郡戸田村ハ村会ノ決議ニ基キ同村戸田ノ所有ニ係ル静岡県田方郡戸田村宇御濱半島に關シ東京帝国大学運動会ト左ノ契約ヲ締結ス

第一条 戸田村ハ静岡県田方郡戸田村宇御濱半島ノ土地ヲ附屬ノ図面ノ通り甲乙二区ニ別ケ其甲区ニ付キ東京帝国大学運動會ノ為メニ本契約締結ノ日ヨリ五拾年間地上権ヲ設定シ東京

帝国大学運動会ハ之ヲ承認シタリ

但シ本項期限満了ノ後猶東京帝国大学運動会ノ都合ニ依リ更ニ五拾年ノ期間ヲ以テ本契約ヲ更新スルモノトス

第二条 前条ノ地上権ハ無報酬トシ戸田村ハ東京帝国大学運動會ニ対シ地代ヲ請求セズ全然厚意ヲ表スルモノトス

第三条 本契約甲乙二区ノ土地ニ現存スル立木ハ戸田村ノ所有ナルモ戸田村ハ之ヲ他人ニ譲渡シ又ハ伐採セザルモノトス若シ不得止事情アリテ之ガ処分ヲ必要トスル場合ニハ契約者双方協議一致ノ上之ヲ決定スルモノトス

第四条 戸田村ハ本契約乙区ノ土地ニ旅館飲食店其他公衆又ハ多数会員ノ来遊ヲ目的トスル建物ノ類ヲ建設シ又ハ他人ヲシテ之ヲ建設セシメザルコトヲ確約ス又前段以外ノ工作物ト雖モ将来新ニ之ヲ設備セントスルトキハ契約書双方協議一致ノ上之ヲ決定スルモノトス

但シ東京帝国大学運動會ガ本契約乙区ノ土地ニ已ニ設備シタル「テニスコート」ノ存置ハ戸田村之ヲ承認シ又戸田村住民ガ本契約甲区ノ土地ニ已ニ設備シタル船小屋ノ存置ハ東京帝国大学運動會之ヲ承認セリ

第六条 東京帝国大学運動會ニ於テ本契約ニ依リ設定シタル地上権ヲ有スル土地ヲ東京帝国大学ニ転貸シ又ハ地上権ヲ該大學ニ譲渡スル必要アルトキハ戸田村ハ之ヲ承認スルハ勿論後段ノ場合ニハ本契約ノ趣旨ニヨリ更ニ東京帝国大学ト契約ヲ

締結スルコトニ異議ナキモノトス

明治四拾壹年参月壹日  
東京帝国大学運動会理事 中村恭平  
静岡県田方郡戸田村長 水口悦郎

静岡県田方郡戸田村長 勝呂金太郎

この契約更正がなされた翌年、この更正契約に従って村側から陳情書が出されている。

陳情書

この契約書は大学と村の友好の記念碑ともいえるもので、大学と村が美しい戸田の自然環境を守ることを相互に確認したものである。契約書中の「甲区」とは御浜岬の半分から現在の敷地に至る一万二千二十一坪であり、乙区とは寮から先の岬の尖端部のことである。

この契約の更正が昭和五年五月二十六日付でなされている。

契約更正書

両理事者協議ノ上東京帝国大学運動会及静岡県田方郡戸田村間ニ存スル明治四十一年三月一日付契約書中左ノ通り更正ス  
第二條ノ二項 「東京帝国大学運動会ハ前項戸田村ノ厚意ニ対シ本契約期間教育費トシテ壹ケ年金百貳拾円宛毎年八月戸田村ニ寄附スルモノトス」ヲ「地上権設定ノ一部ヲ東京帝国大学ノ用途ニ支障ナキ限度ニ於テ制規ノ手續ニ依リ戸田村ニ使セシムルコトヲ得」ニ改ム

昭和五年五月二十六日

東京帝国大学学生会清算人代表

穂積重遠

松原行一

矢作栄蔵

明治四十一年三月一日帝国大学運動会理事中村恭平と静岡県田方郡戸田村長水口悦郎と戸田村字御濱半島ノ土地ヲ帝國大学運動会水泳場ニ貸供ノ契約ヲ為シタリ  
然ルニ時代ハ幾多変遷シテ昭和ノ今日ニ至リ財界ハ非境ニ陥リ下級民衆ノ多クハ職ヲ失フニ至レリ 本村亦打続ク不漁ニテ副業ナキ漁夫ハ一家ノ糊口ヲ支フルニ術ナク農家ハ繭繭ノ暴落産物ノ低価ニテ又自衛生活ニ苦シム 斯ノ如ク海ニ陸ニ収入ハ著シク減少シ納税ハ逐年堆積シ自活運用全ク円滑ヲ欠クニ至レリ 此処ニ至リテ本村ハ何カ他ニ事業ヲ企テ救済ノ方法ヲ講ゼザルベカラズト過般來屢々會議ヲ起シ審議ヲ重ネタル結果最善ノ方法トシテ郷土ノ地理ニ倚リ開発ノ途ヲ講ズルニ如カズ 幸ニ本村ハ天恵ノ御濱岬アリ之ヲ開放シテ遊覽地トシ外人ヲ招致シテ幾分土地ノ繁榮ニ資セントシ客年五月貴大学ニ陳情シテ大体ニ於テ御賛同ヲ得ル事トナリシガ猶才具的ニ其措置ヲ講スルニ及バズ 依テ茲ニ多数村民ノ希望ヲ陳ヘ重ネテ懇請スル所以ナリ 請フ御認容アラン事ヲ

希望条件

一、戸田村ヨリ大学へ貸供シタル御濱半島甲区ノ土地ヲ二分シ其ノ一部ヲ解除サレタキコト

二、解除サレタル部分ハ公衆ノ水浴所トシ浴室、東廬、共同ベ  
ンチノ設備ヲナシ、又喫茶、コーヒー、水菓子等ノ売店設  
置ヲ許可スルコト

三、甲乙両区ニ存在スル立木ハ之ヲ伐採セザルハ勿論ナリト雖  
モ若シ枯損木ヲ生ジタル場合ハ風害ノ虞レアルニツキ村ハ  
独断ニテ直チニ伐採シ得ルコト

四、乙区ノ部分ニ從來建設セル建物ノ外ニ第二項ノ設備ヲナス  
コトヲ得 以上

右御認容相成度此般陳情候也

昭和六年十月二十八日

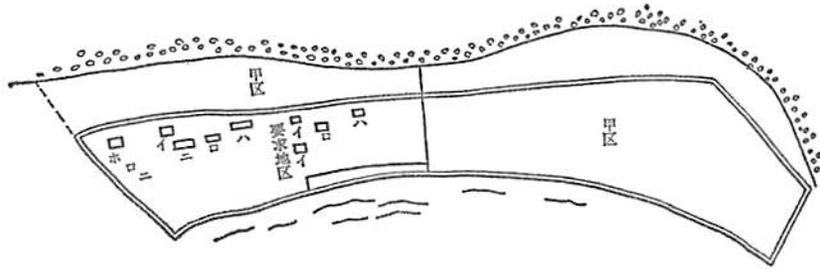
静岡県田方郡戸田村長

田丸 虎吉

東京帝国大学総長 小野塚喜平次殿

この陳情に関して戸田村村長田丸虎吉が、東京帝国大学学生課長竹内良三郎に出した書翰がある。この中に村側の説明が述べられている。

御濱崎一部使用ノ件 快ヨク御同情被下且彼之ト御指図二項  
リ候間 当村ノ希望ヲ忌憚ナク別紙図面ニ認メ提出致候間  
何卒御認容被下度 勿論御許容被下候テモ不況ノ今日直チニ  
設備ニ着手スル事ハ不可能ナリト存候間 徐々ニ施行致度考  
エ御座候 併シ天然ニ恵マレタル此の仙境ヲ俗化シ花柳化ス  
ルハ当局トシテモ忍ビザル処ニ候ヘバ只物質ノミニ着目セズ  
古来ノ風習ヲ破ラヌ程度ニ於テ経営致度主義ニ候ヘバ御懸念



- イ、共同ベンチ
- ロ、脱衣所
- ハ、便所
- ニ、茶菓子水菓子売店
- ホ、止宿所
- へ、中央道路は公衆の往来にも差支へなきこと

被下間敷候

これに対し大学側から次の返信が出されている。

貴方ニテ御多用中乍御手数 例へば脱衣所ハ開口何間奥行何間土台ヲ用イズ掘建トナシ周囲ヲ葺葺張屋根ハとたんトナシ毎年期節中ノミ設置スルモノナルヤ或ハ何々ニテ半永久的ノモノナルヤ 便所・茶菓水菓子売店・止宿所等夫々ニツキ仕様書ノ様ナモノヲ御携へ被下度  
尚止宿所ニツキテハ一般海水浴客ノ為カ村ノ監視人ノ為カ又ハ売店経営者ノ止宿ニ供スルモノナルカ等詳細ニ御図示成致此般御照会申上候

この大学側の要望に従い村から詳細の設計書が出されている。

施設ニ関スル設計書

- イ、共同ベンチ 長六尺巾一尺五寸ニテ板張り目隙ニ造リ永久的ニ常時設置
- ロ、脱衣所 開口三間奥行二間木造平家垂鉛板葺ニテ周囲ニ杉板ノ下見張トシ床板ヲ張り入口一坪ヲ土間トシ脱衣棚敷ケ所ヲ設ケテ永久的ノ建物ナリ
- ホ、止宿所 団体若クハ一般海水浴客ノ為ニ施設スルモノナルガ主トシテ学生団ノ用ニ供スル目的ヲ以

テ設備ス 其ノ設計ニ於テハ未ダ具体的考案ハナケレドモ五六十名ノ団体ヲ収容スル程度ノ建築ヲナシ永久的建物也

このような経緯で村は御浜岬に諸々の設備を設け、文中にも述べられている通りの不況の時代に観光収入をはかることで対処したのである。

日本はこのころから急速に戦争に向って転じていったが、戸田寮と戸田村の友好関係にかわりはなかった。

第一期

太平洋戦争も終わり、戦時中水路部の使用で荒れていた寮も徐々に学生も訪れるようになり、食糧は乏しいながらも戸田の美しい自然に抱かれた寮生活には変わりはなかった。しかし寮の外では猛烈な時代の変化がおこっていた。村との土地関係もその例外でなく、次のような陳情書が昭和二十二年村より出されている。

陳情書

明治四十一年三月一日、当時の本村々長水口悦郎等は貴大学運動部との間に於て、本村宇御浜を甲乙両地区に分ち其の殆んど全部に当る地域を貴大学運動部の水泳場として五十ヶ年間貸与すること、及本村は貴大学運動部に対して最大の厚意を示して其の地代を請求しないこと等を契約した。

由來本村御浜の地は戸田港の外廓を劃する岬であつて、風光

と思ふ。

第三に、御承知の今次敗戦による住宅の払底である。当村にも戦災者引揚者で住むに家なく困窮してある人がどれだけだらう。然して中学の建設は急を要する問題であり、而も建築資材は窮屈を極め、加うるに村の経済は多額の資金が捻出出来ないものである。

貴水泳部の御浜御利用の状況はホンノ夏だけの間であり、殊に本年は学生より女連れの教家族の利用に過ぎない。冬期はあの膨大な寮は野鼠の住家である。宜しく中学建設の為に及住宅難に悩む人々の為に土地の御返却と建物の御譲渡を願ひたいのである。

尤も御返却後來訪の貴大学生の為に御便宜を供与することは戸田村文化向上の為に茲にお約束出来ることである。

今や長期に亘る戦とその敗戦によつて国歩は艱難を加へ我村亦多年の疲弊のあとをうけて今後の復興には幾多の難關を思わしめるものがある。

而して一村興廢に關する御浜の問題を貴大学の御理解によつて有意義な解決に到達することを望むものである。而れば則、村民の幸福之に過ぎるものはなく永く感謝を捧ぐる所と思はれる。茲に村長以下村民有志連署を以て陳情書を提出する次第である。

昭和二十二年十二月

静岡県田方郡戸田村々長 勝呂 計三

希望要件

一、明治四十一年三月一日附契約書ノ全面廢棄願イタキコト

絶佳、俗塵を絶つて誠に天然の作せる公園であり、静岡県二十勝の一に数えられてゐる勝地である。村民は勿論外客も亦此処に遊ぶを楽しむとし、殊に本村の七割を占める漁夫は船及網の格納修理に欠くことの出来ぬ必須の要地である。若し之が解放されれば本村漁業の発展は計り知れぬものであり、村民生業に大いなる向上が期待できるのである。

然し我が村の当局者や指導の地位に立つ者は先輩の結んだ契約を尊重して四十年間所謂最大の厚意を捧げて今日に至つたのであるが、終戦後の民主精神の昂揚と今日の経済情勢は今後此儘で行くことを許さぬもののあることを御諒承願わなくてはならない。

其の第一は戸田村の戦後の経済上の問題である。農業には広き耕地を有せず、漁業亦定時収入を得るに至らず、幸いに山地の多きを頼んで製塩をやって急場を凌いだるが、燃料も既に乏しく全く今の所、村経済の見通しがつかない。

而も茲にどうしても行わねばならぬ事に新制中学の校舍建築と小学校々舎の手入れがあるが、今の経済状態では殆んど不可能の有様である。そこで貴大学運動会の寮を村に譲渡して頂きたいのである。

其の第二は、村経済問題と共に終戦後の観光施設の問題である。本村には他村の如き積極的な仕事もなく村の収入も乏しいから、今後の村の重大な生きる道は御浜岬の利用が最たるものになつて来たのは、敗戦後の日本が風土のよろしきを利用して外客を誘致することが日本再建に重大な役割をするものとして重要視されることと並行するものであつて御理解を願へること

二、該地所在建物等御譲渡願イタキコト  
別紙連署左の通り

この陳情にもつき大学側と村側双方で契約書案を作っている。

契約書案 (東大原案)

東京大学総長は静岡県田方郡戸田村長と同村戸田御浜所在の同村有地の一部について左の契約を締結する。  
第一条 東京大学のために左記戸田村有土地 (別紙図示の通) 上の地上権は本契約締結の日から満式拾年間とする。

記

静岡県田方郡戸田村戸田字御浜式千七百拾番の参番

一、郡村宅地 六百六拾参坪

同 所 式千七百拾番の四番

一、山林 九段参畝六步

第二条 前条地上権存続期間終了後は相互協定して更に契約を結ぶ事とする。

第三条 東京大学が公用に供しなくなった場合は返還して本契約は自然解消する。

第四条 地上権設定地及該地上建物は公用に支障ない限り制限の手續を経て戸田村に一時使用せしめる事がある。

第五条 地上権設定地及其の附近の風致に関係を生ずる虞ある行為を為す場合は予め相互協定する。

第六条 地上権設定地及其の地上建物利用に關して必要なる事項に就ては相互厚意を以て協定する。

項に就ては相互厚意を以て協定する。  
第七条 本契約成立と同時に該地上権に關する明治四十一年三月一日付中村燕平、水口悦郎間の契約及び昭和五年五月二十六日付穂積重遠外二名、勝呂金太郎間の更正契約は解消とする。

昭和二十四年六月十七日

東京大学総長

静岡県田方郡戸田村長

契約書 (戸田村原案)

静岡県田方郡戸田村ハ村会ノ決議ニ基キ同村ノ所有ニ係ル字御浜岬ニ關シ東京大学ト左ノ契約ヲ締結ス

第一条 戸田村ハ御浜岬ノ内附属図面ノ通り土地〇〇坪ヲ東京大学ニ賃貸スルモノトス

(図面ハ両者合合現地ニ即シ坪数ト共ニ測量決定スル) 第二条 賃貸契約期間ハ本契約締結ノ日ヨリ滿三ケ年トスル但シ契約期間満了後ニ於テ之ヲ継続又ハ改訂セルトスル時ハ双方協議ノ上協定スル

第三条 東京大学ハ第二条ノ借地ニ対シ坪当り金〇円ノ割ヲ以テ計算シタル賃貸料ヲ毎年度ノ始メニ於テ戸田村ニ支払フモノトスル

第四条 東京大学ハ契約地内ニ在ル建造物ニ付テハ本契約期間満了後〇〇年内ニ之ヲ撤去、若クハ其ノ処分ニ付双方協議ノ上戸田村ニ譲渡スルコトアルベシ

右協定により本覚書二通を作り署名捺印の上各一通を所持する

昭和二十三年

東京大学事務局長

静岡県田方郡戸田村長 勝呂計三

昭和二十三年八月四日付の契約では期間については明治四十一年の契約を変更するものでなく、明治四十一年契約の契約期間の五十年間 (昭和三十三年に期間満了) はそのまま存続していた。

第三期

明治四十一年の契約期間は昭和三十三年に満了したが、すぐには新契約は締結されなかつた。新契約締結の動きは昭和三十六年ごろからあり、昭和三十八年五月二十七日付で締結された。この経緯は学生部長から施設部長宛の連絡文書に述べられている。

昭和三十八年五月二十七日

施設部長殿

東京大学学生部長 長谷川修一

水泳場 (戸田寮) 敷地の地上権抹消登記

及び地上権設定契約並びに登記について

学生部所属水泳場敷地戸田村有地一万二千二十坪 (登記上) は明治四十一年三月一日より五十年間 (昭和三十三年三月一日

双方意見のくいちがいはあつたが結局昭和二十三年八月四日付で明治四十一年の契約を更改し、地上権設定地を以前の一万二千二十坪から、三千四百五十九坪 (現在の地上権設定地と同じ) に減少させた。この際次の覚書を作っている。

覚書

東京大学総長と静岡県田方郡戸田村長との間に昭和二十三年締結した契約に附随して左の覚書を作る。

(一) 地上権は期間の終了により消滅する。その後は貸借契約とする

(二) 本契約成立後速に既地上権は抹消登記をし新契約の登記をする

(三) 東京大学は地上権設定地及該地上建物の管理を戸田村長に委託し其の管理料として年額金五千円支払う

(四) 本契約書第五条中の「附近」とは別紙図示の範囲とする  
(五) 戸田村有地内に於て別紙図示の位置に現存する東京大学所管艇庫の敷地約七十坪は東京大学が使用することが出来る

存続期間満了) 東京大学運動会が地上権設定しこれを昭和五年九月二十五日本学に(権利移転登記済) 寄付受納し、更に昭和二十三年八月四日戸田村と地上権設定契約変更(地上解消地八千五百六十一坪地上権存続地三千四百五十九坪昭和三十三年二月末日迄地上権設定契約)を行ないましたが、期間満了しましたので新たに地上権設定をいたしたいので左記書類を提出いたしますからよろしくお取り計らい下さい。

記

- 口座名 水泳場
- 所在地 静岡県田方郡戸田村戸田字御浜
- 区分 地上権等
- 種目 地上権
- 数量 三千四百五十九坪
- (一) 地上権設定理由書
- (二) 位置図
- (三) 配置図
- (四) 実測図

この地上権設定理由書は次のものである。

地上権設定理由書

東京大学戸田寮(静岡県田方郡戸田村御浜所在)は体育保健寮として、特に他の寮より利用者も多く、年間約八千名の学生、教職員に利用されており、

現在戸田寮の敷地は、昭和三十三年に地上権設定契約期間が満了していましたが、戸田村当局のご好意により引続き使用し

ております。これをそのまま放置しておくことは好ましくないので今回地上権設定契約を更新するに当り、手続方よろしくお取り計らい下さるようお願い致します。

このような経緯で昭和三十八年契約は結ばれた。昭和三十八年の契約の内容は次の通りである。

契約書

東京大学総長は静岡県田方郡戸田村長と同村戸田御浜所在の同村有地の一部について左の契約を締結する。

第一条 東京大学戸田寮敷地として左記戸田村 土地に地上権を昭和参拾八年六月一日から昭和五拾八年五月末日まで設定する。

記

- 静岡県田方郡戸田村戸田字御浜式七七百拾番の参
- 一、宅地 六百六拾参坪
- 同所
- 一、山林 九反参畝六歩

第二条 前条地上権の期間終了後は両者協議の上本契約を更新することができるものとする。

第三条 東京大学が公用に供しなくなった場合は契約期間中と

雖も返還し本契約は自然解消するものとする。

第四条 地上権設定地及び地上建物は公用に支障のない限り制規の手続を経て戸田村に一時使用せしめることもあ

第五条 地上権設定地及びその附近の風致に関係を生ずる虞ある行為をなす場合は予め相互協議の上之を決定するものとする。

第六条 地上権設定地及びその地上建物利用に関し必要なる事項に就ては相互好意を以つて協定するものとする。

第七条 本契約成立と同時に昭和参拾参年七月四日付南原繁勝呂計三間の契約は解消するものとする。

本契約の成立を証するため本契約書式通を作成し署名捺印の上各自巻通を所持するものとする。

昭和参拾八年五月式拾七日

東京大学総長 茅 誠司  
 静岡県田方郡戸田村長 山田三郎

覚書

東京大学総長と静岡県田方郡戸田村長との間に昭和参拾八年五月式拾七日締結した契約に附随して左の覚書を作る。

(一) 本契約成立後速かに既地上権は抹消登記を新契約の登記する。

(二) 戸田村有地内に於て別紙図示の位置に現存する東京大学所屬艇庫の敷地約七拾坪は契約期間中使用できるものとする。

(三) 本契約書第五条中の「附近」とは別紙図示の範囲とする。  
 (四) 東京大学は戸田村の本学の行事に対する尽力について本契約期間謝金として年額参万五千式百九拾円毎年八月戸田村に納入するものとする。

右協定により本覚書式通作成し署名捺印の上各一通を所持するものとする。

昭和参拾八年五月式拾七日

東京大学事務局長 鶴田酒造雄  
 静岡県田方郡戸田村長 山田 三郎

地上権設定登記嘱託書

一、不動産の表示

所在 静岡県田方郡戸田村戸田字御浜

地番 式七卷番の参

地目 宅地

地積 六百六拾参坪

所在 静岡県田方郡戸田村戸田字御浜

地番 式七卷番の四

地目 山林

地積 九反参畝六歩

一、登記原因及びその日付

昭和参拾八年五月式拾七日地上権設定契約

一、登記の目的

地上権設定の登記

一、地上権設定の目的

建物所有のため

一、存続期間

式拾年

一、地代

無償  
一、登記権利者  
文部省

一、登記義務者  
静岡県田方郡戸田村

一、登録税  
登録税法第拾九条の老により納付せず

一、添付書類

地上権設定登記嘱託書 副本 老通  
地上権設定登記承諾書 老通

右のとおり登記の嘱託をする

昭和参拾九年八月拾貳日

東京都文京区本富士町老番地

文部省所管不動産登記嘱託指定職員  
東京大学長 大河内一男

この昭和三十八年五月二十七日付の契約が現在の大学と村との地上権設定契約である。この契約の基本に流れるものは明治四十一年の原契約と同一の、戸田の自然を愛し、それを保全しようとする大学と村との相互合意であり、寮の附近の風致に関する行為には双方の協議を必要とするとの第五条にもそれは読みとれよう。

昭和三十八年に新契約が締結された数年後、日本全国をつつんだ学園紛争の嵐にも戸田は無関係ではなかった。戸田寮内で

の寮生活には何ら変化なく、戸田寮は平和であったが、戸田寮外での学園紛争の影響が戸田寮にもあらわれて、村から戸田寮の敷地及建物の返還要求が出された。

村有地戸田寮の敷地及建物の返還を要望する

歳末を迎え御多用の事と御推察申上げます。

就而は大きな社会問題である貴校学園紛争は限界もなく発展し学園の権威と信頼を遂に失ない、本村と致しましても明治以来貴校を崇拝し親交の中に土地貸与の延長を計り無償に等しい謝礼金にて学生及び職員に健康と教養の場として惜みなく貴重の土地を広範に貸与して協力を致して参りました。然乍現下の特勢は事態の收拾も政府の責任と権限に於て断をまつ情勢となりましたことは、国民周知のところでありまして、学校当局の無力は誠に遺憾にたえない処であります。

本村に於きましては十二月十七日村議会の議題として貴校の学生達の来村は本村青少年教育に悪影響を及ぼす事を慮い、保安林及自然公園保護を重尊すべきであるの意見が万場一致議決するところとなりました。

茲に契約を解除し建物の撤去を同意下さる様御通知申上げます。

二伸 文部大臣宛に一部を發送致します。

昭和四十三年十二月二十八日

静岡県田方郡戸田村村長 山田三郎

これに対し当時の総長代行加藤一郎より回答が出されている。

日中に関係官を派遣して御希望を直接お聴きするとともに、当方の事情もお知らせしたいと思います。

なお、本学としては学内平常化に努力中であり、又将来に關しても貴村との関係には上記方針に副って益々尽力いたす所存でありますので、現状勢が好転した暁には貴村会の御再孝を御配慮下されたく、貴殿の格別の御尽力をお願いいたします。

大学と村との交渉は詳細にわたって行なわれ村側の要望は次の点である。

東大戸田寮返還について

- 一、全面返還の意志表示をすること。
- 二、返還出来ない場合は左記条項を要求する。
  - a、従来謝礼金として支払っていた謝金は貸貸料とすること。
  - b、貸貸料（謝金）は宅地坪当たり年五〇〇円、山林名目坪当たり年三〇〇円とする。
  - c、貸地内のこわれかかった家屋については美観を損うので直ちに取りこわし整理すること。
  - d、飛んでいるポート小屋は本借地内に移転し該借地はこれを返還すること。
  - e、海水浴場については使用を優先的に認めるも公海として一般にも使用させること。
  - f、今は未使用の中央路より西側の土地はこれを返還すること。

これに対し大学側の回答は次の通りである（東京大学学生部の

村有地内戸田寮の敷地及建物の返還要望（回答）

昭和四十四年一月三十日

静岡県田方郡戸田村村長 山田三郎殿

東京大学総長代行

加藤 一郎

さきに昭和四十三年十二月二十八日付標記要望書を受領いたしました。本学の紛争解決のため鋭意努力を継続しておりましたため回答が遅延いたしましたことを御諒承下さい。

本学の紛争が入試中止や多くの他大学学生を含めた学生斗争の場に進展し、大きな社会問題となったことについては紛争解決の遅れが原因の一つであり、その点深く責任を感じております。学内の正常化を恢復することがその責任を果たす最大の任務と考え努力を続けておりますが、既に大部分の学部がストライキを解除し、授業を再開した学部、学科もあり、正常化の目算ももてるようになりました。

貴村の古くからの御厚意により本学は貴村有地内に戸田寮を設け、又特に最近貴殿の御尽力により、昭和五十八年五月末日まで契約を更新し、本学学生教職員の体育・保健の場として活用させていただいていることは学生教育上極めて有効であり、深く感謝しているところであります。本学としては貴村との友好を深めることに努力するとともに、些細なことでも貴村に役立つことについては尽力いたす方針をとってきました。又その反面本学が今日まで貴村に御迷惑をかけた事実はないと信じておりません。今回突然標記の御要望に接しましたので、本学としては近

担当者宮川清氏の私案による。

宮川私案 昭和四十四年八月一日

- 一、返還の要求には応じかねること。
- 二、諸要求について。
  - a、現在地上権設定契約のしてある土地を賃貸借契約にすることは会計法上困難である。
  - b、謝金は現在使用している六百六十三坪について坪当たり一〇〇〇二〇〇〇円に相当する六六三〇〇〇一三二六〇円とする。
  - c、使用していない物置および便所は取りこわした。
  - d、船小屋は来年度に予算要求をして移築したい。
  - e、海水浴場は一般にも使用させているが、ゴミが甚しく多いので役場から回収に来てほしい。
  - f、中央遊歩道より西側の土地は使用していないから、従来通りの契約のまま、その使用については村と大学の話し合いでその都度相談する。

このような交渉の結果、次の覚書が作成された。

覚書

東京大学総長と静岡県田方郡戸田村長との間に昭和三十八年五月二十七日締結した契約に附随して左の覚書を作る。

一、東京大学は昭和四十四年十二月十六日に戸田村と共に測量

した地上権設定地内の特定地区（別紙図示）以外の地上権設定地については、将来原則として新たに建造物等を設置して使用しない。また戸田村も同様に前記地内については将来原則として新に建造物等を設置して使用しない。

二、前項地区については、将来森林公園的なものとして維持し、双方好意をもって自然を保護するよう協力する。

三、東京大学は地上権設定外にある艇庫を将来同地内に移転する。

四、東京大学は老朽建物の改修など地上権設定地内の風紀維持に努力する。

五、東京大学は地上権設定地の管理料として戸田村長に年額四六六、六〇〇円を支払う。

六、本覚書が成立した時に昭和三十八年五月二十七日に東京大学事務長鶴田酒造雄と戸田村長山田三郎との間で手交した覚書は解消する。

上記協定により本覚書二通を作成し署名捺印の上各一通を所持するものとする。

昭和四十五年十月十七日

東京大学事務局長

藤吉日出男

静岡県田方郡戸田村長

山田 三郎

この覚書にもとづき登記嘱託書が提出された。

登記嘱託書

登記の目的 地上権変更

原 因 昭和四十五年十月十七日変更

変更後の事項 昭和三十九年八月十三日受付第三〇八号地上権 上権

地番二、七一〇番の三と二、七一〇番の四ともに、地代年額四六六、六〇〇円

登記権利者 文部省

登記義務者 静岡県田方郡戸田村

添付書類 地上権変更登記嘱託書副本 一通

登録免許税 登録免許税法副表二により納付せず。

右のとおり登記の嘱託をする。

昭和四十六年如月三日

東京都文京区本郷七丁目三番一号 文部省所管不動産登記嘱託指定職員 東京大学長 加藤 一郎

存続期間満了

昭和五年九月二十五日東京大学運動会が地上権設定し東京大学に寄付 地上権 一万二千二十坪

昭和二十三年八月四日 戸田村と地上権設定契約変更

地上権解消地 八千五百六十一坪

地上権存続地 三千四百五十九坪

昭和三十三年二月末日迄地上権設定契約締結

昭和三十八年五月二十七日 戸田村と地上権設定契約変更

昭和三十八年六月一日より昭和五十八年五月末日迄地上権設定契約締結

静岡県田方郡戸田村戸田字御浜 二千百十の三

宅地 六百六十三坪

同 所 二千七百十の四

山林 九反三畝六歩（二千七百九十六坪）

計 三千四百五十九坪

昭和三十九年八月十二日 静岡地方法務局戸田出張所に地上権登記

登記の目的 地上権設定の登記

地上権設定の目的 建物所有のため

存続期間 二十年

地代 無償

昭和四十五年十月十七日 戸田村と昭和三十八年五月二十七日締結した地上権設定契約に關し協定

管理費として戸田村に年額四十六万六千六百円を支払う

このように明治四十一年から現在に至るまで、数々の出来事が

戸田寮敷地上権設定関係調書

一、口座名 戸田寮

二、所在地 静岡県田方郡戸田村戸田字御浜

三、地上権設定経緯

明治四十一年三月一日より五十年間（昭和三十三年三月一日

以上で戸田寮の土地関係の概略を終わる。まともとして戸田寮敷地上権設定調書を紹介しよう。

あり、大学と村とはいろいろなことを協定し、そして変更してきた。長い年月がたち、人は変わり、時代も変わっても、戸田寮と戸田村の友好関係には何ら変わりはなく、双方の戸田の自然を愛し、保全しようとする気持ちも昔から変わらない。そのことを確認した上で、将来も両者の友好と自然愛に変わりがないことを確信して結語としよう。

(矢折 記)

### 浜木綿 (はまゆう) について

*nanumakium var. japonicum* Bal.

#### 一、学名「石蒜」ヒガンバナ科文殊蘭

多年生草木、おもと(万年青)に似た広い葉をもつもので「浜おもと」とも云う。大平洋岸の暖地の海浜に自生する。その分布の境界を「浜おもと綿」と称する夏の頃、花茎の頂に三十個内外の白色の六弁花を開き芳香を放つ(註戸田寮前にて五十八個のを発見)。四月頃より十一月上旬まで花を咲かせる。

「はまゆう」の名は葉鞘部の肌が白色なるによるとも云い花の盛りは浜辺に白木綿を敷いた如く見えるのによるとも云う。——古来から詩歌によまれていた。

#### 一、和歌万葉集 卷四 柿本人麿

み熊野の浦の浜木綿百重なす心は  
念へど直に逢はぬかも

### 露艦遭難戸田村にての造船について

安政元年十一月下田港に碇泊中のロシア軍艦フレガット・ディアナ号は、津波のため暗礁に触れて艦底を破損したため、提督プチャーチンは戸田港を修理場と定め、艦を下田港より戸田港に廻航しようとしたが、駿河湾にて暴風となり日本側の救助船の努力もむなしく、ディアナ号は艦首より沈没してしまつて、乗組員五百八十六名は全員援船に移り駿河の国宮島対海岸に上陸、陸路戸田村に到着した。プチャーチンは帰国のための船の建造を幕府に申請して、スクーネル船一隻を新造して、翌安政二年三月二十三日戸田村出港帰国の途についた。その後、幕府は同型船六隻を造つてこれを君沢型と呼んだ。そのため西洋型造船の技術を実地に知ることができた。

### 露艦来航の年月及び遭難沈没の場所

安政元年(一八五四)下田港碇泊中、十一月四日朝四ツ時地震津波のため破損し、修繕のため戸田港へ廻航する際、晴天なるも西風はげしく吹き、下田奉行水野筑後守は戸田村へ出張し援船を出すよう命じた。駿豆沿岸には、沼津の城主水野出羽守の救助命令により、援船凡そ数百隻に及んだ。然るに、西風なお烈しい、何分にも戸田港に引寄せることができず、浸水甚だしく、当港を距ること五里程の宮島沖に沈没した。

### 魯人戸田港の造船に適する事を確認

プチャーチン氏は幕府に照会して修繕の場所の撰定を乞い、幕吏の案内にて戸田港に優る良港なしとし、幕府の許可を得て造船所と定めた。

### 上陸の場所及び宿泊・食物の手当

乗組員一同は援船に移り、風模様により、駿州富士郡宮島海岸に上陸し、同所より歩行して戸田村へ到り、村内宝泉寺を提督エヒフミー・プチャーチン外士官の宿泊に充て、同所本善寺を其の他の士官の宿泊所とし、他の軍人は同時に近接の地に梁間三間、桁行二十八間の長屋四棟を新築してこれにあてた。食物は士官以上には魚類、鶏肉、野獣肉を用い、軍人には麵包、野菜を用いた。

### 言語応答の事

当事洋語に通じる者なく、艦員中、蘭語通訳ホシュェット、英人通訳シロリング、それに幕府より派遣せられた蘭学者森山多吉郎とで蘭語、英語、日本語というように三段通訳で非常に苦勞した。

### スクーネル造船及び成工日限の事

露人設計により村内の木工、上田寅吉、緒明嘉吉、石原藤蔵、堤藤吉、佐山太郎兵衛、鈴木七助、渡辺金右衛門、の七名を世話掛とし、数百名の職工を使用して造船に当り、造船御用係は村内有力者松城兵作、大田亀三郎、辻平兵衛、齊藤雅助、勝呂

弥三兵衛、山田平左衛門、齊藤周助、服部三左衛門の七名に士分をもつて取扱い帯刀を許可した。造船は凡そ百日間にして成工し露人帰国の用に供した。幕府においては右七名の大工をして同型船六艘を造り君沢型と称した。

### 魯人帰国の事

造船成工に至るも、五百余名を乗せる積力なし、幕府は米国商船にこの旨を告げ当港に廻船して、安政二年二月九日、士官数名、下士官百五十名出帆し、同三月二十三日プチャーチン他四十七名は新造のスクーネル船にて帰国、何れも帰国の際は互いに別れを惜しみあつた。プチャーチンは出発の際、浅黄ラシヤのテーブル掛けを松城兵作、大田亀三郎の両氏に贈与した。

### 現在のソ連大使館と戸田村

現在のソ連大使館と戸田村とは国境、思想信条を超越した友愛の交際をしており、又、博物館建設に当たってもソ連政府より多大な資金の援助を得て新設された。

(戸田村教育委員会資料)

## 戸田村のむかしばなし

「弥吉じいさん」こと梅原弥吉氏著から抜粋

「戸田港、その昔」から

○西伊豆海岸の中でも、富士山を正面にあおぎ、御浜崎に抱かれた波静かな戸田港は、昔はほとんどと言っていいくらいに、東西各地の船が立ち寄ったそうす。たとえば、播州(兵庫県)赤穂から塩を積み込んで北海道に運び、北海道からサケを塩漬けにして紀州(和歌山県)に運んでいた船は、必ず、戸田に立ち寄ることになっていたそうす。そして、寄港したという「証文」をもらって、再び、出航していったとのことす。

○こうした船によって、紀州家、尾張家などの数々の舟歌や踊りが伝えられました。戦前(昭和二十年頃まで)はそのままの形で、大漁祝いや祝言(結婚式)のときなどには、盛んに歌ったり、踊ったりされていたようす。

○またそのころ戸田から石を切り出しており、その石は大坂城や名古屋城の土台石ともなっており、戸田には石切りの職人がたくさんいたという説もあります。石を切った場所は田代山だそうです。今でもその跡が残っています。

○明治時代には「沼津千軒、戸田千軒」といわれるほど戸田にはたくさん家があり、そのために、明治八年(一八七五)には、県下に警察署が置かれ、戸田にも警察署ができ、署長以下、巡查が六名ほど駐在していたそうす。

## 戸田の漁業と工業

漁業のことは、戸田村の沿革のなかで述べられているので一部を省略しますが、ここでは戸田の名物、タカアシガニのことについて、戸田村のむかしばなしのなからひろってみまします。

タカアシガニは、世界最大のカニで、大きいものは足の長さが三メートルを越すと言われます。世界中でも温暖な海に住むカニで、アメリカのメキシコ湾と、この駿河湾で主にとれます。日本の太平洋岸でも、少しはとれる所があるそうすですが、ごく僅かしかとれないと聞きます。メキシコ湾では三メートル近くになるのに二十年もかかるそうすですが、駿河湾では約十年で三メートルぐらいいなります。それは、駿河湾にはカニのエサが豊富にあるからだと言われます。このカニは、海底二五〇〜三〇〇メートルの所に最も多く住んでいます。このカニはゆで、足を折って引っぱると、身が太い筒のようになって出て来るので、食べやすいです。味はたいへん淡泊です。

## サザエ工場

明治二十年(一八八七)ころ伊豆西海岸一帯でサザエがたくさんとれたころがありました。伝馬船をこぎだし、半日ほど漁をすればサザエが山のようにとれたといひます。磯でもサザエがたいへんとれたが、海の底の方はもつとすこかったと当時、漁師だった古老は言っています。沼津や清水の魚市場はサザエの山となり、足の踏み場もないほどで、売りさばくのたたいへ

ん苦労したということです。そこで大浦の有志がサザエの箱詰め工場を造って、大きく発展しました。ところがそのうちサザエがあまりとれなくなりとうとう工場を閉鎖してしまいました。

## 製紙工場

明治三十年(一八九七)ころには、大上に製紙工場ができて、従業員も五十人位おりました。戸田の会社の紙といえは、良質で評判は良かった。そこで原料の「みつまた」の木を全村に植えてみたが、戸田では思うように育たなかったのと、材料も手に入りにくくなり、大正の初期には製造中止になってしまった。

## 瀬戸物工場

同じころ、沢海に「井田屋岸」という瀬戸物工場が今の儀三丸造船所から、中の島に向ったところがあり、良質の瀬戸物を焼いていました。そしてこの工場も、一時は、有望に見えましたが、しかしそのあたりは交通の便が悪く、道も一人通るのがやっと、という狭さであったばかりでなく、大中島の辻平さんという人の山から酸性の白土を掘り出して、背負って工場まで運ぶのが容易ではなく、費用がかかりすぎて利益があらがないため、間もなくやめてしまった。

そのころの村道は、どこも大八車が一台やっと通れる程の狭さでしたので、この瀬戸物工場ばかりでなく、何の事業も成功しなかったといひます。

## 御浜崎

御浜はこうしてできた。

御浜崎は、川から流れ出た土砂や、山から崩れ落ちた石などが、駿河湾を北上する海流によって運ばれ、それが積み重なってできたものです。これを「砂州」といひます。同じものとしては、清水市の「三保」や日本三景の一つである京都府の「天の橋立」もそうす。

## 御浜は戸田村の財産

明治になって、廃藩置県するとき、政府から役人が来て「御浜は国のものである」と決めつけて、陸路を舟山の上へ去って行きました。

戸田村では、五、六人の有力者が集って、御浜が戸田村のものであるという、正しい証拠がないものと頭を悩ませて考えた結果、御浜の松の木は、昔、戸田村の人々が植えたものであり、また、そこに堤防を築いた土台石のあることがわかりました。村人は喜び勇んで政府の役人の後を追ひ、舟山を通り過して、(賀茂村)宇久須付近で追いつきました。「引き返して再調査してほしい」と何度もお願いしたので、役人は再び戸田に戻って調査をいたしました。その結果、御浜は戸田村のものとして決まり、今も戸田村共有の財産として残っています。

## 御浜の松の木

海から見ると御浜弁天の鳥居の右側に「下り松」と「見返り松」といふ松があります。「下り松」は枝が海の方へ低く下っているののでそう呼ばれています。「見返り松」は、明治、大正時代、学校を卒業し、沼津などの町へ奉公に行く男の子たちが、いつ帰ってこられるだろうかと、港の出口にあるこの松あたりで戸田村を何度も、何度も振り返って見た、ということからそう呼

ばれていた。

「魚見の松」は戸田村と富士見館の間にあります。この松の大きさは、根廻り四・六メートル、目通し四メートル、枝張り十七メートル、樹高二十五メートルといえます。その昔、村民はこの松に登り海を見て、魚の群が港に入ってくるのを見張っていました。

マグロの大群が港に入ってくるのを発見したのは、大正二三年ごろのことでした。大漁でした。しかも、マグロは大きく、戸田村でも大漁祝いをにぎやかにやりました。その時の青年一人の分け前が二〇〇円だったそうで、そのころ二〇〇円で家が建つといわれたくらいですから、現在では何百万という金額になります。そこで五円もしたオーバーは、ふだんではなかなか買えないものでしたが、この時ばかりは、二〇〇人ほどいた漁師の青年たちのほとんどがハイカラなオーバーを買って着ていたそうです。「魚見の松」もその当時は知らない人はいませんでしたが、昔の物語となつてしまい、話す人もいません。

### 戸田村沿革

#### 戸田村沿革

戸田村沿革戸田村は天正時代一五七三〜一五九一室町幕府の直轄地であったが、文化九年（一八一二江戸中期）南北に二分され、北は小笠原安房守の采地となり南は直轄地として残された。幕末も近い文久三年（一八六三）には南の直轄地は水野出

羽守の采地となり、明治二年伊豆国は菫山県となり、明治二年六月十二日戸田村、井田村は菫山県に編入された。十二月菫山県廃止とともに足柄県として第八大区第五小区（戸田村、井田村、土肥村、小土肥村、八木沢村、下小田村）と称した。明治十七年に官選戸長を置くことになった。ついで明治二十一年四月二十五日市長村制が公布され、明治二十二年四月一日施行されたことによつて、井田村を合併して戸田村となり、同時に従来戸田と部田の双方を使用していたのを戸田に統一した。明治二十三年（一八九〇）五月十七日府県制および郡制が公布された。静岡県では郡制は明治二十九年（一八九六）九月一日施行となったが、これに先立って、君沢、那賀の二郡が廃止されたことにより、戸田村は田方郡に編入され、以後、静岡県田方郡戸田村と称している。

#### 位置・面積

戸田村は、伊豆半島西海岸の基部に位置し、東に修善寺町および天城湯ケ島町柿木と、西は駿河湾に面し、南に土肥町小土肥と、北は沼津市西浦に接している。

面積は三五、二六平方キロで、東西の幅員約七、三キロ、南北約八、六キロである。この地目別面積は、田〇・五六平方キロ、畑〇・七平方キロ、山林三一・二〇平方キロ、原野二・三〇平方キロ、宅地〇・三九平方キロ、その他〇・〇八平方キロ、山林原野がその九五、一%を占め耕地はわずかに三・六六%にすぎない。（昭和四〇年十月現在）

#### 地勢

戸田村は、東南北の三面を修善寺町との境界にある遠磨山と、

これに属する小遠磨山・金冠山・奥山・真城山（以上沼津市との境界上にある）雉尾・駿馬山（以上土肥町との境界線上にある）のほか、沢海山・田代山などの山々に囲まれており、これらの山脈のため陸路は開けず近年まで陸の孤島の観があった。水源を遠磨山に発する戸田大川（長さ三〇七四メートル、川の幅員約三八メートル）は、蓼原・北山・宝金洞・大久保・平戸などの諸支川を合わせ、村の北側を流れて戸田港にそそぎ、他に道竜川、沢海川の小川があつていずれも戸田港に流入している。

また井田部落に井田川があり、舟山部落に中川があり、いずれも駿河湾にそそぐ、戸田港は、東西、南北に一、七キロの幅員を有し、港内の水域は〇・八一平方キロあり、中着型の天然の良港（最深部は四四メートル、港口約三八〇メートル。第二種漁港）で、御浜岬をもつて駿河湾と一線を画している。

海岸線は約二二キロあり、岸辺は主として丸石（安山岩）をもつて形成され沿岸いたるところ浅海漁業のてんぐさ、あわび、さざえ、小貝、磯のりなど漁場を形成している。御浜岬（長さ七五〇メートル、幅一〇〜一九〇メートル）は大瀬崎と同様に沿岸流の作用で、湾口部南側から北に向つて伸張して形成された砂嘴である。また、井田にも岬が形成されたが、湾口が狭くやがて北部の出岳に接続し、山中から流出した土砂により入江が埋没、わづかに松江池を残して往時の面影をどめられている。往古における戸田村の海岸線は、だいたいの別図「古海岸線の図」（十六ページ参照）のように推測されている。当時はまだ御浜岬も形成されず、部田神社近くまで海岸線が入りこ

み、戸田港周辺の現居住地域は海であった。また、井田でも部落の大半の地域と通称「よこまくり」辺りまでは入江であったと考えられる。そして、長い歳月の間に河川が上流の土砂を運んで陸地を形成する一方、地殻運動による海岸の隆起または沈下作用、或いは海流による砂嘴の造成などの自然現象に加え、人工理立による陸地の造成がなされるなど幾多の過程を経て、現在の海岸線が形成されるにいたつた。

#### 漁業の沿革

戸田漁業の推移については、明治初期から二十年代末までを第一期に、三十年以降を第二期とすると、第一期は各種の沿岸漁業がこの期に入り積極的に新規漁業の導入がなされ、拡大発展した時期である。第二期はこれら各種漁業がほぼ発展の限界に達すると一方明治四十一年には戸田における最初の動力付カツオ釣漁船が出現し、沿岸漁業から沖合漁業に転換の第一歩が踏み出された。動力漁船の進歩により大正元年末には十三隻を数えるにいたつた。これにより漁場も地先海面を中心とするものから、次第に駿河湾、伊豆七島、三陸沖などに拡大されてきた。

昭和十二年七月日華事変が勃発し、漁業は衰退し始めたが、十七年頃からイルカ追い網漁などにより活路が開け、戦時下の水産蛋白供給に大いに寄与した。

昭和二十年一月に最初の無線電信付漁船が出来た。戦後低迷していた漁業も昭和二十六年、二十七年頃から漁業再建および生産基盤整備の国策にそつて新規にマグロ延縄、遠洋カツオ・マグロ釣漁業が開発された。また、まき網を中心とする沿岸漁

資料編

〈表1〉 戸田の過去10か年における気温・降雨量の平均、日照時間・晴天日数・平均風向・平均風速は次の通りである。

月別	気温 °C			降雨量 mm	日照時間 日時	晴天時間 晴時	平均風向	平均風速
	平均	最高	最低					
1	6.8	10.6	1.6	93	189	21	W	3.2m
2	6.6	10.5	3.2	109	192	22	〃	3.2
3	9.4	14.9	6.5	162	140	14	SW	3.3
4	14.2	19.1	10.8	213	174	16	S	3.1
5	18.2	22.8	14.2	217	142	14	〃	2.8
6	21.8	25.7	17.9	259	132	12	〃	2.7
7	26.1	29.1	22.4	263	262	26	〃	2.7
8	27.0	30.3	23.2	252	199	19	〃	2.7
9	23.7	27.6	20.4	288	235	22	NE	2.8
10	18.2	23.0	14.7	174	142	13	〃	2.7
11	13.9	18.9	11.0	121	194	20	〃	3.0
12	9.0	14.2	5.4	74	212	24	W	3.3
平均	16.2	20.6	12.6	185	125	12		3.0

〈表2〉 産業別就労者割合

産業別	大正14年		昭和35年		昭和40年		
	総数	比率	総数	比率	総数	比率	
総数	1,812人	%	2,536人	%	2,266人	%	
第一次	農業	829	45.7	566	22.2	469	20.7
	林業	46	2.5	106	4.2	20	0.9
	漁業	442	24.4	1,034	40.8	897	39.6
第二次	鉱業	1		12	0.4	5	0.2
	建設業			157	6.2	138	6.1
	製造業	242	13.3	125	4.9	165	7.3
第三次	卸売小売業	142	7.8	188	7.4	164	7.2
	金融保険業			2	0.1	6	0.2
	不動産業	—		—		—	
その他	運輸通信業	36	2.0	58	2.3	128	5.6
	電気・ガス・水道業			3	0.1	5	0.2
	サービス業			216	8.5	224	10.2
	公務	52	2.9	68	2.7	45	2.0
その他有業	14	0.8	—		—		
家事使用人	8	0.4	—		—		

資料編

業の拡大発達へ飛躍的發展をみせて今日に至っている。これにつれ漁業も赤道方面、オーストラリア、南米沖、インド洋へと拡大されてきた。

戸田村の交通

戸田村は三方を険しい山々で囲まれ、隣村との交通はかろうじて開かれていた。林道、自動車道が開かれるまでの山道に、東、南、北の三方に開かれていた。即ち、東方の中伊豆方面は、はじめは柿木峠を経て天城湯ヶ島町柿木に通じ（伊豆方面の齋藤などはこの道を経て戸田から積み出したという）後には修善寺町と南側土肥方面は、小山田部落から舟山峠を経て小土肥に通じ、北方沼津方市西浦方面は、平戸部落から真城山を経て古宇にいたる山道であった。

このように陸路に恵まれなかった戸田の交通は、もっぱら海路に依存していたが、近年それぞれ自動車道が開けたことにより、ようやく陸の孤島の汚名を返上するにいたった。

これらの推移についてみると、明治四十三年（一九一〇）七月修善町との間に林道が開通し、ようやく曙光が見えはじめた。この林道は昭和二年（一九二七）県道に移管され戦後改良工事により、昭和二十六年（一九五一）六月定期バス路の開通がみられ永年の念願が達成された。一方昭和十一年（一九三六）沼津市西浦古宇との間に県林道が通じ、これも昭和二十六年から定期バス便が開け（現在運行中止）沼津方面との陸路をもつようになった。

また昭和四十三年十月には、県道沼津土肥線の最後の区間であった戸田、井田間の開通をみるにいたり、これにより伊豆西

海岸の海岸道路も貫通し、今後はこのルートが幹線になるものと思われる。

これに先だち、昭和三十五年八月戸田、土肥間十四キロメートルが開通し、定期バスも通じるようになった。海路については、明治十五年南豆の人、依田佐平二氏によって動力貨物船による沼津、戸田間の船路が開け、また明治四十一年（一九〇八）十月には地元の動力貨物船日進丸が戸田・沼津間に就航した。

気象

戸田村は気象条件に恵まれて、冬寒からず夏暑からず、概して温暖の地であるといえよう。

戸田における平年度の風浪についてみると、だいたい十二月中旬の頃から翌年三月中旬の頃までは季節風（西風）の時期である。ことに一、二月には連日吹き続いて、強風により海上が荒れる日も多く、海路の途絶することもままあり、最も気候の悪い季節といえよう。三月中旬の頃になると、南西風の吹く日が多くなり多少風浪はあっても海路が途絶することはなし、四月に入っては、次第に南風の季節となってきた八月頃をもつて終るが、この期間中は海上も比較のおだやかであって、最も気候の良い季節である。

九月に入ると、ならない（北東風）の吹く日が多くなり、秋の深まりと共にならぬ風の日々が続き、やがて十二月中旬の頃をもつて終るが、積雪することはまれである。しかし達磨山など的高嶺には年数回積雪がみられる。

年表

年代	ことば
安政元年十一月	プチャーチン、ディアナ号で再び来日。下田港で津波のため遭難したディアナ号はその後沈没する。
二年三月	ロシア人戸田村で戸田号建造・三回に分けて帰国する。幕命により、戸田村で、戸田号と同型の君沢型帆船、合計六隻を追加建造、戸田号建造に参加した戸田の船匠、上田寅吉・鈴木兵助の二名が、幕命により長崎伝習所の一期生となる。
三年	ロシアより戸田号返還。この時、条約の批准書交換、戸田号建造に参加した戸田船匠、石原藤蔵、堤藤吉、作山太郎兵衛、渡辺金右衛門の四名が幕命により石川島造船所に技師として派遣される。
明治五年	伊豆は二一区分に分けられ、戸田村は第五区に入る。
六年六月	戸田に巴学舎（戸田小学校）、松江小序（井田小学校）開校
七年十二月	戸田郵便局開設

明治十六年四月	月島の緒明造船所に六艘の新艇発注、隅田川で第一回競漕大会開催。
十七年	戸田村と井田村を合せて戸田村となる。
十七年六月	水泳場設置（浜町河岸の対岸の中州）。
十八年五月	本学記念日を四月十二日と定め文部省に同書提出。
十二月	文部大臣これを認可（文部大臣森有礼）。
十九年十月	明治天皇本学に行幸される。
二十年六月	隅田川で東京帝国大学をはじめ各大学・中学校等の水泳道場開設。
十一月	構内御殿下グラウンドにて第一回秋期陸上大運動会挙行。
三十三年	向島に艇庫新設される。
四月	運動会主催による第一回競漕大会挙行される。
二十五年	静岡県会議員（戸田村出身佐山氏）は戸田村当局と五十年間の借地契約を行ない（現在の戸田寮の敷地）保養館と称する旅館を建設する。
三十八年九月	戸田尋常小学校高等科を併置。
三十年七月	篠田治策氏伊豆地方旅行中（暑中休暇中）戸田を水泳部の水泳場として好適と考え、大津海岸から戸田へ移すことを計画した。

明治三十一年七月	水泳部は戸田御浜に水泳場を開設。
八月	皇太子殿下戸田御浜にご来遊。
四十二年	佐山氏より保養館を買収。
四十一年三月	大学は村当局と地上権設定、運動会は戸田村当局に教育費として年間百二十円也を寄附する事を約す。
七年	敷地坪数二一、〇二一坪。
七年	皇太子、御浜岬にご来遊。
二年八月	奥田文相戸田寮開場式に臨席す。
五年九月	学友会は戸田水泳場を大学に寄附する。
六年七月	戸田にて第一回全国競泳大会開催さる。
八年	運動会を社団法人に改組し学友会となる。不況による米騒動発生。戸田の海にまぐるの大群やってきた。
八年八月	早稲田大学との対抗レースのため全学クルー、応援団などの組織をつくった。
九年八月	第三回全国競泳大会で茨木中のデビニー
十年	第四回全国競泳大会で茨木中クロールで優勝。
十一年	全国学生水上競技連盟組織さる。第五回
十二年九月	全国競泳大会開催さる。
十一年	帝大水泳部競泳チーム組織さる。
十二年九月	関東大震災発生、御殿下グラウンドに救済本部が設けらる。撃剣道場、向島艇庫壊

大正十三年	十二月	駿河湾にも津波が来て、寮も浸水の被害を受ける。
十四年	六月	撃剣道場、向島艇庫再建さる。
十五年	七月	大学の移転問題が出たが、結果として一高の駒場移転が決り現在の農学部敷地を確保する。
昭和三年	七月	東大水泳部の競泳強化の打合せ会がもたれる。
四年	七月	山中寮建設のため、学生奉仕団の開拓がはじまる。
五年	七月	ラ式蹴球部戸田で合宿。
六年十月	五月	ボート「しぶき号」進水。
		山中寮宿舎完成。
		学友会解散、運動会独立、山中寮新寮建設開始（故岸田日出刀氏設計）。学生監を学生主事と改称。学生課を設置。
		稲木久吉氏大学に籍を置く。
		運動会総務部員、故岸道三、清水文彦、曾根文二氏らの努力により谷川寮の建設が始まる。
		寮敷地、地上権設定、契約更改。
		戸田村議会を経て地上権返還の要求あり。谷川寮完成（設計宮澤清清水技師）。
		澁海楼新設（保養館時代の取りこわし

昭和七年	九年八月	十年	十一年	十二年	十三年	十四年	十五年	十八年	二十一年
て新築。 村当局より敷地の一部を公衆の水泳場として使用したいとの陳情あり。 土地返還に対する対策協議を行なう(当時の水泳部長これの折衝にあたる)。 財団法人東京大学運動会設立、文部省認可、登記完了。運動会報創刊号発行。 大坪事件発生が主因で土地返還署名運動起る。	戸田村青年学校開校。国勢調査、八一四戸、二三七人(男二、一六八)。 東大ボート部ベルリンオリンピック代表となる。	戸田寮三十周年記念行事行なわれる。戸田村の物価、米一升三十五銭、酒一升一円二十銭、醬油一升四十銭。 七徳堂新築される。	検見川総合運動場用地買収、九、八〇〇坪総合的体育保健施設として学生の奉仕団による建設が始まる。	国勢調査、八〇三戸、四〇一九人(男二〇二五人)。 寮委員長、瀬田修平氏となる。	青木信博氏、戸田寮管理のため稲木氏に				

昭和二十二年四月	四月	二十年七月	二十二年	二十三年八月	二十四年四月	二十五年七月	二十六年	二十九年	二十九年三月	三十年	三十一年	三十三年	三十四年八月	三十六年
協力。 村立戸田中学校開校 戸田寮再開のため学生課長その他視察。 戸田寮再開。 戸田寮管理人、青木氏が稲木氏と交替。 寮の敷地全面返還の要求あり。 戸田村当局と地上権設定。契約の一部変更。地上権設定二、〇二二坪を三、四五九坪に縮減。 学生部横山氏、管理委員となる。 学生水死事故。 谷川寮焼失。 村当局より天草乾燥小屋建設のため敷地の一部使用願ひあり。 戸田灯台竣工。 天草小屋建設のため、敷地の一部を使用承認。 地上権設定更改。寮委員長、日野和徳となる。谷川寮新築完成、再開。 村で温泉試掘行なうも失敗。 台風七号により御浜岬の松五十本倒る。 戸田橋艇庫、合宿所完成。 台風による水害のため、役場保存の資料等流出。														

昭和三十七年七月	三十八年四月	三十八年五月	三十九年十二月	四十年十月	四十一年一月	四十二年	四十四年
戸田一宇佐美間のマラソン横断レース(第一回)開催。 椰子植樹さる(東大より寄附)。 地上権設定契約期間満了、新契約締結。(期間二十年間)地代として年額三十五万二千九百円とする。 管理委員、宮川清となる。 地上権設定登記完了。 マリアナ海域において漁船の集団遭難事故(七日)。遭難船金比羅丸、永盛丸、弁天丸、死者七十四名。運動会では救援のため募金活動開始する。 募金活動終了、四十五万四千円を戸田村を通じて遺族に贈る。 宇佐美寮廃寮となる。 戸田寮委員、有志によって「バカヤロー会」結成さる。 西伊豆下賀茂にある東大樹芸研究所の敷地の一部に下賀茂寮を建設。七月十日開寮す。 安田講堂紛争により封鎖さる。 戸田村当局より敷地返還の要望書出される。 安田講堂に封鎖排除のため機動隊導入さる。							

昭和四十六年二月	四月	四十五年	四十七年	四十八年七月	四十九年八月	五月	五十年十月	五十一年一月	五十一年四月
御浜岬にプール竣工。 村立郷土資料博物館竣工。 土地契約一部変更、地代四十六万六千六百円となる。 契約更正登記。 管理委員、飯塚素弘となる。 村営プール建設のため、船小屋を移築する。寮委員長、松橋直となる。 救急医師派遣の要請あり、承諾。三井記念病院の協力により、夏期特別開寮中六名の医師を派遣する。 戸田寮史作成のため「戸田の夕べ」を寮において開催、出席者多数。 戸田寮再建委員会発足。 管理人青木信博氏退職、青木くにと交替。 戸田村民(老人対象)の検診を村当局から依頼され、吉田主事が医師団を編成、十月二十六日と十一月八日の二回にわたる検診を行なう受検者三百二名。 管理人青木くにと退職、木内富福と交替。 滄海楼の改修改装工事施工。 元管理人青木信博氏逝去。 谷川寮元管理人、石井長要氏逝去。									



大正十三年

大正十四年

大正十五年

昭和二年

昭和三年

(委員長)

山岡小西清岡松岡磯渡湯松白增渡松中吉中吉加	田本原尾水本沢本部辺川沢杵田田村田村田村田	繁勁静勤一勁茂一樹諒夫鶴仁次諒鶴清二清二	三郎一雄襄元一鶴一樹諒夫鶴仁次諒鶴清二清二	夫
-----------------------	-----------------------	----------------------	-----------------------	---

昭和四年

昭和五年

昭和六年

昭和七年

昭和八年

牧宮阿関井阿荒阿山荒浅浅黒岡砂満岡砂小石高	野下部口沢部木部崎木井井田林原尾林原原原橋岸	進衛実治夫実章実里章孝三郎孝三郎基午郎弘郎雄雄之	進衛実治夫実章実里章孝三郎孝三郎基午郎弘郎雄雄之	郎
-----------------------	------------------------	--------------------------	--------------------------	---

昭和九年

昭和十年

昭和十一年

昭和十二年

昭和十三年

昭和十四年

齊藤健太郎	齊藤健太郎	犬塚輝夫	久野健	齊藤健太郎	犬塚輝夫	久野健	大村潤四郎	松下元次	近藤勇三	橋村良辰	松下元次	牧野良辰	橋村良辰	松澤元次	藤野進	牧野進	藤原進	牧野進	原野進	宮田下衛
-------	-------	------	-----	-------	------	-----	-------	------	------	------	------	------	------	------	-----	-----	-----	-----	-----	------

昭和十五年

昭和十六年

昭和十七年

昭和十八年

昭和二十一年

昭和二十二年

(委員長)

中瀬中	小笠原	東洋	瀬田	瀬田	江橋	栗野	西沢	西沢	阿南	大場	大場	河合	山藤	山藤	林節	園節	林節
村田賢二	村田賢二	村田賢二	田修平	田修平	橋慎四郎	野弘順	沢弘順	沢弘順	南隆美	場和夫	場和夫	合博正	藤哲三	藤哲三	節周一	節周一	節周一

昭和二十三年

昭和二十四年

昭和二十五年

昭和二十六年

昭和二十七年

昭和二十八年

昭和二十九年

昭和三十年

昭和三十一年

昭和三十二年

(管理委員)

笈 一生城  
山 正仁  
紺 邦夫  
米 倉亮  
岡 沢貞雄  
杉 村弘二  
横 山陽三  
須 藤彰司  
須 藤彰司  
大 森義正  
大 森義正  
片 桐松薫  
杉 山容  
倉 重輝  
牧 江春夫  
遠 藤郁夫  
油 井忠雄  
遠 藤郁夫  
日 野和徳  
遠 藤郁夫

昭和三十三年

昭和三十四年

昭和三十五年

昭和三十七年

昭和三十八年

昭和三十九年

昭和四十年

昭和四十一年

昭和四十二年

(管理委員)

儘 川田眞一郎  
森 川信  
森 川信  
今 敏  
清 水洋  
久 野三  
竜 野慶  
井 波理郎  
永 木宏  
宮 川清  
塩 沢邦彦  
林 成裕三  
山 成喬彦  
清 水英彦  
安 田晴男  
渡 辺敏男  
岩 沢淳和  
村 松退男  
佐 藤俊之  
龜 井武  
米 田寿

昭和四十三年

昭和四十四年

昭和四十五年

昭和四十六年

昭和四十七年

(管理委員)

梶 浦一樹  
岡 本秀昇  
清 水憲周  
塚 田一憲  
杉 山健一  
内 藤賦一  
飯 塚素弘  
大 槻哲史  
瀬 尾一郎  
前 田知和  
伊 東映仁  
矢 代隆義  
石 丸陽義  
池 内浩陽  
松 橋直  
田 中栄  
藤 本英夫  
山 口満男  
池 内浩男  
伊 東映仁

昭和四十八年

昭和四十九年

昭和五十年

昭和五十一年

(管理委員)

皆 川尚史  
細 野尚宏  
橋 和夫  
高 橋常雄  
皆 川尚史  
佐 々木研淳  
清 田光二  
岸 尾光  
佐 々木研淳  
清 田光二  
土 屋正雄  
有 馬立郎  
清 田正雄  
土 屋正雄  
田 端正  
小 林崇敦



## 将来の戸田寮

——戸田寮の改築計画について——

学生部長 大場和夫

昭和五十年度の文部省予算約八百万円で滄海楼の一部修繕が行われたが、その他の棟は依然昔のままである。

特に、新二階棟は、雨洩りがひどく、畳は上げたままで使用不能の状態であり、そのため現在の戸田寮の収容定員は二〇名減せざるを得なくなっている。

更に、便所の臭いのひどさは、定評のあるところであり、中には、あの悪臭を思い出しただけで、戸田寮に行きたくないという人すら居る現状である。

従って、これらを解消し、快適な戸田寮にすることは、すべての戸田を愛する人達の念願であった。

昭和四十九年に開催された戸田の夕では、戸田寮史の編さんと共に、戸田寮改築の決議がなされたのは当然の結論であった。

学生部としては、これらの要望を背景にして、五十一年度の概算要求の最重要項目として文部省に対し要求している。

文部省学生課としては、この要求に極めて好意的に対処してくれており、管理局教育施設部との了解がつけば、今年度中にも具体化する見込みであり、遅くとも五十二年度中には実現の可能性が十分あるものと期待している。

昔からの戸田を知っている人達は、改築に際しても、従来通りの木造建築を望む声もきかれるが、文部省としては、これからの本建築はすべて鉄筋または鉄骨構造をすることになっており、従って滄海楼以外はこの方針に従わざるを得ないであろう。

ただ、その設計施工に際しては、御浜の景観を生かし、また、せつかくの松その他の樹木を一本も痛めないよう充分の配慮をするつもりである。

ここに参考のために現在の戸田寮の平面図と、文部省に提出した図面とをお示しておく。

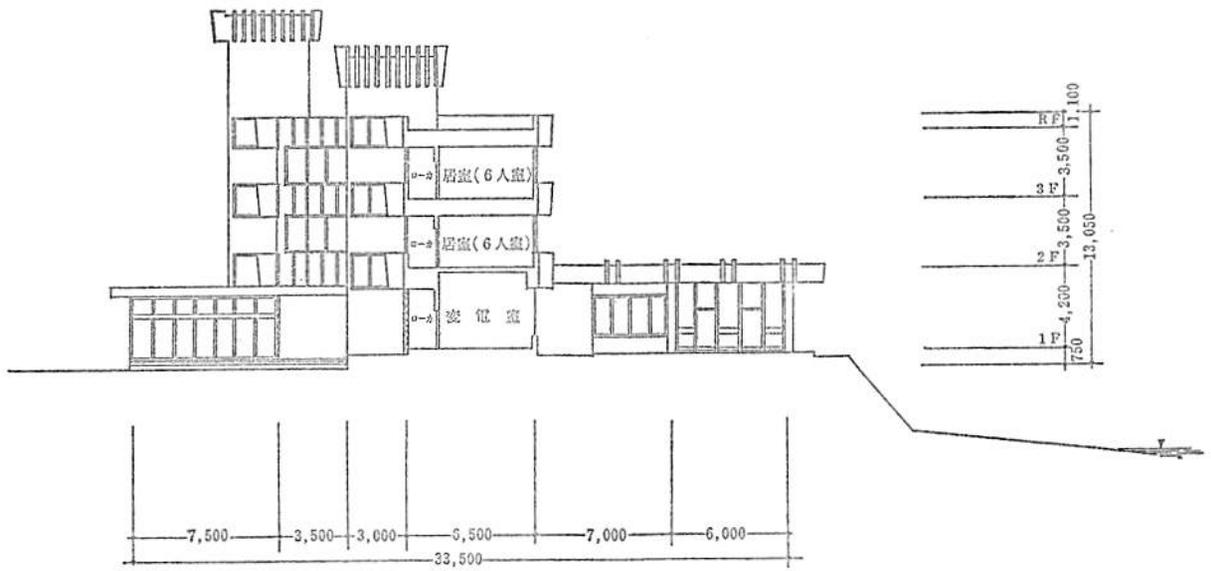
なお、改築に際しての地元との関係は、現在においては、トラブル等は全くなく、むしろ村長を始めとする村の有力者たちは挙ってこの計画に賛成していることをつ

け加えておこう。

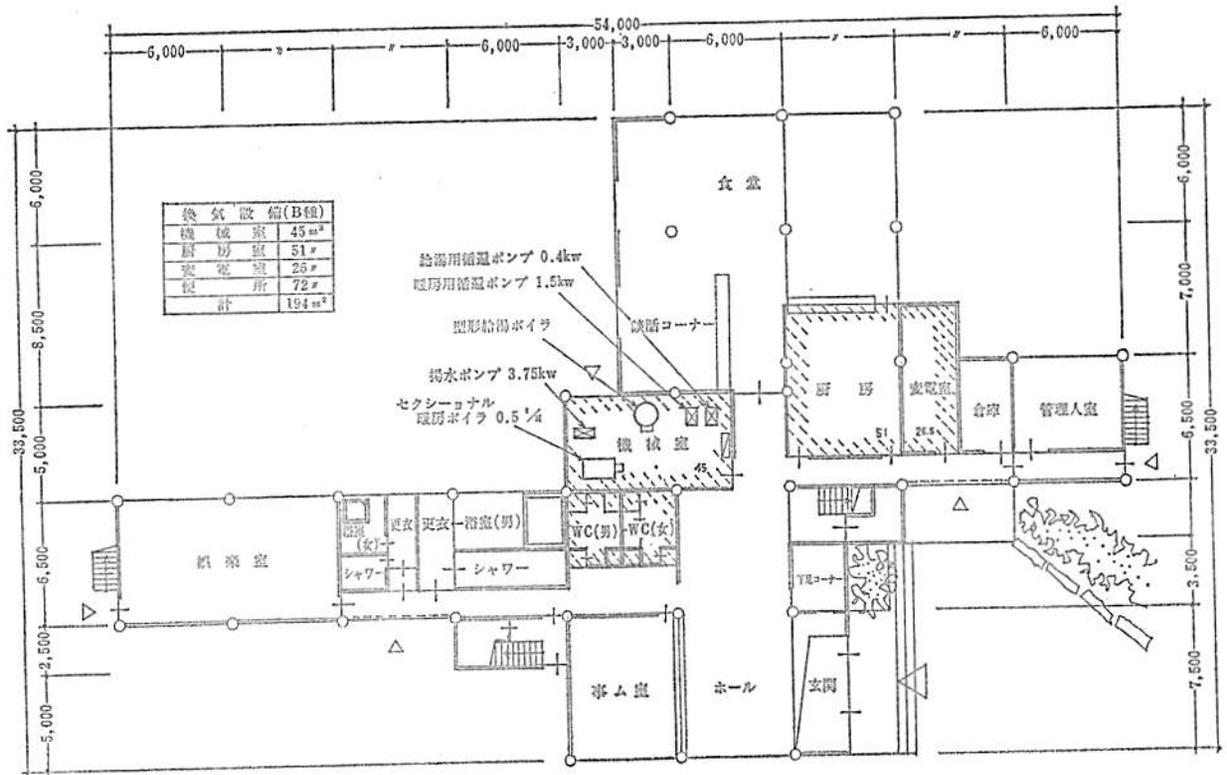
これには、古田運動会主事を中心とする村民に対する医療協力、村医獲得のための努力がはずかたて大いに力があつたことは事実であり、私としても将来の戸田寮と村との関係を考えるとき心から感謝申し上げたい。

そのためか、今年の戸田マラソンには村の有志の参加もあり、特別開寮期間中の学生委員も村との融和を重点的に考える等、将来の戸田寮は、建物ばかりでなく、むしろ人を通じて、常に新しくなっていくことを期待してやまない。

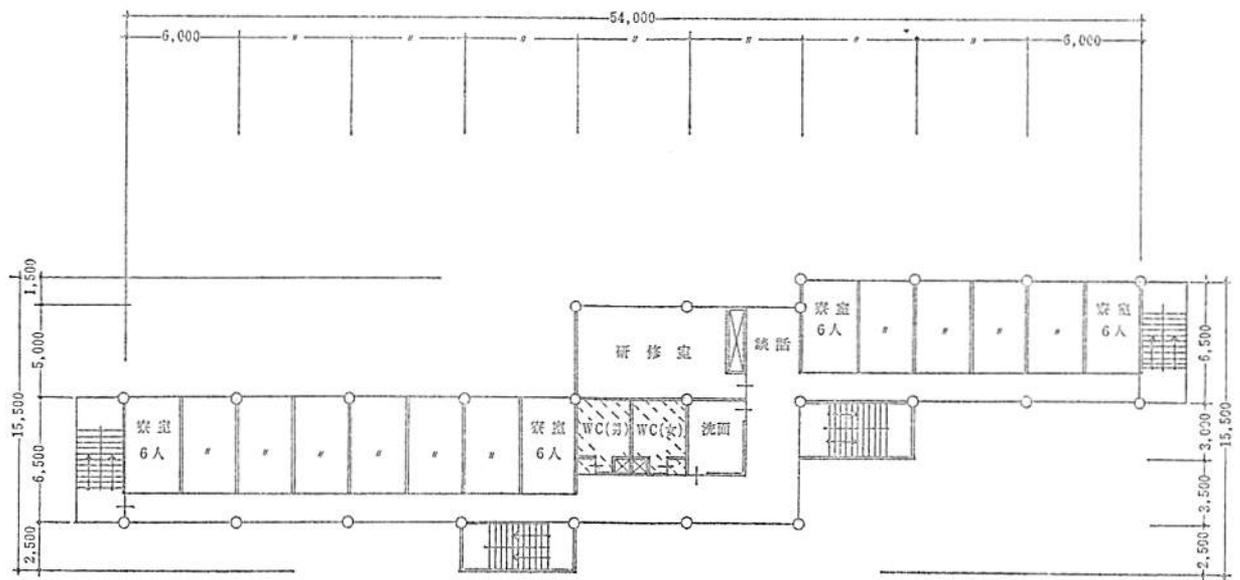




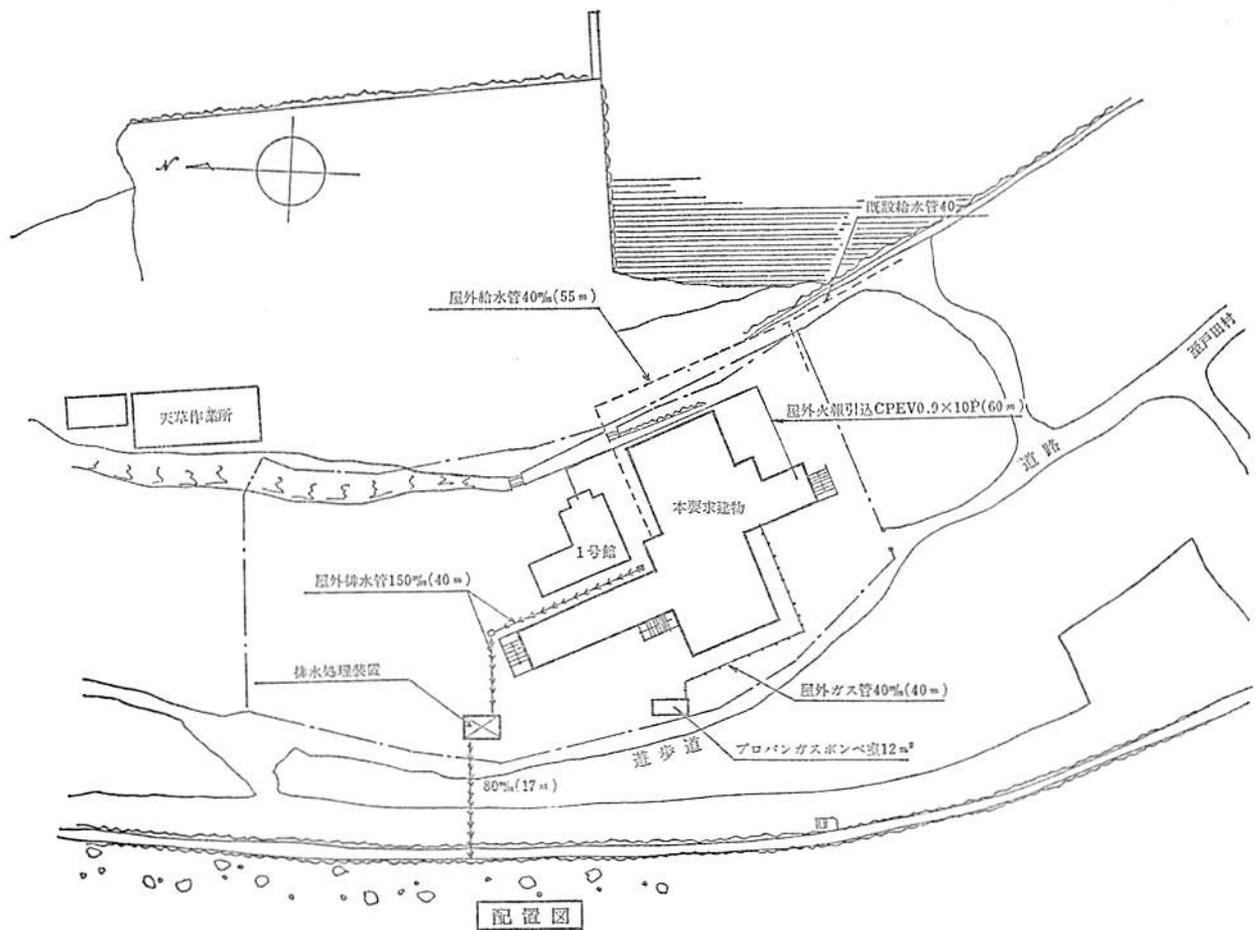
断面図 S1/200



1階平面図



2・3・階平面図



配置図

戸田寮編集委員会

- 編集委員長 松橋 直  
 副委員長 杉村 弘二郎  
 主 幹 古田 直樹  
 明治・大正編集責任者 日野 和徳  
 昭和の戦前編集責任者 大場 和夫  
 戦後編集責任者 松橋 直  
 編集委員 岸尾 光二  
 (昭49工卒・応援部)  
 八木沢 正博  
 (昭51工院院卒・合気)  
 大熊 和彦  
 (昭43工卒・ア蹴球)  
 小林 博重  
 (昭51法卒・応援部)  
 矢 折 誠  
 (昭51法卒・B&W)  
 小林 崇 敦  
 (昭74入学農・応援部)  
 渡 辺 仁  
 (昭48入学工・合気)



事務局

先輩協力者

- 辻角 精二  
 (昭48入学工・B&W)  
 清田 研  
 (昭48入学法・弓術部)  
 徳丸 富士夫  
 (昭49入学経・応援部)  
 鈴木 一郎  
 高橋 常雄  
 谷岸 博  
 (昭30育卒・硬式野球)  
 佐々木 貞次  
 (昭34文卒・ボート)  
 中 沢 新 吾  
 (昭41文卒・スキー山岳)

あとがき

昭和四十九年八月二十四日、戸田寮において戸田の夕べを催して以来、寮の新築と寮史の編纂は、常に関係者の腦裏をはなれなかつた。幸にして松橋戸田寮委員長を中心とする戸田寮再建委員会の活動と、大場学生部長、横山学生部次長の非常な御努力の結果、滄海樓を除く他の建物を解体し、食堂のあたりを中心とした新しい寮が建設されることになりそうであり、明治大正以来の木造建築とも来年はお別れることになろう。

寮史の方はそれほどはいかなかつた。昨年末に本格的に取組みはじめてすぐ分つたことは、終戦後寮が再開された時にこの仕事をやっておくべきだつたと云うことである。

その頃なら太田老人や坂田老人から直接昔話がきけたし、小生の媒酌をつとめてくれた白根竹介さん(二・二六事件の時の内閣書記官長)などは、保養館買取りが難航して水泳部を移転する案がおこり、油壺を調査に行った話や、静岡県知事の時に県の船で水泳大会に乗込んで実に嬉しかった話をよくきかせてくれたものであつた。松平恒雄さん(駐英大使から貴族院議長)や霜山精一さん(最高裁長官)もお元気だつたし辰野隆教授も御健在だつた。昭二十五年春に一度だけ戦前の「みはま会」を復活すると云うことで山上会議所に三十数人が集つたことがあつたが、現役との繋りがなかつたため一度で終つてしまつたのは残念でならない。

今となつては明治は遠くなりけりで大正七年の夏から戸田へ行つておりますと云われる佐々木先生が一番古い戸田寮を御存知の方となつてしまつた。

村の方でも松城さんはなくなられるし、勝呂村長もなくなり、昔の寮生活を知っている人は元管理人の稲木さん位

しかない。

そんなわけで寮史と云っても諸先輩の御寄稿を頂いて綴りあわせることになってしまい、資料の蒐集に御努力下さった鈴木体育第一係長以下の皆さんの労苦があまり内容に反映されていないことはまことに残念である。

水府流太田派と云う日本泳法のことや、モーターボート、スカールそして戦後のヨットのことなど調査して記録に留めたいことはいくらかもあるがこれ等は今後の課題として、新しい寮には資料室を設けて資料の蒐集と保管を行い将来さらに充実した寮史が出来る素地としたいと考えている。

編集に当り日野前委員長、松橋委員長の両先生をはじめ谷岸、佐々木、中沢、古田、岸尾、矢折各先輩および現役の委員諸君が多忙のなかを一致協力して寮史の八月完成に努力され感謝に堪えない。御寄稿を賜った諸先輩に対する謝辞と共にここに敬意を表する次第である。

編集委員表 杉村弘二郎

## 編集後記

ある先輩の発案により昭和四十八年九月一日に、谷川寮創設以来お世話になっている金盛館という旅館を利用させて頂いていただき「谷川の夕べ」という会を開きました。集った方達はいずれも谷川寮に関係の深い人たちで、楽しく一夕を過ごしていただきました。そのとき寮の建設に協力した先輩や、寮の運営にあたられた先輩等の昔話などをテープにとり、それを一冊の本にまとめてみました。もし将来谷川寮史を作るとしたら、これをもとにして作れば雑作のない事であろうと思う。まあこんな調子で、四十九年の夏戸田寮において「戸田の夕べ」を催した際、古い先輩方のお話を伺いながら戸田寮史作成の資料として収録したいと簡単に考えておりましたが、我々の意図は見事戸田寮の歴史の重みにはね返されてしまった。それ以来我々の苦しみが始まったのです。

先ず戸田寮の歴代の寮委員の名札の写しをとり寄せ住所等を調べてみたところ、明治から大正のあたりが全然つながらない事が判りました。そこで村の古老から話を聞き込んだり、あるいは大正中期から昭和の始め頃の先輩にお集りいただいたり、記事をいただいたりして、一応五月の連休に日頃多忙な寮委員長や編集責任者の杉村さん、運動会主事の古田さん等を戸田寮まで引張り出し、二泊三日の作業で何とか目鼻を付ける予定でいたところ、何とか全く素人の集りで、これは実は大変な仕事であるという事が判り愕然とした次第です。

ところが神は我々迷える者共を救い給うたのです。それは五月の末のある日、運動会総務部OBの某氏が、ある市の市長選に立候補したのでその陣中見舞に硬式野球部運動会総務OBの谷岸氏（現在東京書籍勤務）と一緒に行く事になり、途中戸田寮史作成にあたってのいろいろな苦労話をしながら、あんな本職なんだから何とか面倒見てくれな

いかともちかけたところ、彼は気持ちよく引受けてくれました。そんな事になってから、ついているというのか、筑摩書房の中沢氏、東大出版会の佐々木氏等本職の方達の協力が得られることになり仕事も急ピッチではかどり予定していた期日に何とか出版出来る見通しもつきました。去年の秋に編集委員会を組織したときには六人いた現役の学生がこの春二人卒業し、一人は学業の都合で去られてしまい、一時はどうなるかと思ったが総務の清田君などが一寸遅滞しながらよく頑張ってくれました。私は今自分なりに反省しているが、私自身でもっと積極的に自分の足で巾広く取材をしていたらもっと内容も濃くなっているであろうと悔まれてなりません。とに角曲りなりにもここまで漕ぎつけたのも先輩の協力の賜ものと心から感謝して筆をおきます。

学生課体育第一掛長

鈴木一郎

東京大学戸田寮八十年史

昭和五十一年八月二十日印刷

昭和五十一年八月二十一日発行

編者 東京大学戸田寮史編集委員会

発行者 東京大学戸田寮委員会

東京都文京区本郷七―三一

東京大学運動会戸田寮委員会

電話(八二二)二一一一内線二一五二

印刷所 スミダ印刷

電話(八四二)七三三三・八八五七